白石大谷Ⅰ遺跡・惣三堀遺跡

掘田ヶ谷遺跡・地蔵院遺跡・熊谷遺跡

中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書 7

日本道路公団中国支社
島根県教育委員会

2002年3月

白石大谷Ⅰ遺跡・惣三堀遺跡

掘田ヶ谷遺跡・地蔵院遺跡・熊谷遺跡

中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内
埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書 7

日本道路公団中国支社
島 根 県 教 育 委 員 会

２００２年3月

序

中国横断自動車道尾道・松江線は「国土開発幹線自動車道法」に基づいて、均衡ある国土の開発に寄与する高速道路の一環として計画が進められ、このうち三刀屋～松江間につきましては平成９年３月から鋭意建設を進めてまいりました。その過程で路線敷地内にある遺跡について島根県教育委員会と協議し、記録保存のための発掘調査を進めてまいりました。本書は松江工事事務所担当区域である宍道町における白石大谷Ｉ遺跡他３遺跡、三刀屋町および木次町に所在する熊谷遺跡など貴重な遺跡の発掘調査の記録であります。

この記録調査が、はるかな過去に生きた祖先の生活や文化様式を時代を超えて現代に蘇らせ、また、現代に生きる私どもの未来への道しるべとなるとともに今後の調査研究の資料として活用されることを期待するものであります。

なお、この発掘調査および本書の編集は島根県教育委員会に委託して実施したものであり、ここに関係各位のご尽力に対し、深甚なる誠意を表するものであります。

平成１４年３月

日本道路公団中国支社　松江工事事務所
所　長　　村　田　一　廣

序

島根県教育委員会では、日本道路公団中国支社の委託を受けて、平成８年度より中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施してきておりますが、このほど報告書７集を刊行する運びとなりました。

本報告書は、八束郡宍道町に所在する白石大谷Ｉ遺跡、惣三堀遺跡、掘田ヶ谷遺跡、地蔵院遺跡、また三刀屋町および木次町に所在する熊谷遺跡について調査成果をまとめたものです。

なかでも白石大谷Ｉ遺跡では、宍道町内で出土例が知られていなかった弥生時代中期の土器が出土し、製鉄用の炭を生産したと考えられる古代の炭窯も見つかりました。また、惣三堀遺跡では、中世の墳墓が発見されています。

本報告書が地域の歴史を解明する手がかりとなり、郷土の歴史と埋蔵文化財に対する理解と関心を高める一助となれば幸いです。

最後になりましたが、本書を刊行するにあたり御協力いただきました地元の方々、日本道路公団中国支社、地元教育委員会、その他関係機関、関係者の皆様に厚くお礼を申し上げます。

平成１４年３月

島根県教育委員会

教育長　山　﨑　悠　雄

例　　言

１．本書は日本道路公団中国支社の委託を受けて、島根県教育委員会が平成８・10・13年度に実施した中国横断自動車道尾道・松江線の建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の記録である。

２．本書で扱う遺跡・調査年度は次の通りである。

八束郡宍道町白石８８７－２他	白石大谷Ｉ遺跡	（平成８年度）
八束郡宍道町東来待３６９他	惣三堀遺跡	（平成８年度）
八束郡宍道町西来待２１７５他	掘田ヶ谷遺跡	（平成８年度）
八束郡宍道町東来待１６６６－２他	地蔵院遺跡	（平成10年度）
飯石郡三刀屋町下熊谷２０２７、大原郡木次町下熊谷１４８８－８他	熊谷遺跡	（平成13年度）

３．調査組織は下記の通りである。

調査主体　島根県教育委員会

＜平成８年度＞　　現地調査

事務局　島根県教育庁文化財課　　勝部　昭（課長）

埋蔵文化財調査センター　宍道正年（センター長）、古崎蔵治（課長補佐）

調査員　川原和人（文化財課埋蔵文化財調査センター主幹･調査第２係長）、東森　晋（同主事）、植田良司（同教諭兼文化財保護主事）、亀井彰子（同講師兼主事）、上河敦史（同調査補助員）、大西憲和（同調査補助員）

調査指導（敬称略・五十音順）

穴澤義功（たたら研究委員会）、池田満雄（島根文化財保護審議会委員）、伊藤晴明（島根県職業能力開発短期大学校）、河瀬正利（広島大学教授）、武田泰彰（岡山県総社市教育委員会）、田中義昭（島根大学法文学部教授）、時枝克安（島根大学総合理工学部教授）、村上恭通（愛媛大学法文学部助教授）、行田裕美（岡山県津山市教育委員会）、渡辺貞幸（島根大学法文学部教授）

＜平成１０年度＞　　現地調査

事務局　島根県教育庁文化財課　　勝部　昭（課長）

埋蔵文化財調査センター　宍道正年（センター長）、島地徳郎（課長補佐）、秋山　実（課長補佐）、松本岩雄（課長補佐）

調査員　川原和人（文化財課埋蔵文化財調査センター主幹）、橘　弘章（同調査第１係教諭兼文化財保護主事）、坂本豊治（同調査補助員）

＜平成１３年度＞　現地調査・報告書作成

事務局　宍道正年（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター所長）、内田　融（同総務課長）、今岡　宏（同主幹・総務係長）

調査員　川原和人（同調査第２課長）、大庭俊次（同第３係文化財保護主事）、奥村昌子（同教諭兼文化財保護主事）、横木尚文（同教諭兼主事）、東森　晋（同調査第１課第１係主事）、糸賀伸文（同調査補助員）、梶谷泰子（同調査補助員）、松崎恵美子（同調査補助員）、伊藤悟郎（同調査補助員）

４．発掘作業（発掘作業員雇用・重機借り上げ・発掘用具調達等）については、委託者・社団法人中国建設弘済会、島根県教育委員会の三者協定に基づき、島根県教育委員会から社団法人中国建設弘済会へ委託して実施した。

社団法人中国建設弘済会

＜平成８年度＞　現場担当　布村幹生（現場事務所長）、木村昌義（技術員）
　　事務担当　与倉明子（事務員）

＜平成１０年度＞　現場担当　布村幹生（現場事務所長）
　　事務担当　篠原律子（事務員）

＜平成１３年度＞　現場担当　小川剛史（技術員）
　　事務担当　馬庭明美（事務員）

５．現地調査および資料整理に際しては、以下の方々から有益な御指導・御助言・御協力をいただいた。記して感謝の意を表す。（敬称略、五十音順）

阿部賢治（斐川町教育委員会）、稲田　信（宍道町教育委員会）、
江角　健（斐川町教育委員会）岡崎研一（京都府埋蔵文化財調査研究センター）、
木下　誠（宍道町教育委員会）、河野一隆（京都府埋蔵文化財調査研究センター）、
坂本研次（高速道路地区対策委員長）、永井　泰（来待ストーン館館長）、
東森市良（島根考古学会副会長）、藤木　透（兵庫県佐用郡教育委員会）、舟引通健（同）、
増田孝彦（京都府埋蔵文化財調査研究センター）、松井　章（奈良国立文化財研究所）

６．挿図中の方位は測量法による軸方位を示し、レベル高は海抜高を示す。

７．第１・３・４図は、建設省国土地理院発行のものを利用した。第５・７・９・19・26・38・40・41図は株式会社ジェクト、第54図は有限会社創互技研、第62図は株式会社アイシーが作成したものをもとに作成した。第53図は中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書２で作成した遺跡位置図を一部改変して使用している。

８．本書に掲載した写真は各調査員の他、広江耕史（調査第１課第１係長）、中川　寧（調査第２課第３係主事）が撮影した。また写真図版１・２は株式会社ジェクトが撮影した。

９．本書に掲載した実測図は各調査員の他、以下のものが作成した。

岩橋孝典（主事）、池田哲也（教諭兼主事）、野津　清（講師兼主事）、露梨靖子・寺尾令・松山智弘（以上調査補助員）

また浄書は以下のものが行った。

岡本育子（調査補助員）、河野真由美・田中路子・三上恭子（以上内業作業員）

10．本書の執筆は第３章第７節を除き各作業員が分担して行い、その文責を目次に記した。第３章第７節については時枝克安氏（島根大学総合理工学部）、渡部道貴氏（同）、伊藤晴明氏（島根県職業能力開発短期大学校）に御執筆いただいた。

11．本書の編集は、埋蔵文化財調査センター職員の協力を得て川原・大庭・東森の３名が協議して行った。

12．本書掲載の遺跡出土遺物および実測図、写真などの資料は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センター（松江市打出町３３番地）で保管している。

本　文　目　次

第１章　調査に至る経緯 ……（寺尾・横木）… 1
第２章　遺跡の位置と歴史的環境 ……（寺尾・横木）… 3
　第１節　白石大谷Ⅰ遺跡・惣三堀遺跡・掘田ヶ谷遺跡・地蔵院遺跡 …… 3
　第２節　熊谷遺跡 …… 8
第３章　白石大谷Ⅰ遺跡 ……（東森）… 17
　第１節　調査の経過 …… 17
　第２節　弥生時代の遺構・遺物 …… 22
　第３節　古墳時代の遺構・遺物 …… 33
　第４節　古代の遺構・遺物 …… 41
　第５節　中・近世の遺構・遺物 …… 53
　第６節　時期不明の遺構・遺物 …… 55
　第７節　自然科学分析 ……（時枝・渡部・伊藤）… 69
　第８節　まとめ ……（東森）… 73
第４章　惣三堀遺跡 ……（川原）… 77
　第１節　位置と調査の概要 …… 77
　第２節　検出した遺構・遺物 …… 77
　第３節　まとめ …… 80
第５章　掘田ヶ谷遺跡 ……（川原）… 85
　第１節　位置と調査概要 …… 85
　第２節　調査結果 …… 85
　第３節　まとめ …… 89
第６章　地蔵院遺跡 ……（川原）… 90
　第１節　位置と調査概要 …… 90
　第２節　遺跡の概要 …… 92
　第３節　まとめ …… 94
第７章　熊谷遺跡 ……（大庭）… 95

表　目　次

第１表　尾道松江線（三刀屋～玉湯間）ルート上の遺跡一覧 …… 2
第２表　白石大谷Ⅰ遺跡・惣三堀遺跡・掘田ヶ谷遺跡・地蔵院遺跡と周辺の遺跡一覧 … 5
第３表　熊谷遺跡と周辺の遺跡一覧 …… 11
＜白石大谷Ⅰ遺跡＞
第４表　白石大谷Ⅰ遺跡　段状遺構２　出土遺物観察表 …… 24
第５表　白石大谷Ⅰ遺跡　段状遺構３　出土遺物観察表 …… 25
第６表　白石大谷Ⅰ遺跡　土坑１　計測表 …… 26
第７表　白石大谷Ⅰ遺跡　土坑１　出土遺物観察表 …… 26
第８表　白石大谷Ⅰ遺跡　土坑２　計測表 …… 26
第９表　白石大谷Ⅰ遺跡　土坑２　出土遺物観察表 …… 26
第10表　白石大谷Ⅰ遺跡　集石１　出土遺物観察表 …… 28
第11表　白石大谷Ⅰ遺跡　土器溜り　出土遺物観察表 …… 32
第12表　白石大谷Ⅰ遺跡　出土弥生土器観察表 …… 32
第13表　白石大谷Ⅰ遺跡　１号墳　出土遺物観察表 …… 38
第14表　白石大谷Ⅰ遺跡　出土土師器・須恵器観察表 …… 39
第15表　白石大谷Ⅰ遺跡　出土玉未成品観察表 …… 39
第16表　白石大谷Ⅰ遺跡　土坑３　計測表 …… 47
第17表　白石大谷Ⅰ遺跡　炭窯　出土遺物観察表 …… 48
第18表　白石大谷Ⅰ遺跡　段状遺構４　出土遺物観察表 …… 50
第19表　白石大谷Ⅰ遺跡　溝状遺構１　出土遺物観察表 …… 50
第20表　白石大谷Ⅰ遺跡　土坑３・４　計測表 …… 50
第21表　白石大谷Ⅰ遺跡　出土須恵器観察表 …… 52

第22表　白石大谷Ⅰ遺跡　出土土師器・陶磁器観察表 …… 54
第23表　白石大谷Ⅰ遺跡　土坑６～２７計測表 …… 56
第24表　白石大谷Ⅰ遺跡　集石２　出土遺物観察表 …… 61
第25表　白石大谷Ⅰ遺跡　集石３　出土遺物観察表 …… 61
第26表　白石大谷Ⅰ遺跡　出土石器計測表 …… 63
第27表　白石大谷Ⅰ遺跡　出土剥片計測表 …… 64
第28表　白石大谷Ⅰ遺跡　出土鉄器鉄滓観察表 …… 68
第29表　白石大谷Ⅰ遺跡の横口式窯跡の残留磁気の平均方向 …… 70
第30表　Ｃ１４年代測定結果 …… 72
第31表　白石大谷Ⅰ遺跡　出土遺物数量表 …… 75
第32表　島根県内で調査された横口付製炭窯 …… 76
＜惣三堀遺跡＞
第33表　島根県下における中世墓一覧表① …… 81
第34表　島根県下における中世墓一覧表② …… 82
＜掘田ヶ谷遺跡＞
第34表　掘田ヶ谷遺跡　出土土器一覧表 …… 89
＜熊谷遺跡＞
第36表　熊谷遺跡　Ⅴ区出土遺物観察表１（石器等） …… 99
第37表　熊谷遺跡　Ⅴ区出土遺物観察表２（弥生土器、須恵器） …… 99
第38表　熊谷遺跡　Ⅴ区出土遺物数量表 …… 99

挿　図　目　次

第１図　尾道松江線（三刀屋～玉湯間）ルート上の遺跡（Ｓ＝1/150,000） …… 2
第２図　宍道町・三刀屋町の位置 …… 3
第３図　白石大谷Ⅰ遺跡・惣三堀遺跡・掘田ヶ谷遺跡
　　・地蔵院遺跡と周辺の遺跡一覧（Ｓ＝1/40,000） …… 4
第４図　熊谷遺跡と周辺の遺跡（Ｓ＝1/35,000） …… 10
＜白石大谷Ⅰ遺跡＞
第５図　白石大谷Ⅰ遺跡　調査区割図（Ｓ＝1/900） …… 17
第６図　白石大谷Ⅰ遺跡　調査区配置図（Ｓ＝1/3,000） …… 18
第７図　白石大谷Ⅰ遺跡　遺構配置図（Ｓ＝1/300） …… 19～20
第８図　白石大谷Ⅰ遺跡　Ⅰ区谷部土層断面図（Ｓ＝1/60） …… 21
第９図　白石大谷Ⅰ遺跡　弥生時代の遺構（Ｓ＝1/600） …… 22
第10図　白石大谷Ⅰ遺跡　段状遺構１（Ｓ＝1/60） …… 23
第11図　白石大谷Ⅰ遺跡　段状遺構２（Ｓ＝1/60）、出土遺物（Ｓ＝1/4） …… 24
第12図　白石大谷Ⅰ遺跡　段状遺構３（Ｓ＝1/60）、出土遺物（Ｓ＝1/4） …… 25
第13図　白石大谷Ⅰ遺跡　土坑１（Ｓ＝1/40）、出土遺物（Ｓ＝1/4） …… 26
第14図　白石大谷Ⅰ遺跡　土坑２（Ｓ＝1/20）、出土遺物（Ｓ＝1/4） …… 27
第15図　白石大谷Ⅰ遺跡　集石１（Ｓ＝1/40） …… 29
第16図　白石大谷Ⅰ遺跡　集石１遺物出土状況（Ｓ＝1/20） …… 30
第17図　白石大谷Ⅰ遺跡　集石１出土遺物（Ｓ＝1/4） …… 31
第18図　白石大谷Ⅰ遺跡　出土弥生土器（Ｓ＝1/4） …… 32
第19図　白石大谷Ⅰ遺跡　古墳時代の遺構（Ｓ＝1/600） …… 33
第20図　白石大谷Ⅰ遺跡　１号墳　調査前地形測量図（Ｓ＝1/100） …… 34
第21図　白石大谷Ⅰ遺跡　１号墳　調査後墳丘測量図・断層断面（Ｓ＝1/60） …… 35
第22図　白石大谷Ⅰ遺跡　１号墳　石棺（Ｓ＝1/20） …… 36
第23図　白石大谷Ⅰ遺跡　１号墳　遺物出土状況（Ｓ＝1/100） …… 37
第24図　白石大谷Ⅰ遺跡　１号墳　出土遺物（Ｓ＝1/4） …… 38
第25図　白石大谷Ⅰ遺跡　出土土師器①・須恵器①（Ｓ＝1/4）・玉未製品（Ｓ＝1/2） …… 40
第26図　白石大谷Ⅰ遺跡　古代の遺構（Ｓ＝1/600） …… 41
第27図　白石大谷Ⅰ遺跡　横口付製炭窯①（Ｓ＝1/100） …… 43
第28図　白石大谷Ⅰ遺跡　横口付製炭窯②（Ｓ＝1/80） …… 44
第29図　白石大谷Ⅰ遺跡　横口付製炭窯土層断面図①（Ｓ＝1/40） …… 45

第30図　白石大谷Ⅰ遺跡　横口付製炭窯土層断面図②（S＝1/40）…… 46
第31図　白石大谷Ⅰ遺跡　横口付製炭窯煙出し、土坑３（S＝1/40）…… 47
第32図　白石大谷Ⅰ遺跡　横口付製炭窯出土遺物（S＝1/4）…… 48
第33図　白石大谷Ⅰ遺跡　段状遺構４（S＝1/80）…… 49
第34図　白石大谷Ⅰ遺跡　段状遺構４　出土遺物（S＝1/4）…… 50
第35図　白石大谷Ⅰ遺跡　溝状遺構１（S＝1/60）、
出土遺物（S＝1/4）、土坑４・５（S＝1/40）…… 51
第36図　白石大谷Ⅰ遺跡　古道１（S＝1/60）…… 52
第37図　白石大谷Ⅰ遺跡　出土須恵器②（S＝1/4）…… 52
第38図　白石大谷Ⅰ遺跡　中・近世の遺構（S＝1/600）…… 53
第39図　白石大谷Ⅰ遺跡　出土土師器②・陶磁器（S＝1/4）…… 54
第40図　白石大谷Ⅰ遺跡　時代不明の遺構（S＝1/600）…… 55
第41図　白石大谷Ⅰ遺跡　土坑位置図（S＝1/300）…… 57
第42図　白石大谷Ⅰ遺跡　土坑６～１２（S＝1/40）…… 58
第43図　白石大谷Ⅰ遺跡　土坑１３～２０（S＝1/40）…… 59
第44図　白石大谷Ⅰ遺跡　土坑２１～２７（S＝1/40）…… 60
第45図　白石大谷Ⅰ遺跡　集石２（S＝1/40）、出土遺物（S＝1/4）…… 61
第46図　白石大谷Ⅰ遺跡　集石３・４（S＝1/40）、出土遺物（S＝1/4）…… 62
第47図　白石大谷Ⅰ遺跡　石器出土状況（S＝1/200）…… 65
第48図　白石大谷Ⅰ遺跡　出土石器①（S＝2/3）…… 66
第49図　白石大谷Ⅰ遺跡　出土石器②（S＝2/3）…… 67
第50図　白石大谷Ⅰ遺跡　出土鉄器・鉄滓（S＝1/2）…… 68
第51図　白石大谷Ⅰ遺跡の横口付窯跡１号の残留磁気の方向 …… 71
第52図　白石大谷Ⅰ遺跡の横口付窯跡の残留磁気の平均方向（＋印）と誤差の範囲
（点線の楕円）、および、広岡による西南日本の過去2000年間の地磁気永年変化曲線 …… 71
第53図　白石大谷Ⅰ遺跡の位置と周辺の主な遺跡（S＝1/10,000）…… 74

＜惣三堀遺跡＞

第54図　惣三堀遺跡　出土遺物実測図（S＝1/2）…… 77
第55図　惣三堀遺跡　地形測量図（調査区配置図）（S＝1/400）…… 78
第56図　惣三堀遺跡　調査後地形測量図・遺構配置図（S＝1/100）…… 79
第57図　惣三堀遺跡　土壙墓実測図（S＝1/40）…… 79

＜掘田ヶ谷遺跡＞

第58図　掘田ヶ谷遺跡　遺跡周辺の地形図（S＝1/1,000）…… 86
第59図　掘田ヶ谷遺跡　調査区配置図（S＝1/375）・土層実測図（S＝1/120）…… 87
第60図　掘田ヶ谷遺跡　出土遺物実測図（S＝1/3）…… 88

＜地蔵院遺跡＞

第61図　地蔵院遺跡　遺跡周辺の地形図（S＝1/1,000）…… 90
第62図　地蔵院遺跡　測量図（S＝1/120）…… 91
第63図　地蔵院遺跡　宝篋印塔実測図（S＝1/10）…… 93

＜熊谷遺跡＞

第64図　熊谷遺跡　平成13年度調査対象範囲（S＝1/2,000）…… 95
第65図　熊谷遺跡　Ⅴ区完掘後地形測量図（S＝1/250）…… 97
第66図　熊谷遺跡　Ⅴ区土層堆積状況実測図（S＝1/80）…… 97
第67図　熊谷遺跡　Ⅴ区遺物出土状況実測図（S＝1/200）…… 98
第68図　熊谷遺跡　Ⅴ区出土遺物実測図　黒曜石剥片（S＝2/3）、石錘（S＝1/2）、
弥生土器・須恵器（S＝1/4）…… 99
第69図　熊谷遺跡　Ⅴ区検出土坑実測図（S＝1/4）…… 100

写　真　図　版　目　次

＜白石大谷Ⅰ遺跡＞
図版１　白石大谷Ⅰ遺跡と周辺の遺跡
図版２　白石大谷Ⅰ遺跡　全景（南西から）
白石大谷Ⅰ遺跡　全景（南東から）
白石大谷Ⅰ遺跡　全景（北から）
図版３　白石大谷Ⅰ遺跡　集石１　赤色物
白石大谷Ⅰ遺跡　土坑４
白石大谷Ⅰ遺跡　土坑５
白石大谷Ⅰ遺跡　土坑１３
白石大谷Ⅰ遺跡　土坑１５
白石大谷Ⅰ遺跡　土坑１７
白石大谷Ⅰ遺跡　集石３
図版４　白石大谷Ⅰ遺跡　横口付製炭窯（北東から）
白石大谷Ⅰ遺跡　横口付製炭窯（北西から）
図版５　白石大谷Ⅰ遺跡　横口付製炭窯　前庭土層断面
白石大谷Ⅰ遺跡　横口付製炭窯　焼成部
白石大谷Ⅰ遺跡　横口付製炭窯　焼成部断面
白石大谷Ⅰ遺跡　横口付製炭窯　煙道部
白石大谷Ⅰ遺跡　横口付製炭窯　煙出し部
白石大谷Ⅰ遺跡　横口付製炭窯　側庭土層断面
白石大谷Ⅰ遺跡　横口付製炭窯　側庭の石
白石大谷Ⅰ遺跡　土坑３　土層断面
図版６　白石大谷Ⅰ遺跡　調査前（北から）
白石大谷Ⅰ遺跡　Ⅰ区　調査前（西から）
図版７　白石大谷Ⅰ遺跡　段状遺構１
白石大谷Ⅰ遺跡　段状遺構１　土層断面
図版８　白石大谷Ⅰ遺跡　段状遺構２
白石大谷Ⅰ遺跡　段状遺構３
図版９　白石大谷Ⅰ遺跡　土坑１
白石大谷Ⅰ遺跡　土坑２内弥生土器・炭化物
白石大谷Ⅰ遺跡　土坑２
図版10　白石大谷Ⅰ遺跡　集石１　検出時
白石大谷Ⅰ遺跡　集石１
図版11　白石大谷Ⅰ遺跡　集石１
白石大谷Ⅰ遺跡　集石１　土層断面
図版12　白石大谷Ⅰ遺跡　１号墳　調査前
白石大谷Ⅰ遺跡　１号墳　完掘後
図版13　白石大谷Ⅰ遺跡　１号墳　Ａライン土層断面
白石大谷Ⅰ遺跡　１号墳　南側土層断面
図版14　白石大谷Ⅰ遺跡　１号墳　主体部
図版15　白石大谷Ⅰ遺跡　１号墳　主体部西土層断面
白石大谷Ⅰ遺跡
１号墳　周溝内須恵器・来待石石材
図版16　白石大谷Ⅰ遺跡　横口付製炭窯　遠景
白石大谷Ⅰ遺跡　横口付製炭窯　作業場検出時
図版17　白石大谷Ⅰ遺跡
横口付製炭窯　Ｈライン土層断面
白石大谷Ⅰ遺跡
横口付製炭窯　前庭上須恵器出土状況
図版18　白石大谷Ⅰ遺跡
横口付製炭窯　Ｅライン土層断面
白石大谷Ⅰ遺跡　横口付製炭窯　焼成部
図版19　白石大谷Ⅰ遺跡　横口付製炭窯
横口４土層断面
白石大谷Ⅰ遺跡　横口付製炭窯　煙道
図版20　白石大谷Ⅰ遺跡　横口付製炭窯　煙出し上の石
白石大谷Ⅰ遺跡　横口付製炭窯
Ｂライン土層断面
白石大谷Ⅰ遺跡　横口付製炭窯
Ａライン土層断面
図版21　白石大谷Ⅰ遺跡　横口付製炭窯　煙出し
図版22　白石大谷Ⅰ遺跡　横口付製炭窯　煙出し
白石大谷Ⅰ遺跡　横口付製炭窯
地山ブロック・石除去後
図版23　白石大谷Ⅰ遺跡
横口付製炭窯　Ｄライン土層断面
白石大谷Ⅰ遺跡　横口付製炭窯　側庭
図版24　白石大谷Ⅰ遺跡　横口付製炭窯　側庭
白石大谷Ⅰ遺跡　土坑３
図版25　白石大谷Ⅰ遺跡　溝状遺構１
白石大谷Ⅰ遺跡
溝状遺構１　Ａライン土層断面
図版26　白石大谷Ⅰ遺跡　段状遺構４
白石大谷Ⅰ遺跡　古道１
図版27　白石大谷Ⅰ遺跡　土坑６
白石大谷Ⅰ遺跡　土坑７
白石大谷Ⅰ遺跡　土坑１０
白石大谷Ⅰ遺跡　土坑１２
白石大谷Ⅰ遺跡　土坑１３
白石大谷Ⅰ遺跡　土坑１４
白石大谷Ⅰ遺跡　土坑１５
図版28　白石大谷Ⅰ遺跡　土坑１６
白石大谷Ⅰ遺跡　土坑１８
白石大谷Ⅰ遺跡　土坑１９
白石大谷Ⅰ遺跡　土坑２２
白石大谷Ⅰ遺跡　土坑２３
白石大谷Ⅰ遺跡　土坑２４
白石大谷Ⅰ遺跡　土坑２５
白石大谷Ⅰ遺跡　土坑２６
図版29　白石大谷Ⅰ遺跡　集石２
白石大谷Ⅰ遺跡　集石３
白石大谷Ⅰ遺跡　古道３
図版30　白石大谷Ⅰ遺跡　溝状遺構４
白石大谷Ⅰ遺跡　溝状遺構４　土層断面
図版31　白石大谷Ⅰ遺跡　出土遺物①
図版32　白石大谷Ⅰ遺跡　出土遺物②
図版33　白石大谷Ⅰ遺跡　出土遺物③
図版34　白石大谷Ⅰ遺跡　出土遺物④
図版35　白石大谷Ⅰ遺跡　出土遺物⑤
図版36　白石大谷Ⅰ遺跡　出土遺物⑥
図版37　白石大谷Ⅰ遺跡　出土遺物⑦
図版38　白石大谷Ⅰ遺跡　出土遺物⑧
図版39　白石大谷Ⅰ遺跡　出土遺物⑨
図版40　白石大谷Ⅰ遺跡　出土遺物⑩
図版41　白石大谷Ⅰ遺跡　出土遺物⑪
図版42　白石大谷Ⅰ遺跡　出土遺物⑫
＜惣三堀遺跡＞
図版43　惣三堀遺跡　遠景
惣三堀遺跡　中世墓検出状況
図版44　惣三堀遺跡　中世墓検出状況半裁
惣三堀遺跡　中世墓検出状況完掘
図版45　惣三堀遺跡　中世墓出土土器
惣三堀遺跡　中世墓出土火葬骨
＜掘田ヶ谷遺跡＞
図版46　掘田ヶ谷遺跡　遠景
掘田ヶ谷遺跡　近景
図版47　掘田ヶ谷遺跡　完掘状況１
掘田ヶ谷遺跡　完掘状況２
図版48　掘田ヶ谷遺跡　出土土器１
掘田ヶ谷遺跡　出土土器２
＜地蔵院遺跡＞
図版49　地蔵院遺跡　遠景
地蔵院遺跡　近景
図版50　地蔵院遺跡　１号石窟
地蔵院遺跡　２号石窟
図版51　地蔵院遺跡　宝篋印塔　移設遠景
地蔵院遺跡　宝篋印塔　移設近景
図版52　地蔵院遺跡　宝篋印塔１
地蔵院遺跡　宝篋印塔２
＜熊谷遺跡＞
図版53　熊谷遺跡　Ⅴ区調査区および遺構
図版54　熊谷遺跡　Ⅴ区出土遺物

第１章　調査に至る経緯

中国横断自動車道尾道・松江線は、松江都市圏と山陽地方を結び、また中国自動車道と接続してネットワークを形成することにより、沿線地域の産業振興や観光開発を促進するとともに地域経済の発展と活性化を図ることを目的に計画された。

この計画にともなう埋蔵文化財調査については、平成４年１月に建設省道路建設局から日本道路公団に対して松江・三刀屋間についての調査開始指示があり、同年４月17日付けで島根県教育委員会に分布調査の依頼があった。11月には日本道路公団に対して施行命令があり、翌平成５年９月には工事実施計画も認可された。その間調査体制が整わないため分布調査を実施できない状態が続いていたが、平成６年３月になって分布調査も開始、全体の９割あまりが踏査された。

この調査結果をふまえ、同年６月と８月に道路公団と調査の打ち合わせを行った。残りの分布調査は平成７年４月に行い、同月28日付けで公団へ回答した。

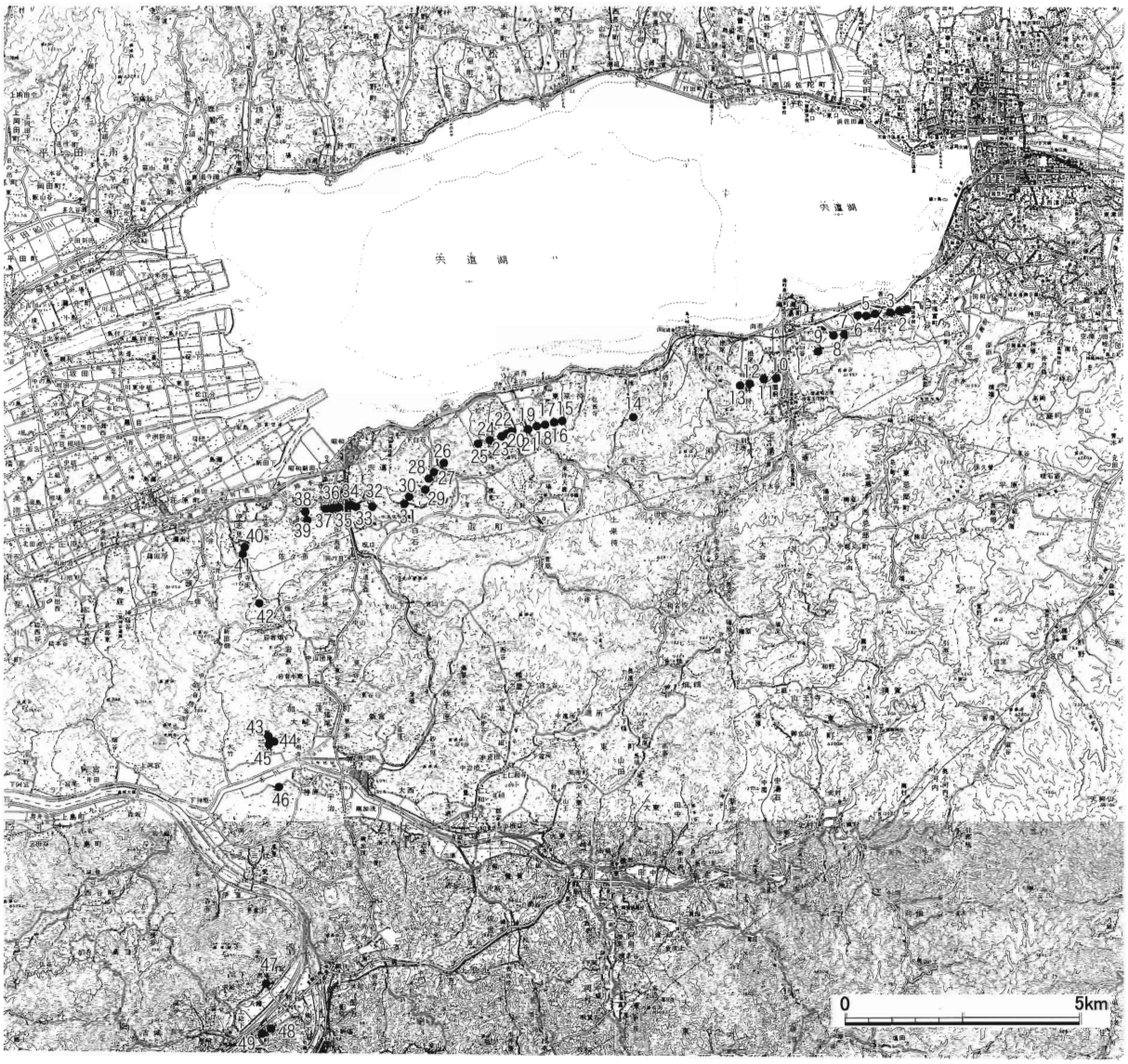
同じこの月には、日本道路公団、県教育委員会、県土木部からなる埋蔵文化財調査連絡会も発足し、８月３日には第１回の連絡会が開催された。この会議で、宍道下倉～弘長寺間4.6kmに位置する遺跡について平成８年度から調査を実施することが決定した。

この決定を受けて、作業員確保・発掘現場における物件確保・測量掘削工事等の調査補助業務を社団法人中国建設弘済会島根県支部に委託すべく、日本道路公団、社団法人中国建設弘済会、島根県教育委員会の三者による埋蔵文化財発掘調査覚書を平成８年３月26日に交わし、本格的に調査を開始することとなった。

平成８年度は３パーティーで宍道町下倉～弘長寺間を調査した。大谷Ⅰ遺跡他６遺跡に加え、来待石の石切場跡を数か所調査し、さらに試掘調査を６か所で行った。平成９年度は玉湯町湯町～林村間と宍道町の残りの部分の調査を行うとともに、宍道インターから国道への連絡道、松江道路から中国横断自動車道への連結部についても調査した。玉湯町内では平床遺跡他３遺跡、宍道町内では上野遺跡他２遺跡の調査を行い、試掘調査は11か所で行った。平成10年度は前年度に引き続き、２町内での調査となった。玉湯町内では布志名大谷Ⅰ遺跡他８遺跡、宍道町内では野津原Ⅱ遺跡他12遺跡を対象とし、試掘等も９か所で行った。

平成11年度は宍道インター～三刀屋間の調査が中心となるが、松江道路から中国横断自動車道につながる連結部の調査も行った。調査対象となったのは、玉湯町では大谷Ⅲ北遺跡、宍道町では上野Ⅱ遺跡他３遺跡、加茂町では登安寺遺跡他３遺跡、三刀屋町では熊谷遺跡他２遺跡、合計12遺跡である。なお、試掘調査のみ行った場所は４か所であった。平成12年１月９日には現地調査は終了した。その後、タイヤチェーン装着場の建設に伴い、熊谷遺跡の一部について追加調査が必要となり、平成13年７月から現地踏査およびトレンチ調査が開始された。７月23日に始まったこの追加調査は、同年９月14日をもって終了した。

今回報告する遺跡は、平成８年度に調査した白石大谷Ⅰ遺跡、惣三堀遺跡、掘田ヶ谷遺跡、平成10年度に調査した地蔵院遺跡であり、いずれも宍道町内に所在する。また、熊谷遺跡の平成13年度追加調査分についてもあわせて報告する。



第１図　尾道松江線（三刀屋～玉湯間）ルート上の遺跡（S=1／150,000）

第１表　尾道松江線（三刀屋～玉湯間）ルート上の遺跡一覧

番号	遺　跡　名	発掘年度	主　な　内　容	報告書シリーズ名
1	布志名大谷Ⅰ遺跡	平成10年度	古墳、建物跡	一般国道９号松江道路（西地区）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書4
2	布志名大谷Ⅱ遺跡	平成10・11年度	土坑１、縄文土器片	一般国道９号松江道路（西地区）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書4
3	茂芳目遺跡	平成10年度	散布地	中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書5
4	布志名遺跡	平成10年度	建物跡	中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書5
5	大堤Ⅱ遺跡	平成10年度	古墳、住居跡	中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書5
6	大堤Ⅰ遺跡	平成10年度	古墳	中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書5
7	樋の木古墳群	平成10年度	古墳	中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書5
8	真野谷遺跡	平成10年度	古墳	中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書5
9	杉谷遺跡	平成10年度	住居跡	中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書5
10	平床Ⅱ遺跡	平成９年度	玉造工房	中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書6
11	岩屋遺跡	平成10年度	古墳、玉造工房	中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書6
12	堂床遺跡	平成９年度	玉造工房跡	中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書4
13	宰山遺跡	平成10年度	住居跡	中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書5
14	惣三堀遺跡	平成８年度	散布地	中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書7
15	イヤ谷遺跡	平成８年度	石切場	中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書1
16	大畑遺跡	平成８年度	石切場	中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書1
17	小三才谷遺跡	平成８年度	石切場	中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書1
18	川岡遺跡	平成８年度	石切場	中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書1
19	地蔵院遺跡	平成10年度	石造物	中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書7
20	山屋遺跡	平成８年度	石切場	中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書1
21	勝負廻Ⅰ遺跡	平成８年度	古墳、山城、石切場	中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書2
22	勝負廻Ⅱ遺跡	平成８年度	石切場	中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書1
23	堀田ヶ谷遺跡	平成８年度	散布地	中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書7
24	長廻遺跡	平成８年度	石切場	中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書1
25	三反田遺跡	平成８年度	石切場	中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書1
26	ゴンワ遺跡	平成８年度	古墳、建物跡	中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書1
27	白石大谷Ⅰ遺跡	平成８年度	古墳、炭窯、住居跡	中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書7
28	白石大谷Ⅱ遺跡	平成８・９・10年度	建物跡	中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書2
29	シトギ免遺跡	平成８年度	古墳	中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書2
30	野津原Ⅱ遺跡	平成８年度	弥生後期集落、竪穴住居	中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書2・3
31	山守免遺跡	平成９・10年度	弥生後期集落、竪穴住居	中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書2
32	堤平遺跡	平成10年度	寺院跡	中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書8
33	女夫岩遺跡	平成８年度	祭祀跡	島根県指定史跡　宍道・女夫岩遺跡第１次発掘調査報告書
34	女夫岩西遺跡	平成10年度	古墳	中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書3
35	石地蔵遺跡	平成10年度	石造仏	中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書3
36	竹ノ崎遺跡	平成９年度	横穴	中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書9
37	上野遺跡	平成９・10年度	弥生後期集落、竪穴住居、古墳	中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書9
38	上野Ⅱ遺跡	平成11年度	弥生後期集落、竪穴住居	中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書10
39	城山遺跡	平成10年度	山城	中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書3
40	ラント遺跡	平成11年度	散布地	中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書11
41	荒畑遺跡	平成11年度	散布地	中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書11
42	野田遺跡	平成11年度	中世墓	中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書11
43	湯ノ奥遺跡	平成11年度	散布地	中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書12
44	登安寺遺跡	平成11年度	古墳	中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書12
45	湯後遺跡	平成11年度	横穴	中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書12
46	土井・砂遺跡	平成11年度	古墳、横穴	中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書12
47	馬場遺跡	平成11・12年度	集落跡、古墳	中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書14
48	腰黒岡遺跡	平成11年度	弥生時代の溝、山城	中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書13
49	熊谷遺跡	平成11・13年度	古墳、山城	中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書7・13

第２章　遺跡の位置と歴史的環境

第１節　白石大谷Ⅰ遺跡・惣三堀遺跡・掘田ヶ谷遺跡・地蔵院遺跡

白石大谷Ⅰ遺跡、惣三堀遺跡・掘田ヶ谷遺跡・地蔵院遺跡は、いずれも島根県八束郡宍道町に所在する。宍道町は宍道湖の南西に位置し、古来陸上交通の要衝であり『出雲国風土記』に登場する意宇郡宍道郷、宍道駅、拝志郷の一部、出雲郡建部郷が該当する。今日の宍道町は、東西およそ10㎞、南北およそ６㎞の地域を占め、南部一帯は火成岩からなる山地、北部は丘陵を形成する川合・久利・大森・布志名の各堆積層が地溝帯に沿って並走する。また、山地から緩やかに湖に向かう傾斜地には、佐々布川・同道川・来待川・その他小河川が堆積層を浸食して北流し、いずれの河谷にも狭長な沖積層からなる谷底平野を形成する。南に連なる山地は標高400ｍ程度で、植生に変化を与えるほどの高度差はなく、全域常緑広葉樹と落葉広葉樹の混合林の様相を呈し、所々に針葉樹の造林地が点在する。北西の季節風をうける地域であるにもかかわらず、気候は比較的温暖で冬期の積雪も少ない。

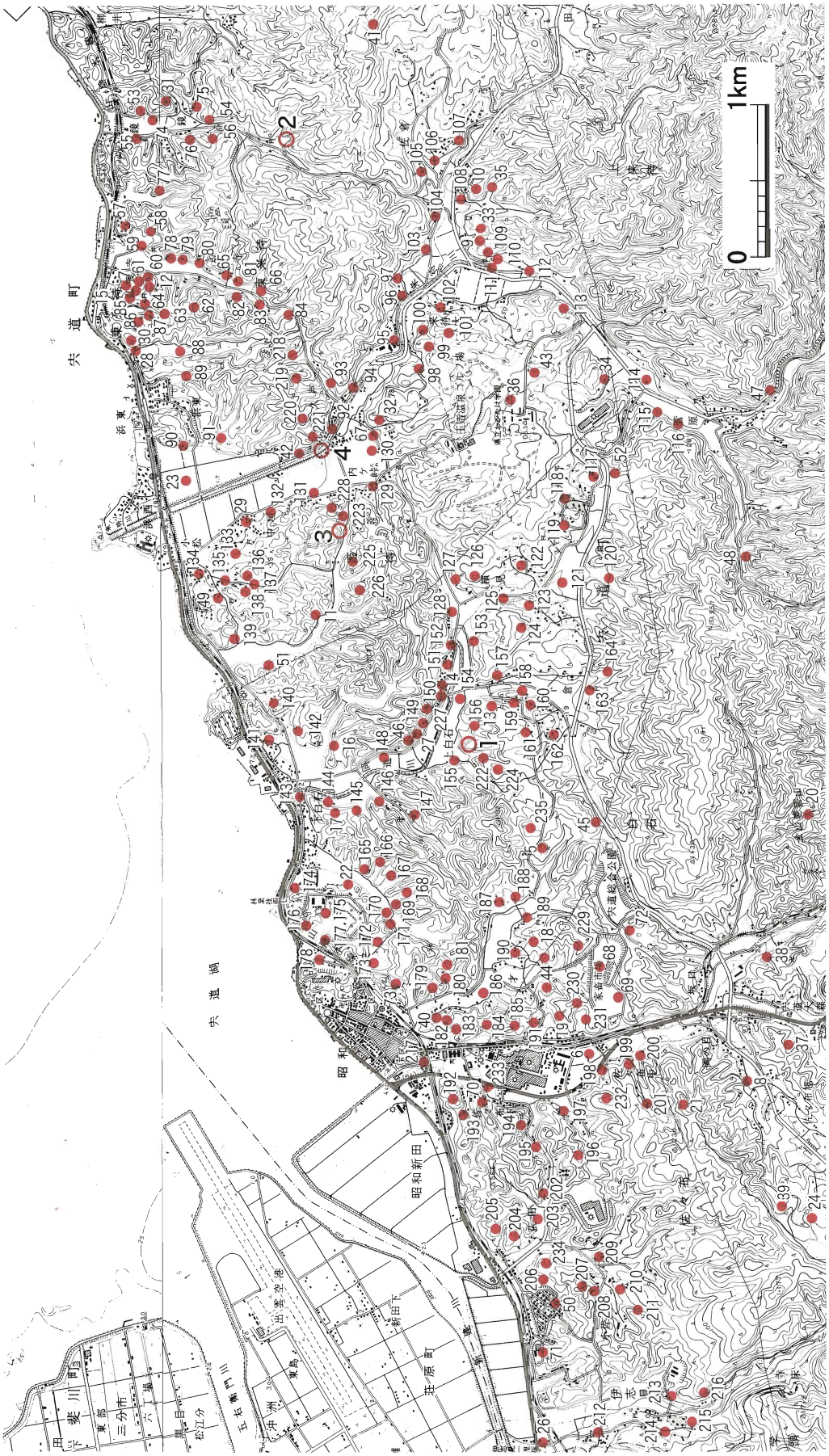
旧石器時代

ウルム氷期の寒冷な気候の影響を受け海水面は低下し、今日の湖の位置には低く西流する河川が古日本海に注いでいたと考えられる。現在の宍道の位置は、湖を望む丘陵地というより、むしろ北向きの山の中腹といったところであろう。この時代の関連遺物として、堤平遺跡のナイフ型石器、首谷遺跡の細石核、町内久戸地区で発見された石核等多くを数えないのは、当時の生活の舞台が、今日の湖底のさらに下であったからではないだろうか。

縄文時代

氷期が終わり、温暖化とともに海水面の上昇が始まる。いわゆる「縄文海進」であり、これによって西行する河谷に海水が浸入し、さらに湾口部が砂洲や河川からの堆積物により締め切られて湖が出現する。かつての石器時代の生活の舞台は水底になり、より高い位置での生活が始まる。野津原Ⅱ遺跡の有茎尖頭器・落とし穴、三成遺跡の縄文土器、弘長寺遺跡の磨製石斧他の石器類・黒曜石剥片はこの時代の遺物・遺構である。特に弘長寺遺跡からの巻貝や二枚貝の出土を考えると、上記の遺跡からあまり遠くないところに当時の汀線があったものと推測される。

第2図　宍道町･三刀屋町の位置



第3図　白石大谷Ⅰ遺跡・惣三堀遺跡・掘田ケ谷遺跡・地蔵院遺跡と周辺の遺跡(S=1/40,000)

第2表　白石大谷Ⅰ遺跡・惣三堀遺跡・掘田ヶ谷遺跡・地蔵院遺跡と周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	概要
1	白石大谷Ⅰ遺跡	古墳、炭窯、住居跡
2	惣三堀遺跡	散布地
3	掘田ヶ谷遺跡	散布地
4	地蔵院遺跡	石造物
5	山守免遺跡	住居跡
6	石地蔵遺跡	石造仏
7	弘長寺遺跡	散布地
8	平田遺跡	散布地
9	栗屋山横穴群	横穴
10	佐倉横穴群	横穴
11	西来待横穴群	横穴
12	弘長寺横穴群	横穴
13	椎山古墳群	古墳
14	下の空古墳	古墳
15	弘長寺古墳	古墳
16	伊賀見古墳群	古墳
17	萩古墳	古墳
18	才古墳	古墳
19	OM公園横穴	横穴
20	金山要害山城跡	城跡
21	佐々布要害山城跡	城跡
22	伝塩冶高貞首塚	古墓
23	伝土御門親王墓	古墓
24	佐々布Ⅰ遺跡	散布地
25	佐々布Ⅱ遺跡	散布地(所在不明)
26	伊志見一里塚	一里塚
27	大石、猪石	祭祀遺跡
28	三成遺跡	散布地
29	中垣遺跡	散布地
30	三成古墳群	古墳
31	鍛北廻古墳	古墳
32	高松古墳群	古墳
33	佐久多神社裏古墳群	古墳
34	菅原横穴群	横穴
35	佐倉未の廻横穴群	横穴
36	伝大野次郎左衛門の墓	古墓
37	大森経塚	経塚
38	金山五輪塔群	古墓
39	普門院跡	寺跡
40	宍道要害山城跡	城跡
41	穂東城跡	城跡
42	久戸千体地蔵	磨崖仏
43	大野原古墳	古墳
44	才横穴群	横穴
45	女ノ峠横穴	横穴
46	坪の内古墳	古墳
47	菅原金屋子鉧跡	製鉄遺跡
48	上来待カナクソ谷鉧跡	製鉄遺跡
49	小松古窯跡群	窯跡
50	萩田遺跡	住居跡
51	尹野谷遺跡	散布地
52	大野鉧跡	製鉄遺跡
53	大紋古墳	古墳
54	草の上東遺跡	散布地
55	塚畑遺跡	散布地
56	草の上遺跡	散布地
57	松石薄穴	横穴
58	松石畫跡	散布地
59	松石古墳群	古墳
60	明寿廻古墳群	古墳
61	明寿廻遺跡	散布地
62	多井古墳群	古墳
63	寺谷遺跡	散布地
64	寺谷北遺跡	散布地
65	多井北遺跡	散布地
66	多井遺跡	散布地
67	知原古墳群	古墳
68	清水谷古墳群	古墳
69	矢頃遺跡	横穴・散布地
70	観音寺横穴	横穴
71	足頃古墳群	古墳
72	水溜古墳群	古墳
73	随音寺横穴群	横穴
74	大門遺跡	散布地
75	庄廻遺跡	散布地
76	岩穴遺跡	散布地
77	荒神谷遺跡	散布地
78	水行遺跡	散布地
79	高畝遺跡	散布地
80	家の下遺跡	散布地
81	下多井遺跡	散布地
82	立平遺跡	散布地
83	前田遺跡	散布地
84	苅山遺跡	散布地
85	明寿廻東遺跡	散布地
86	竹の下遺跡	散布地
87	寺谷西遺跡	散布地
88	三成上遺跡	散布地
89	坂広遺跡	散布地
90	目吉遺跡	散布地
91	舟山遺跡	散布地
92	水頃遺跡	散布地
93	高平遺跡	散布地
94	山根遺跡	散布地
95	鍛冶屋遺跡	散布地
96	蔵敷遺跡	散布地
97	西廻遺跡	散布地
98	蔵の前遺跡	散布地
99	織部古墳群	古墳
100	平治割遺跡	散布地
101	大森城跡	城跡
102	大畑遺跡	散布地
103	大坊遺跡	散布地
104	清水尻遺跡	散布地
105	常命壽遺跡	散布地
106	柴木田遺跡	散布地
107	岩屋遺跡	散布地
108	戸構遺跡	散布地
109	角田古墳群	古墳
110	角田横穴群	横穴
111	紺屋田遺跡	散布地
112	金子遺跡	散布地
113	半ノ田遺跡	散布地
114	沢目尻遺跡	散布地
115	ハゲの前遺跡	散布地
116	上ス郷遺跡	散布地
117	四斗尻遺跡	散布地
118	木実田遺跡	散布地
119	中村遺跡	散布地
120	反田遺跡	散布地
121	鹿掘遺跡	散布地
122	土井遺跡	散布地
123	堂床遺跡	散布地
124	横見古墳群	古墳
125	椿堀遺跡	散布地
126	御崎廻古墳	古墳
127	的場遺跡	散布地
128	宮の前遺跡	散布地
129	横田古墳	古墳
130	大前遺跡	散布地
131	槙綴遺跡	散布地
132	八ツ面遺跡	散布地
133	船分遺跡	散布地
134	段原遺跡	散布地
135	伊ノ坂遺跡	散布地
136	東カナヘ廻遺跡	散布地
137	カナヘ廻遺跡	散布地
138	宇由比神社古墳	古墳
139	四つ口古墳	古墳
140	イヅレ遺跡	散布地
141	下白石遺跡	散布地
142	平井廻遺跡	散布地
143	後原遺跡	散布地
144	奥遺跡	散布地
145	萩遺跡	散布地
146	熊江遺跡	散布地
147	空遺跡	散布地
148	長畑遺跡	散布地
149	坪の内遺跡	散布地
150	平屋敷遺跡	散布地
151	上西遺跡	散布地
152	ホウジ遺跡	散布地
153	ホウジ向遺跡	古墓
154	五反田遺跡	散布地
155	イナニソ遺跡	散布地
156	椎山遺跡	散布地
157	鳶遺跡	散布地
158	北垣尻遺跡	散布地
159	北垣遺跡	散布地
160	掛木遺跡	散布地
161	上後ヶ市遺跡	散布地
162	鶴田遺跡	散布地
163	宮原遺跡	散布地
164	荒田遺跡	散布地
165	カシャク古墳	古墳
166	小昭廻遺跡	散布地
167	後谷横穴	横穴
168	元薬師遺跡	散布地
169	山の神谷横穴	横穴
170	岩穴口横穴	横穴
171	打越遺跡	散布地
172	笹登堀遺跡	散布地
173	上野原遺跡	散布地
174	香の木遺跡	散布地
175	深坪遺跡	散布地
176	小宮田遺跡	散布地
177	同野原遺跡	散布地
178	下野原遺跡	散布地
179	八斗久保遺跡	散布地
180	横町横穴群	横穴
181	横町遺跡	散布地
182	宍道要害山古墳	古墳
183	榎廻遺跡	散布地
184	西代遺跡	散布地
185	長廻古墳	古墳
186	六反田遺跡	散布地
187	外垣内遺跡	散布地
188	原田遺跡	散布地
189	佐賀利遺跡	散布地
190	向原遺跡	散布地
191	篠原遺跡	散布地
192	掛屋山城跡	城跡
193	佐々布下古墳群	古墳
194	中屋敷遺跡	散布地
195	大畑ヶ遺跡	散布地
196	城山城跡	城跡
197	西屋敷遺跡	散布地
198	竹ノ崎遺跡	散布地
199	矢谷下遺跡	散布地
200	敷手遺跡	散布地
201	矢谷上遺跡	散布地
202	岩穴畑遺跡	散布地
203	鋤崎古墳群	横穴
204	屋敷古墳群	古墳、横穴
205	椎ノ木廻古墳群	古墳
206	小界古墳	古墳
207	小佐々布古墳群	古墳
208	鹿田遺跡	散布地
209	北ノ廻遺跡	散布地
210	ソラ田遺跡	散布地
211	小佐々布横穴群	横穴
212	原添遺跡	散布地
213	寺ノ前遺跡	散布地
214	廻田遺跡	散布地
215	ニソリ田遺跡	散布地
216	ニ遺跡	散布地
217	加茂分遺跡	散布地
218	イヤ谷遺跡	石切場
219	六畑遺跡	石切場
220	小三才谷遺跡	石切場
221	川岡遺跡	石切場
222	白石大谷Ⅱ遺跡	住居跡
223	勝負廻Ⅱ遺跡	石切場
224	シトギ免遺跡	古墳
225	長廻遺跡	石切場
226	三反田遺跡	石切場
227	ゴンワ遺跡	石切場
228	勝負廻Ⅰ遺跡	城跡、古墳
229	堤平遺跡	寺院跡
230	女夫岩遺跡	祭祀跡
231	女夫岩西遺跡	古墳
232	上野遺跡	古墳、住居跡
233	海部城跡	城跡
234	長廻古墳群	古墳、横穴
235	野津原Ⅱ遺跡(東区)	住居跡

弥生時代

溺れ谷に形成された谷底平野で稲作が行われる。佐々布川・同道川・来待川の流域あたりが主な舞台であろうか。遺跡も増え、墳墓とともに弥生中期頃の土器を検出した三成遺跡、弥生の建物跡や遺物を検出した白石大谷Ⅱ遺跡、弥生後期の墳墓と推定される知原古墳群の１号墓、清水谷古墳群の２号墓等を数え、いずれも、平坦地に近い丘陵もしくは、丘陵の端に位置する。なお、後期になると竪穴住居跡・掘立柱住居跡の確認された前述の野津原Ⅱ遺跡、竪穴住居跡や石器を検出した山守免遺跡に見られるような高地性集落が出現する。また、この時代の遺物として宍道町内出土と考えられる伝出雲出土銅鐸をあげておきたい。

古墳時代

遺跡の数は急増する。それも、丘陵地や斜面に多い。前期の古墳には佐々布下古墳群の１号墳、上野古墳群の１号墳が知られ、特に上野１号墳はこの地域初の前期古墳で長径約40m・短径約34mを測り、鰭付きの円筒埴輪や豊富な副葬品を伴った古墳である。30基の古墳からなる水溜古墳群のうち、円筒埴輪や朝顔形埴輪が発見された群中最大の５号墓、３基の方墳からなる足頭古墳群、木棺の埋納が確認された松石古墳群の１号墳、水田中に石棺の蓋の部分が発見された横田古墳は、いずれも中期に該当すると考えられる。後期になると全長35mと地域最大級の前方後円墳である椎山古墳群の１号墳、前方後方墳の可能性が高く調査地に耳環や須恵器、それに多くの鉄器が発見された伊賀見古墳群の１号墓、墳丘はすでになく来待石の石材が露出していた下の空古墳、その他、前述の知原古墳群の４号墓（Ｂ古墳）、それに、遅れて築造されたと考えられる２号墳、この地域の終末期の古墳とされる鏡北廻古墳があげられる。また、後期になると横穴墓が登場する。玄室の形態は妻入りを呈するものと平入りのものが混在し、内蔵する数少ない石棺はいずれもこの地方特産の来待石で作られている。現在３支群16穴が確認されている地域内最大規模の才横穴墓群、横穴墓が盛行し始めるころにあたる松石横穴墓、未確認のものを含めて大規模な横穴墓群になると予想される菅原横穴墓群等、多数の遺跡を数える。古墳や横穴墓以外の遺跡には、土器を伴った住居跡群が確認された矢頭遺跡がある。

律令時代以降

律令時代になると、『出雲国風土記』によりこの地域の様子をうかがい知ることができる。記述にある「女夫岩」や「猪岩」・「犬岩」は現存するものとの関連が想定される。遺跡としては住居跡に鍛冶炉、その関連遺物の確認された荻田遺跡、布掘り建物跡等や遺物から寺院跡とされた前述の堤平遺跡、須恵器を焼成した小松古窯跡群がある。

宍道の地は、東西の水陸の交通路と南方への通路の分岐点にあたる要衝であるため、付近に**中世**の山城が多く存在する。この地域に勢力を誇った国人領主、宍道氏の拠った金山要害山を始め、その支城として築かれた宍道要害山城、佐々布要害山城等をあげることができる。

湖岸に並行する凝灰岩質砂岩からなる来待層と呼ばれる堆積層中には、石材として有用なものが含まれ、遠く古代から利用されてきた。中世から**近世**にかけての石切場遺跡はこの来待層上に点在する。中には、長廻遺跡に見られるように、切り取り面の高さが30mを超える壮大なものまである。この石材は産出する所の地名から来待石と呼ばれ、その採石・加工は今日でも重要な地場産業である。現在、宍道町立の「来待ストーン・ミュージアム」があり、ここでは来待石に関するいろいろな情報を得ることができる。

本報告書の対象である白石大谷Ⅰ遺跡は、宍道湖の南方1.3kmの地点にある同道川の左岸、幅約200ｍの沖積地を望む丘陵部の中腹に位置し、横口式製炭窯、方墳、その他弥生の掘立柱建物跡と考えられる遺構を検出した。同じ丘陵地に所在し、近接する遺跡には、弥生および中世の建物跡やそれにかかわる弥生土器、須恵器、陶磁器、その他石器類が出土した前述の白石大谷Ⅱ遺跡、さらに西方に５～６世紀初頭の方墳を検出したシトギ免遺跡が所在する。なお、対岸の山裾には、『出雲国風土記』に登場する「宍道」の地名にかかわると伝えられる「猪岩」・「犬岩」を祀る石宮神社がある。

惣三堀遺跡は鏡神社の東方、鏡川上流域の尾根上にあり、中世末の火葬墓と考えられる土壙を検出した。少し離れた下流の丘陵地には、方墳のある前述の鏡北廻古墳を始め数か所の遺跡が確認されている。

掘田ヶ谷遺跡は来待川左岸の低い尾根上にあり、土師器・須恵器・中世土器を出土した。また、付近の遺跡には、古墳時代の石棺、中世の山城、それに石切場跡を確認した勝負廻Ⅱ遺跡、山屋遺跡、前述の長廻遺跡がある。

地蔵院遺跡は掘田ヶ谷遺跡から来待川を隔てた対岸に位置する。右岸の丘陵が川近くまでせり出したところにあり、中世の宝篋印塔収納施設２基を確認した。付近のほかの遺跡には川岡遺跡、小三才谷遺跡、大畑遺跡等、左岸と同様来待石の採石場が多い。

附記：　白石大谷Ⅰ遺跡の発掘にあたり、礫岩中に二枚貝の化石を発見した。古生物の調査は本来の目的ではないが、採集し持ち帰ったものについては、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターにおいて白石大谷Ⅰ遺跡の報告書掲載遺物と一緒に保管している。

第２節　熊谷遺跡

熊谷遺跡は、斐伊川と三刀屋川の合流地点から南南西に約２㎞の、中国山地に連なる丘陵地帯に所在し、西側の要害遺跡と並んで位置する。両遺跡の所在地を『出雲国風土記』（以下『風土記』と略す）の地名に当てはめると飯石郡熊谷郷にあたり、斐伊川を境界にして東側は大原郡の斐伊郷・来次郷に接する。付近の標高は100ｍ前後と決して高くはないが、地形は急峻である。斐伊川と三刀屋川の沖積作用によって形成された平野に突き出すような地形になっているため、眺望は非常に良い。遺跡内の最高所からは、北方に斐伊川と三刀屋川の合流地点や、『風土記』にも登場する城名樋山を、西に中世三刀屋氏の居城であった三刀屋じゃ山城や三刀屋尾崎城を、東に木次の中心市街地を、さらに南には三刀屋中心市街地を経て中国山地の山並みを望むことができる。松江と広島を結ぶ国道54号や、広島県比婆郡東城町に至る国道314号、出雲市に至る主要地方道出雲三刀屋線など、主要な街道の様子も手に取るようにわかる。

この地域は古来、商業活動で栄えてきた。特に木次市庭（木次市場）は奥出雲の「たたら」で生産された鉄の集散地であり、また慶安２（1649）年には出雲国唯一の紙座が開設されるなど、雲南地域の経済の中心を担った。このような役割を果たせた要因として、この地が交通の要衝であったことを見逃すことはできない。前述したように、この地で主要街道が交わることに加え、ＪＲ山陰本線とＪＲ芸備線を連絡するＪＲ木次線もこの地を経由する。道路・鉄道網が整備される以前には、当然のごとく斐伊川や三刀屋川の水運が活発に利用されてきた。この地域の歴史を振り返る上で、陰陽連絡の要としての性格を無視することはできない。

以下、熊谷遺跡を中心とする地域の主な遺跡を紹介し、本地域の歴史を概観しておきたい。

旧石器時代

三刀屋・木次両町内およびその周辺地域で、この時期の遺跡は現在まで確認されていない。島根県全体を見ても旧石器時代の資料は少ないが、宍道湖・中海の周辺地域では、松江市の下黒田遺跡を始めとし、この時代に遡ることのできる遺跡が見つかり始めている。雲南地域においても、今後の開発等をきっかけにこの時代の遺跡が発見される可能性は高いと言えるだろう。

縄文時代

三刀屋町内では、三刀屋川流域の殿河内地区や乙加宮地区、飯石川流域の粟谷地区や多久和地区において、縄文時代の遺跡が確認されている。

このうち乙加宮地区の宮内遺跡、槇原遺跡では中期から後期の、浜遺跡では早期後葉の土器片が数多く出土している。多久和地区には、縄文時代の遺物を出土した遺跡が密集している。中でも、埋甕を２基出土した宮田遺跡は県指定史跡である。埋甕は乳幼児の埋葬に用いたと考えられ、ここでは後期末から晩期の大型土器を倒立して使用しており、埋甕を取り囲むようにピットや立石をともなっている。その他、貯蔵穴（５穴）等が検出され、後期から晩器を中心とした多量の土器、磨石、石斧、石鏃、石錘等が出土している。給下地区の馬場遺跡では、前期から晩期にかけての土器、さらに石器や900点以上の黒曜石剥片が出土した。石器製作跡の可能性も高い。また、六重地区の子安観音堂には、磨石、石斧、石棒が奉納されている（出土地は不明）。石棒の出土は、県内では斐伊川上流域では何例か報告があるが、稀なものといえる。

木次町内では、熊谷遺跡から南南東に約10㎞の地点にある平田遺跡が著名である。後期から晩期

初頭の土器が大量に出土したが、山陽地方や北部九州の影響を強く感じさせるものも見られる。また、土器の出土状況等から、埋甕が行われた可能性が指摘され、土壙も８基検出されるなど、縄文時代の墓制の一端を知る上で貴重な遺跡である。さらに大量の石鏃や石斧が剥片をともなって出土しており、この遺跡は石器の製作工房跡であったと考えられる。

弥生時代

三刀屋町内では宮内遺跡、浜遺跡、宮田遺跡などが、木次町内では湯村地区の早稲田遺跡、本郷谷遺跡などがこの時代の遺跡として知られている。しかし、縄文時代の遺跡と比べると数そのものが少なく、遺構が確認された例もなかった。雲南地域では、仁多郡横田町の横田八幡宮に伝えられた銅剣（中細形銅剣）、木次町内から出土したといわれる銅鐸（外縁付鈕Ｉ式）が注目される程度であった。

しかし、近年この様相にも変化が生じつつある。平成８（1996）年には、熊谷遺跡の北約７㎞の加茂岩倉遺跡（大原郡加茂町）から39個もの銅鐸が出土するという大発見があり世間の注目を集めた。また平成11（1999）年には、三刀屋・木次両町内では初めて、遺構をともなった弥生時代の遺跡の調査が２か所で実施された。

ひとつは、縄文時代の項で触れた、木次町の平田遺跡である。前述の遺物・遺構を検出した区域の東側から、円形に近い多角形を呈した径8.8～9.0ｍの竪穴建物跡１棟が見つかった。建物内から鍛冶炉が４基検出され、鉄鏃やその未製品、板状や棒状の鉄片、鑿、砥石などが出土したことから、この建物は鉄素材を鍛錬し、鑿を用いて鉄器を製作した工房であったと考えられる。やはり平成11年に、これとほぼ同じ性格をもつ建物群が八束郡宍道町の上野Ⅱ遺跡で見つかったが、平田遺跡の鉄器工房跡のほうはやや新しい、弥生時代の末から古墳時代初頭のものと考えられている。

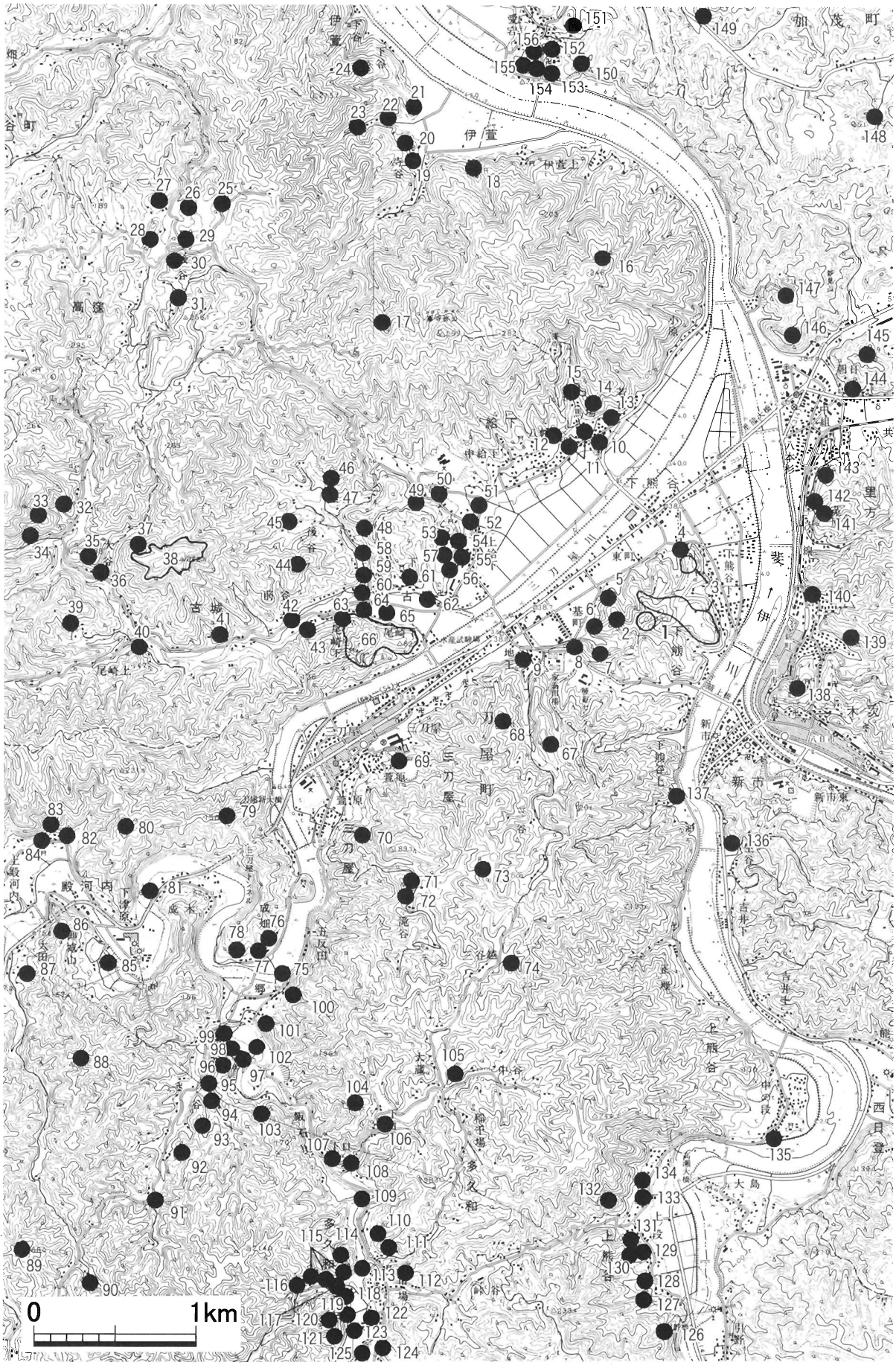
もうひとつは、三刀屋町の要害遺跡である。尾根の先端を濠によって切り離した、見張り台の一種を思わせる遺構を検出しており、時期は弥生前期末から中期と考えられる。

古墳時代

斐伊川中流域は、出雲地方でも比較的早くから古墳の築造を始めた地域である。熊谷遺跡の北６㎞に所在する大原郡加茂町神原の神原神社古墳は、景初三年銘の三角縁神獣鏡を副葬品とすることで名高く、古墳自体も県内最古級の築造と考えられる。この古墳から南東約600ｍのところには、平成11年に調査が行われた土井・砂遺跡があり、前期の方墳が６基存在する。中でも土井・砂１号墳は、古墳の副葬品として県内初めての破砕鏡が出土したことが注目される。

三刀屋町内では、給下の松本古墳群に前期古墳が存在する。松本１号墳は全長約50ｍの前方後方墳である。埋葬施設として後方部に粘土槨が２基、前方部に土器蓋土壙が１基検出された。副葬品には、斜縁神獣鏡の他に、鉄剣、刀子、鉄針、ガラス小玉等がある。墳頂部には土師器の壺や高坏等が供献されていたと思われる。松本３号墳は、全長52ｍの前方後方墳である。１号墳とは異なり前方部がバチ形に開いているので、１号墳に先行するものと考えられる。これらはともに、この時代に斐伊川中流域を支配した首長の墓であろう。

木次町では、斐伊中山古墳群が注目される。１号墳は試掘と地形測量が行われたのみだが、全長約50ｍの前方後円墳の可能性がある。また、２号墳は中心となる埋葬施設に排水施設をもち、割竹形木棺には細線式鳥文鏡や鉄製武器が副葬されていた。３号墳、13～16号墓も前期の小規模な古墳である。



第4図　熊谷遺跡と周辺の遺跡（S=1／35,000）

第３表　熊谷遺跡と周辺の遺跡一覧

地図番号	遺　跡　名	種　別	地図番号	遺　跡　名	種　別
1	熊谷遺跡	古墳・城跡	79	大櫃山城跡	城跡
2	要害遺跡	城跡(弥生時代の溝を含む)	80	下殿河内城跡	城跡
3	熊谷軍団跡	軍団跡	81	殿河内煉瓦工場窯跡	窯跡
4	要害砦	城跡	82	永晶寺跡	寺院跡
5	要害宅裏横穴	横穴	83	清水荒神塚遺跡	鏡出土地
6	要害横穴群	横穴	84	清水十王堂跡	古墓・寺院跡
7	要害の首塚	古墓	85	殿河内遺跡	住居跡
8	地王砦跡	城跡	86	御城山城跡	城跡
9	地王横穴	横穴	87	太田横穴群	横穴
10	馬場遺跡	集落・古墓	88	高丸砦群	城跡
11	大門口遺跡	散布地	89	陣高丸城跡	城跡
12	坂中横穴	横穴	90	札場道尾鉄跡	製鉄遺跡
13	若宮跡	神社跡	91	城木谷鉄跡	製鉄遺跡
14	若宮古墳	古墳	92	かいろく遺跡	散布地
15	峯寺石塔群	古墓	93	栗谷谷横穴	横穴
16	峯寺山要塞群	城跡	94	城ノ尾下ノ段遺跡	散布地
17	宮谷上砦跡	城跡	95	金井子鉄跡	製鉄遺跡
18	中屋谷古墓	古墓	96	栗谷城跡	城跡
19	醍醐塞古墓	古墓	97	大年横穴群	横穴
20	堀ノ内砦	城跡	98	法尺寺跡	寺院跡
21	鍛冶屋遺跡	製鉄遺跡	99	大年経塚	経塚
22	割田古墓	古墓	100	不動堂鉄跡	製鉄遺跡
23	俵谷たたら跡	製鉄遺跡	101	栗谷横穴群	横穴
24	伊萱城跡	城跡	102	栗谷遺跡	散布地
25	古山砦跡	城跡	103	カナクソ鉄跡	製鉄遺跡
26	段家の上古墓	古墓	104	梅坊砦(寺院)跡	城跡
27	苗代迫古墳	古墳	105	大日鉄跡	製鉄遺跡
28	蓮池古墳	古墳	106	道の下鉄跡	製鉄遺跡
29	後谷古墳	古墳	107	大倉口五輪塔	古墓
30	壁の内古墓	古墓	108	大倉口横穴群	横穴
31	蛇ノ原宝篋印塔	古墓	109	清名五輪塔群	古墓
32	面田上古墓	古墓	110	王神谷口遺跡	散布地
33	鐘撞堂砦	城跡	111	大神谷横穴	横穴
34	石峠権現跡	寺院跡	112	多久和城跡	城跡
35	大谷砦	城跡	113	宮田遺跡	散布地
36	枝の前古墓	古墓	114	法泉寺跡	寺院跡
37	石曲り奥古墓	古墓	115	森谷横穴群	横穴
38	三刀屋じゃ山城跡	城跡	116	森谷鉄跡	製鉄遺跡
39	鉄谷鉄跡	製鉄遺跡	117	森谷川遺跡	散布地
40	尾崎神子ケ畑古墓	古墓	118	託和神社跡	神社跡
41	金屎鉄跡	製鉄遺跡	119	古殿遺跡	散布地
42	丸山遺跡	散布地	120	古殿古墳	古墳
43	枇杷垣古墓	古墓	121	古殿今宮古墳	古墳
44	中山砦	城跡	122	京殿遺跡	散布地
45	元屋敷城跡	城跡	123	飯石小学校グランド遺跡	散布地
46	梅窓院日跡	寺院跡	124	飯石神社遺跡	散布地
47	薬床古墓	古墓	125	飯石神社上遺跡	散布地
48	久円寺上古墓	古墓	126	後の谷鉄跡	製鉄遺跡
49	宮谷遺跡	散布地	127	善王寺跡	寺院跡
50	高丸遺跡	散布地	128	善王寺横穴	横穴
51	上給下遺跡	散布地	129	林迫荒神古墓	古墓
52	籠王遺跡	散布地	130	熊谷山経塚	経塚
53	給下の殿様墓と同安寺跡	古墓・寺院跡	131	上熊谷蛇山城跡	城跡
54	一宮横穴群	横穴	132	上熊谷秋葉山砦跡	城跡
55	同安寺遺跡	散布地	133	岩広製鉄遺跡	製鉄遺跡
56	松本古墳群	古墳群	134	岩広古墳	古墳
57	松本１号墳	古墳	135	岩佐古墳	古墳
58	古城八幡宮跡	神社跡	136	下吉井横穴群	横穴
59	中屋垣内遺跡	散布地	137	深谷古墓	古墓
60	コン墓垣内遺跡	散布地	138	秋葉山城跡	城跡
61	八万坊遺跡	散布地	139	案内横穴群	横穴
62	引地書跡	散布地	140	斐伊郷新造院跡	寺院跡
63	啓星谷遺跡	散布地	141	明徳寺横穴群	横穴
64	御厳前遺跡	散布地	142	明徳寺跡	祭祀遺跡
65	御厳前館推定地	館跡	143	斐伊郷新造院跡	寺院跡
66	三刀屋尾崎城跡	城跡	144	里方横穴群	横穴
67	三谷古墓	古墓	145	斐伊中山古墳群	古墳
68	三谷砦群	城跡	146	城名樋山城跡	城跡
69	宮垣古墳	古墳	147	妙見山遺跡	祭祀遺跡
70	萱原鉄谷たたら	製鉄遺跡	148	小宮谷製鉄跡	製鉄遺跡
71	滝谷遺跡	集落跡	149	高麻神社跡	神社跡
72	滝谷古墓	古墓	150	長谷寺上へ砦跡	城跡
73	滝谷槙山たたら跡	製鉄遺跡	151	杉原窯跡	窯跡
74	長戸呂鉄谷鉄跡	製鉄遺跡	152	長谷寺古墓	古墓
75	樵平荒神遺跡	散布地	153	御代赤瓦組合窯跡	窯跡
76	成木宮前石塚	古墓	154	御代窯跡	窯跡
77	成木八幡宮跡	神社跡	155	三代古墳	古墳
78	宮上ミ荒神塚古墳	古墳	156	矢ノ尻古墓	古墓

一方、中期の古墳については、この地域で確認・調査された例はほとんどない。熊谷遺跡の南側の尾根続きにあたる地王砦跡は、その形状や立地から中世の城跡と考えられる。『雲陽軍実記』や『陰徳太平記』によれば、このあたりは大内氏と尼子氏、毛利氏と尼子氏の古戦場であったらしいが、ここから古墳時代前期から中期のものと推測される鉄製品が出土している。これらは丘陵上にかつて築かれた古墳の副葬品であった可能性がある。周辺からは古鏡や勾玉が出土したこともあったという。

この地域で確認された古墳のほとんどは後期に属する。このうち、内部主体が知られるのは松本４号墳と三刀屋町上熊谷の岩広古墳で、ともに横穴式石室をもつ。松本４号墳には陶硯等が、岩広古墳には馬具等が副葬されていた。横穴墓も数多く存在し、三刀屋町で20群、木次町で10群を数えることができる。副葬品も等質的であるが、三刀屋町殿河内の太田横穴群の２号穴には馬具が、同町中野の東下谷横穴群の４、５号穴にはそれぞれ太刀が、木次町寺領の平ヶ廻横穴墓には金銅装刀子が副葬されていたのは注目される。その他、三刀屋町内では神代横穴、神代下廻横穴、森谷横穴群、粟谷横穴群などが、木次町内では早稲田横穴群、中谷奥横穴群などがあげられる。

奈良・平安時代

『風土記』によれば、この地域は斐伊川を境に、東が大原郡、西が飯石郡に属している。大原郡の郡家は斐伊郷に置かれたが、現在のＪＲ木次駅北方約500mの地点と推定される。出雲国には「教昊寺」と10か所の「新造院」があるが、斐伊郷にはそのうち新造院が二つ存在した。一つは現在の木次駅付近に推定され、「塔の石」と呼ばれる礎石らしき石がある。もう一つの推定地からもやはり礎石らしい石が出土している。

一方、飯石郡の郡家は多禰郷に置かれた。これは現在の掛合町掛合の郡地区にあたるので、三刀屋は一見飯石郡の中心から外れているように見える。しかし『風土記』時代、三刀屋町域の重要性は顕著である。飯石神社は伊毘志都幣命が天降ったとされる巨石を御神体とする、古い時代の信仰形態を現在に伝える神社である。地名の由来となった神社でもあり、『延喜式』にも記載される古社である。また、松本古墳群の近くには、『風土記』では「御門屋社」、『延喜式』では「三屋神社」と記載される古社、三屋神社がある。この神社を中心とする一帯が三屋郷で、正倉が置かれていた。さらに『風土記』には、飯石郡熊谷郷に軍団が置かれたとの記載がある。熊谷軍団跡は三刀屋川と斐伊川の合流地点をひかえた丘陵上に推定され、熊谷遺跡と部分的に重なっている。平成10(1998)年、熊谷軍団推定地の一部(熊谷遺跡の東側にあたる)で島根県教育委員会が発掘調査を行ったが、充分な成果は得られていない。

奈良時代から平安時代にかけて、この地域にも本格的に仏教文化が流入してくる。三刀屋町給下の峯寺弥山には、修験道の開祖役小角が開いたと伝えられる峯寺があり、また、乙加宮の鍋山には聖武天皇の勅願寺との寺伝をもつ禅定寺がある。両寺院とも、出雲地方屈指の古刹である。

木次町では寺領と宇谷の境界に伝室山寺跡があり、平安時代には山岳仏教で栄えたという。さらに斐伊中山古墳群にほど近く、「城名樋山」に隣接する妙見山遺跡からは9～12世紀の掘立柱建物跡が計６棟検出され、土師質土器等の遺物が大量に出土した。祭祀に直接つながる遺物は確認されなかったが、穿孔土器や灯明皿、飾り釘等の出土を考えると、奈良時代後期から平安時代の山岳信仰にかかわる祭祀遺跡である可能性は高い。また、同町平田の家の上遺跡では、配石遺構から土馬や手づくね土器、土玉などが出土している。７～８世紀の、水辺の祭祀に関係するものと考えられ

る。

さらに、三刀屋町給下の馬場遺跡では平安時代後期の墓が見つかっている。長さ約4.2m、幅約2.1mと大型で、底には礫が敷きつめられていた。副葬品として大刀一振り、刀子１点、毛抜き、鋏、火打ち金、さらに玉類22点をともなっている。また、奈良時代から平安時代にかけての掘立柱建物跡が10棟見つかった。平安時代末に溝によって区画された集落跡も確認された。墓の規模や構造、副葬品ばかりでなく、集落と墓が隣接していたことも注目に値する。この遺跡では、江戸時代にいたるまでの掘立柱建物跡が合計で56棟検出され、ここが長期にわたって生活の場になっていたことが明らかになった。

鎌倉・室町時代

承久三（1221）年、越後国の住人諏訪部助長（扶永）が三刀屋郷地頭職に補任された。この時の「関東下知状」（三刀屋文書）に初めて「三刀屋」の文字があてられる。諏訪部氏はやがてこの地に深く根をおろし、三刀屋氏を名乗るようになる。本拠地は当初、跡谷の元屋敷城跡におかれたようである。南北朝の動乱期を巧みに切り抜けた三刀屋氏は、出雲の有力国人に成長していくが、観応２（1352）年9月、諏訪部信恵が三刀屋郷内石丸城に立てこもって挙兵した記録がある。この石丸城とは、元屋敷城に代わって三刀屋氏の根城となったもので、「じゃ山」の別称と考えられる。じゃ山城に見られる畝掘り構造は、出雲地方では近隣も含め確認された例はない。この城跡からは中国製青磁碗を含み、14～16世紀前半の遺物が出土している。

戦国時代になると、大内氏と尼子氏、毛利氏と尼子氏の抗争の本格化や、流通経済の発展にともない、交通の要衝としての三刀屋の重要性はいっそう高まる。それに呼応し、三刀屋氏の根城は三刀屋川を望む尾崎城に移る。元和元（1615）年の一国一城令の発令により堀尾氏が廃城とするまで、この城の重要性に変化は生じなかった。「殿井手」と呼ばれる用水路をもつことは尾崎城の大きな特徴である。

その他、木次町内には宇山氏の宇山城（日登城）、広田氏の霞龍山城などがある。また、三刀屋町多久和の古殿遺跡では、礎石と見られる自然石が多数出土し、同時に南宋伝来の青磁碗や白磁碗、銅製の飾金具などの遺物が得られた。鎌倉時代後半から南北朝期のものと推定され、多久和城主の多久和氏（目黒氏）との関係が注目される。

江戸時代

『風土記』に「飯石小川。源は郡家の正東一十二里なる佐久禮山より出で、北に流れて三屋川に入る。鐵あり。」と記されるなど、古来この地では製鉄が盛んであった。しかし奈良時代に比定されるほど古い遺構は未確認である。同町中野の六重峠鈩跡など、中世にさかのぼる可能性があるものも点在するが、多くの製鉄遺跡は近世のものである。特に三刀屋町六重の金蔵鈩跡は近世の大規模な製鉄遺跡として知られる。

木次町下熊谷には、深谷古墓がある。地蔵菩薩像を半肉彫にした石造物2基や、墓壙と思われる４つの掘り込みなどからなるもので、18世紀前半の墓所と考えられる。

本書では、弥生前期土器と須恵器および石錘、黒曜石剥片等が出土し、落とし穴状土壙１基を検出した、熊谷遺跡の追加調査について報告する。

参考文献

第１節　白石大谷Ⅰ遺跡・惣三堀遺跡・掘田ヶ谷遺跡・地蔵院遺跡

宍道町史編纂委員会編 『宍道町史　史料編』 宍道町　1999

『野津原Ⅱ遺跡(西区)・女夫岩西遺跡・城山遺跡
中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 ３』 島根県教育委員会　2000

『勝負廻Ⅰ遺跡・白石大谷Ⅱ遺跡・シトギ免遺跡・野津原Ⅱ遺跡・山守免遺跡・石地蔵遺跡
中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書　２』 島根県教育委員会　2000

『島根県教育庁文化財課埋蔵文化財調査センター年報Ⅴ』 島根県教育委員会　1997

『島根県教育庁文化財課埋蔵文化財調査センター年報Ⅵ』 島根県教育委員会　1998

『島根県教育庁文化財課埋蔵文化財調査センター年報Ⅶ』 島根県教育委員会　1999

『島根県教育庁埋蔵文化財調査センター年報Ⅷ』 島根県教育委員会　2000

高安　克己 『宍道町が海だったころ　宍道町ふるさと文庫４』 宍道町教育委員会　1991

山根　正明 『宍道町の山城　宍道町ふるさと文庫５』 宍道町教育委員会　1991

西尾　克己 『宍道町の古墳時代　宍道町ふるさと文庫６』 宍道町教育委員会　1992

宍道町教育委員会他 『石と人　宍道町ふるさと文庫８』 宍道町教育委員会　1995

中村　唯史 『宍道湖のおいたち　宍道町ふるさと文庫９』 宍道町教育委員会　1995

『出雲国風土記にみる宍道町　宍道町ふるさと文庫13』 宍道町教育委員会　1998

第２節　熊谷遺跡

『島根県埋蔵文化財調査報告書第Ⅰ集』 島根県教育委員会　1969

『京殿遺跡－調査概報－』 三刀屋町教育委員会　1979

『太田横穴群発掘調査報告書』 三刀屋町教育委員会　1982

『三刀屋城跡調査報告書－Ⅰ－』 三刀屋町教育委員会　1982

『三刀屋城跡調査報告書－Ⅱ－』 三刀屋町教育委員会　1983

『三刀屋城跡調査報告書－Ⅲ－』 三刀屋町教育委員会　1984

『東下谷横穴群発掘調査報告書』 三刀屋町教育委員会　1984

『木次深谷古墓発掘調査報告書』 木次町教育委員会　1984

『三刀屋町の遺跡Ⅰ－三刀屋・一宮地区－』 三刀屋町教育委員会　1988

『三刀屋町の遺跡Ⅱ－飯石・中野地区－』 三刀屋町教育委員会　1989

『三刀屋町の遺跡Ⅲ－鍋山地区－』 三刀屋町教育委員会　1990

『三刀屋町の遺跡Ⅳ－鍋山地区(禅定寺周辺)－』 三刀屋町教育委員会　1991

『要害の首塚・地王砦跡発掘調査報告書』 三刀屋町教育委員会　1989

『平成元年度予防治山事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－三刀屋尾崎城跡－』
三刀屋町教育委員会　1990

『松本古墳群　古代の出雲を考える７』 出雲考古学研究会　1991

『神代下廻横穴発掘調査報告書』 三刀屋町教育委員会　1995

『発掘調査報告書　斐伊中山古墳群－西支群－』 木次町教育委員会　1993

『妙見山遺跡発掘調査報告書』 木次町教育委員会　1995

『平田遺跡　木次町文化財調査報告書第４集』 木次町教育委員会　1997

『家の上遺跡・石壷遺跡　尾原ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書　１』
木次町教育委員会　1998

『島根県中近世城館跡分布調査報告書〈第２集〉　出雲、隠岐の城館跡』 島根県教育委員会　1998

「平田遺跡（第Ⅲ調査区）発掘調査現地説明会資料」 木次町教育委員会　1999

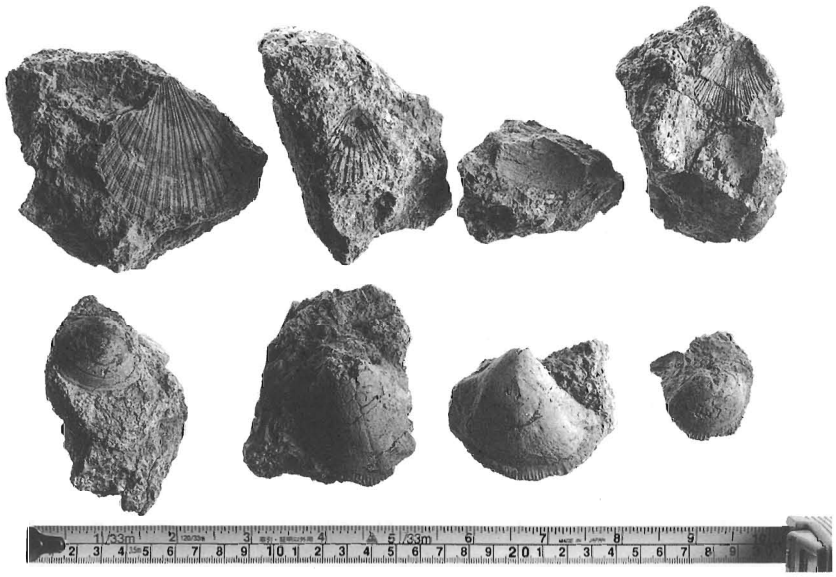
「上野Ⅱ遺跡現地説明会資料」 1999

「中国横断道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査　馬場遺跡現地説明会資料」 1999

『島根県教育庁埋蔵文化財調査センター年報Ⅸ』 島根県教育委員会　2001

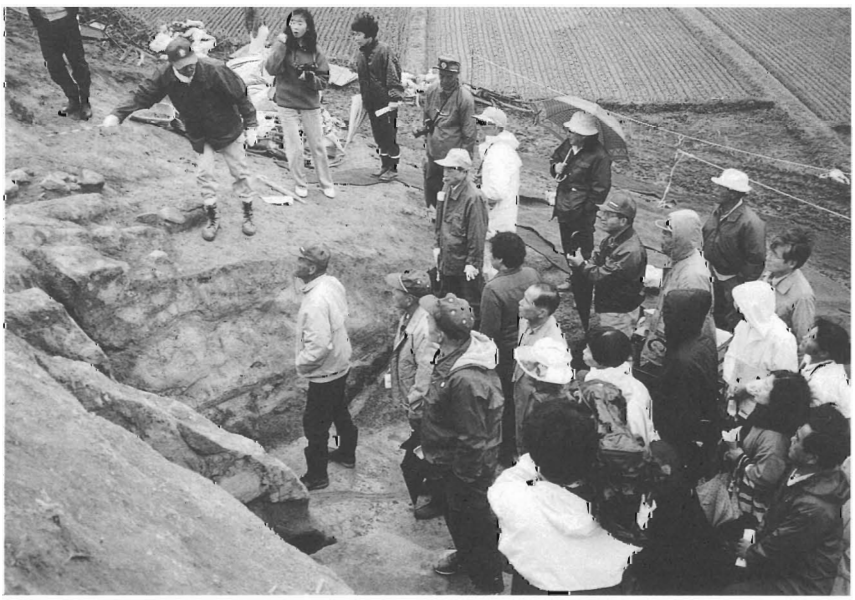
『熊谷遺跡・要害遺跡　中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書　13』
島根県教育委員会　2001

『馬場遺跡発掘調査報告書　中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書　14』
島根県教育委員会　2001



白石大谷Ⅰ遺跡　出土化石

白石大谷Ⅰ遺跡　集石１　調査指導風景



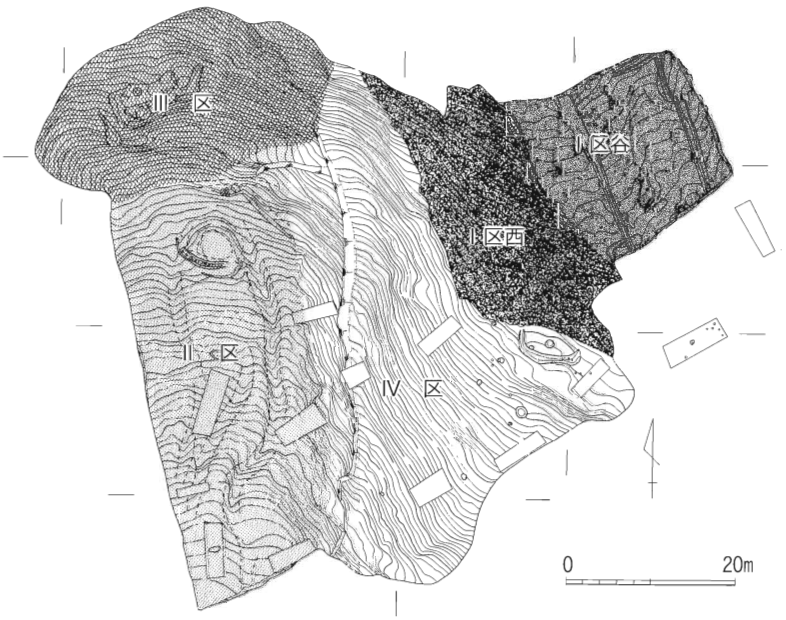
白石大谷Ⅰ遺跡　現地説明会風景

第３章　白石大谷Ｉ遺跡

第１節　調査前の経過と概要

調査前の白石大谷Ｉ遺跡は丘陵裾の緩斜面に造られた耕作地（Ｉ区）と山林（Ⅱ～Ⅳ区）になっており、分布調査時に耕作地で土器が拾われ、尾根上で古墳が確認されたことから発掘調査を行うことになった。調査範囲確定のためのトレンチ調査は平成８年６月６日から行った。遺跡東側の丘陵裾部分から南西方向にＴ１～16を設定して調査を行った。丘陵北側斜面は当初調査予定地外だったが、立木伐採後に傾斜の緩くなっている部分が確認されたのでトレンチを２か所設定した。その結果６月27日にＴ19で板状の石と炭を多量に含む黒色の土層を検出した。Ｔ19が１号墳の斜面下方に位置することから、当地域に類例の多い横穴墓の前庭部分を検出したと考え、急遽北側斜面にⅢ区を設定した。最終的なトレンチ数は21で、７月１日にトレンチ調査を終了した。

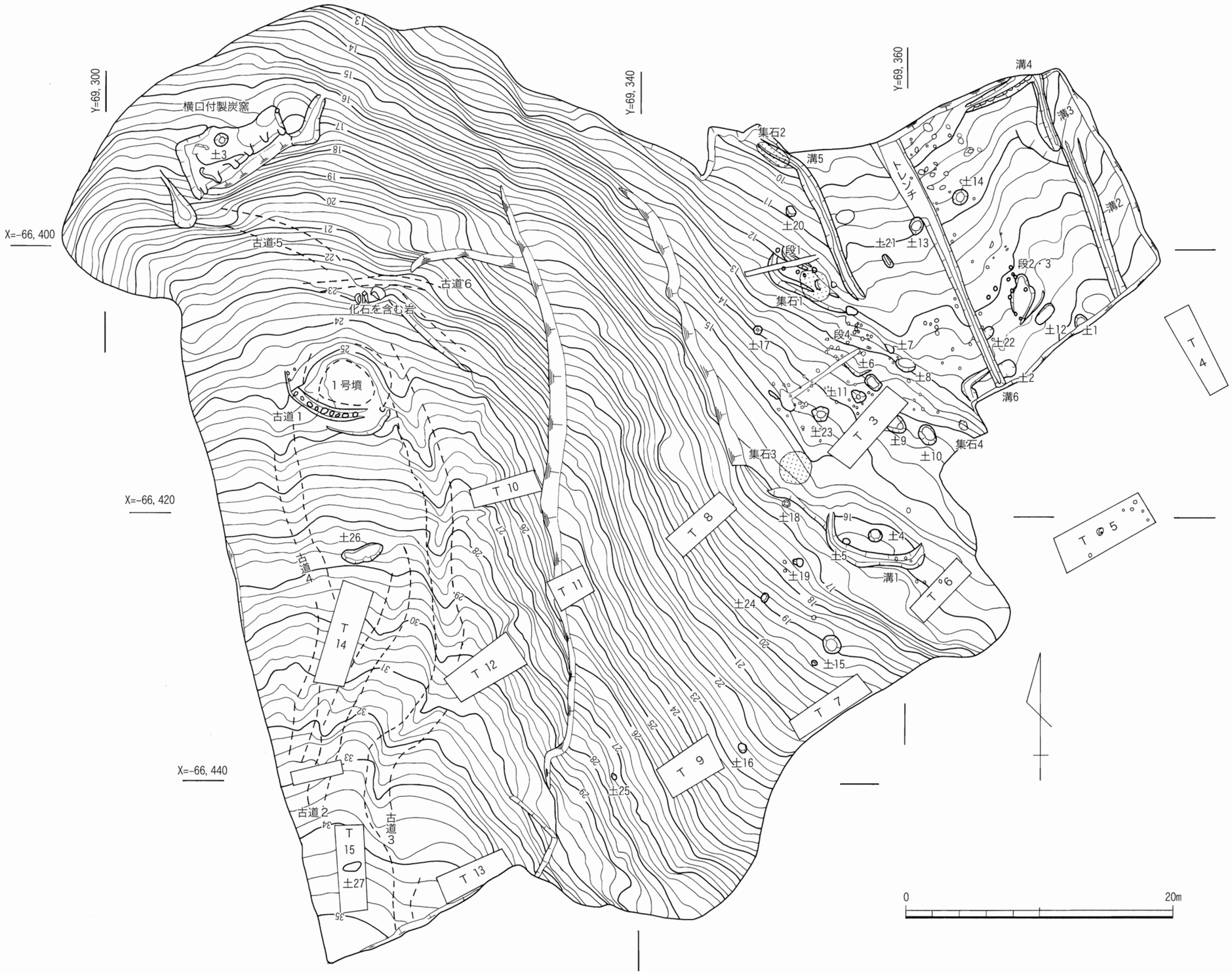
本調査はトレンチ調査と平行して平成８年６月18日に開始した。Ｉ区は耕作土の厚い部分や竹の根が広がっていたため重機掘削を行ったので、先に尾根上のⅡ区から調査を行い、古道と考えられる遺構を６か所検出した。１号墳は７月22日に来待石の切石で作られた小型の石棺を検出した。Ｉ区の調査は７月23日から行った。Ｉ区では時期不明の土坑群や弥生時代から近世までの土器や石器、鉄滓を検出したが、谷部に位置する遺構は遺構面と覆土の区別が困難で調査にかなりの時間を割くことになった。Ⅲ区は８月19日から掘り下げを開始した。当初平坦地に面的に炭が堆積していることしか分からず、遺構の性格はすぐに判断できなかった。９月４日に地山を裁ち割った結果、等高線に併行して地山を刳り抜いた窯状遺構であることが判明し、さらに６個の横口が検出されたので横口付製炭窯[1]と判断した。このため他の炭窯が地山の中に存在する可能性が考えられＩ区とⅡ区の間にさらにⅣ区を設定した。また、この間の９月26日、10月24日、11月21日、12月５日、12月９日、12月13日には調査指導会を、10月26日には現地説明会を開いている。12月20日には下層で検出した土坑２と集石１の遺物を取り上げ、ラジコンヘリによる空撮を行った。12月26日に横口付製炭窯と古道１の実測を終え、現地調査を完了した。



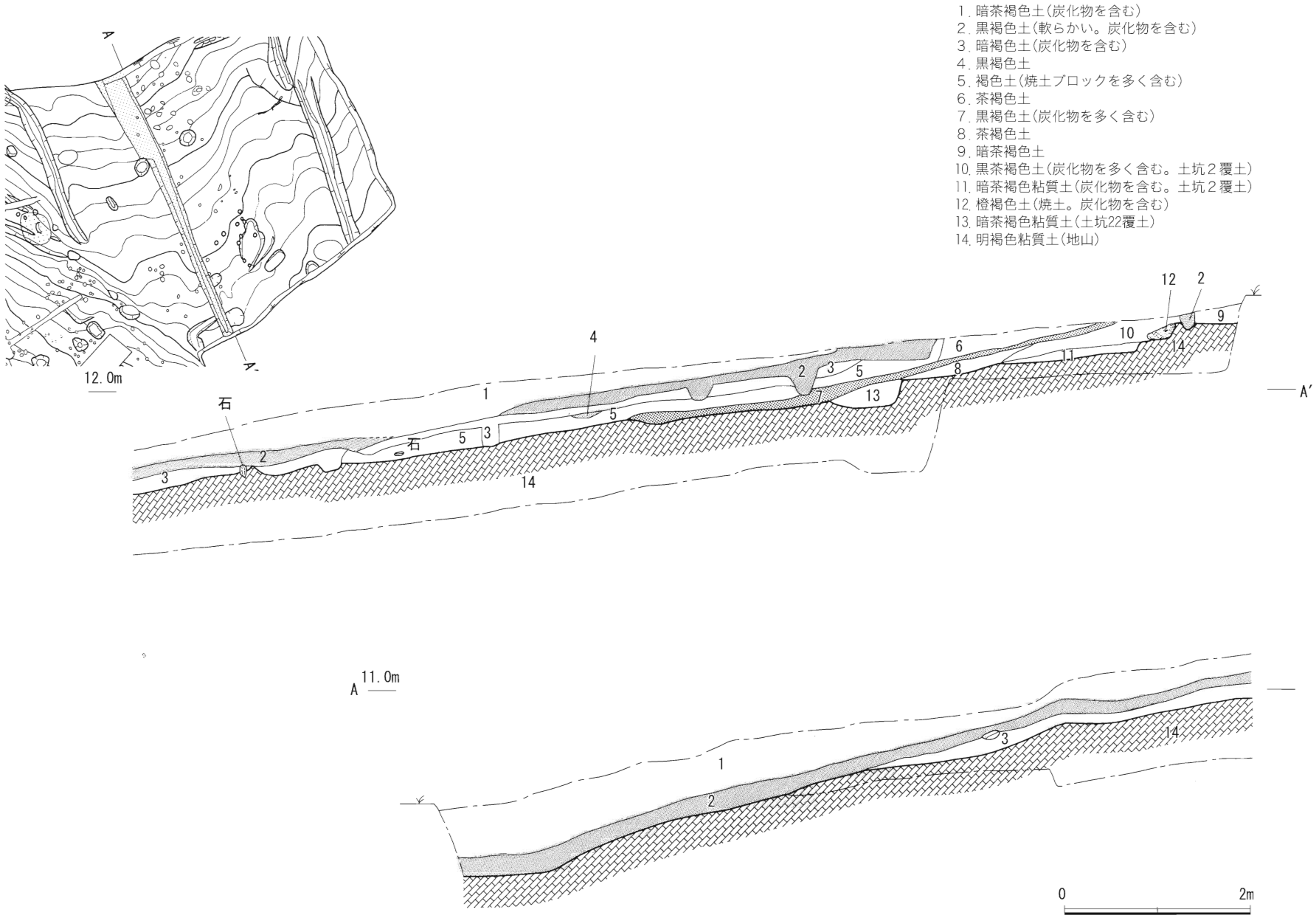
第5図　白石大谷Ｉ遺跡　調査区割図(S=1/900)

(1)　この種の窯跡の呼称については「横口付き炭窯」「横口式窯跡」（文献12）、「横口式炭窯」（文献24）等島根県内で統一されていないが、今回検出した窯跡は形態や炭の堆積状況から炭を大量に生産していたことは間違いないと判断されるので、以下「横口付製炭窯」と記述する。

第6図　白石大谷Ⅰ遺跡　調査区配置図(S=1/3000)



第7図　白石大谷Ⅰ遺跡　遺構配置図(S＝1/300)



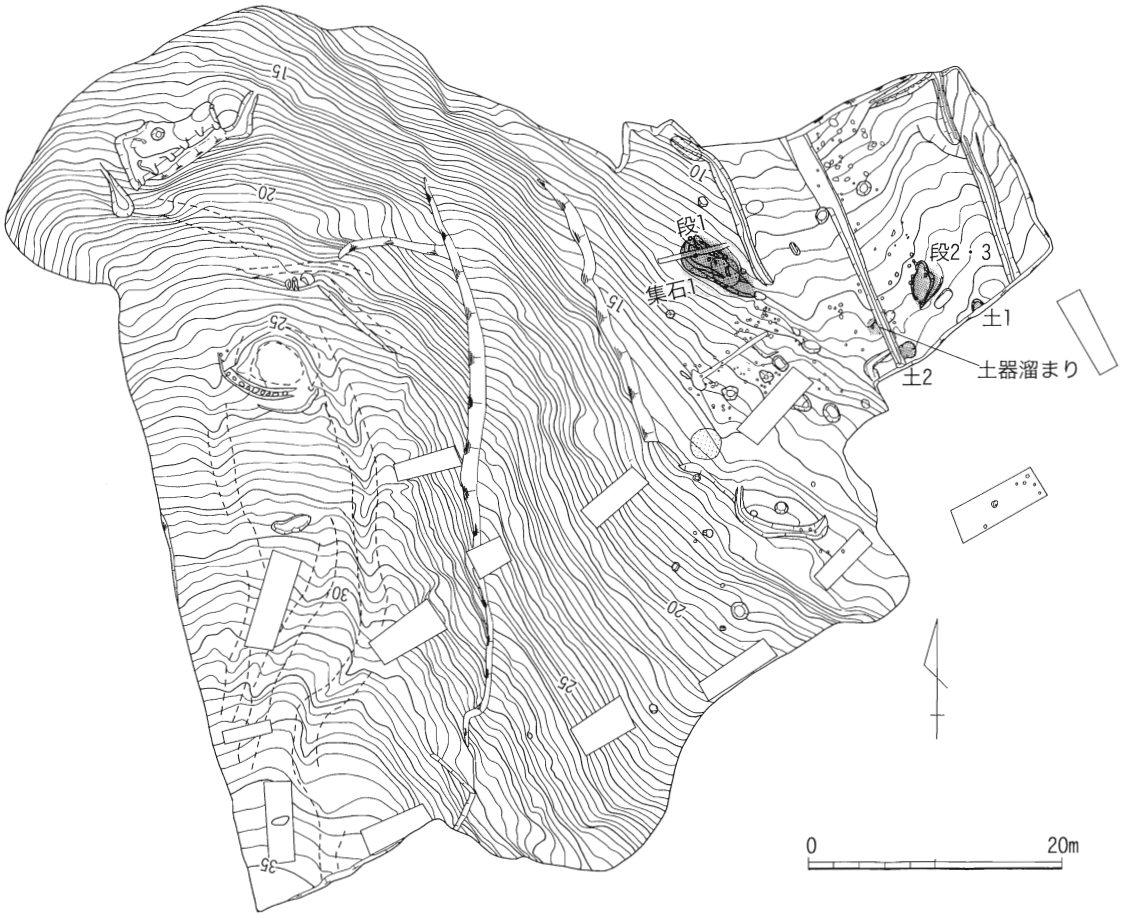
第8図　白石大谷Ⅰ遺跡　Ⅰ区谷部土層断面(S=1/60)

第2節　弥生時代の遺構・遺物

弥生時代の遺構・遺物は、丘陵裾に位置するⅠ区でのみ検出した。主な遺構は段状遺構・土坑で、時期は弥生時代中期後葉（松本編年出雲Ⅳ様式。文献６）である。これらの遺構は、古墳時代以降も土地利用が続いたため残存状態は必ずしも良くない。ほかにⅠ区西側で弥生時代後期中葉（出雲Ⅴ－２様式）の土器が石と混じるようにしてまとまって出土し、Ⅰ区谷部の南側ではこれらの時期の土器が細片化して出土した。

遺物も中期後葉と後期中葉の土器が中心で、この間の出雲Ⅴ－１様式と明確に判断される土器は調査区内では出土していない。また、後期後葉の土器は41が図示できるのみでほとんど確認できなかった。

このような遺構・遺物の検出状況は、中国横断自動車道建設に伴って発掘調査を行った宍道町内の他の弥生時代の遺構・遺物を検出した遺跡[1]の状況と大きく異なっている。



第9図　白石大谷Ⅰ遺跡　弥生時代の遺構(S=1/600)

(1)　白石大谷Ⅱ遺跡（文献17）、野津原Ⅱ遺跡（文献17・18）、山守免遺跡（文献17）、上野遺跡（文献21）、上野Ⅱ遺跡（文献23）等の遺跡がある。このうち白石大谷Ⅱ遺跡以外は集落遺跡である。

１．段状遺構

Ｉ区で弥生時代と思われる段状遺構を３か所検出した。このうち段状遺構１と３は建物の一部である可能性が考えられる。

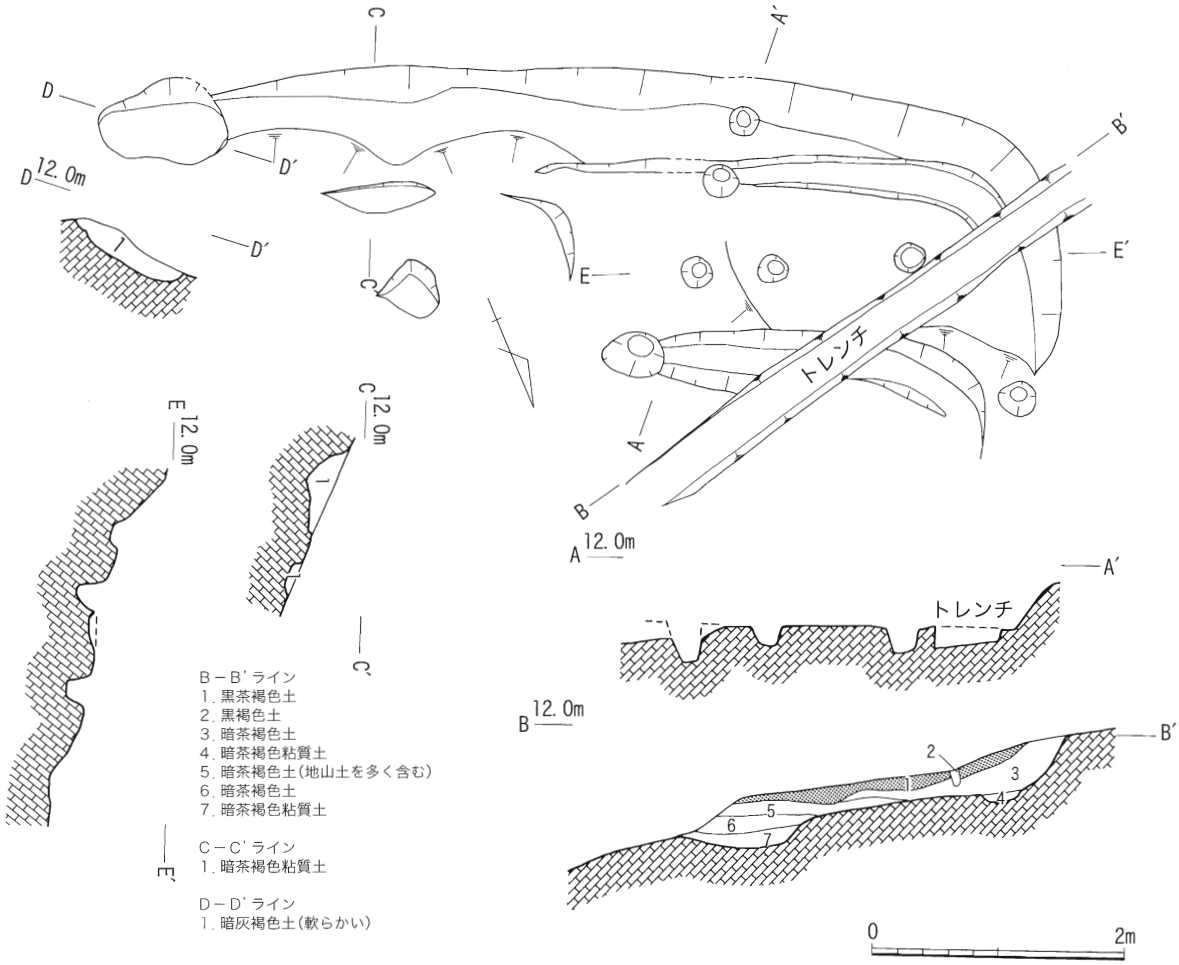
段状遺構１（第10図、写真図版７）

Ｉ区西で集石１調査後に検出した。床面の規模は長さ6.5m、幅2.5mである。地山面で柱穴を７基検出している。床面の西側には幅約25～35cm、深さ５cmの溝が設けられていた。この溝の1.1m北でも同様の溝を検出しており、土層の堆積状況から斜面上方に向かって遺構を作り替えたと考えられる。

遺物は西側の床面で弥生土器片が出土しているが、いずれも細片で図示できなかった。詳しい時期は不明だが、この遺構が完全に埋没した後に集石１が作られている点や、周辺で弥生時代中期後葉の土器（40・43）が出土している点等から、弥生時代の遺構と判断した。

遺構の性格は、柱の並びを復元できていないが基本的には石台遺跡[1]などに見られるような、等高線に平行する長軸を持つ細長い堀立柱建物が建てられていたと考えられる。

また、遺構東側の１×0.7mの落ち込みは覆土が非常に軟らかかったので、別時期の土坑の可能性もある。



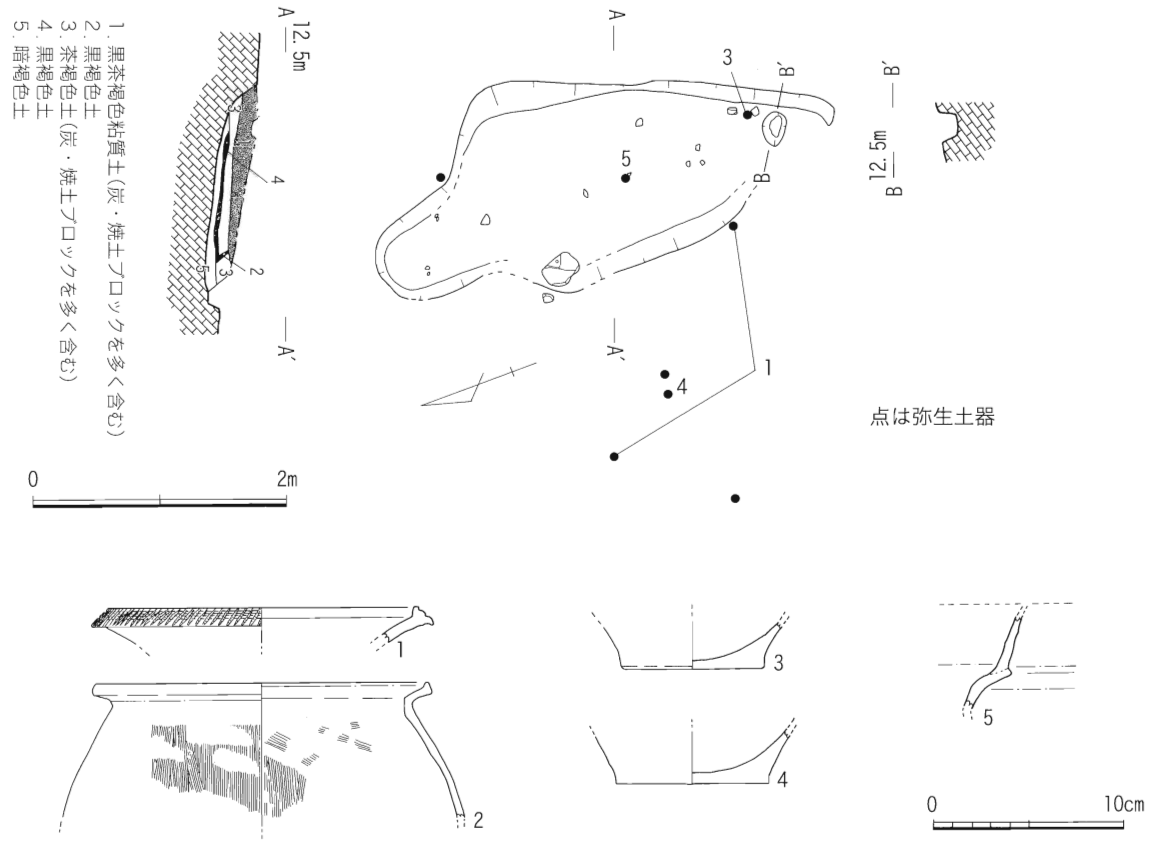
第10図　白石大谷Ｉ遺跡　段状遺構１(S=1/60)

(1)　文献４。ＳＩ－02～06は斜面を平坦にカットした後、細長い建物を建てたと推測されている。

段状遺構２（第11図、写真図版８・32）

Ⅰ区谷部の南側に位置し、段状遺構３の調査後に検出した。平面規模は南北約3.8m、東西1.8mである。遺物は弥生時代中期中葉から後期末の土器が出土している。

詳しい遺構の性格は不明だが、炭と焼土を含む黒色の土が交互に堆積するなど、南側に位置する土坑２に関係した遺構とも考えられる。



第11図　白石大谷Ⅰ遺跡　段状遺構2(S=1/60)、出土遺物(S=1/4)

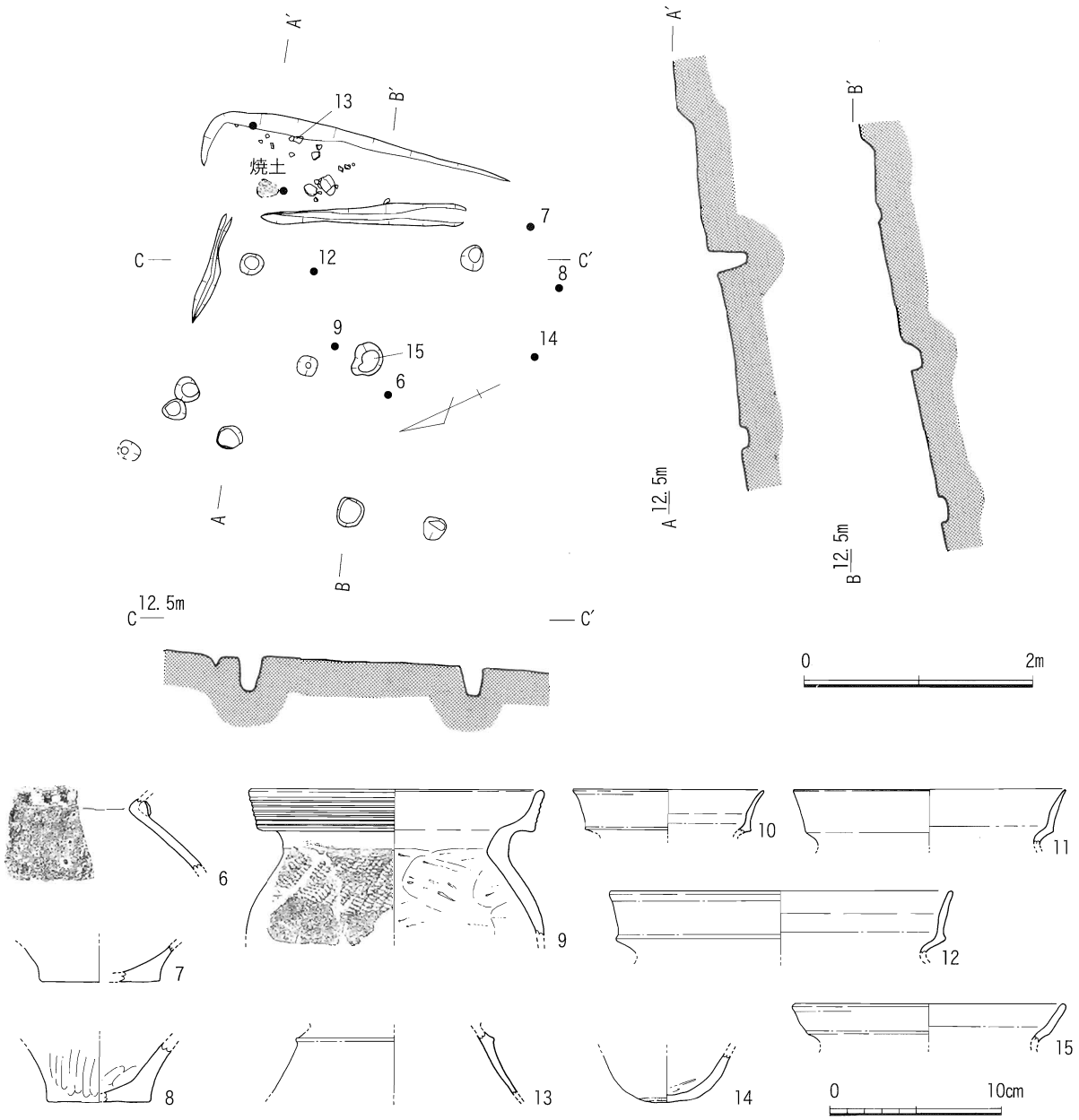
第4表　白石大谷Ⅰ遺跡　段状遺構2　出土遺物観察表

挿図番号	写真図版	遺物番号	出土地点	種別	器種	寸法(cm) 口径	底径	器高	形態・文様の特徴	調整	胎土	色調	備考
11	32	1	段状遺構２	弥生	壺	(16.0)	-	-	口縁端部に２条凹線文、貝殻刺突文	不明	1.5mm以下の砂粒多く含む	淡黄褐色	
11	32	2	段状遺構２	弥生	甕	(17.4)	-	-		(外)ハケ　ヨコナデ (内)ハケ　ヨコナデ	0.5mm以下の砂粒多く含む	明褐色	
11	32	3	段状遺構２	弥生	底部	7.4	-	-		(外)ナデ (内)ナデ	1～3.0mmの砂粒多く含む	淡橙褐色	
11	32	4	段状遺構２	弥生	底部	-	10.0	-	黒斑	摩滅により調整不明	1.5mmの砂粒多く含む	淡茶褐色	
11	32	5	段状遺構２	弥生	甕	-	-	-		摩滅により調整不明	1.0mm以下の砂粒多く含む	淡黄褐色	

段状遺構３（第12図、写真図版８・32）

Ⅰ区谷部の南側で検出した。緩斜面をカットして平坦面を作っている。平坦面の北側にはこの遺構に伴う焼土面があり、東側ではＬ字に並ぶ幅10～20cmの溝を検出した。段状遺構３の周辺で検出したピットは並びが明確でなく建物を復元できなかったが、Ｃラインで並ぶ２基はこの遺構に伴う可能性が高い。

遺物は弥生時代中期中葉から後期末の土器が出土している。焼土周辺で弥生時代後期末の土器がまとまって出土しており、遺構の時期を示すものと考えられる。



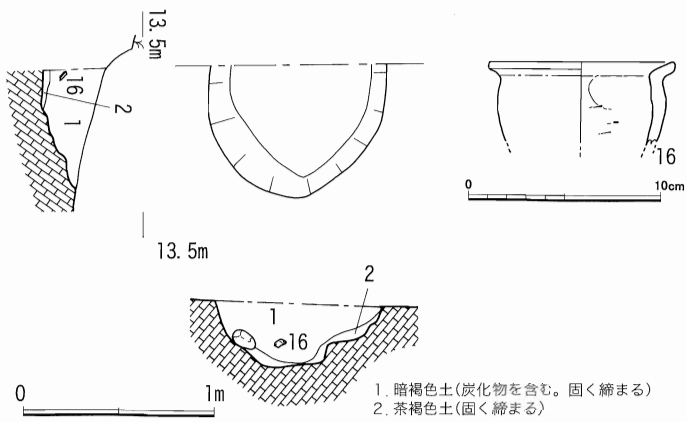
第12図　白石大谷Ⅰ遺跡　段状遺構3(S=1/60)出土遺物(S=1/4)

第5表　白石大谷Ⅰ遺跡 段状遺構3　出土遺物観察表

挿図番号	写真図版	遺物番号	出土地点	種別	器種	寸法(cm) 口径	底径	器高	形態・文様の特徴	調整	胎土	色調	備考
12	32	6	段状遺構３	弥生	壺	－	－	－	指頭圧痕文帯	(外)調整不明 (内)ナデ	2.1mm以下の砂粒含む	淡黄褐色	
12	32	7	段状遺構３	弥生	底部	－	7.0	－		摩滅により調整不明	2.0mm以下の砂粒含む	明茶褐色	
12	32	8	段状遺構３	弥生	底部	－	6.0	－	黒斑	(外)指頭圧痕　ナデ (内)ヘラミガキ	1.5mmの砂粒含む	淡黄褐色	
12	32	9	段状遺構３	弥生	甕	(16.9)	－	－	７条の貝殻直線文、貝殻による３段の刺突文	(外)ヨコナデ　ヘラミガキ (内)ヨコナデ	4.0mmの砂粒含む	黒褐色	
12	32	10	段状遺構３	弥生	甕	(11.1)	－	－		(外)ヨコナデ？ (内)ヨコナデ？	1.0mmの砂粒多く含む	淡黄褐色	
12	32	11	段状遺構３	弥生	甕	(15.8)	－	－		摩滅により調整不明	3.0mm以下の砂粒含む	淡黄褐色	
12	32	12	段状遺構３	弥生	甕	(20.1)	－	－		摩滅により調整不明	1.0mm以下の砂粒含む	明褐色	
12	32	13	段状遺構３	弥生	鼓形器台	－	－	－		(外)ヨコナデ？ (内)ヨコナデ？	1～3.0mmの砂粒多く含む	淡黄褐色	
12	32	14	段状遺構３	弥生	底部	－	－	－		(外)ナデユビオサエ (内)ヘラケズリ	1～2.0mmの砂粒多く含む	淡黄褐色	弥生後期の蓋の可能性あり
12	32	15	段状遺構３	弥生	甕	(15.6)	－	－		(外)ヨコナデ (内)ヨコナデ	2.5mm以下の砂粒をやや多く含む	淡橙褐色	

2．土坑

Ⅰ区で地山面に堀込まれた土坑を２基検出した。



第13図　白石大谷Ⅰ遺跡　土坑1(S=1/40)、出土遺物(S=1/4)

土坑１（第13図、写真図版９・32）

Ⅰ区谷部の南端、標高の最も高い位置で検出した。土坑埋土は固く締まっており、床面はゆるくカーブして茶褐色土が薄く堆積していた。

遺物は小型の鉢が出土している。胎土の特徴とナデ調整が施される点から弥生時代中期頃のものと判断した。

埋土や形態がⅠ区で検出した他の土坑と異なっており、詳しい性格は不明である。

第6表　白石大谷Ⅰ遺跡　土坑1計測表

遺構名	上面形	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	主軸	出土遺物	備考
	底面形	長軸(cm)	短軸(cm)				
土坑1	円形	91	70	42	N-24°-W	弥生土器(中期)	
	円形	72	56				

第7表　白石大谷Ⅰ遺跡　土坑1　出土遺物観察表

挿図番号	写真図版	遺物番号	出土地点	種別	器種	寸法(cm) 口径	底径	器高	形態・文様の特徴	調整	胎土	色調	備考
13	32	16	土坑1	弥生	鉢	(8.8)	－	－		(外)ナデ？ (内)ヘラケズリ	1.0mm以下の砂粒含む	黄褐色	

土坑２（第14図、写真図版９・31～33）

Ⅰ区谷部の南側、調査区南の削平地と谷部斜面の境に位置している。Ⅰ区谷部に堆積する茶褐色土と黒褐色土を掘り下げた後に検出した。土坑内には炭化物を多く含む土が堆積し、不整長方形の平面プランを検出した。床面は断面ではほぼ水平であることが確認できたが、平面は堆積土と地山の区別が困難で明確に検出できなかった。

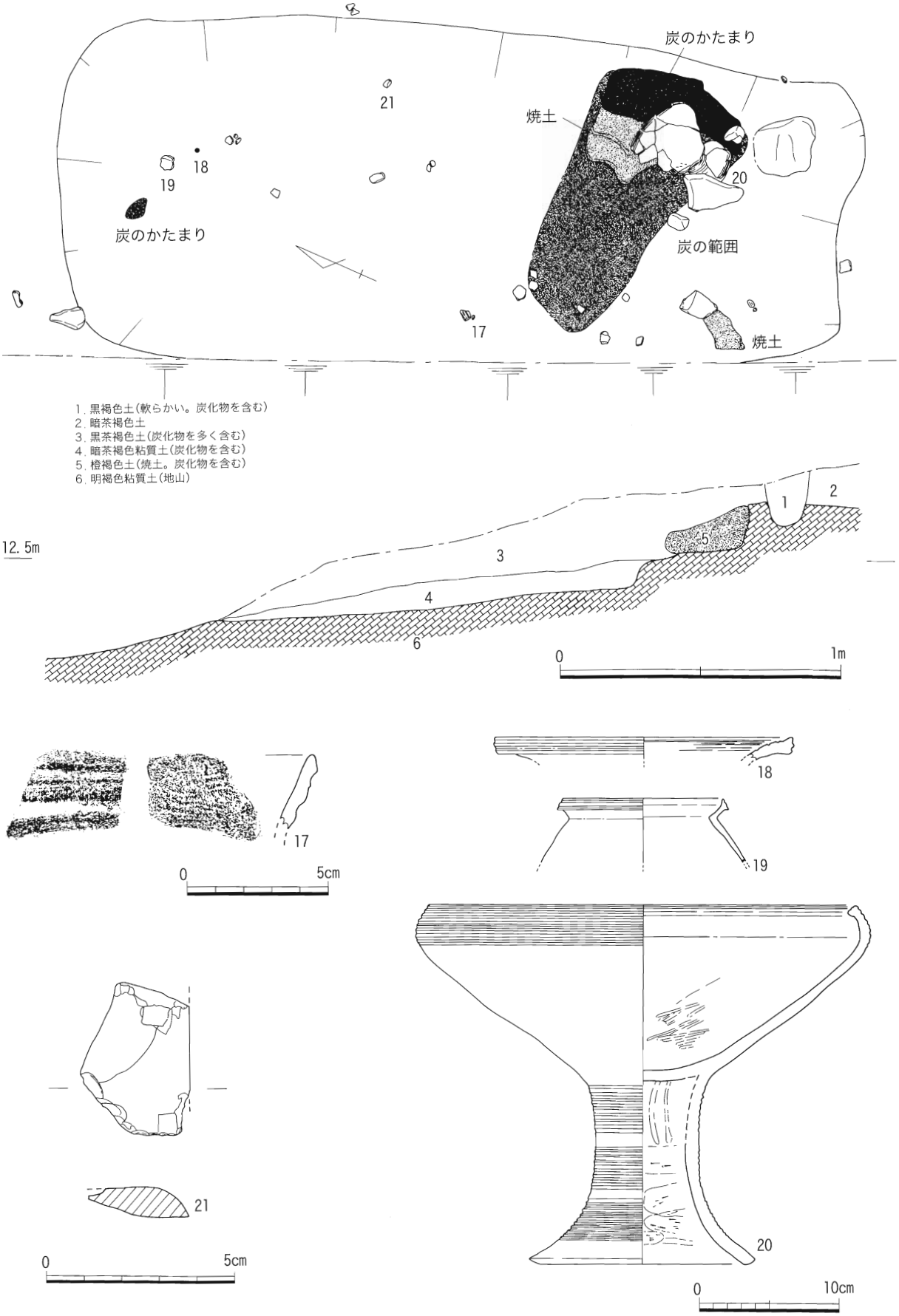
遺物は弥生時代中期後葉（出雲Ⅳ－１）の土器が炭や焼土のかたまりと伴に出土した。特に20周辺では長さ約50cmの炭化物や厚みのある焼土面を検出しており、この部分は火が使用された際の原位置を保っていると考えられる。また、20の脚部は破片接合部を境に明確に色調が異なっている点も特徴的である。以上の点から、土坑２は弥生時代中期後葉の土器焼成遺構の可能性が考えられる。

第8表　白石大谷Ⅰ遺跡　土坑2計測表

遺構名	上面形	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	主軸	出土遺物	備考
	底面形	長軸(cm)	短軸(cm)				
土坑2	円形	100	90	31	N-49°-E	縄文土器、弥生土器、石斧	
	円形	55	52				

第9表　白石大谷Ⅰ遺跡　土坑2　出土遺物観察表

挿図番号	写真図版	遺物番号	出土地点	種別	器種	寸法(cm) 口径	底径	器高	形態・文様の特徴	調整	胎土	色調	備考
14	32	17	土坑2	縄文	深鉢	－	－	－	巻き貝を利用した３条以上の凹線文	(外)凹線 (内)条痕	0.5mm以下の砂粒含む	淡黄褐色	
14	32	18	土坑2	弥生	壺	(20.9)	－	－	２条の凹線文	(外)ナデ (内)不明	1～3.0mmの砂粒多く含む	淡黄褐色	
14	32	19	土坑2	弥生	壺	(11.4)	－	－	２条の凹線文	(外)ヨコナデ (内)調整不	やや粗い	淡黄褐色	
14	33	20	土坑2	弥生	高坏	30.4	25.8	14.8	凹線文	(外)調整不明 (内)ヘラミガキ	2.0mm以下の白色砂粒含む	暗黄褐色 (内面暗灰褐色)	
14	32	21	土坑2	石器	磨製石斧	(残存長) 4.15	(重量) 12.16g	(残存幅) 2.1	欠損後再加工を施す				



第14図　白石大谷Ⅰ遺跡　土坑2(S=1/20)、出土遺物(17はS=1/2、18～20はS=1/4、21はS=2/3)

３．その他の遺構・遺物

集石１（第15～17図、写真図版３・10・11・31～35）

Ⅰ区西側、段状遺構４の北に位置する。Ⅰ区西側でこの部分だけ石と弥生時代後期中葉の土器が集中して検出されたので、墳墓の可能性も含め弥生時代の集石遺構として調査を行った。その後第15図１層の黒褐色土で弥生土器に混じって須恵器の細片が１点出土したため、何らかの遺構に伴った土器が別の時期に片づけられたものと判断した。ただし、出土した土器の器種関係や数量から本来一括のセットをなしていたと考えられるのでこの節で扱うことにする。

出土した土器は須恵器片１点を除いてすべて弥生土器である。ほとんどが粉々に砕けた状態で出土したが、可能な限り分類と接合を行って図示した。22は当地域では類例の少ない台付装飾壺である。石と石に挟まれ潰されるようにして出土した。胴部が算盤玉状に張り、最大径部分に突帯が貼り付けられ、外面はスタンプ文でにぎにぎしく飾られている。形態・文様以外に色調や胎土も他の土器と明確に異なっている。また、口縁部に円形の穴が約２cmの間隔で空けられているので、本来は蓋を伴った可能性が高い[1]。このほか同一個体と思われるスタンプ文を施した土器がⅠ区谷部でも出土している。24は天地逆に出土した小型の甕で、口縁内で赤色物が検出された。27・28・30は頸部下に貝殻による押し引きの刺突文が施される。31は高坏脚部と判断したが、これも当地域ではあまり見られない形態である。これらの土器は安来市九重第３号土壙墓（文献１）、松江市福富Ⅰ遺跡５区ＳＩ０５（文献11）と並んで弥生時代後期中葉、さらに細かい時期区分で言えば中川編年Ⅲ期（文献９）、安来市門生黒谷Ⅲ遺跡Ⅲ期（文献15）に併行する良好な一括資料と言える[2]。

土器と混じって出土した石は長さ５cm以下のものから大きいもので35cmのものまで様々である。また、これらの石の中には熱によって赤く変色したものが含まれており注意される。

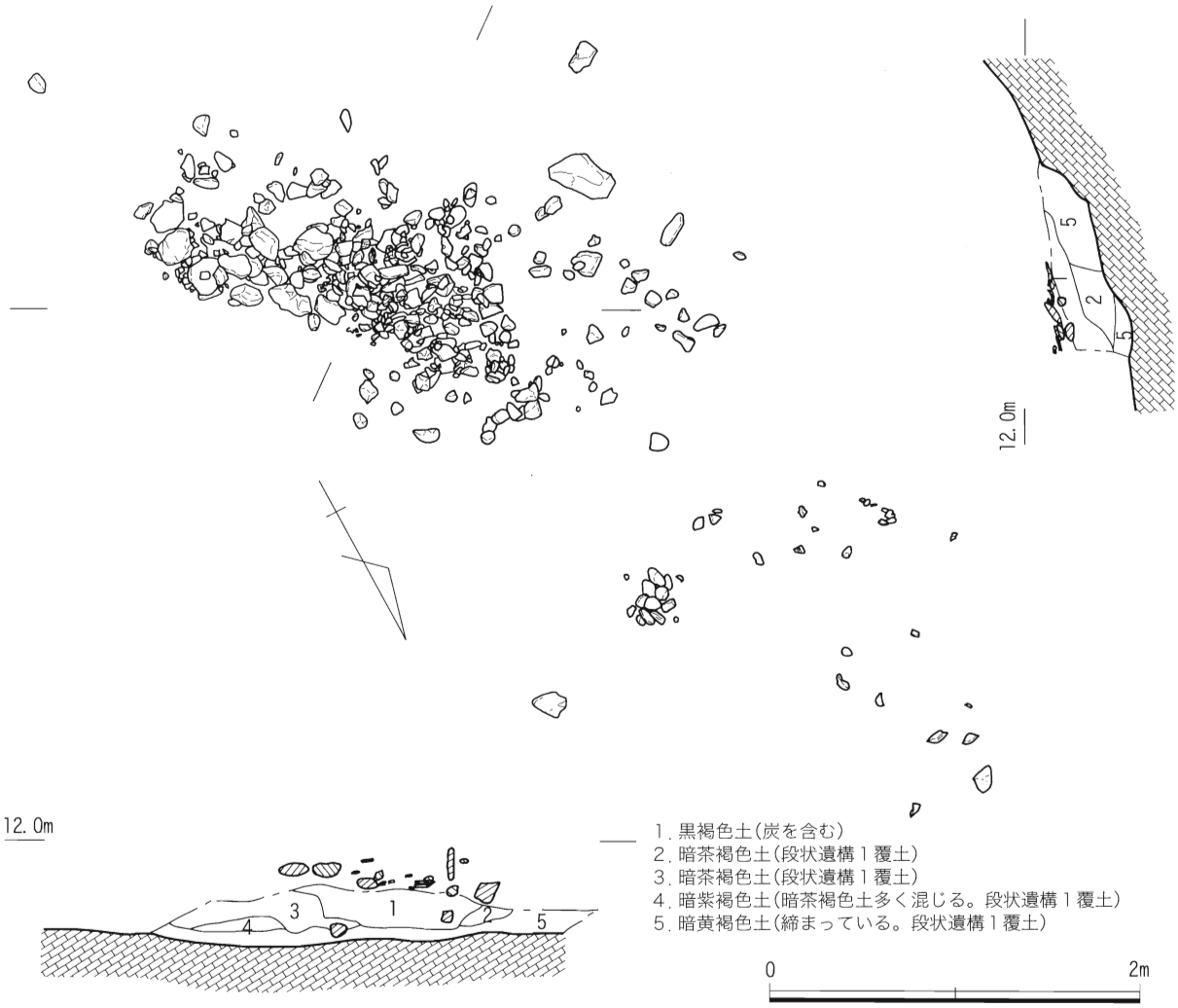
集石１の土器が本来伴った遺構については不明と言わざるを得ないが、段状遺構４が作られた古代以降にⅠ区西側の丘陵部分が削平され、その時土器と礫を隅に集めた可能性が高い。

第10表　白石大谷Ⅰ遺跡　集石1　出土遺物観察表

挿図番号	写真図版	遺物番号	出土地点	種別	器種	寸法(cm) 口径	底径	器高	形態・文様の特徴	調整	胎土	色調	備考
17	33	22	集石１	弥生	脚台付壺	9.6	－	－	貝殻直線文、スタンプ文、列点文、貼り付け突帯	(外)ヨコナデ (内)ヘラミガキ	2.0mm以下の石英・長石・雲母多く含む	(外)明褐色 (内)黒褐色 (断面)黒褐色	
17	34	23	集石１	弥生	壺	14.1	－	－	４条の貝殻直線文	(外)ヨコナデ (内)ヘラケズリ	1.0mm前後の砂粒含む	茶黄褐色	
17	34	24	集石１	弥生	甕	14.5	－	－	貝殻直線文	(外)ナデ (内)ヘラケズリ	3.0mm以下の砂粒含む	赤褐色	
17	34	25	集石１	弥生	甕	15.4	－	－	貝殻直線文	(外)ナデ (内)ナデ　ヘラケズリ	2.5mm以下の砂粒含む	赤茶褐色	
17	34	26	集石１	弥生	甕	16.4	－	－	貝殻直線文	(外)ナデ (内)ヨコナデ ヘラケズリ	砂粒多く含む	淡橙褐色	
17	32	27	集石１	弥生	甕	21.4	－	－	貝殻直線文、貝殻腹縁による列点文	(外)ナデ (内)ヘラケズリ	3.5mm以下の砂粒含む	明褐色	
17	33	28	集石１	弥生	甕	21.4	－	－	７条の貝殻直線文、貝殻による６条の波状文	(外)ヨコナデ (内)ヘラケズリ	1～3.0mmの砂粒含む	暗黄褐色	
17	33	29	集石１	弥生	甕	22.45	4.4	28.8	６条の凹線文	(外)ヨコナデ (内)ヨコナデ	3.0mm以下の砂粒含む	淡黄褐色	
17	35	30	集石１	弥生	鉢	－	6.0	－	黒斑、貝殻直線文、貝殻腹縁による列点文	(外)ヘラケズリ (内)ヘラミガキ	3.0mm以下の砂粒含む	淡赤褐色	
17	35	31	集石１	弥生	高坏	－	16.6	－		(外)ナデ (内)ナデ	2.0mm以下の砂粒含む	淡橙褐色	
17	34	32	集石１	弥生	鼓形器台	19.9	15.3	19.1	16条の貝殻直線文	(外)ヘラミガキ (内)ヘラケズリ ナデ	3.5mm以下の砂粒含む	淡明赤褐色	

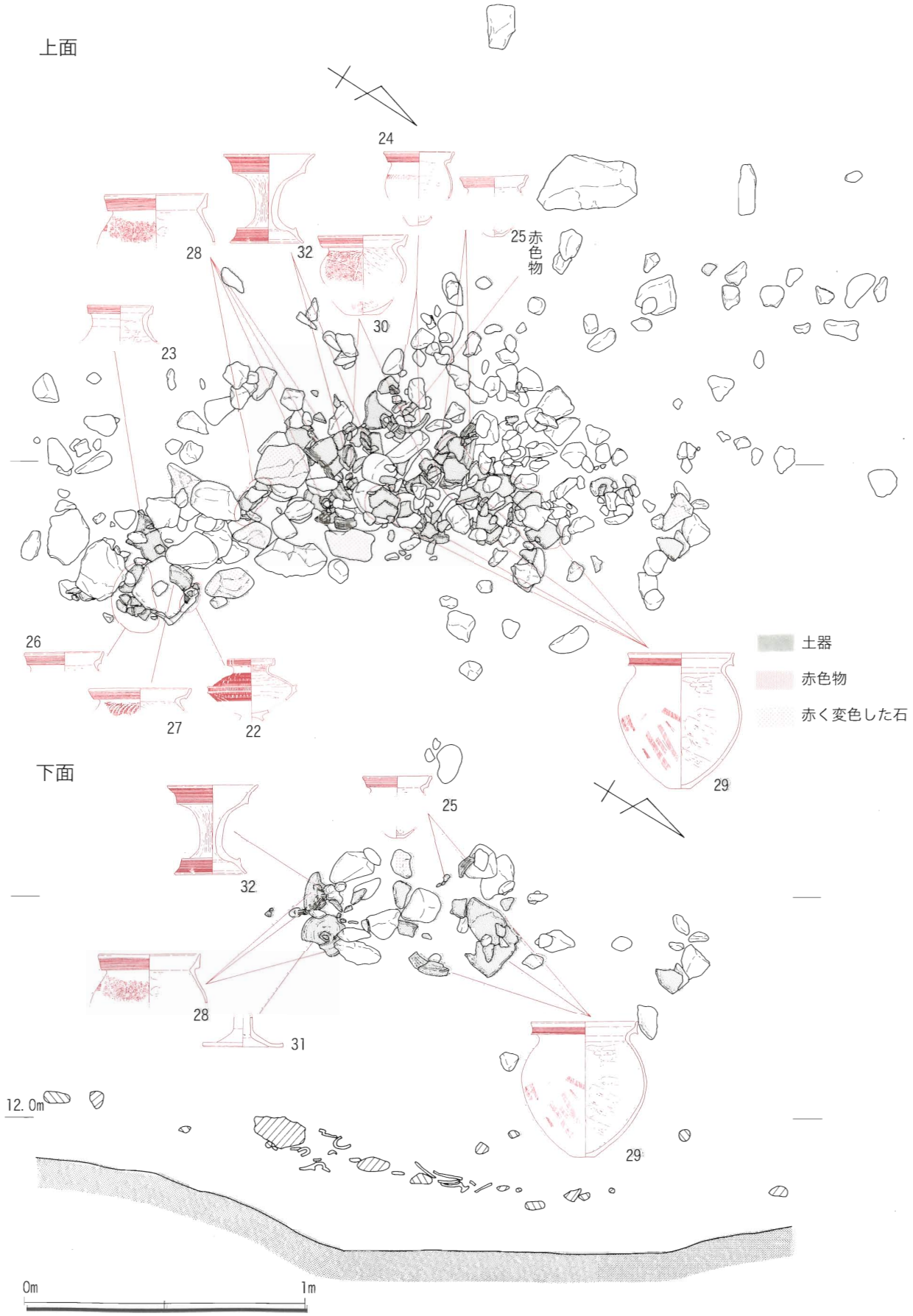
(1)　出雲市上長浜貝塚（文献８）でスタンプ文を施した蓋が出土している。

(2)　池渕俊一氏の御教示による。詳しくは文献15「５．門生黒谷Ⅲ遺跡の調査　第３章まとめ」の中で同氏が述べている。

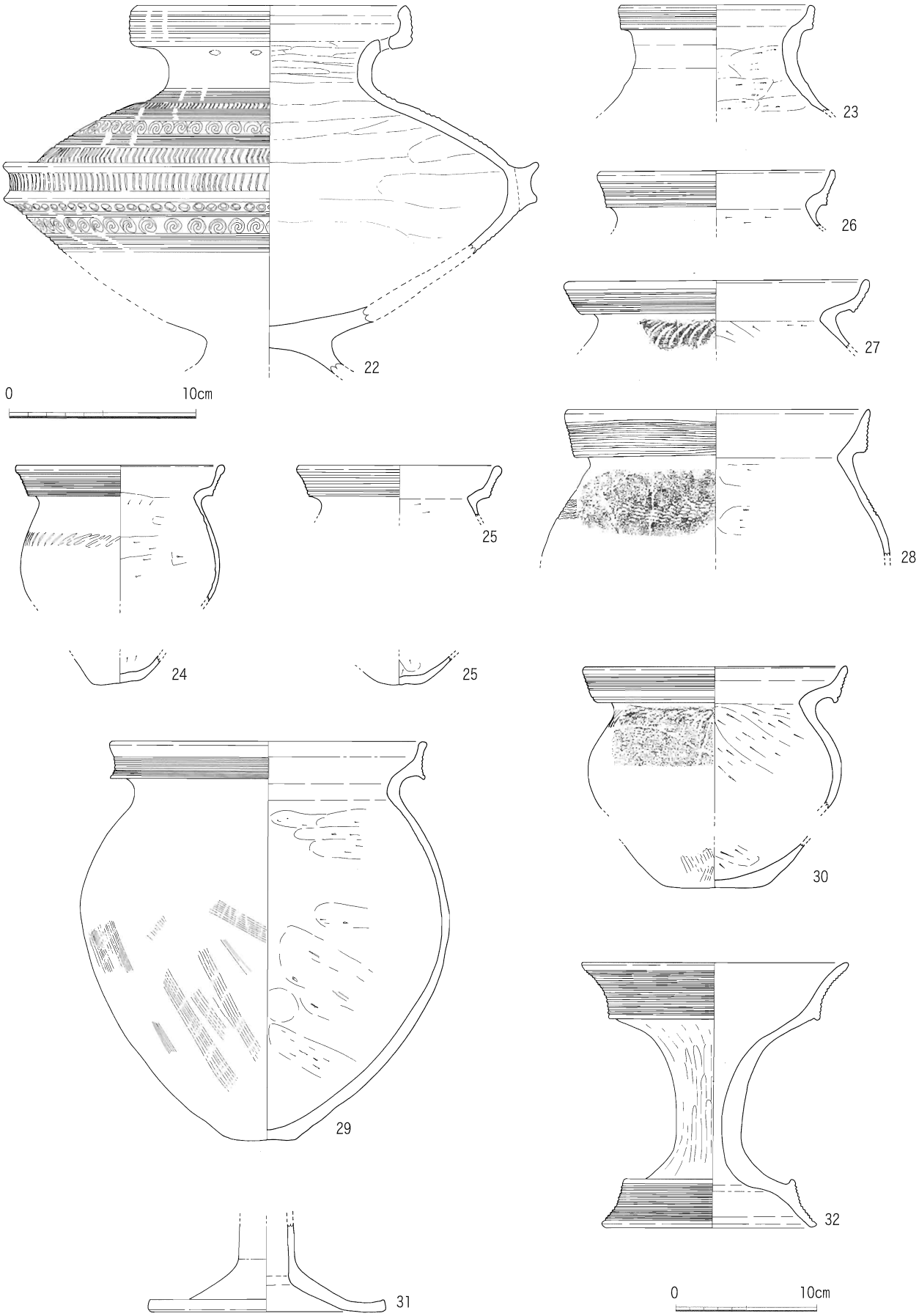


第15図　白石大谷Ⅰ遺跡　集石1(S=1/40)

集石1　黒色土除去後



第16図　白石大谷Ⅰ遺跡　集石1遺物出土状況(S=1/20)



第17図　白石大谷Ⅰ遺跡　集石１出土遺物(S=1/4)

土器溜まり（第18図、写真図版32）

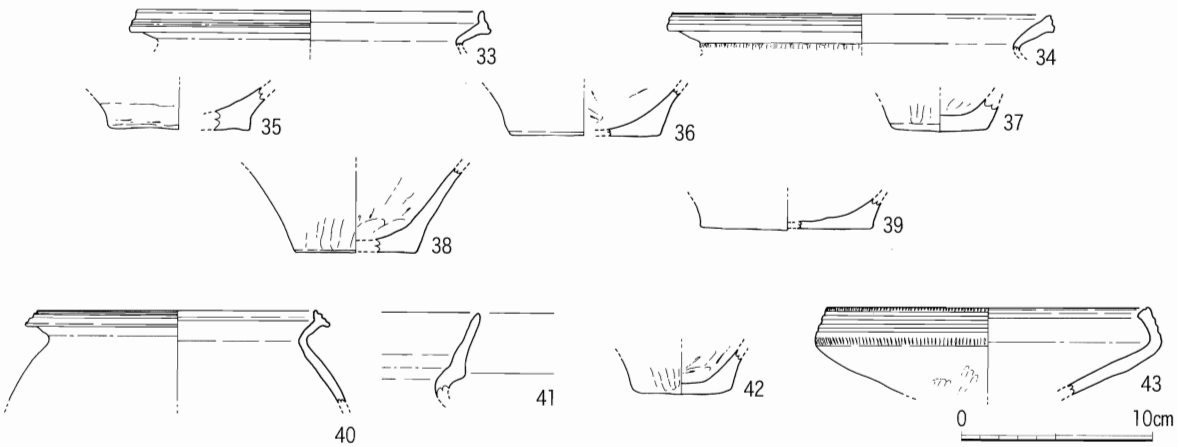
Ⅰ区谷部分の南よりで弥生土器がまとまって出土した。約12m北西の集石１で出土したスタンプ文土器と同一個体と思われる破片が出土している。他に中期後葉（出雲Ⅳ様式）の土器も出土しているので、後世Ⅰ区西側の丘陵裾部分を削平した際に土と一緒に運ばれた可能性が高い。

第１１表　白石大谷Ⅰ遺跡　土器溜まり　出土遺物観察表

挿図番号	写真図版	遺物番号	出土地点	種別	器種	寸法(cm) 口径	底径	器高	形態・文様の特徴	調整	胎土	色調	備考
18	32	33	土器溜まり	弥生	甕	(18.1)	－	－	凹線文	(外)ヨコナデ (内)ヨコナデ	1.0㎜以下の砂粒多く含む	淡茶褐色	
18	32	34	土器溜まり	弥生	甕	(19.8)	－	－	凹線文２条、指頭圧痕文帯	(外)ヨコナデ (内)調整不明	1.0㎜以下の砂粒多く含む	淡茶褐色	
18	32	35	土器溜まり	弥生	底部	－	(7.4)	－		(外)ケズリ後ナデ (内)調整不明	2.0㎜以下の砂粒含む	淡茶褐色	
18	32	36	土器溜まり	弥生	底部	－	(7.8)	－	黒斑	(外)ナデ (内)ヘラケズリ後ナデ	1.0㎜以下の白色砂粒を多く含む	淡黄褐色	
18	32	37	土器溜まり	弥生	底部	－	(4.9)	－		(外)ヘラミガキ　ナデ (内)ヘラケズリ	1.5㎜以下の砂粒含む	灰褐色	

遺構に伴わない遺物（第18図、写真図版32）

弥生土器はⅠ区を中心に出土している。いずれも細片で図化できるものはわずかだったが、壺・甕・高坏の代表的な器種を確認することができた。**41**はⅢ区東側の急斜面で出土した。摩滅が著しいが、後期後葉の甕と判断した。付近に遺構は無く、時期も他の弥生土器とは異なるものである。**43**は摩滅しているので明確でないが、口縁上面にも凹線が施されている。



第18図　白石大谷Ⅰ遺跡　出土弥生土器(S=1/4)

第１２表　白石大谷Ⅰ遺跡　出土弥生土器観察表

挿図番号	写真図版	遺物番号	出土地点	種別	器種	寸法(cm) 口径	底径	器高	形態・文様の特徴	調整	胎土	色調	備考
18	32	38	集石１北	弥生	底部	－	(6.4)	－	黒斑	(外)ヘラミガキ　ナデ (内)ヘラ削り後ナデ ユビオサエ	1.0㎜以下の砂粒含む	淡黄褐色	
18	32	39	集石１北	弥生	底部	－	(9.0)	－		摩滅により調整不明	1～3.0㎜の砂粒多く含む	淡黄褐色	
18	32	40	Ⅰ区西	弥生	甕	(14.4)	－	－	凹線文	(外)ヨコナデ　ナデ (内)ヨコナデ　ナデ	1～2.0㎜以下の砂粒多く含む	淡黄褐色	
18	32	41	Ⅲ区	弥生	甕	－	－	－		(外)不明 (内)ヨコナデ	1.0㎜以下の砂粒含む	明茶褐色	
18	32	42	Ⅰ区谷	弥生	底部	－	(5.1)	－	黒斑	(外)ミガキ (内)ヘラケズリ	1.0㎜以下の砂粒含む	淡褐色	
18	32	43	Ⅰ区西	弥生	高坏	－	(15.8)	－	３条の凹線文、キザミ	(外)ヘラミガキ (内)ヘラミガキ	3.0㎜以下の砂粒含む	淡黄褐色	

第３節　古墳時代の遺構・遺物

今回の調査では、ほぼ全ての調査区で古墳時代の遺物が出土した。明確に当該期と判断される遺構は丘陵尾根上先端部（Ⅱ区北側）に位置する白石大谷１号墳のみである。白石大谷１号墳は小規模ながら明確な墳丘を持っており、分布調査の段階で確認することができた。Ⅱ区では僅かではあるが１号墳と同時期の須恵器が出土した（土師器は１点も出土しなかった）。当遺跡とひとつ丘陵を挟んだ東側の丘陵上には椎山古墳群が所在するので、他の小規模古墳の存在を想定して尾根上を調査したが古墳等は検出されなかった。

古墳時代の遺物が最も多く出土したのはⅠ区谷部である。遺物はほとんどが１号墳より古い時期のもので、この時期の集落遺跡で通常出土する甑や竈は見られなかった。調査区内で甕以外の煮沸具は見られず建物跡等も検出していないが、周辺には６世紀後半以前の集落が存在したと推測される。また、Ⅲ区で検出した横口付製炭窯の焚き口部分で須恵器の壺が２点出土している。古墳北側の岩から転落した化石が、横口付製炭窯の焚口部分で出土したので、この須恵器も斜面上方に位置する１号墳から転落した可能性がある。

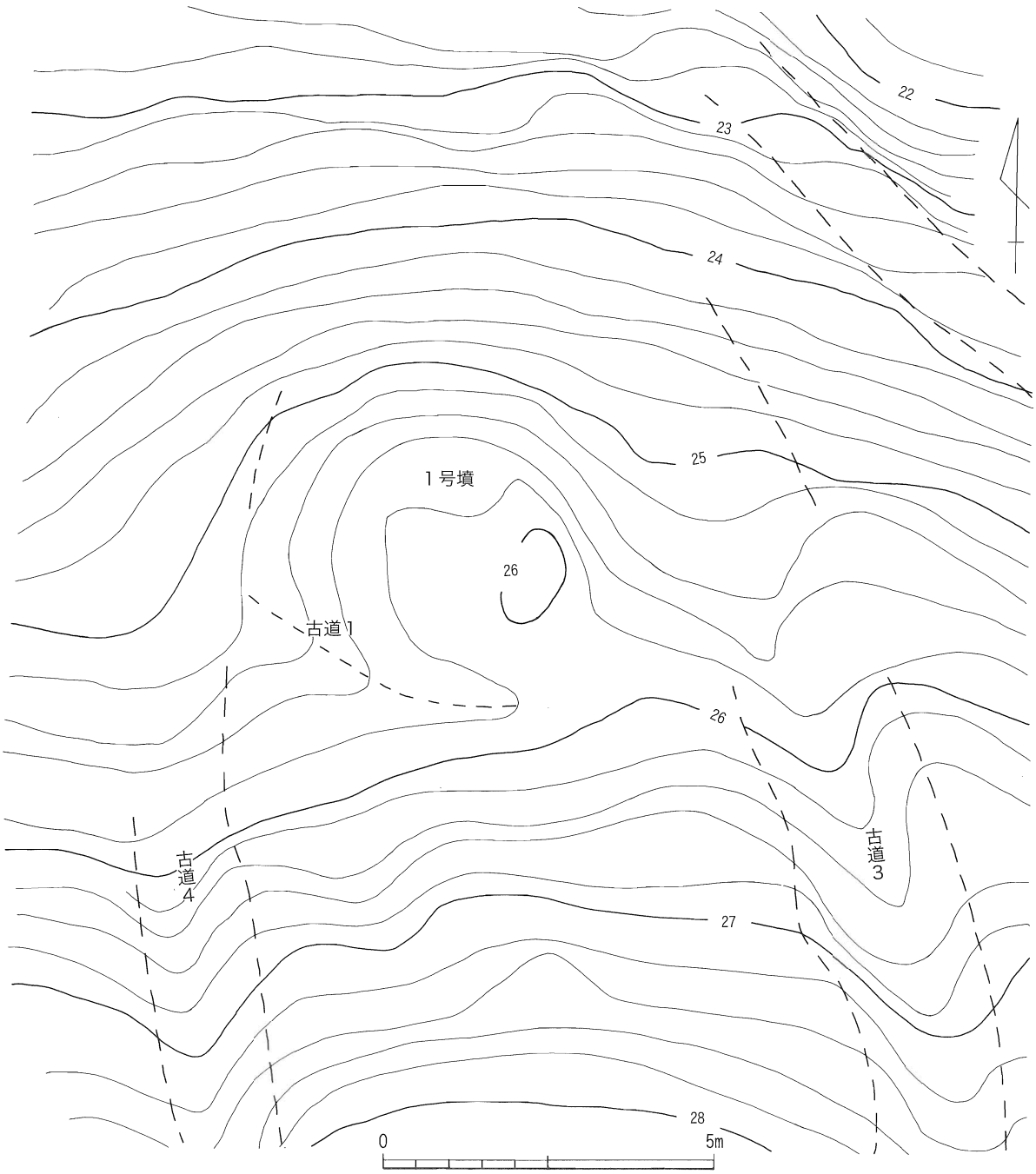
第19図　白石大谷Ⅰ遺跡　古墳時代の遺構(S=1/600)

1．１号墳

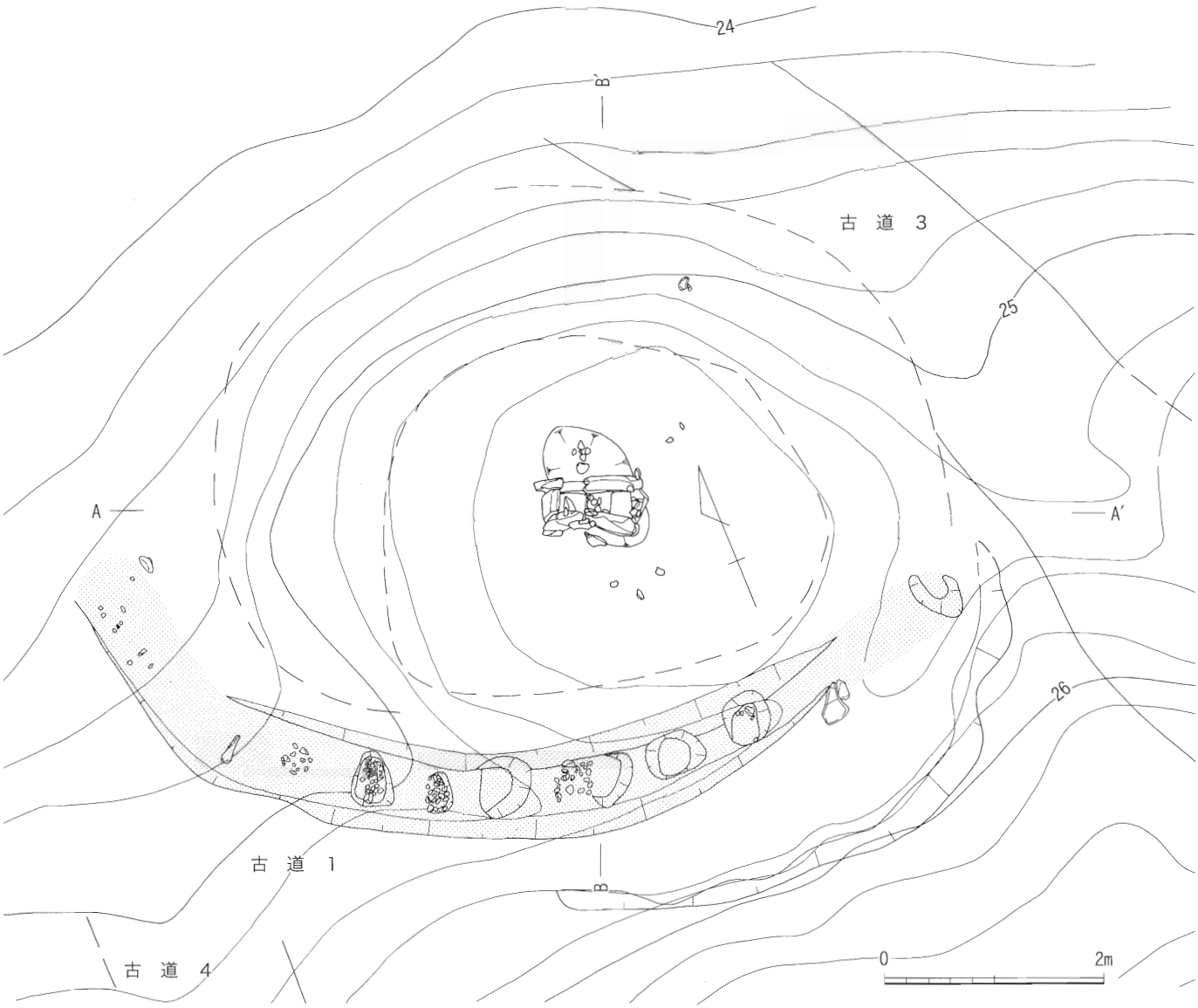
調査前の状況（第20～23図、写真図版12～15）

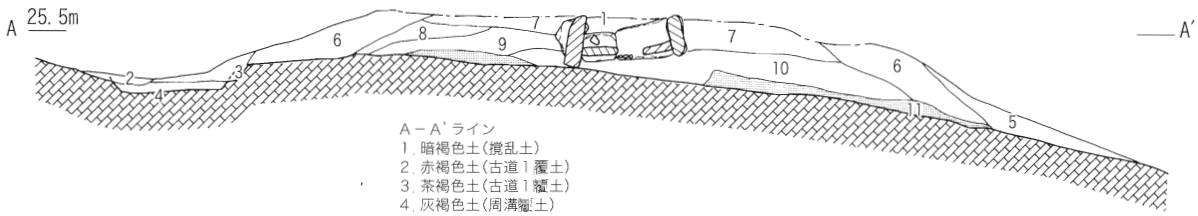
Ⅱ区の北側、尾根上の緩斜面とⅢ区の急斜面の変換点近くに位置する。墳丘上より北方を望むと、谷の間から宍道湖と島根半島を見通すことができる。

調査前の１号墳は墳丘の高まりと西側と南側の周溝の窪みをはっきり認識することができた。しかし、東側の盛土が流失し、周溝と南側の地山カット部分を古道１に切られていたため墳形は推定できなかった。

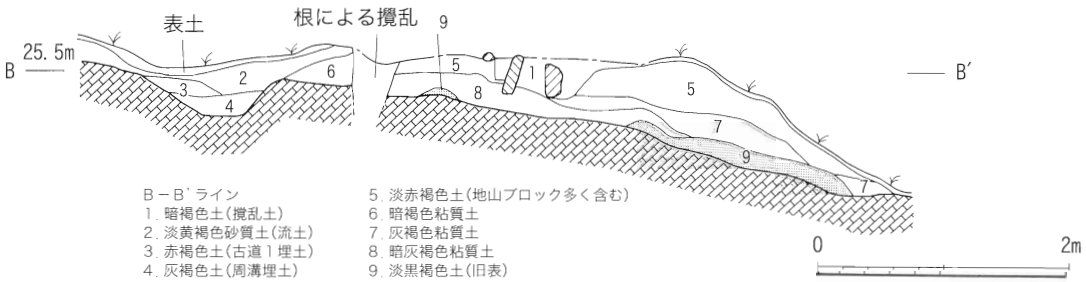


第20図　白石大谷Ⅰ遺跡　１号墳調査前地形測量図(S=1/100)





A－A′ライン
1. 暗褐色土(攪乱土)
2. 赤褐色土(古道１覆土)
3. 茶褐色土(古道１覆土)
4. 灰褐色土(周溝覆土)
5. 淡黄褐色砂質土(流土)
6. 暗褐色土
7. 淡赤褐色土(地山ブロック多く含む)
8. 暗褐色粘質土(地山ブロック含む)
9. 灰褐色粘質土
10. 暗灰褐色粘質土
11. 淡黒褐色土(旧表土)



B－B′ライン
1. 暗褐色土(攪乱土)
2. 淡黄褐色砂質土(流土)
3. 赤褐色土(古道１埋土)
4. 灰褐色土(周溝埋土)
5. 淡赤褐色土(地山ブロック多く含む)
6. 暗褐色粘質土
7. 灰褐色粘質土
8. 暗灰褐色粘質土
9. 淡黒褐色土(旧表)

第21図　白石大谷Ⅰ遺跡　１号墳　調査後墳丘測量図、墳丘土層断面(S=1/60)

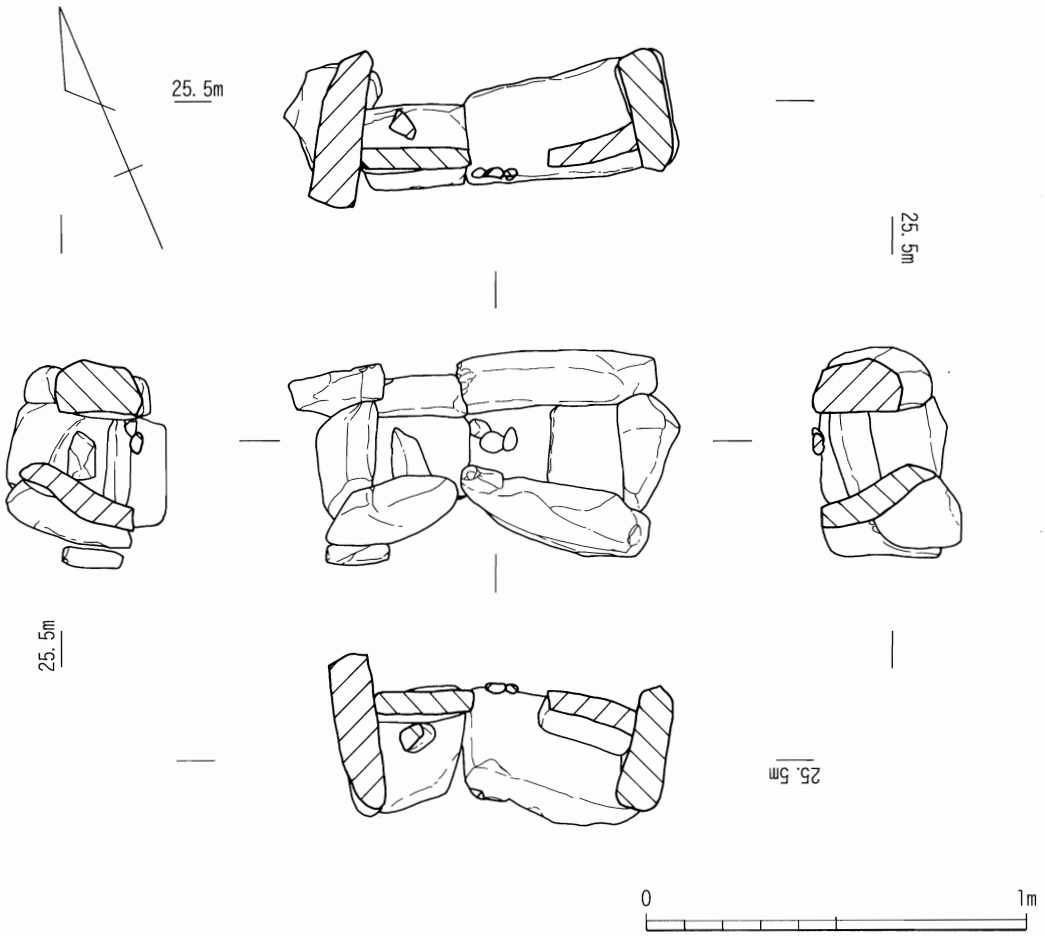
墳丘・周溝（第20・21図、写真図版12・13）

墳丘は東側と北側の一部が流失しているため不整形で、平面形は隅の丸い長方形状である。墳丘の規模は墳裾と判断した部分で計測して、南北5.1m、東西6.7mである。墳丘の高さは上部が攪乱されているので本来の高さは不明だが、残存高は北側の墳裾から計算して約1.2mである。墳丘は旧地表面に灰褐色系の粘質土を盛って水平な面を形成し、そこで石棺を組み立てた後に淡赤褐色の土を盛って墳丘を築成している。この淡赤褐色土には地山ブロックが多く含まれており、墳丘南側をカットして平坦地を造った際の残土を使用したと考えられる。

周溝は墳丘の西側と南側で検出した。周溝はやや埋まった段階で、その窪みを利用してほぼ同じ位置に古道１が造られたため、残存状態は良くない。平面的に確認することが困難だったが、丘陵斜面上方にあたる西側と南側のみ造られていたと思われる。

石棺（第21・22図、写真図版14・15）

１号墳の埋葬施設は墳丘のほぼ中央に位置する箱式石棺である。非常に小型の石棺であるが、１号墳で検出した埋葬施設はこの１基のみである。石棺は墳丘を築成する過程で組まれていたので堀方は見られなかった。石棺は攪乱を受けており、蓋石はその際廃棄されたようで墳丘上では検出されなかった。棺の構造は側石で小口石と底石を挟み込むタイプのものである。９枚の板石を組み合

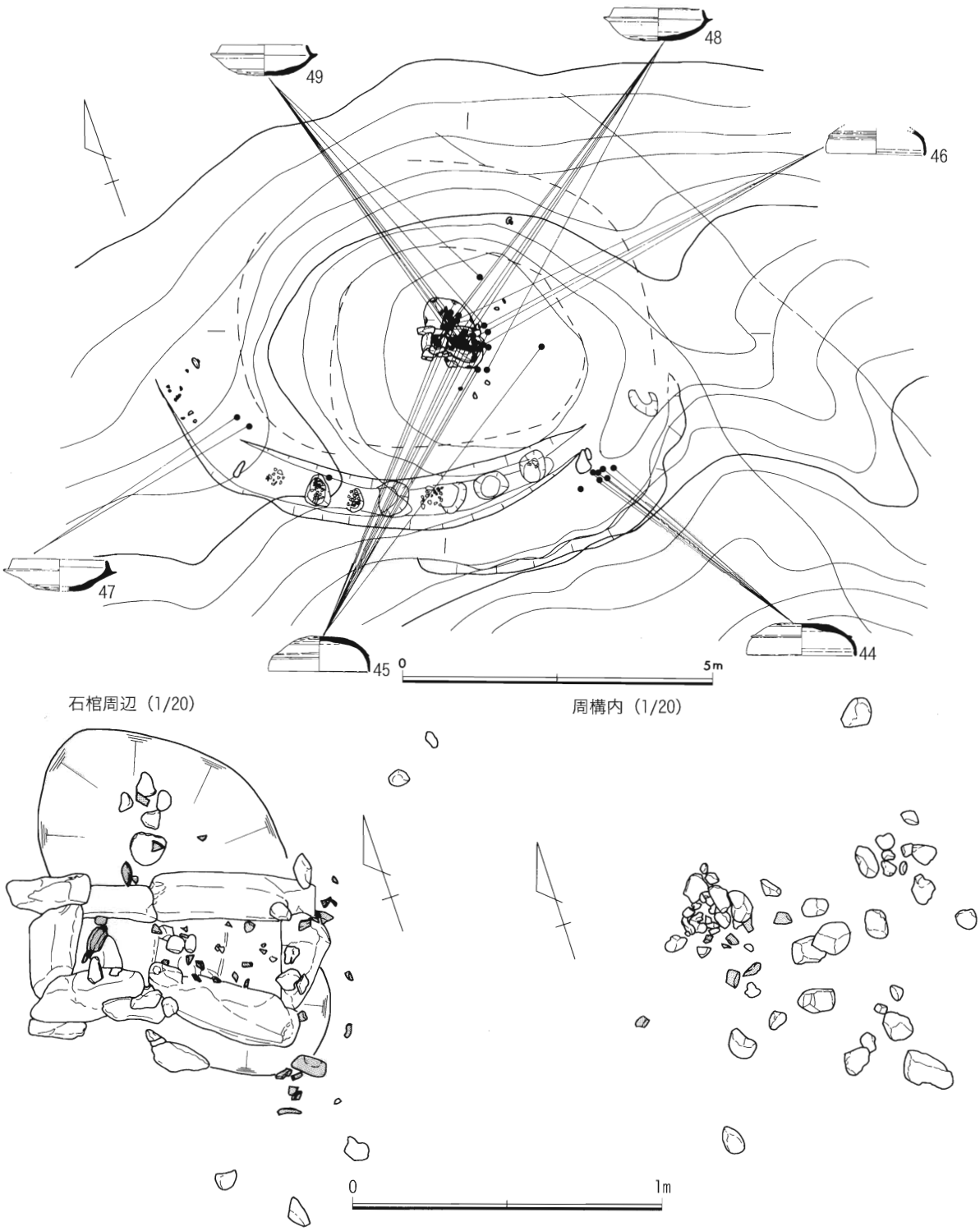


第22図　白石大谷Ⅰ遺跡　１号墳　石棺(S=1/20)

わぜて作られており、底石は中央のみ検出されなかったが、あるいは攪乱時に廃棄されたとも考えられる。石材は宍道町内で産出される来待石が使用されている。表面は風化が著しく加工痕は確認できなかった。規模は床面の内法で長さ70cm、幅22～27cm、底石から小口石上面までの高さは19～25cmである。棺の主軸はＮ－67°－Ｗ方向である。

遺物出土状況（第23図、写真図版14・15）

須恵器が石棺周辺と周溝内の２か所で出土した。石棺周辺の須恵器は攪乱土中で小片に砕かれた



第23図　白石大谷Ⅰ遺跡　１号墳遺物出土状況(S=1/100)

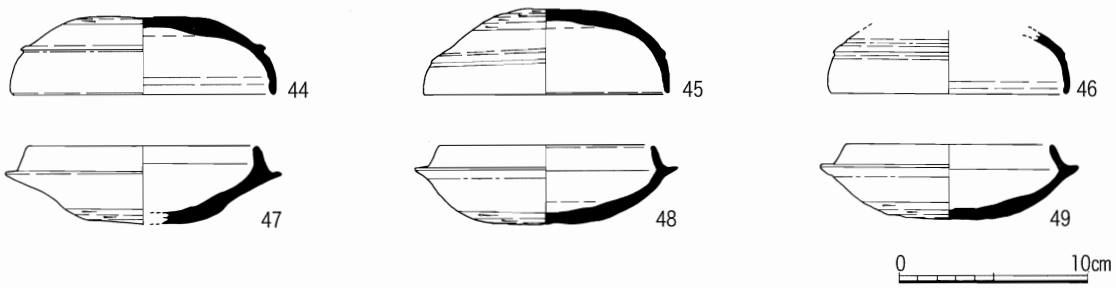
来待石と伴に出土した。45・48の破片がやや大きいくらいでほとんどが攪乱によって細片に砕けている。44は周溝南東部分で小型の礫に混じって出土した。付近で出土した来待石の板石は石棺の蓋石または底石と思われるので、攪乱の際墳丘上から廃棄された可能性が考えられる。

出土遺物（第24図、写真図版35・36）

出土した須恵器は復元した結果６個体で、色調や調整等の特徴から第24図に示したセット関係になると判断した。44は体部と天井部の境の稜が水平方向に突出する坏蓋で特徴的である。天井部のヘラケズリはケズリ残しの所があり、横方向の板目が確認できる。これとセットになると考えた47は口縁部に厚みがあり、体部は内弯せず外反気味で48・49とは異なるプロポーションである。この２点は色調が明灰色で他の４点とはっきり異なる。これら６点の蓋坏はいずれも古墳時代後期後半（大谷編年出雲４期。文献25）に位置づけられる。

第13表　白石大谷Ⅰ遺跡　1号墳　出土遺物観察表

挿図番号	写真図版	遺物番号	出土地点	種別	器種	寸法(cm) 口径	底径	器高	形態・文様の特徴	調整	胎土	色調	備考
24	35	44	1号墳	須恵器	坏蓋	13.7	－	4.1		(外)回転ヘラケズリ回転ナデ (内)回転ナデ	3.0mm以下の石英含む	明灰色	
24	35	45	1号墳	須恵器	坏蓋	12.9	－	4.6		(外)回転ヘラケズリ回転ナデ (内)回転ナデ	1.0mm以下の白色砂粒含む	灰色	
24	35	46	1号墳	須恵器	坏蓋	12.5	－	－		(外)回転ナデ (内)回転ナデ	1.0mm以下の砂粒、0.5mm以下の黒	灰色	
24	35	47	1号墳	須恵器	坏身	12.0	(最大径)14.5	4.05		(外)回転ヘラケズリ回転ナデ (内)回転ナデ	1.0mm以下の砂粒含む	明灰色	
24	36	48	1号墳	須恵器	坏身	12.1	(最大径)13.9	4.2		(外)回転ヘラケズリ回転ナデ (内)回転ナデ	1.0mm以下の砂粒やや多く含む	灰色	
24	36	49	1号墳	須恵器	坏身	10.8	(最大径)13.6	4.0		(外)回転ヘラケズリ回転ナデ (内)回転ナデ	1.0mm以下の白色砂粒やや多く含む	灰色	



第24図　白石大谷Ⅰ遺跡　1号墳　出土遺物(S=1/4)

2．遺構に伴わない遺物（第25図、写真図版31・35～37）

Ⅰ区を中心に土師器（50～63）・須恵器（64～73）が出土し、玉の未製品（74～77）も４点出土している。一部を除いてほとんど細片だが、古墳時代のほぼ全般の土師器・須恵器が確認できた。

51はⅠ区谷部で出土した。図示できなかったが、同地点で同一個体と思われる胴部や底部の破片も多数出土した。二次的に火を受けて脆くなっており、胴部下半の外面には黒色になった部分も見られる。56～58は別個体だがいずれも坏部に段のある高坏の破片と思われる。61・62は口径が小さく古墳時代前期（松山編年Ⅰ期。文献５）の器台または高坏と思われる。64は大谷編年出雲２期頃と思われる坏身で、同じⅠ区谷部で出土した土師器同様１号墳に先行する時期のものと言える。67はⅢ区東側の急斜面で出土した短頸壺の口縁である。周辺で遺構は検出されず、同一個体と思われる口縁部がⅡ区で出土しているので、１号墳周辺から転落した可能性も考えられる。須恵器の甕

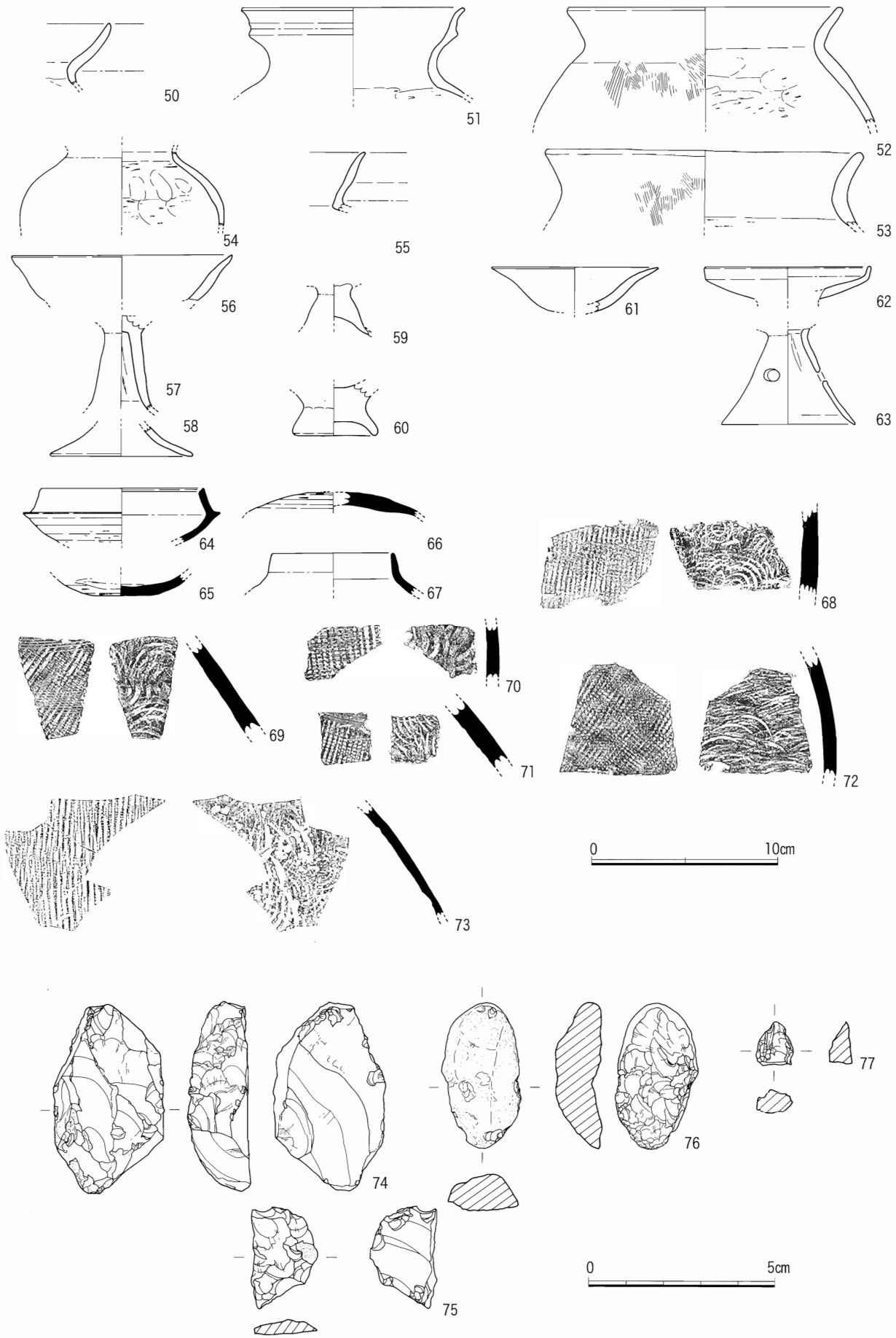
（68～73）はほとんど胴部の細片で、口縁部は図示できなかった。古代の甕と完全に分類することができなかったので、須恵器の胴部片はここにまとめて掲載しておく。器壁の薄い73は壺や横瓶等の胴部の可能性も考えられる。74は濃い緑色の碧玉で表面に赤く変色した部分が見られる。側面の丸く加工した部分には見られない。加工前に火を受けたと考えられ、あるいは加工の初めの段階で火を使用した可能性もある。76は水晶製の勾玉未製品と思われ、図中左側の面は自然面である。また、右図の右側面には急角度の剥離が見られるので、抉りを入れようとした可能性がある。

第１４表　白石大谷Ⅰ遺跡　出土土師器･須恵器観察表

挿図番号	写真図版	遺物番号	出土地点	種別	器種	寸法(cm) 口径	底径	器高	形態・文様の特徴	調整	胎土	色調	備考
25	35	50	Ⅰ区谷西	土師器	甕	－	－	－		(外)ヨコナデ (内)ヨコナデ　ヘラケズリ	2.0mm以下の砂粒含む	淡桃褐色	
25	35	51	Ⅰ区谷部	土師器	甕	(15.8)	－	－		(外)ヨコナデ (内)ヘラケズリ	3.0mm以下の砂粒含む	茶褐色	
25	35	52	Ⅰ区谷	土師器	甕	(19.6)	－	－		(外)ヨコナデ　タテハケ (内)ヘラケズリ	2.0mm以下の砂粒含む	淡褐色	
25	35	53	Ⅲ区東	土師器	甕	22.4	－	－		(外)ハケ　ヨコナデ (内)ヨコナデ	2.0mm以下の砂粒多量に含む	暗茶褐色	
25	35	54	Ⅰ区谷北	土師器	甕	－	－	－		(外)調整不明(内)ヘラケズリ　ユビオサエ	2.0mm以下の砂粒やや多量に含む	淡茶褐色	
25	35	55	Ⅰ区谷	土師器	壺	－	－	－		摩滅により調整不明	1.0mm以下の砂粒微量含む	茶褐色	
25	35	56	Ⅰ区谷	土師器	高坏	(15.9)	－	－		(外)ヨコナデ (内)調整不明	1.0mm以内の砂粒(石英･長石)多く含む	暗茶褐色	
25	35	57	Ⅰ区谷北	土師器	高坏	－	－	－		摩滅により調整不明	2.5mm以下の砂粒含む	茶褐色	
25	35	58	Ⅰ区	土師器	脚部	－	(10.3)	－		(外)ナデ (内)ナデ	1.0mm以下の砂粒微量含む	橙黄色	
25	35	59	Ⅰ区谷北	土師器	高坏	－	－	－		摩滅により調整不明	2.5mm以下の砂粒含む	淡黄褐色	
25	36	60	Ⅰ区谷	土師器	高坏	－	5.7	－		摩滅により調整不明	3.0mm以下の砂粒含む	茶褐色	
25	35	61	Ⅰ区谷	土師器	小型器台	(12.0)	－	－		摩滅により調整不明	2.0mm以下の砂粒多く含む	淡黄褐色	
25	35	62	Ⅰ区谷	土師器	器台	(11.8)	－	－		摩滅により調整不明	1.0mm以下の白色砂粒含む	淡黄褐色	
25	36	63	Ⅰ区	土師器	器台	－	(11.6)	－		(外)ヘラミガキ (内)不明	微砂粒含む	橙褐色	
25	37	64	Ⅰ区谷	須恵器	坏身	(11.6)	－	－		(外)回転ナデ　回転ヘラケズリ (内)回転ナデ	微砂粒含む	灰色	
25	37	65	Ⅳ区北	須恵器	坏身	－	－	－		(外)回転ナデ　回転ヘラケズリ (内)回転ナデ	1.0mm以下の砂粒含む	灰色	
25	37	66	Ⅱ区 T15	須恵器	坏蓋	－	－	－		(外)回転ナデ　回転ヘラケズリ (内)回転ナデ	1.0mm以下の砂粒含む	濃灰色	
25	37	67	Ⅲ区東	須恵器	短頸壺	－	－	－		(外)回転ナデ (内)回転ナデ	2.0mm以下の砂粒多く含む	暗灰色	
25	37	68	Ⅰ区谷	須恵器	甕	－	－	－		(外)タタキ (内)タタキ	0.5mm以下の砂粒少量含む	淡灰色	
25	37	69	Ⅰ区西	須恵器	甕	－	－	－		(外)タタキ (内)タタキ	0.5mm以下の砂粒少量含む	淡灰色	
25	37	70	Ⅰ区谷北	須恵器	甕	－	－	－		(外)タタキ (内)タタキ	0.5mm以下の砂粒少量含む	暗灰色	
25	37	71	Ⅰ区谷北	須恵器	甕	－	－	－		(外)タタキ (内)タタキ	0.5mm以内の砂粒(長石)若干含む	青灰色	
25	37	72	２トレンチ	須恵器	甕	－	－	－		(外)タタキ (内)タタキ	0.5mm以内の砂粒含む	青灰色	
25	37	73	Ⅰ区西	須恵器	甕	－	－	－		(外)タタキ (内)タタキ後ナデ	0.5mm以下の砂粒含む	(外)黒灰色 (内)灰色	

第１５表　白石大谷Ⅰ遺跡　出土玉未製品観察表

挿図番号	写真図版	遺物番号	出土地点	種別	器種	寸法(mm) 長さ	幅	厚さ	石材	重量(g)
25	31	74	Ⅰ区谷	玉	玉未成品	51.5	30.0	16.5	碧玉	30.88
25	31	75	Ⅰ区谷	玉	玉未成品	28.0	18.0	4.0	碧玉	2.37
25	31	76	Ⅳ区南	玉	勾玉未成品	39.5	22.0	12.5	水晶？	12.63
25	31	77	Ⅰ区谷	玉	玉未成品	11.5	10.0	7.5	水晶	0.81



第25図　白石大谷Ⅰ遺跡　出土土師器・須恵器①(S=1/4)

第４節　古代の遺構・遺物

今回の調査で検出した遺構の中で、最も特徴的な遺構である横口付製炭窯を検出している。横口付製炭窯は生産遺構の常で出土遺物に乏しく、しかも確実に遺構の時期を示す出土状況ではなかった。また、自然科学的分析も地磁気年代と放射性炭素年代で大きく年代に違いが出ているので操業時期は明確にできていない。そのため周辺や調査区内で出土した遺物の時期や、同じ宍道湖南岸地域で確認された横口付製炭窯の例[1]を参考にして７世紀後半～８世紀後半の遺構と判断した。このほかⅠ区西側で段状遺構４、Ⅱ区で古道１、Ⅳ区で溝状遺構１を検出している。

遺物はⅠ区西側で８世紀後半から９世紀の土師器・須恵器が出土したほか、Ⅰ区谷部でも同時期の土器が出土している。谷部では古代の遺構を検出していないので、基本的にⅠ区西側の遺構から流入したものと推測される。また、Ⅳ区東側の緩斜面でも古代の遺物が若干出土しており、このあたりまで何らかの形で利用されていたと考えられる。

第26図　白石大谷Ⅰ遺跡　古代の遺構(S=1/600)

(1)　玉湯町布志名大谷Ⅱ遺跡（文献12）、宍道町屋敷古墳群（文献24）、斐川町三井Ⅱ遺跡は古代に操業していたと考えられている。三井Ⅱ遺跡は現在調査・整理中で江角健・阿部賢治両氏の御教示による。

1．横口付製炭窯

調査前の状況（第27図、写真図版16）

横口付製炭窯は丘陵北側斜面の標高約17～19mの位置で検出した。調査前は土砂で完全に埋没しており、検出は全く予想外だった。ただ調査前から側庭部分は緩斜面になっていたのでトレンチを２か所（T18・19）設定した結果、T19で側庭作業場に堆積した黒色の炭層を検出した。

炭窯の構造（第28図、写真図版５・16～24）

横口付製炭窯は急斜面をトンネル状に刳り抜いて焼成部を造る地下式構造で、焼成部の天井が約半分崩落していた他はほぼ完全な形で検出された。焚き口・焼成部・煙道・煙出し・前庭および側庭作業面によって構成されており、横口の数は６個である。この種の窯跡に付属施設として見られる上方溝は検出されなかった。以下各部ごとに記述する。

焚き口・前庭（第27～30図、写真図版５・17）

焚き口は、天井が崩落し山側の壁面が迫り出しているので断面（H－H’ライン）の形はいびつだが、本来は焼成部断面に近い形でやや幅が狭かったと推測される。床面には黄褐色砂質土が堆積し、これを掘り下げると地山が長さ96cm、幅60cm、深さ18cmの規模で１段低くなっていた。堆積土の黄褐色土は地山ブロックを含んで締まっており、当初からこのような作りだった可能性の他に焚き口を補修したとも考えられる。

前庭作業面は焚き口から北に向かって伸び、土坑状に地山を掘り込んで造られている。床面は平坦に造られ、平面は焚き口側が広い台形で規模は長さ3.5m、幅0.5～1.1mである。断面は逆台形状で、壁面は最も深い山側で高さ0.9mになる。前庭内には検出面まで土砂が堆積し、検出面で須恵器の壺が２点出土した。また、最下層には炭のかたまりや焼土粒を含む黒褐色砂質土が堆積しており、土層断面から焼成部内より炭を掻き出す際に前庭に堆積したものと考えられる。

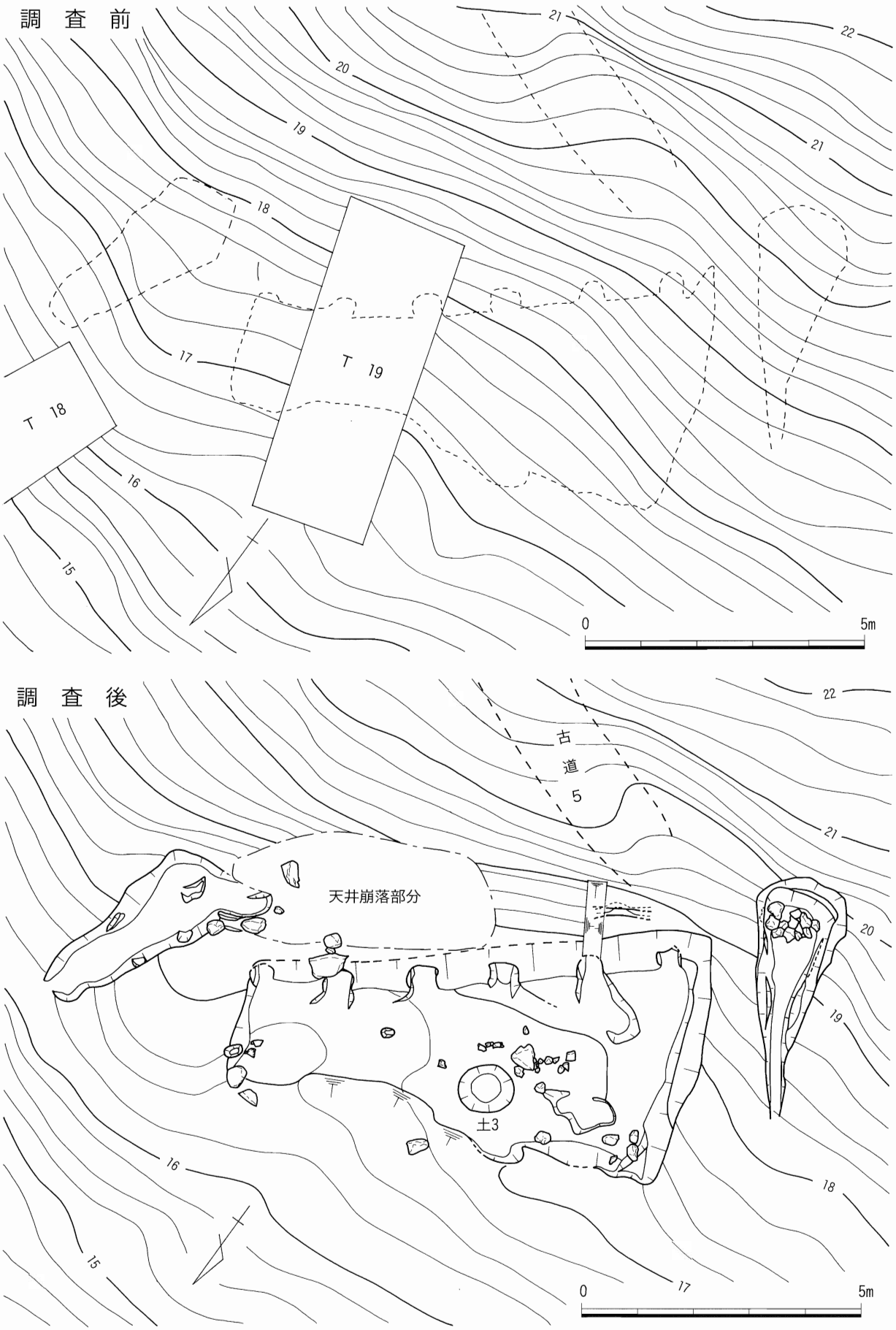
焼成部・横口（第27～30図、写真図版５～19）

焼成部は地山を刳り抜いて造られており、斜面上方からの土圧によるものか天井の焚き口側約半分は調査前に崩落していた。このため焼成部の調査は危険を避ける必要から、ある程度崩落した地山と天井を取り除いた後に掘り下げる方法を採った。焼成部の平面形は細長い長方形で、北側に僅かに張り出すようにカーブしている。主軸はN－53°－E方向である。横断面は丸みのある台形で壁面と天井の境は明確でない。焼成部の規模は床面で長さ約8.5m、幅約0.8m、床面から天井までの高さは0.6～0.7mである。床面は煙道に向けて７～８°の角度で緩やかに高くなり、高熱により黒灰色に変色して非常に硬くなっていた。壁面と天井は床面ほど硬くなっておらず、色調も黄褐色である。さらに横断面の地山を裁ち割って確認すると、最大で幅17cmにわたって暗赤褐色に変色していた。また、焼成部内には天井崩落土や赤褐色の焼土が堆積していたが、前庭・側庭作業面で検出したような黒色の炭層は検出されなかった。

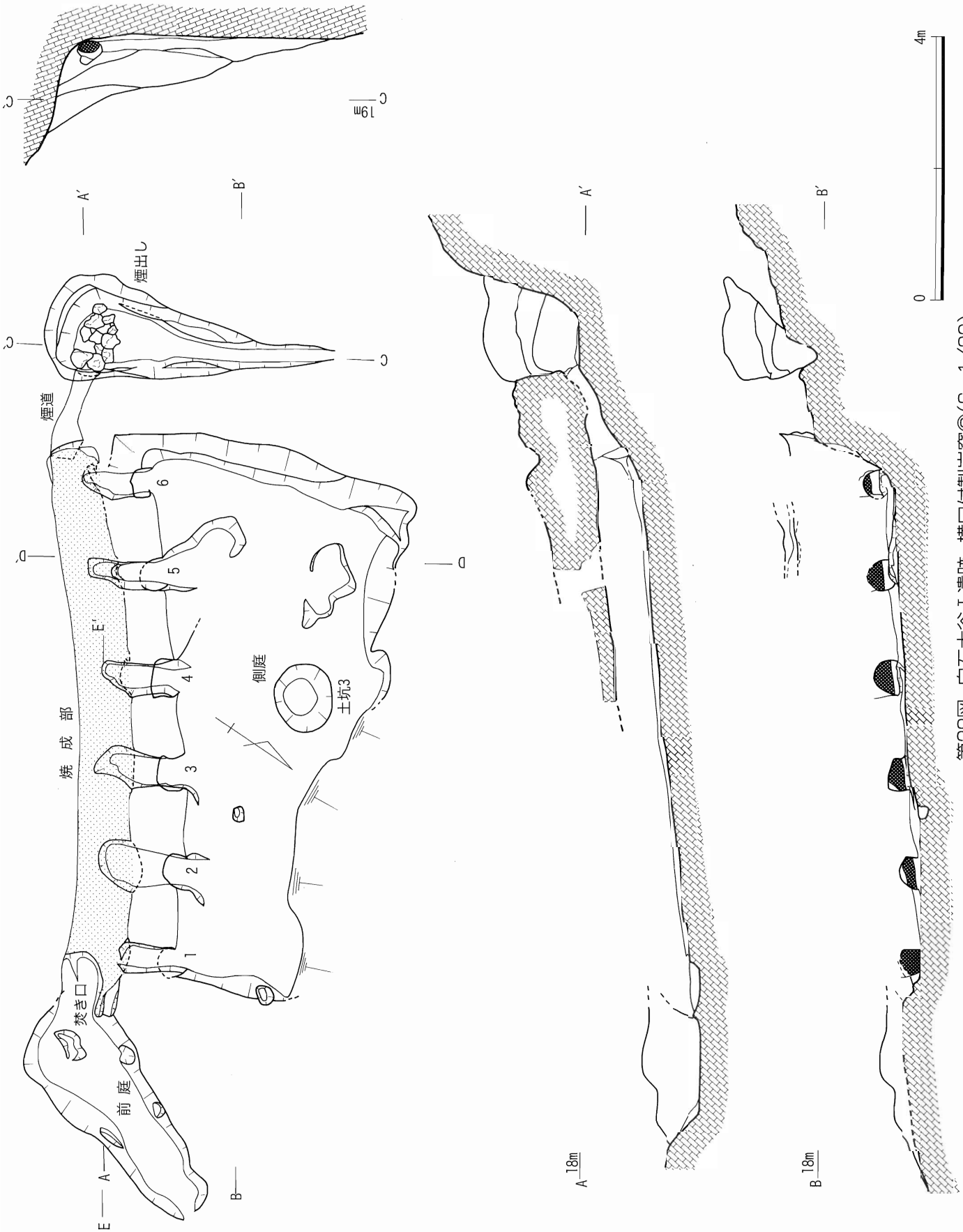
焼成部の側庭側壁面には横口が６個開けられている。穴の間隔は中心で測って1.4～1.5mで、横口は長さ約50cm、床面からの高さは30～40cmである。横口部分の焼成部床面は作業によるものか１段低くなっているので、横断面は楕円形になる。

煙道・煙出し（第28・31図、写真図版５・19～22）

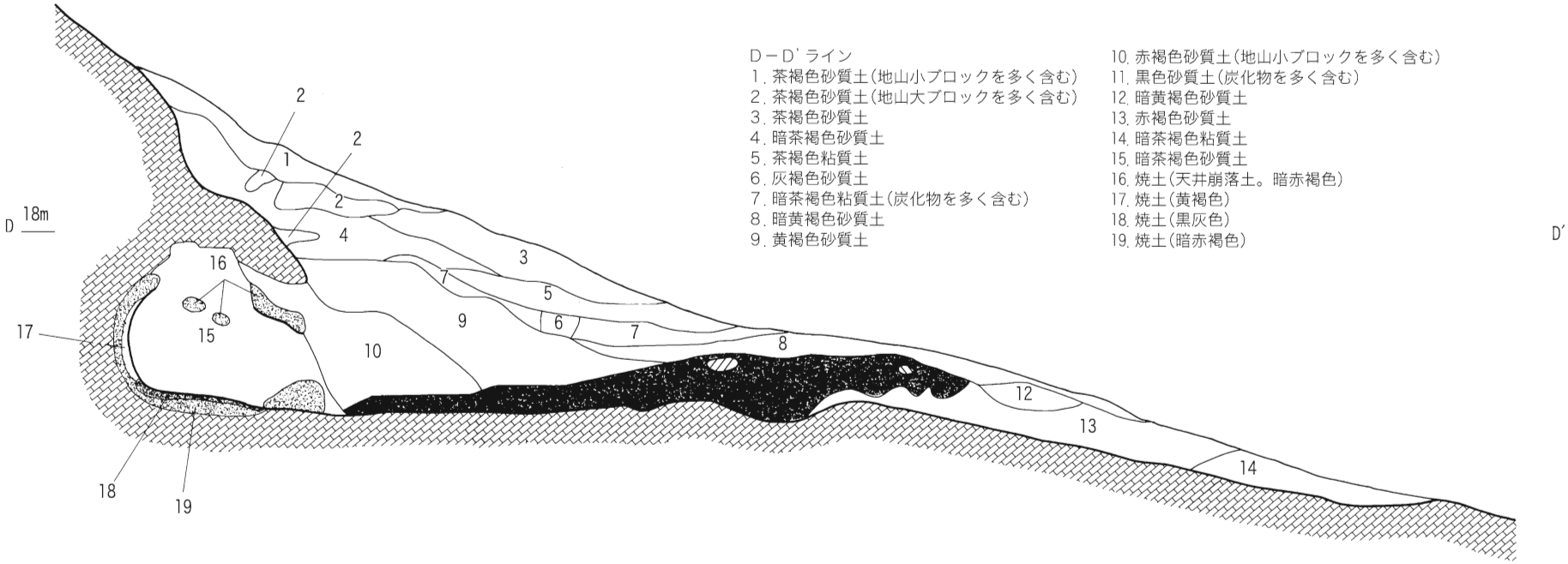
煙道は焼成部の奥からさらに細いトンネルとなって煙出しへ続いており、長さは約1.2m、床面から天井までの高さは最も低いところで約0.2mである。平面と断面で確認すると焼成部から約0.6

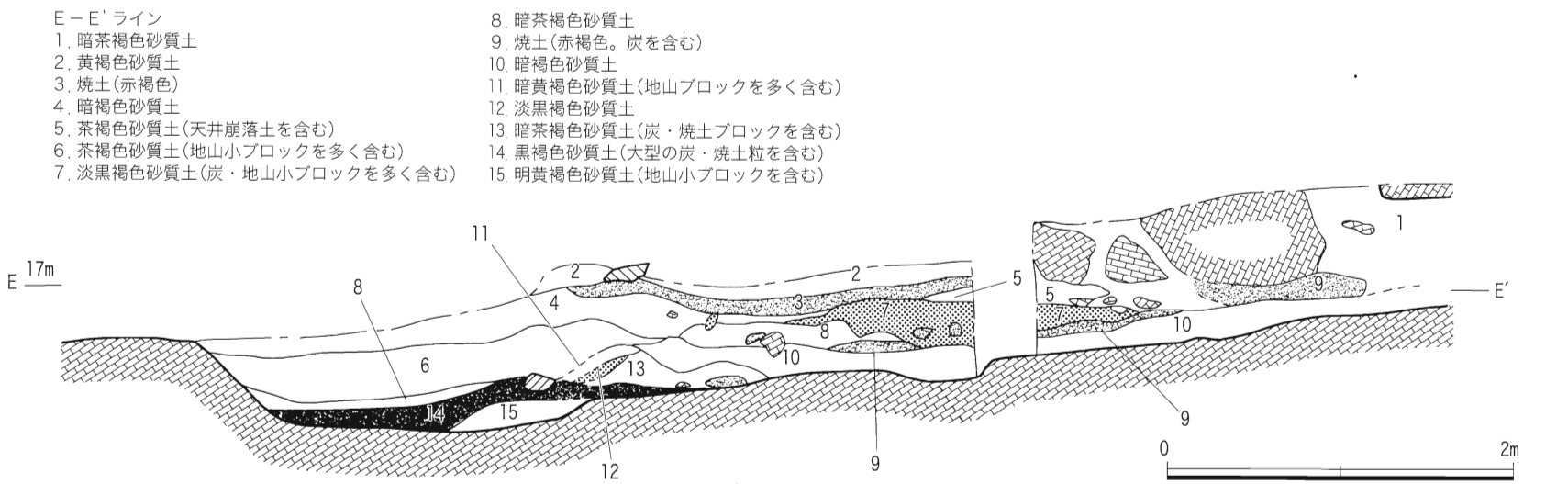


第27図　白石大谷Ⅰ遺跡　横口付製炭窯①(S＝1/100)

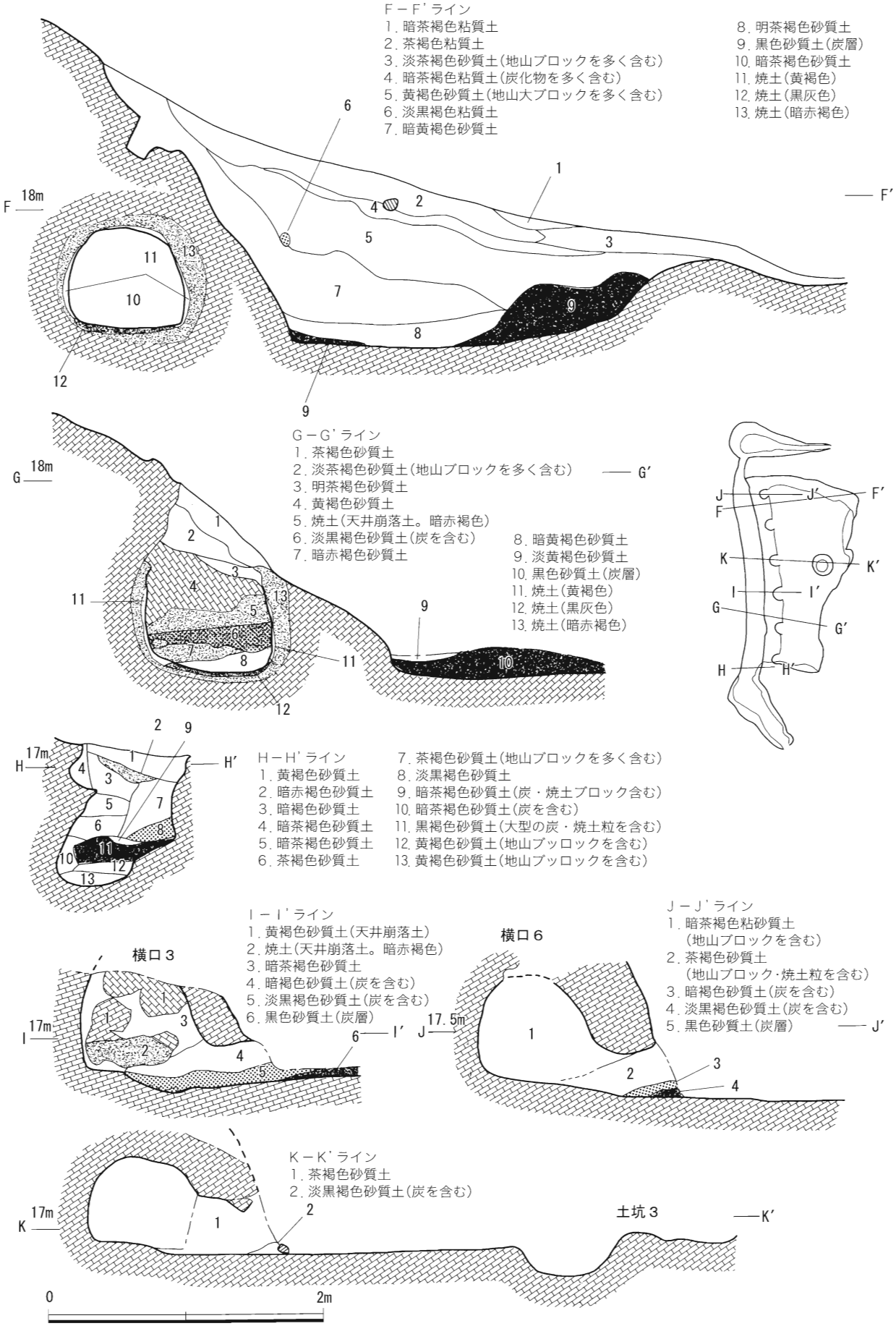


第28図　白石大谷Ⅰ遺跡　横口付製炭窯②(S=1/80)

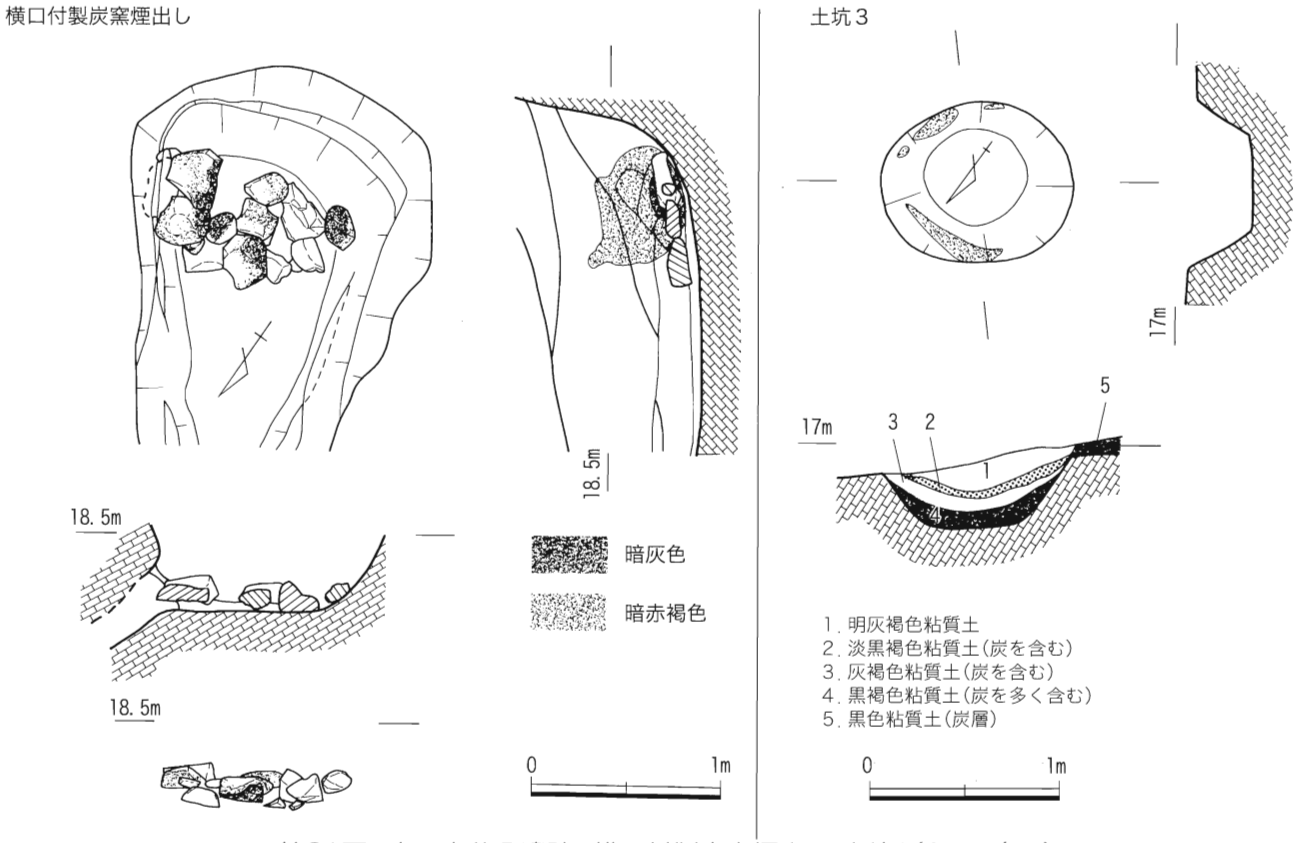




第29図　白石大谷Ⅰ遺跡　横口付製炭窯土層断面図①（S＝1/40）



第30図　白石大谷Ⅰ遺跡　横口付製炭窯土層断面図②(S＝1/40)



第31図　白石大谷Ⅰ遺跡　横口付製炭窯煙出し、土坑3(S＝1/40)

mの所で折れ曲がっている。これは煙道を造る時に焼成部から煙出しに向かって床面レベルを上げながら掘り進み、煙出しからも東に向かって掘り下げた結果ズレが生じたためと考えられる。

煙出しは地山を土坑状に掘り込んだ堀方の中に開けられていた。堀方の平面形は北西に向かって伸びる溝状の部分があるため細長い三角形である。床面は水平で規模は長さ3.9m、幅0.9mである。溝状に伸びる部分は長さ約2.5m、幅約0.2m断面はU字状だが床面はほぼ水平なので、排水よりもむしろ通路として機能していたと考えられる。また、堀方の床面では、長さ15～30cm前後の地山ブロックや石が検出された。これらの中には高熱によって暗灰色や暗赤褐色に変色したものが見られ、本来煙道側の壁面に寄せて造られた煙突が崩れたものと思われる。

側庭（第27～30図、写真図版４・５・16・23・24）

側庭作業面は焼成部の北側に位置し、丘陵斜面を大規模に削平して造られている。調査前は土砂によって完全に埋まっており緩斜面になっていた。床上には黒色の炭層が全面にわたって堆積していたが、横口部分から北側に向けて次第に厚さが厚くなり、焼成部から炭を掻き出した様子がうかがえる。また、炭層の上面では焼けた石を多数検出した。大きさは不揃いだが操業時に横口を閉塞するために使用されたと考えられる。床面の平面形は台形で煙道側が広くなり、規模は最大で長さ7.8m、幅3.6mである。床面は煙道側に向かって高くなり、３～４°の角度で緩やかに傾斜している。旧地形の勾配と側庭床面の勾配に差があるため西側は急角度で立ち上がる壁になり、床面からの高さは最も高くなる南西隅で約1.6mである。床上には炭が堆積していた。床面で土坑３とピットを検出したほか、北東コーナーでもピットを検出している。床面の横口周辺は焼成部から製品を掻き出す作業によって１段低くなっている。横口２・３は東側に、横口４・５は西側に向けて窪んでおり、ちょうど土坑３を避けるような作業状況だったと推測される。

土坑３（第28・31図、写真図版５・24）

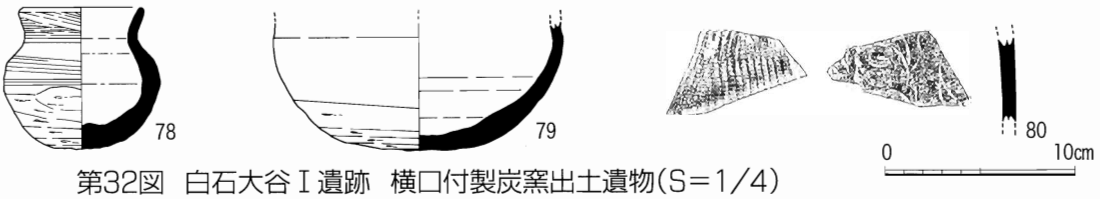
側庭作業場のほぼ中央、横口３と４の間に位置している。側庭床面に堆積した黒色の炭層と同時に検出した。土坑内には床面に黒色の炭層が堆積し、その上に灰褐色粘質土と炭を含む黒褐色土が交互に堆積していた。土坑壁面は熱を受けて赤く変色している。土坑３は検出した位置や側庭に堆積した炭層とよく似た炭層が床面に堆積している点、側庭床面で検出した横口から伸びる窪みが土坑３を避けるようについている点等から、横口付製炭窯と同時期のものと推測される。また、放射性炭素年代の結果もＡ．Ｄ．830年±70と焼成部内で出土した炭の年代に近いものだった。

第１４表　白石大谷Ⅰ遺跡　出土土師器･須恵器観察表

遺構名	上面形 底面形	長軸(cm) 長軸(cm)	短軸(cm) 短軸(cm)	深さ(cm)	主軸	出土遺物	備考
土坑３	楕円形	９８	５６	44	N－ ９０°－E	弥生土器(中期) 二次加工のある剥片	
	円形	８４	５２				

出土遺物（第32図、写真図版17・36）

遺物は土師器の細片が１点、須恵器が３点出土した。土師器は側庭床上で出土したが、細片のため時期を判断できず図示もできなかった。78・79は前庭検出面で出土した須恵器の壺である。78は底部を下にして出土しているので当初は意図的に置かれたものと考えていたが、その後検出した床面が60cmも低い位置だったのでⅡ区から前庭埋没後の平坦地に転落したものとも考えられる。Ⅲ区東斜面では短頸壺67が出土しており、同一個体の可能性がある。79も前庭北側の茶褐色土上で出土し、床面からは浮いた状態だった。80は側庭上層から出土した須恵器甕の胴部である。これらの遺物は出土状況から横口付製炭窯の時期を決める材料とするには問題があると思われる。



第32図　白石大谷Ⅰ遺跡　横口付製炭窯出土遺物(S＝1/4)

第１７表　白石大谷Ⅰ遺跡　炭窯出土遺物観察表

挿図番号	写真図版	遺物番号	出土地点	種別	器種	寸法(cm) 口径	底径	器高	形態・文様の特徴	調整	胎土	色調	備考
32	36	78	横口付製炭窯	須恵器	壺	6.3	(最大径) 8.2	7.5		(外)カキメ調整　回転ヘラケズリ (内)回転ナデ	1.0mmの砂粒微量含む	灰色	内外面に吹き出し釉
32	36	79	横口付製炭窯	須恵器	壺	－	－	－		(外)カキメ調整後ナデ　ヘラケズリ (内)回転ナデ	2.0mm以下の砂粒含む	青灰色	
32	36	80	横口付製炭窯	須恵器	甕	－	－	－		(外)タタキ (内)タタキ	1.0mmの砂粒微量含む	暗灰色	

年代

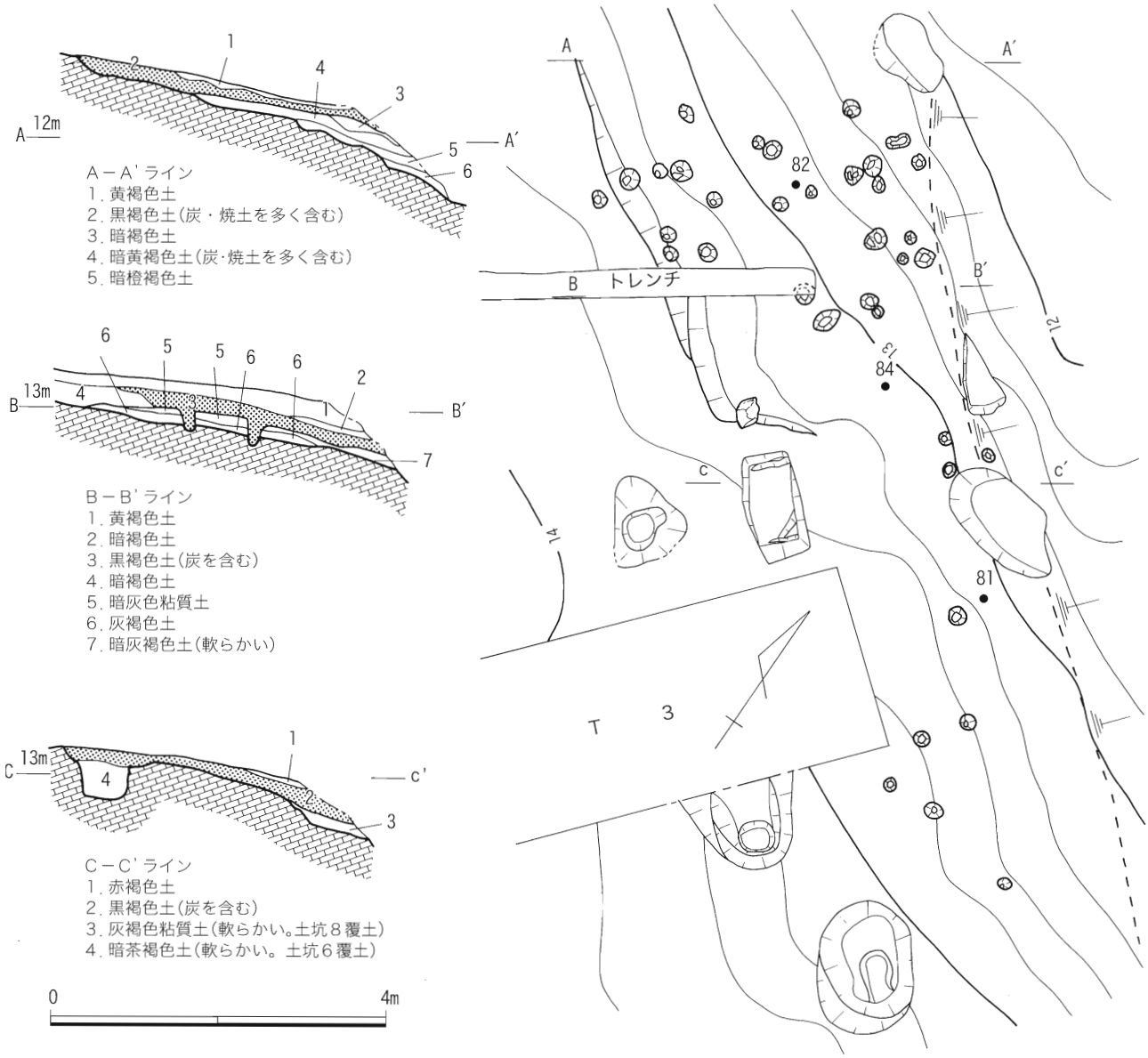
出土した土器は４点しか無く、時期を決定できる出土状況ではなかった。焼成部内で行った地磁気年代の測定結果はＡ．Ｄ．660年±20年で、同じく焼成部内より採取した炭の放射性炭素年代の測定結果はＡ．Ｄ．870年±60年だった。このように自然科学的年代測定結果にはかなり開きが見られる。また、この種の窯跡は近年報告例が増加しており、形態の分類や編年等の研究も行われている（文献19）。これを参考にすると白石大谷Ⅰ遺跡で検出された窯跡はＢ１型に分類される。このタイプは７世紀を中心に６世紀後半～８世紀前半まで構築されると考えられている。本遺跡の場合６世紀後半から７世紀初頭に窯跡の斜面上方に１号墳が築かれるので、これと近い時期を想定するのは不自然と思われる。以上の状況から、横口付製炭窯の操業年代は大まかではあるが７世紀後半から８世紀後半頃と推測される。

２．段状遺構４（第33図、写真図版26・36）

Ⅰ区西の谷部に近い位置で検出した。Ⅰ区西の東側は古代以降に大規模な段状の削平を受けており、段状遺構４も北東部を削られている。南東・南西部分は壁がよく残っているが、北西部分は明確でなかった。床面は斜面を削って平坦にし、その残土を斜面下方に盛って形成している。平面は不整長方形で、残存する規模は3.3×5.3m以上である。壁溝は確認できなかった。床面ではピットを27基検出した。床上に堆積した炭・焼土を含む黒褐色土と同じ土が覆土なので、段状遺構４に伴う柱穴と考えられる。建物や柱の並びは復元できなかった。

Ⅰ区西で検出した平坦地は段状遺構４の南東にも続いている。地山上に炭を含む黒褐色土が堆積し、古代の遺物が出土することから段状遺構４と同時期の平坦地と判断した。これに伴うと判断されるピットを９基検出したが、並び等は不明である。

段状遺構４の南西でも小規模なピットやテラスを検出した。詳しい時期は不明だが、黒褐色土の上から堀込まれているので段状遺構４より後の遺構と考えられる。

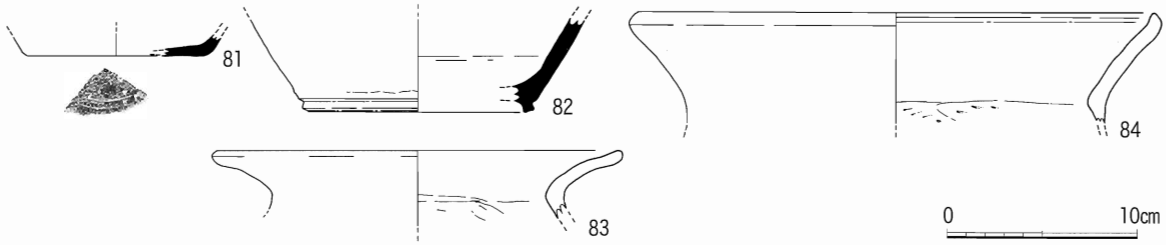


第33図　白石大谷Ⅰ遺跡　段状遺構4(S＝1/80)

遺物は須恵器と土師器が出土している。81は底部糸切りの坏で９世紀頃のものである。82は壺の底部と判断した須恵器で、８世紀後半から９世紀初め頃のものと思われる。土師器は図示できるものは甕の口縁のみで、甑や竈は確認できなかった。83・84はいずれも須恵器と同時期のものである。このほか段状遺構４検出前のⅠ区西掘削時に碗形鍛冶滓（154）が出土している。また、壁の南隅で検出した37×25cmの石は西側の面に使用痕があり、金床石として使用した可能性がある[1]。以上の点から段状遺構４は、９世紀頃の鍛冶に関連する遺構の可能性が考えられる。

第18表　白石大谷Ⅰ遺跡段状遺構4　出土遺物観察表

挿図番号	写真図版	遺物番号	出土地点	種別	器種	寸法(cm) 口径	底径	器高	形態・文様の特徴	調整	胎土	色調	備考
34	36	81	段状遺構４	須恵器	坏	－	(9.2)	－	回転糸切り痕	(外)調整不明 (内)調整不明	1～2.0mmの砂粒多く含む	淡灰色	
34	36	82	段状遺構４	須恵器	壺	－	(高台径) (12.6)	－		(外)回転ヘラケズリ後ナデ　回転ナデ (内)回転ナデ　ナデ	1.0mmの砂粒微量含む	青灰色	
34	36	83	段状遺構４	土師器	甕	(21.2)	－	－		(外)調整不明 (内)ヘラケズリ	1～3.0mmの砂粒多く含む	淡黄褐色	
34	36	84	段状遺構４	土師器	甕	(27.0)	－	－		(外)調整不明 (内)ナデ	1～2.0mmの砂粒多く含む	淡黄褐色	



第34図　白石大谷Ⅰ遺跡　段状遺構4　出土遺物(S＝1/4)

３．溝状遺構１（第35図、写真図版25・36）

Ⅳ区東側の緩斜面で検出した。調査前には段状遺構４より１段高い平坦地になっており、調査時には墳丘を全て削平された古墳と認識していた。その後埋土中で古墳時代以降の須恵器と思われる85が出土したことや、地山面で検出した土坑４・５の覆土と同様の炭・焼土を含む黒色土が堆積していることから、土坑４・５と関連のある古代の遺構と判断した。平面はコの字状で、規模は検出面で東西約7.8m、幅0.8～1.1m、深さは最も深いところで0.7mである。遺物は弥生土器、土師器、須恵器の細片が出土している。

第19表　白石大谷Ⅰ遺跡　溝状遺構1　出土遺物観察表

挿図番号	写真図版	遺物番号	出土地点	種別	器種	寸法(cm) 口径	底径	器高	形態・文様の特徴	調整	胎土	色調	備考
35	36	85	溝状遺構１	須恵器	甕	(19.2)	－	－		(外)回転ナデ (内)回転ナデ	1.0mm以下の砂粒含む	黒灰色	

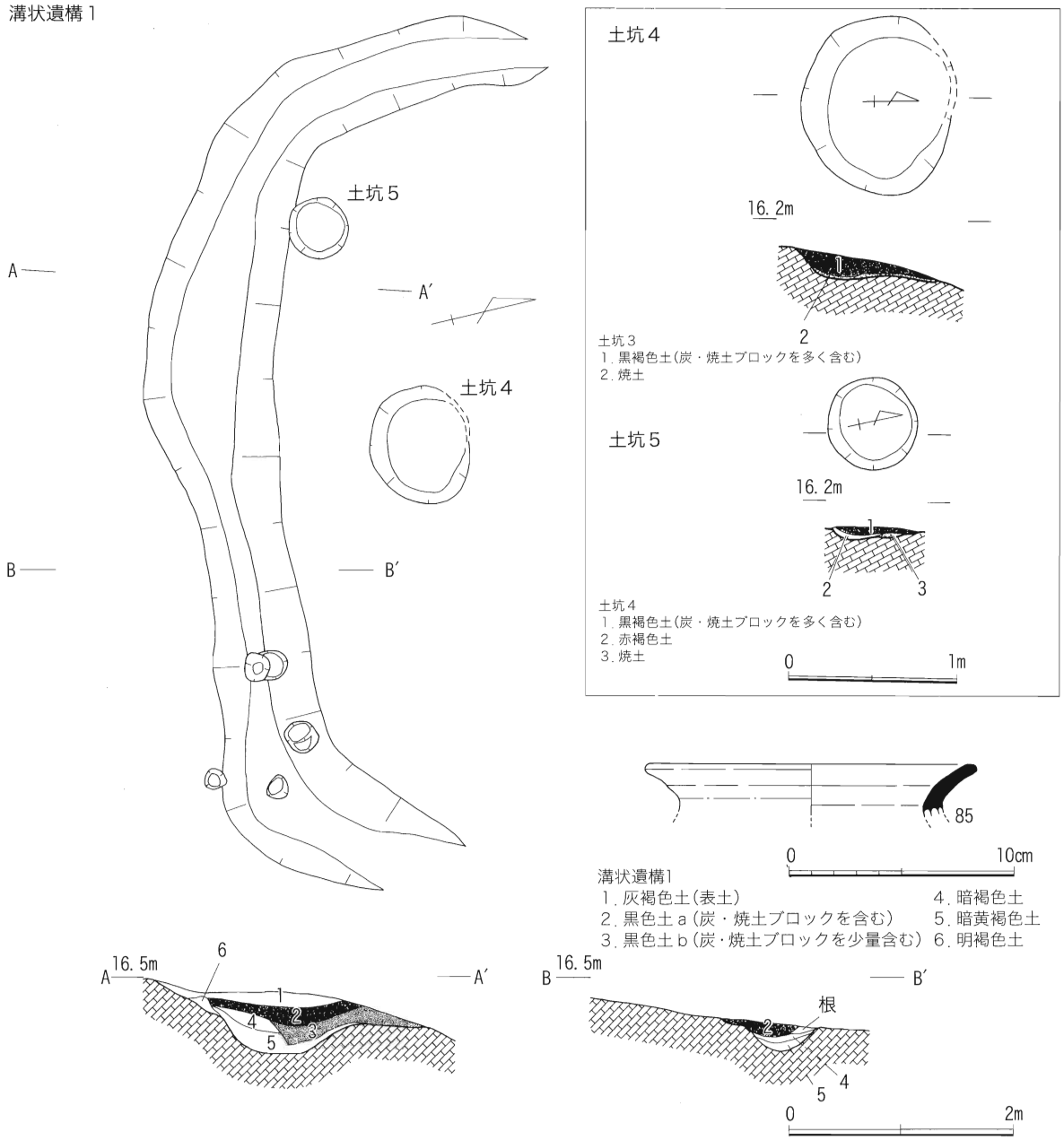
４．土坑４・５（第35図、写真図版３・25）

溝状遺構１に囲まれた平坦地で検出した。非常に浅く、ここで火を使用した以外性格は不明である。土坑５は溝状遺構１東西軸のほぼ中央に位置しており、関連のあるものと判断した。

第20表　白石大谷Ⅰ遺跡　土坑4･5計測表

遺構名	上面形 底面形	長軸(cm) 長軸(cm)	短軸(cm) 短軸(cm)	深さ(cm)	主軸	出土遺物	備考
土坑４	円形	１０４	９０	１８	N－５３°－W		
	円形	８４	６７				
土坑５	円形	５４	５１	８	N－９０°－W		
	円形	４２	４１				

(1)　穴沢義功氏の御教示による。

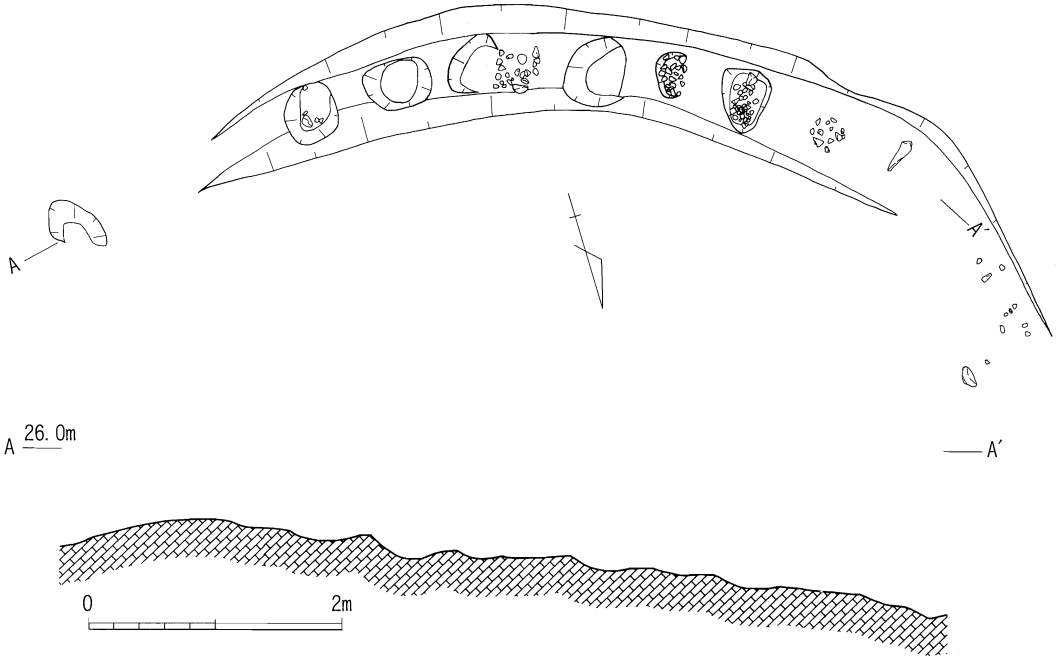


第35図　白石大谷Ⅰ遺跡　溝状遺構1(S＝1/60)、出土遺物(S＝1/4)、土坑4･5(S＝1/40)

５．古道１（第21・36図、写真図版26）

１号墳周溝を調査中にほぼ周溝と重複する位置で検出した。検出した規模は東西約７ｍ、床面の幅25～70cmである。床面には長さ35～55cm、深さ５～20の不整形な窪みが掘られ、中からは拳大以下の小石が多数出土した。遺物が出土していないので詳しい時期は不明だが、形態の特徴から古代の道路跡と判断した(1)。丘陵斜面北側から尾根状を登っていく目的で造られたと考えられるが、これより北側で古道の続きは検出されなかった。

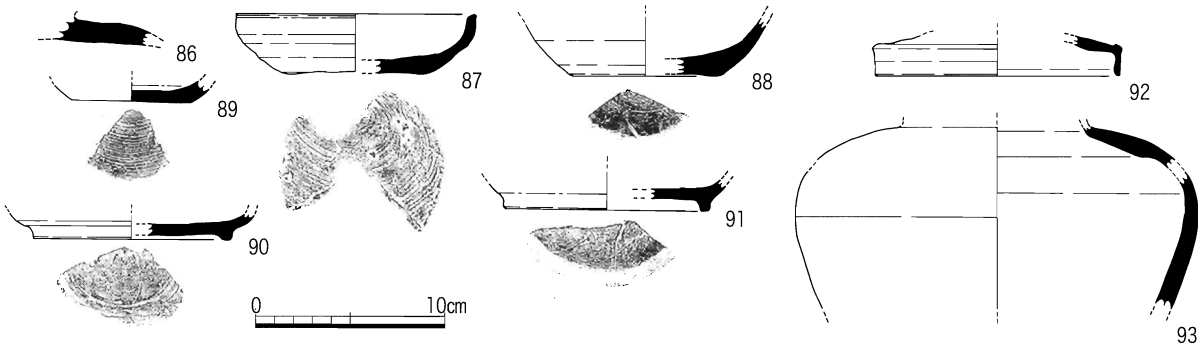
(1)　丘陵斜面を溝状に掘削し底面に連続したピットを付設する古道については椿慎治氏が文献10「第６章　結語３．古道について」において詳しく述べている。



第36図　白石大谷Ⅰ遺跡　古道1(S=1/60)

6．遺構に伴わない遺物（第37図、写真図版38）

古代の遺物は須恵器の坏が最も出土量が多い。土師器はⅠ区で84と同じタイプの甕が僅かに出土している。92は薬壺等の蓋と思われる。天井部の調整は回転ヘラケズリで屈曲部には突帯状の段がつく。焼成は悪く軟質で色調は灰白色である。出土遺物の内、時期のわかる古代の遺物はほぼ８・９世紀のものだった。



第37図　白石大谷Ⅰ遺跡　出土須恵器②(S=1/4)

第21表　白石大谷Ⅰ遺跡　出土須恵器観察表

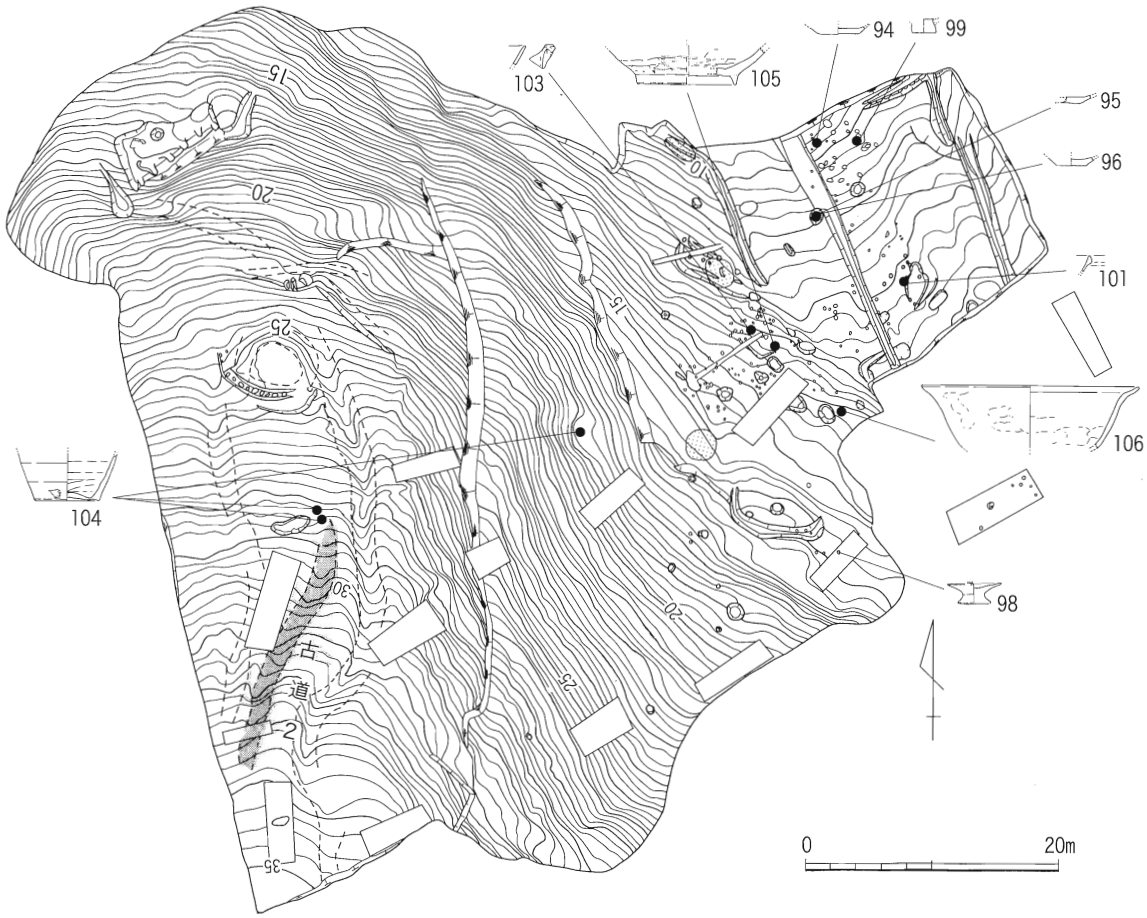
挿図番号	写真図版	遺物番号	出土地点	種別	器種	寸法(cm) 口径	底径	器高	形態・文様の特徴	調整	胎土	色調	備考
37	38	86	Ⅰ区谷	須恵器	坏蓋	－	－	－		(外)回転ナデ (内)静止ナデ	1.0mm以下の砂粒含む	淡灰色	
37	38	87	Ⅱ区	須恵器	坏身	(12.6)	7.8	3.1	回転糸切り痕	(外)回転ナデ (内)回転ナデ　ナデ	1.0mm以下の砂粒含む	暗灰色	
37	38	88	Ⅳ区	須恵器	坏身	－	(7.5)	－	回転糸切り痕	(外)回転ナデ (内)回転ナデ　ナデ	0.5mm以下の白色粒多量含む	暗灰色	
37	38	89	Ⅰ区	須恵器	坏身	－	6.2	－	回転糸切り痕	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	密である。よく精製されている	青灰色	
37	38	90	Ⅰ区谷	須恵器	坏身	－	(9.0)	－	底部は回転糸切り後にナデ	(外)回転ナデ　回転ヘラケズリ (内)回転ナデ　ナデ	0.5mm以下の砂粒含む	(外)暗灰色 (内)灰色	
37	38	91	Ⅰ区谷北	須恵器	坏身	－	(10.0)	－	回転糸切り痕	(外)調整不明 (内)ナデ	1.5mm以下の白色砂粒含む	青灰色	
37	38	92	Ⅰ区	須恵器	蓋	(12.8)	－	－		(外)回転ヘラケズリ (内)回転ナデ	1.0mmの砂粒含む	灰白色	
37	38	93	Ⅰ区西	須恵器	壺	－	－	－		外)回転ヨコナデ (内)回転ヨコナデ	0.5mm以下の砂粒(石英・長石)含む	青灰色	

第５節　中・近世の遺構・遺物

遺物の出土状況から中世の遺構と判断できたものは尾根上で検出した古道２である。Ⅱ区の地山面に掘られ、古道部分には固く締まった褐色土が堆積していた。断面はやや開いたU字状である。最も北側で褐釉陶器の壺（104）が出土している。尾根上の古道で時期が判断できたものは古道２のみだが、他の古道も検出状況や形態がよく似ているのでこの頃まで使用されていた可能性が高い。また、古道はいずれも調査区の南側まで続いている。

中世の遺物はⅠ区西の緩斜面から谷部分にかけて集中して出土している。このためⅠ区西上層で検出したピットやⅠ区谷北側で検出した楕円形のピットは並びを復元できなかったが、この時期の遺構の可能性がある。ほかに特徴的な遺物として京都系土師器（97）が１点出土した。宍道町内の出土例[1]を確認すると、土坑墓・火葬遺構に伴って１～３点がまとまって出土する点で共通している。Ⅰ区西とⅣ区東側の緩斜面では時期不明の土坑や浅い焼土坑を検出しているが、京都系土師器の出土例を参考にするとこれらの土坑の中には中世のものが含まれている可能性がある。

近世の遺物はⅠ区で肥前系と在地産の陶磁器の細片が僅かに出土した。近世には丘陵裾部は集落内の居住空間の中心からはずれていたと推測される。

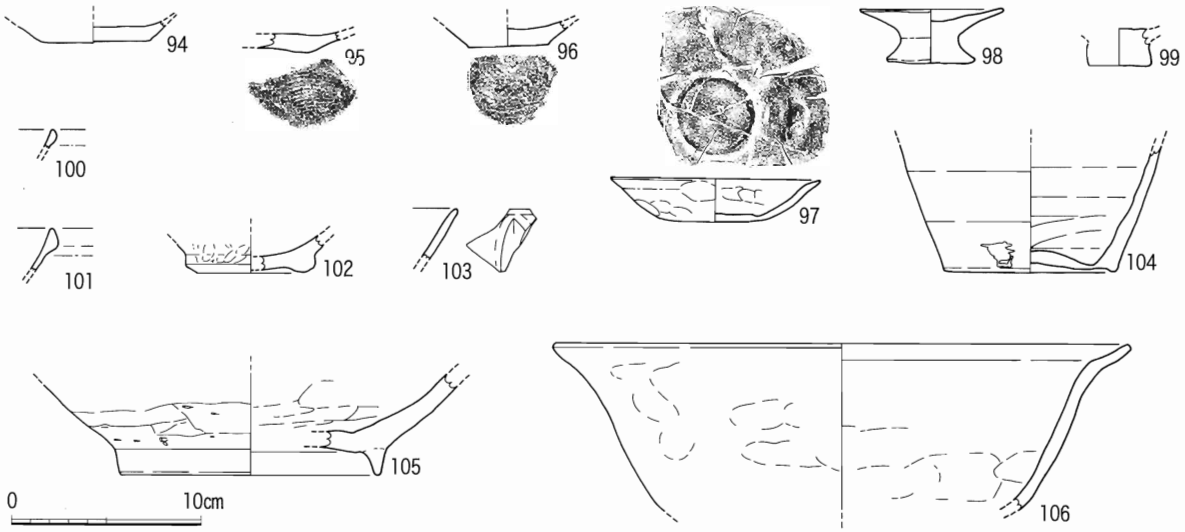


第38図　白石大谷Ⅰ遺跡　中･近世の遺構(S＝1/600)

(1)　惣三堀遺跡（本書）、野田遺跡（文献20）、知原４号墓（文献16）で出土している。

中世の遺物（第39図、写真図版31・38・39）

土師器（94～99・106）、貿易陶磁（100～104）、国産陶器（105）が出土している。土師器の坏は小片が多く、全形の分かるものは97・98のみである。97は器壁が薄い等の特徴から16世紀代で収まる時期のものと思われる。98はⅣ区のピット内から出土したもので、坏部を一部欠損しているがほぼ完形に復元できた。12世紀頃のものと思われる。時期の判断できる土師器は少ないが、ハの字に開く高台が付くものは出土していない。104は底部も含む全面に釉薬が掛けられ、外面底部付近には白色の目痕が見られる。胎土も密であり、これらの特徴から中国製の褐釉陶器壺と思われる。これは古道２の覆土中で出土したもので、同一個体と判断される陶器片がⅣ区の斜面でも出土している。105は瓷器系の鉢で堅い焼成である。産地や詳しい年代は明らかにできなかったが、内面に擂り目が無く断面三角形の高台が付けられる点などから、14世紀以前のものと判断される。106は全体にナデの痕が明確に残り外面下半には僅かではあるが煤が付着している。このほか細片で図化できなかったが備前系の壺・甕・擂鉢も出土している。



第39図　白石大谷Ⅰ遺跡　出土土師器②・陶磁器（S＝1/4）

第22表　白石大谷Ⅰ遺跡　出土土師器・陶磁器観察表

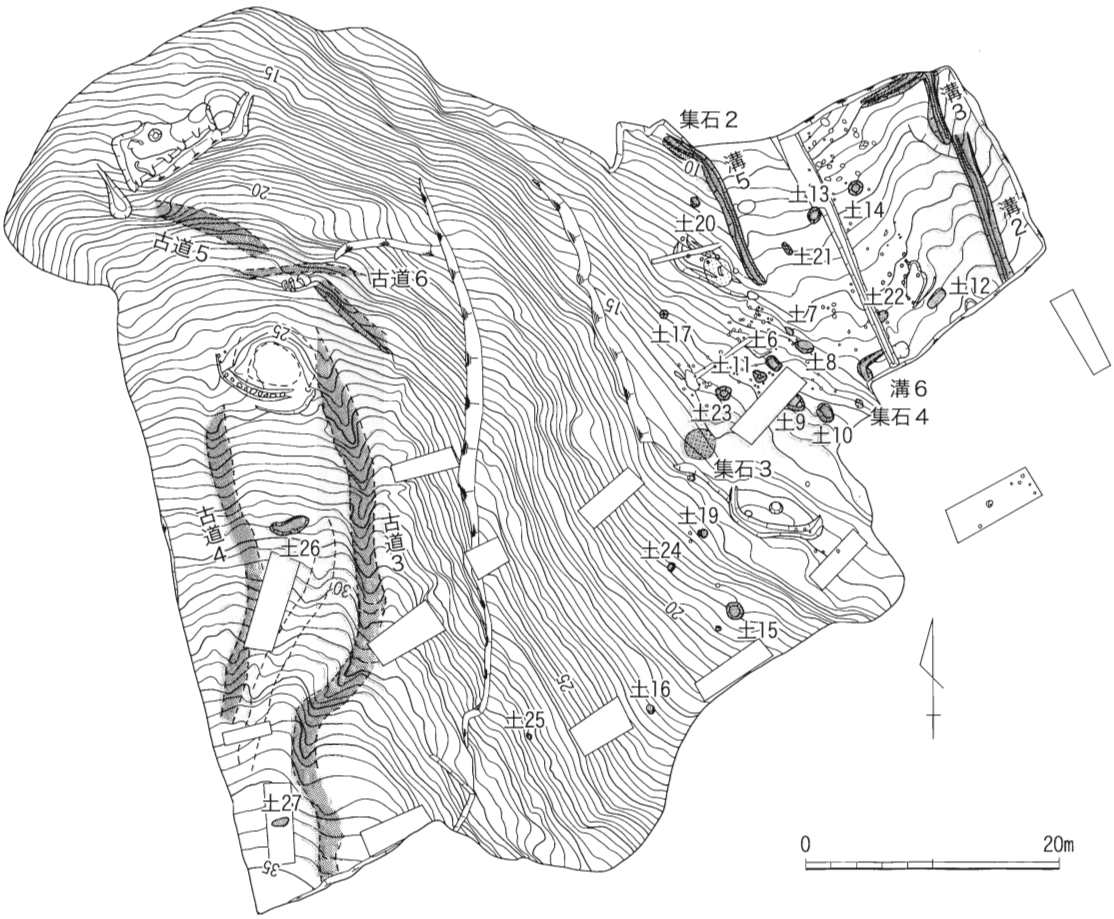
挿図番号	写真図版	遺物番号	出土地点	種別	器種	寸法(cm) 口径	底径	器高	形態・文様の特徴	調整	胎土	色調	備考
39	39	94	Ⅰ区谷北	中世土師器	皿	－	5.5	－	回転糸切り痕	摩滅により調整不明	3.0mm以下の砂粒含む	淡橙褐色	
39	39	95	土坑13	中世土師器	皿	－	－	－	回転糸切り痕	(外)回転ナデ (内)調整不明	2.0mmの砂粒含む	橙褐色	
39	39	96	土坑13	中世土師器	皿	－	(4.2)	－	回転糸切り痕	(外)回転ナデ (内)静止ナデ	2.0mmの砂粒含む	橙褐色	
39	38	97	Ⅰ区西	中世土師器	皿	11.6	3.2	2.1	ナデ	(外)ナデ (内)ナデ　指頭圧痕	密である	淡褐色	京都系
39	38	98	Ⅳ区Pit６	中世土師器	柱状高台付皿	7.4	4.6	2.9	回転糸切り痕	摩滅により調整不明	1.0mmの砂粒微量含む	淡褐色	
39	39	99	Ⅰ区谷	中世土師器	高台	－	3.3	－		摩滅により調整不明	1.0mmの砂粒少量含む	淡茶褐色	
39	31	100	Ⅰ区谷北	白磁	碗？	－	－	－	玉縁口縁		密である、白色	灰白色	太宰府Ⅱ類？
39	31	101	Ⅰ区谷	白磁	碗	(16.0)	－	－	玉縁口縁		密、黒色粒子を多く含む	灰白色	太宰府Ⅳ類
39	31	102	Ⅰ区谷北	白磁	碗	－	－	5.6	内面のみ施釉	(外)回転ケズリ	淡黄褐色、黒色粒子を多く含む	灰白色	太宰府Ⅳ類
39	31	103	Ⅰ区西	青磁	蓮弁文碗	(18.0)	－	－	蓮弁文を施す		密であり、灰白色の胎土	青緑色	太宰府編年Ⅰ－５類
39	31	104	古道２	陶器	壺	－	9.1	－	全面に施釉	(外)回転ケズリ (内)回転ナデ	密であり、灰褐色の胎土	(外)濃灰色 (内)黄灰色	中国製
39	39	105	Ⅰ区西	瓷器系陶器	鉢	(14.6)	－	－		(外)回転ナデ後ケズリ (内)ナデ	2～3.0mmの砂粒(石英・長石)多く含む	灰白色	
39	38	106	土坑10付近	中世土師器	鍋	30.2	－	－		ナデ	2.0mm以下の砂粒多量に含む	淡黄褐色	

第6節　時期不明の遺構・遺物

白石大谷Ⅰ遺跡で検出した遺構の大部分は、時期の明確でない土坑・溝状遺構である。これらの中には覆土中から遺物が出土しているが、出土状況から時期を決定していないものも含まれる。

時期不明の土坑は22基と今回検出した遺構の中でもっとも数が多く、土坑墓の可能性があるもの、炭窯、焼土坑、性格も不明であるものの大きく４つのタイプに分けられる。貯蔵穴や廃棄土坑のように集落内の居住域と直接結びつく土坑は検出されなかった。調査区内では拳大前後の石が多数出土した。人為的に置かれたものか自然のものか判断できない石も多数あったが、特にまとまりのあるものは集石として調査を行った。

このほか時期不明の遺物として黒曜石製を中心とする石器・剥片や鉄器・鉄滓等が出土している。石器は時期が明確でないものの、打製石器や剥片が合わせて200点以上出土した点は注目される。調査区内で鍛冶炉や羽口を検出していないが、鉄滓は基本的に鍛冶に伴うものと考えられる。



第40図　白石大谷Ⅰ遺跡　時期不明の遺構（S＝1/600）

１．土坑

土坑墓の可能性があるもの（第42図、写真図版27）

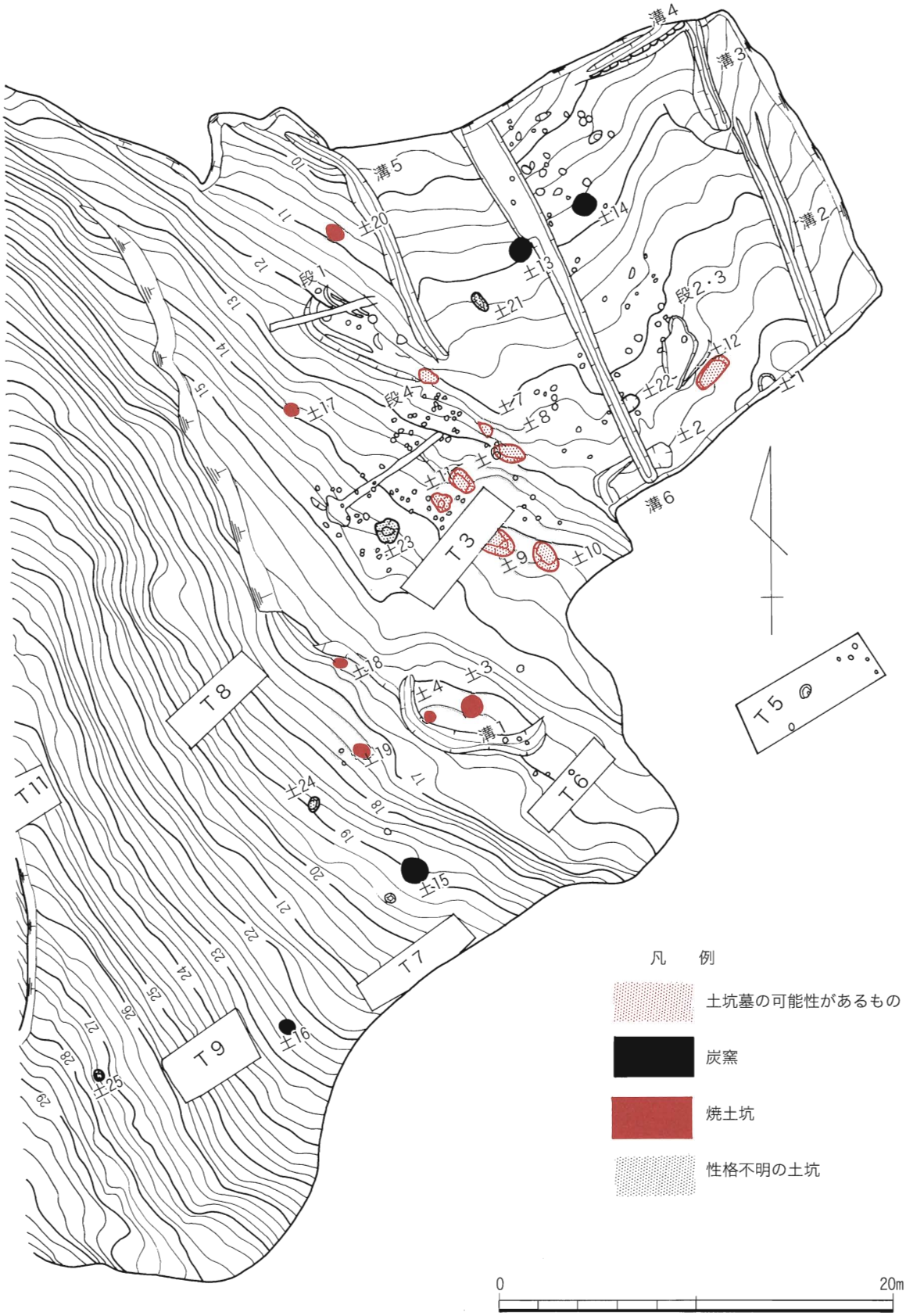
覆土が他の遺構より軟らかい土坑や、平面が長方形または長蛇円形で床面が平坦である土坑は、土坑墓の可能性が考えられる。中でも土坑６は両小口が浅い溝状に窪んでおり木棺墓のように見える。土坑12は他の土坑より東側に単独で位置している。地形の関係もあるが主軸は他の土坑に対しほぼ直行し形状も異なる。土坑12以外はⅠ区西側にかたまって分布している。詳しい時期は不明だが土坑６・８はⅠ区西側に堆積した炭・焼土を含む黒褐色土を除去した後に検出している。

炭窯（第43図、写真図版27・28）

平面が円形で深さがあり、床面に炭が層状に堆積するものは炭窯と判断した。土坑16は他の炭窯が直径１ｍを越える規模であるのと比較すると小振りだが、覆土中で炭の固まりが出土したので炭窯とした。土坑15は放射性炭素年代を測定した結果Ａ．Ｄ．1380±50年という年代を得ている。炭窯はⅠ区谷部とⅣ区斜面に大きく分かれて分布している。

第23表　白石大谷Ⅰ遺跡　土坑6～27計測表

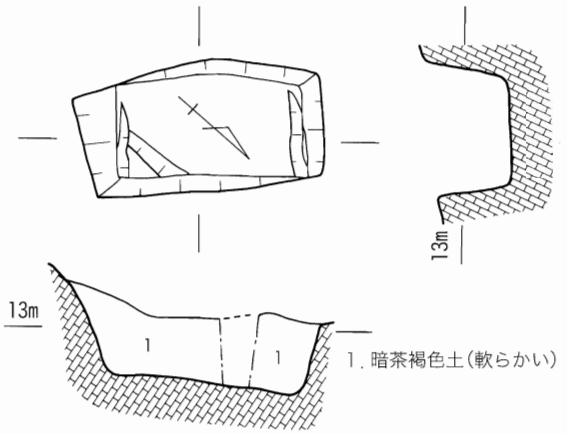
遺構名	上面形 底面形	長軸(cm) 長軸(cm)	短軸(cm) 短軸(cm)	深さ(cm)	主軸	出土遺物	備考
土坑６	長方形	１７９	７０	６０	N－４９°－W		
	長方形	１５９	６３				
土坑７	長方形	（９８）	５４	２４	N－５１°－W		
	長方形	（８９）	４１				
土坑８	不整楕円形	１６０	８３	３２	N－７４°－W	弥生中期(細片)	
	不整楕円形	１３７	６４				
土坑９	楕円形	（１４０）	？	６０	N－４５°－W		
	楕円形	（７５）	？				
土坑１０	楕円形	１５９	１１２	４８	N－３９°－W	土坑北側で中世の鍋	
	楕円形	１０２	５８				
土坑１１	三角形	１００	８９	４０	N－５８°－W		
	円形	３４	２８				
土坑１２	長方形	１８０	７０	２２	N－４１°－W		
	長方形	１５８	６０				
土坑１３	円形	１０６	９８	２４	N－４８°－E	弥生・土師器細片 須恵器、土師器坏	
	円形	８７	７８				
土坑１４	円形	１１９	１０４	４０	N－４５°－E	弥生土器(後期) 土師器	
	円形	７２	６８				
土坑１５	円形	１３１	１３０	４８	N－９０°－E		
	円形	９３	８４				
土坑１６	円形	７５	６３	３６	N－４２°－W		
	円形	５９	５０				
土坑１７	円形	７０	５９	１２	N－３３°－W	土坑北側で弥生後期 古代の甕	
	三角形	３４	３０				
土坑１８	円形	６２	５２	２８	N－６７°－E		
	円形	４０	３２				
土坑１９	円形	７５	５４	２０	N－６１°－W		
	円形	（４６）	？				
土坑２０	楕円形	９０	５９	３６	N－４２°－W		
	楕円形	７８	５４				
土坑２１	楕円形	１０６	５４	２０	N－３６°－W		
	楕円形	８１	２２				
土坑２２	長方形	（９６）	（７６）	３０	N－５１°－E		
	長方形	（９２）	（６４）				
土坑２３	不整方形	１３０	１０６	２０	N－２９°－E	弥生？土器	
	不整方形	６６	４０				
土坑２４	楕円形	７２	４７	３６	N－３２°－E	弥生底部	
	楕円形	４５	３５				
土坑２５	方形	４１	３７	５２	N－３１°－W		
	円形	２６	１６				
土坑２６	不整楕円形	３０９	１２３	４４	N－７５°－E		
	不整楕円形	２７０	７７				
土坑２７	不整楕円形	（１４０）	５９	２４	N－７６°－E	弥生土器(細片)	
	不整楕円形	３２	？				



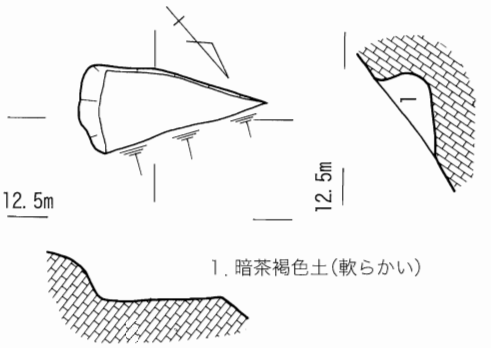
第41図　白石大谷Ⅰ遺跡　土坑位置図(S＝1/300)

土坑墓の可能性があるもの

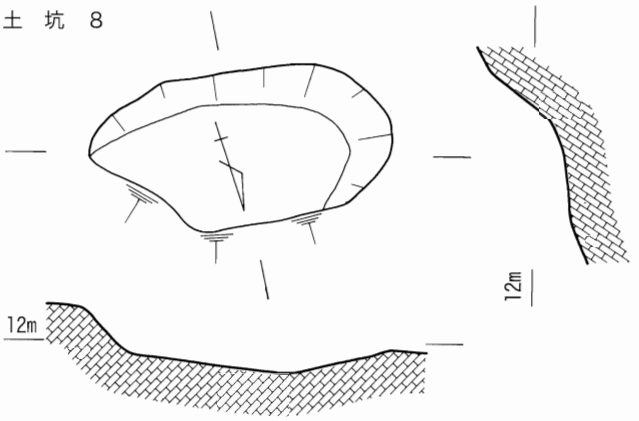
土　坑　6



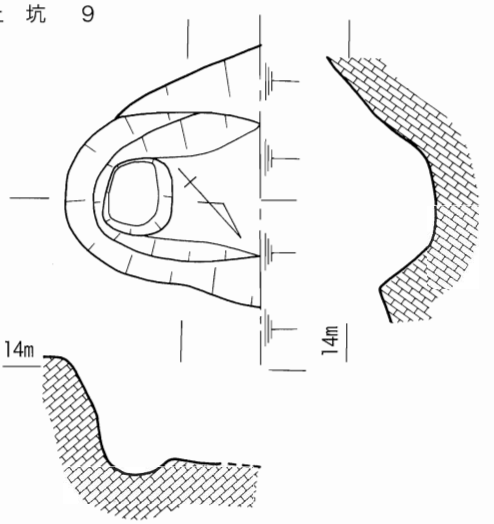
土　坑　7



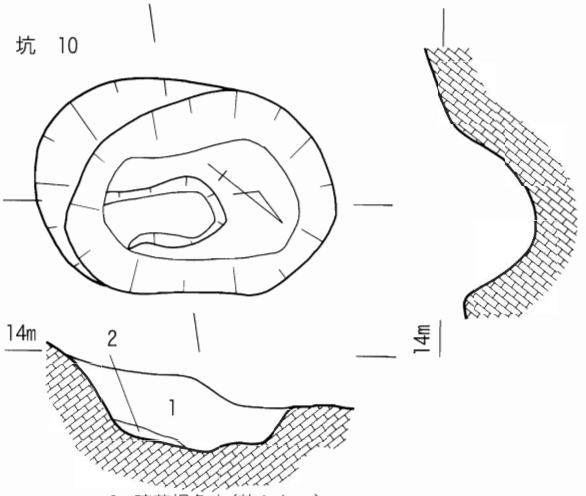
土　坑　8



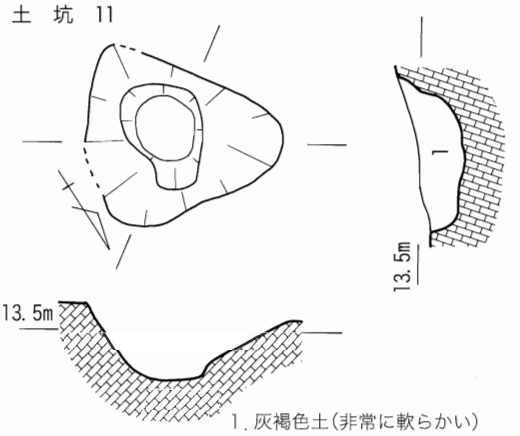
土　坑　9



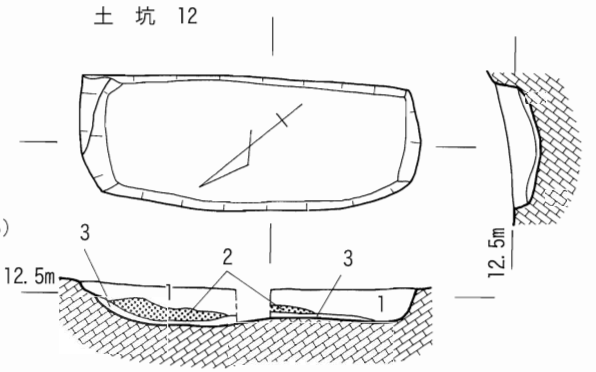
土　坑　10



土　坑　11



土　坑　12

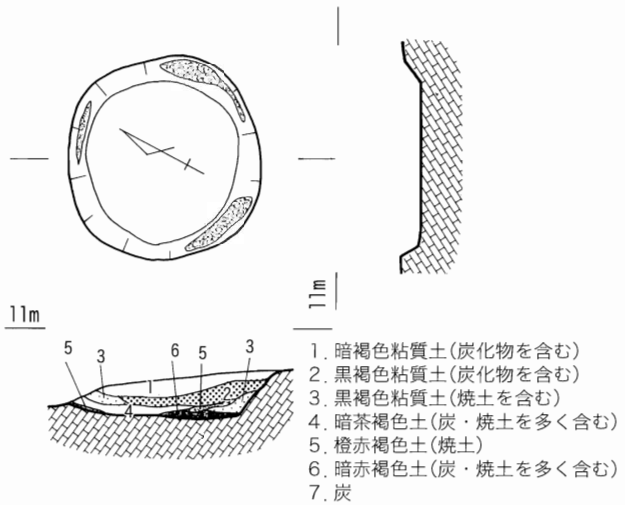


0　　2m

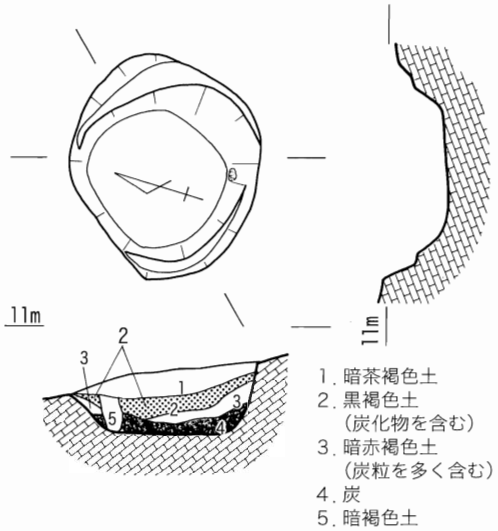
第42図　白石大谷Ⅰ遺跡　土坑6～12（S=1/40）

炭　窯

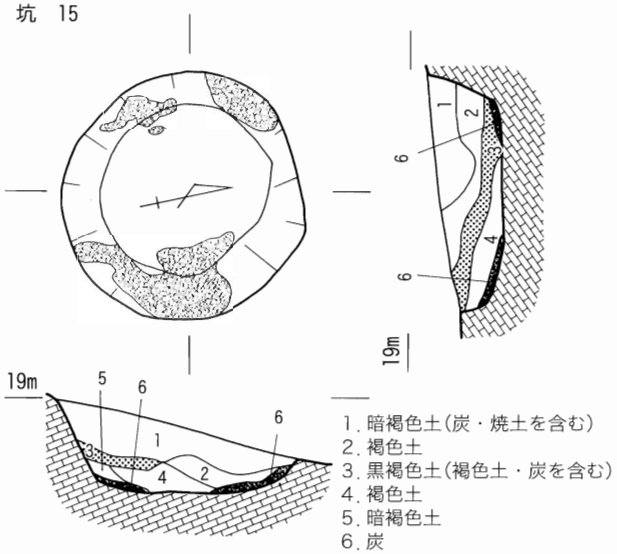
土　坑　13



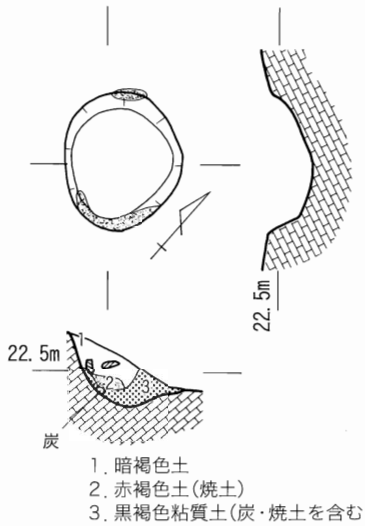
土　坑　14



土　坑　15

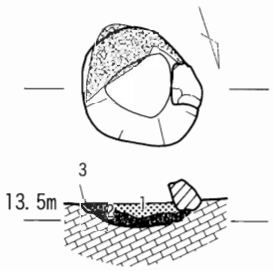


土　坑　16

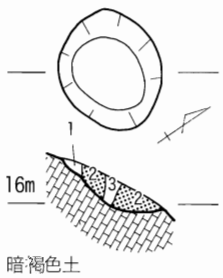


焼　土　坑

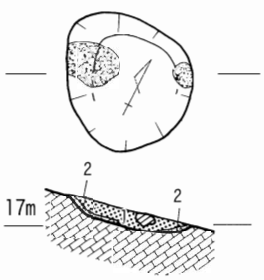
土　坑　17



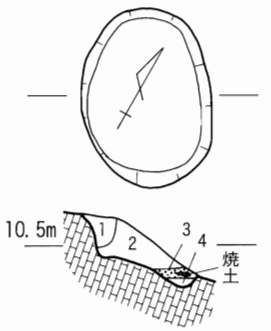
土　坑　18



土　坑　19



土　坑　20



0　　2m

第43図　白石大谷Ⅰ遺跡　土坑13～20(S=1/40)

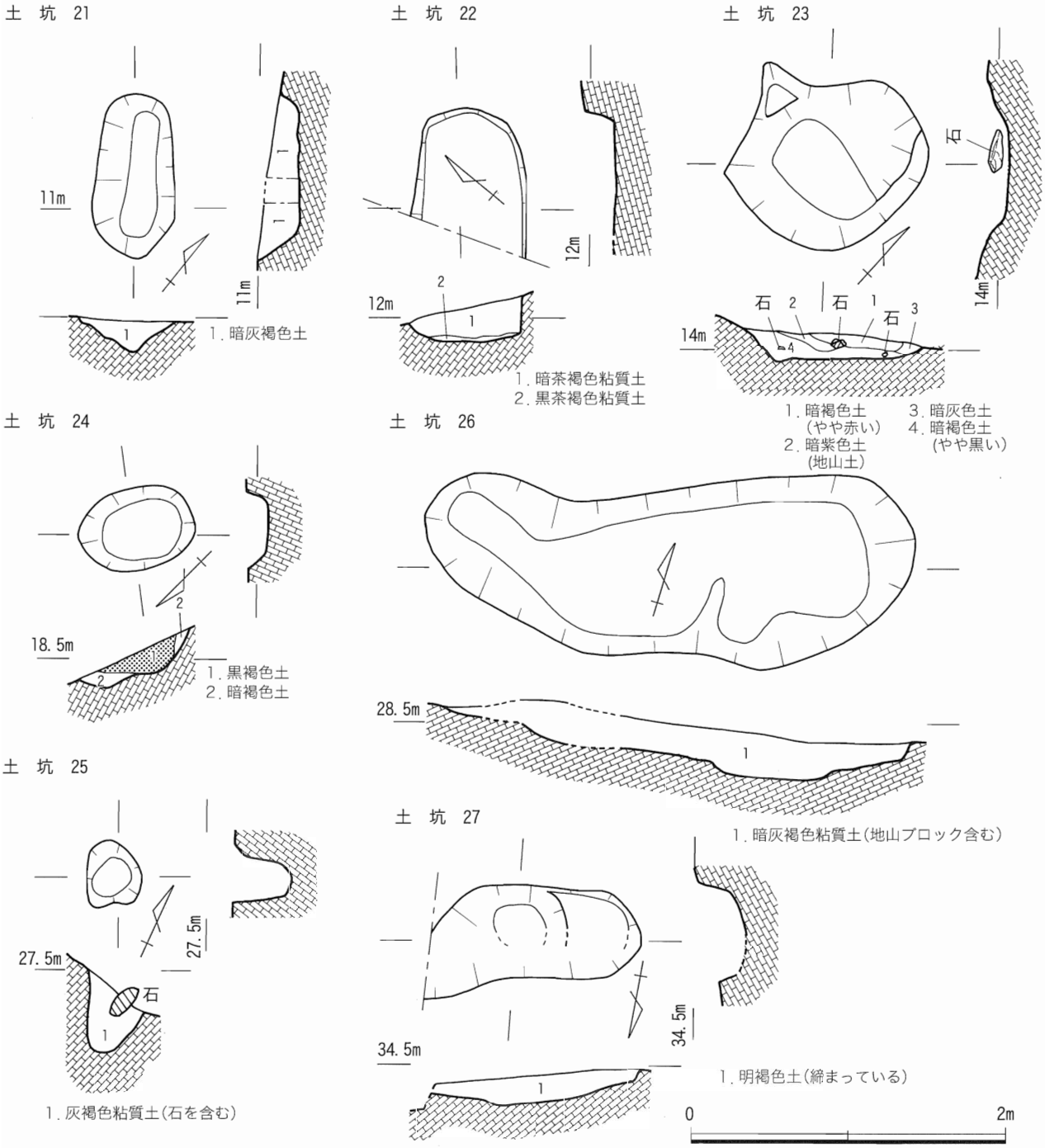
被熱土坑（第43図、写真図版28）

炭窯と思われる土坑に比べて規模が小さく浅いものである。土坑17・19は床面に粘土を貼っていた。土坑内で火を使用したこと以外詳しい時期や性格は不明である。第41図に見られるように丘陵裾部分に南北に長く分布している。

性格不明の土坑（第44図、写真図版28）

前述の３タイプに当てはまらなかった土坑も検出している。25は深さが52cmあり、一見柱穴状だが周辺で対応する遺構・遺物は検出していない。Ⅱ区で検出した土坑26・27は平面が不整形で床面レベルも一定でないので、古道の一部とも考えられる。

性格不明の土坑

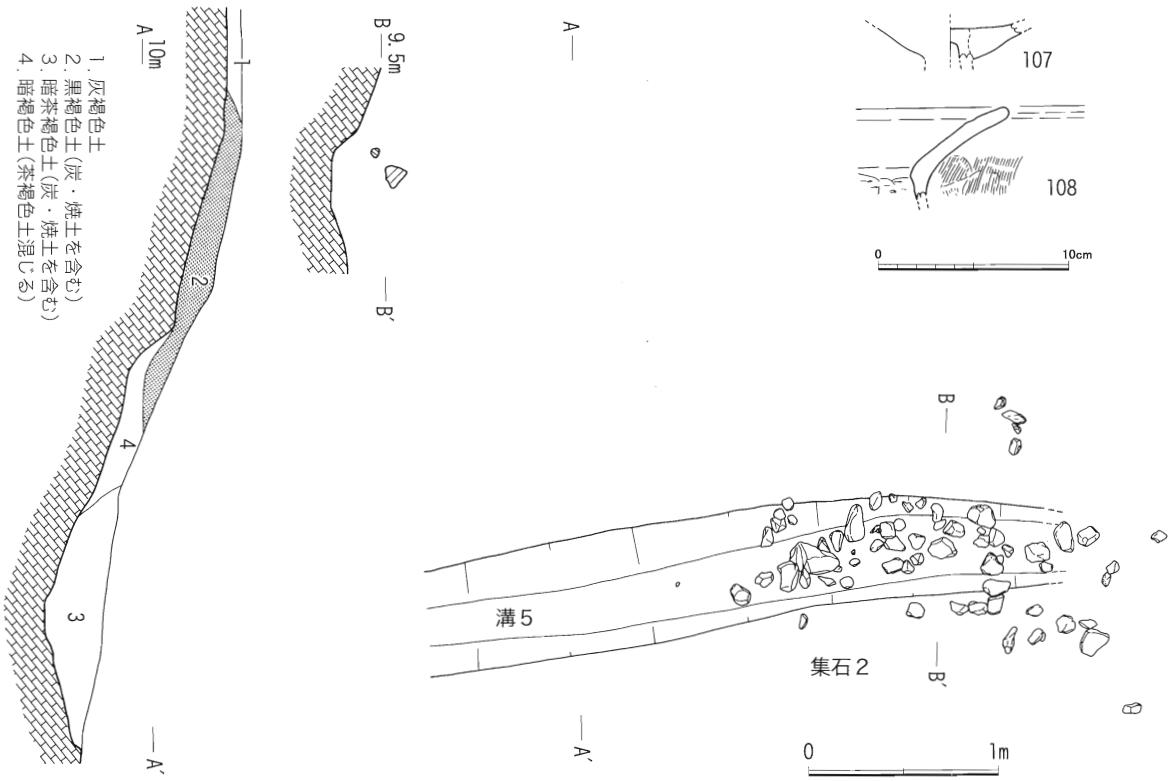


第44図　白石大谷Ⅰ遺跡　土坑21～27（S=1/40）

２．集石

集石２（第45図、写真図版29）

Ⅰ区西とⅠ区谷の境で検出した。溝状遺構５に堆積した茶褐色土上に位置し、地山面からは20～30㎝浮いている。遺物は古墳時代の高坏（107）と古代の甕（108）の２点が出土しているが、どちらもⅠ区西から転落したものと思われる。溝状遺構５との関係など詳しい性格は不明である。



第45図　白石大谷Ⅰ遺跡　集石2(S＝1/40)、出土遺物(S＝1/4)

第24表　白石大谷Ⅰ遺跡　集石2　出土遺物観察表

挿図番号	写真図版	遺物番号	出土地点	種別	器種	寸法(㎝) 口径	底径	器高	形態・文様の特徴	調整	胎土	色調	備考
45	39	107	集石２	土師器	高坏	－	－	－		摩滅により調整不明	1.0㎜以下の砂粒含む	淡茶褐色	
45	39	108	集石２	土師器	甕	－	－	－		(外)ナデ　ハケ (内)ナデ　ヘラケズリ	1～3.0㎜の砂粒多く含む	暗褐色	外面に煤が付着する

集石３（第46図、写真図版３）

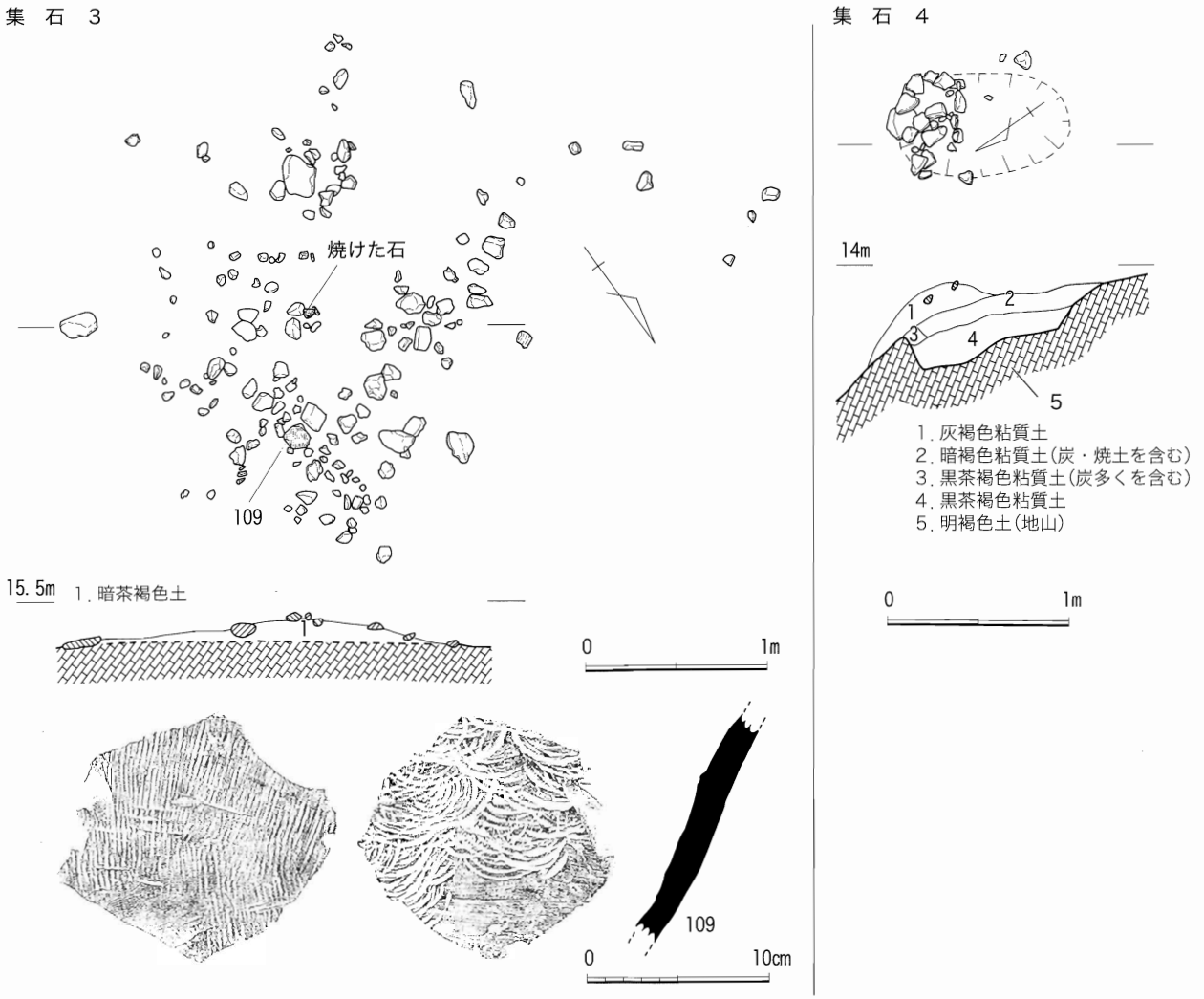
Ⅰ区西の丘陵裾近くで検出した。溝状遺構１の北西に位置する。３×４ｍの範囲に長さ５～25㎝の石が散布していた。集石のほぼ中央で被熱した石が１点出土している。遺物は須恵器が１点出土している。調整から平安時代頃の甕と思われる。

第25表　白石大谷Ⅰ遺跡　集石3　出土遺物観察表

挿図番号	写真図版	遺物番号	出土地点	種別	器種	寸法(㎝) 口径	底径	器高	形態・文様の特徴	調整	胎土	色調	備考
46	39	109	集石３	須恵器	甕	－	－	－		(外)タタキ (内)タタキ　ナデ	0.5㎜以下の砂粒含む	灰色	平安時代

集石４（第46図、写真図版29）

Ⅰ区西の調査区南端で検出した。遺物は出土していない。他の集石に比べ狭い範囲にまとまって出土している。集石調査後に地山を裁ち割った結果、長さが1.1ｍの不整形な落ち込みを検出した。床面も平坦でなく調査時には判断できなかったが、墓の可能性も考えられる。



第46図　白石大谷Ⅰ遺跡　集石3･4(S=1/40)、出土遺物(S=1/4)

3．古道（第７図、写真図版29）

Ⅱ区からⅢ区にかけての丘陵尾根上では、古道と思われる溝状の遺構や（古道３・４）斜面を段上に削りだした遺構（古道５・６）を検出した。これらの古道の時期を確実に示す遺物は出土していないが、古道１・２の例から古代から近世までに使用されたと考えられる。特に古道５は横口付製炭窯の煙出し部分から南東方向に伸び、付近で古代の坏（87）が出土しているので関連する可能性がある。また、２・３区では古墳時代後期の須恵器・中国製陶器・黒曜石が少量出土しており、本遺跡南側の丘陵上にこれらの時期の遺跡が存在すると推測される。

4．溝状遺構（第７・45図、写真図版30）

Ⅰ区では溝状の遺構を４条検出した。溝２～５は配置から関連性がうかがえる。出土遺物は僅かでいずれも細片であるため時期を判断できなかった。溝状遺構４の南側壁面には来待石を長さ45～70cm、幅15～25cmに切り出して加工したものが並べられている。近世以降の耕地に伴うものと思われ、機能は水路・道などが考えられる。Ⅰ区南端で検出した溝状遺構６は平面Ｌ字状で覆土が軟らかく、他の溝とは様相が異なる。覆土中で弥生土器の胴部片が出土しているので弥生時代の遺構の可能性もあるが、詳しい性格は不明である。

５．石器（第48・49図、写真図版40～42）

Ⅰ区谷部を中心に、黒曜石・安山岩の石器及び剥片が出土している。出土した石器はスクレイパー・石鏃・楔形石器・石核・抉入石器・二次加工を施した剥片・磨製石斧・敲き石である。出土した石器の中では石鏃と１側縁のみ加工した剥片が最も多く、それぞれ全体数の４分の１にあたる。石材は圧倒的に黒曜石が多く全体の約96％を占めている。Ⅰ区谷では耕作土から地山面までほとんどの層で石器・剥片が出土しているので、基本的にこれらの石器は原位置を保っていないと判断される。周辺で出土した遺物は弥生時代中期後葉と後期中葉のものが多数だが、土坑２の覆土中で宮滝式に併行すると思われる縄文土器片が出土している。このため出土した石器の中には縄文時代後期後半まで時期が遡るものも含まれていると考えられる。

スクレイパー（111・112）は黒曜石製と安山岩製のものが１点ずつ出土した。111は裏面に主剥離面を残す、薄く平坦な剥片を利用している。裏面の剥離は均一でなく主剥離の打撃点に近いことから、刃部ではなく整形加工の可能性が考えられる。

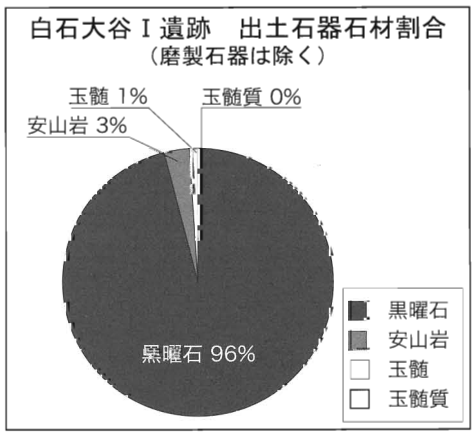
第26表　白石大谷Ⅰ遺跡　出土石器計測表

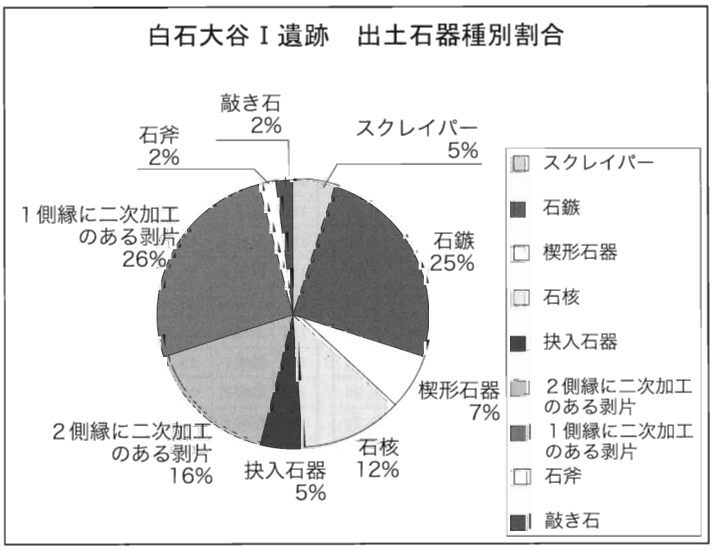
Ⅰ区

挿図番号	写真図版	遺物番号	種別	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
48	40	110	スクレイパー	黒曜石	3.1	3.0	0.9	5.56
48	40	111	スクレイパー	安山岩	4.2	3.4	0.4	7.29
48	40	112	石鏃（ⅠAa）	黒曜石	2.5	1.6	0.6	0.99
48	40	113	石鏃（ⅠC）	黒曜石	1.8	1.5	0.3	0.50
48	40	114	石鏃（ⅠC）	黒曜石	2.3	1.3	0.3	0.52
48	40	115	石鏃（ⅠAa）	黒曜石	2.4	1.1	0.3	0.78
48	40	116	石鏃（ⅠBb）	黒曜石	2.0	1.6	0.4	0.62
48	40	117	石鏃（ⅠBb）	黒曜石	2.0	1.4	0.3	0.68
48	40	118	石鏃（ⅠAb）	黒曜石	1.7	1.5	0.3	0.57
48	40	119	石鏃（ⅠBb）	黒曜石	1.8	1.3	0.3	0.51
48	40	120	石鏃（ⅠAb）	黒曜石	2.0	1.5	0.4	0.58
48	40	121	石鏃（Ⅱb）	黒曜石	2.2	1.7	0.7	1.29
48	40	122	石鏃（Ⅱb）	安山岩	2.1	1.2	0.3	0.53
48	40	123	楔形石器	黒曜石	2.9	2.3	1.0	7.68
48	40	124	楔形石器	黒曜石	3.2	1.9	1.1	5.9
48	40	125	楔形石器	黒曜石	2.2	0.8	0.4	0.69
48	40	126	石核	黒曜石	3.6	2.7	2.3	16.66
48	40	127	石核	黒曜石	3.5	2.4	1.6	8.81
48	40	128	石核	黒曜石	2.7	2.9	1.3	11.84
48	40	129	石核	黒曜石	2.4	1.9	1.2	5.71
48	41	130	抉入石器	黒曜石	5.1	3.8	1.3	11.27
48	41	131	抉入石器	黒曜石	2.0	1.0	0.5	0.65
48	41	132	２側縁に二次加工のある剥片	黒曜石	2.3	2.0	0.7	2.74
48	41	133	２側縁に二次加工のある剥片	黒曜石	1.6	1.5	0.5	1.07
48	41	134	２側縁に二次加工のある剥片	黒曜石	1.7	1.4	0.3	0.54
48	41	135	２側縁に二次加工のある剥片	黒曜石	2.5	1.8	0.5	2.15
48	41	136	２側縁に二次加工のある剥片	黒曜石	2.5	2.2	0.9	3.50
48	41	137	２側縁に二次加工のある剥片	黒曜石	2.6	1.6	0.7	2.18
49	41	138	１側縁に二次加工のある剥片	黒曜石	2.3	1.5	0.6	1.19
49	41	139	１側縁に二次加工のある剥片	黒曜石	2.1	1.7	0.8	2.21
49	41	140	１側縁に二次加工のある剥片	黒曜石	2.1	1.3	0.8	1.33
49	41	141	１側縁に二次加工のある剥片	黒曜石	2.0	1.9	0.8	1.82
49	41	142	１側縁に二次加工のある剥片	黒曜石	1.6	0.9	0.3	0.25
49	41	143	１側縁に二次加工のある剥片	黒曜石	2.2	2.0	1.2	2.16
49	41	144	１側縁に二次加工のある剥片	玉髄	3.0	2.3	0.6	3.71
49	41	145	１側縁に二次加工のある剥片	黒曜石	4.0	2.9	1.2	8.50
49	41	146	１側縁に二次加工のある剥片	黒曜石	3.8	1.4	1.2	4.50
49	41	147	１側縁に二次加工のある剥片	黒曜石	2.7	1.2	0.5	1.15
49	41	148	１側縁に二次加工のある剥片	黒曜石	2.0	1.4	0.4	0.82
49	41	－	石斧	安山岩	?	?	?	?
49	41	151	敲き石	その他	11.5	9.4	8.0	1146.92

Ⅱ区

挿図番号	写真図版	遺物番号	種別	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
49	41	149	２側縁に二次加工のある剥片	黒曜石	2.9	2.7	0.8	6.19
49	41	150	石核	黒曜石	3.8	3	1.7	15.58

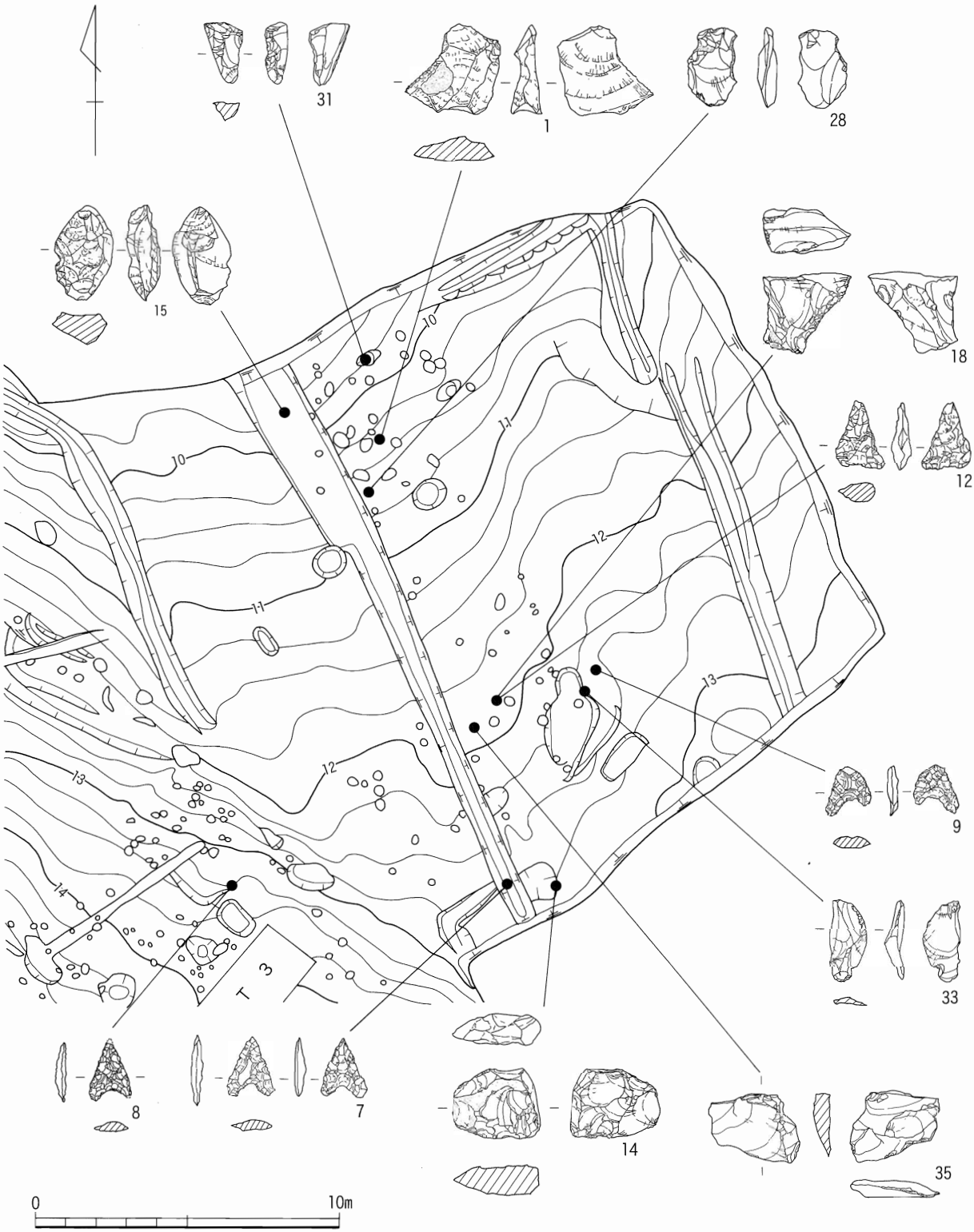




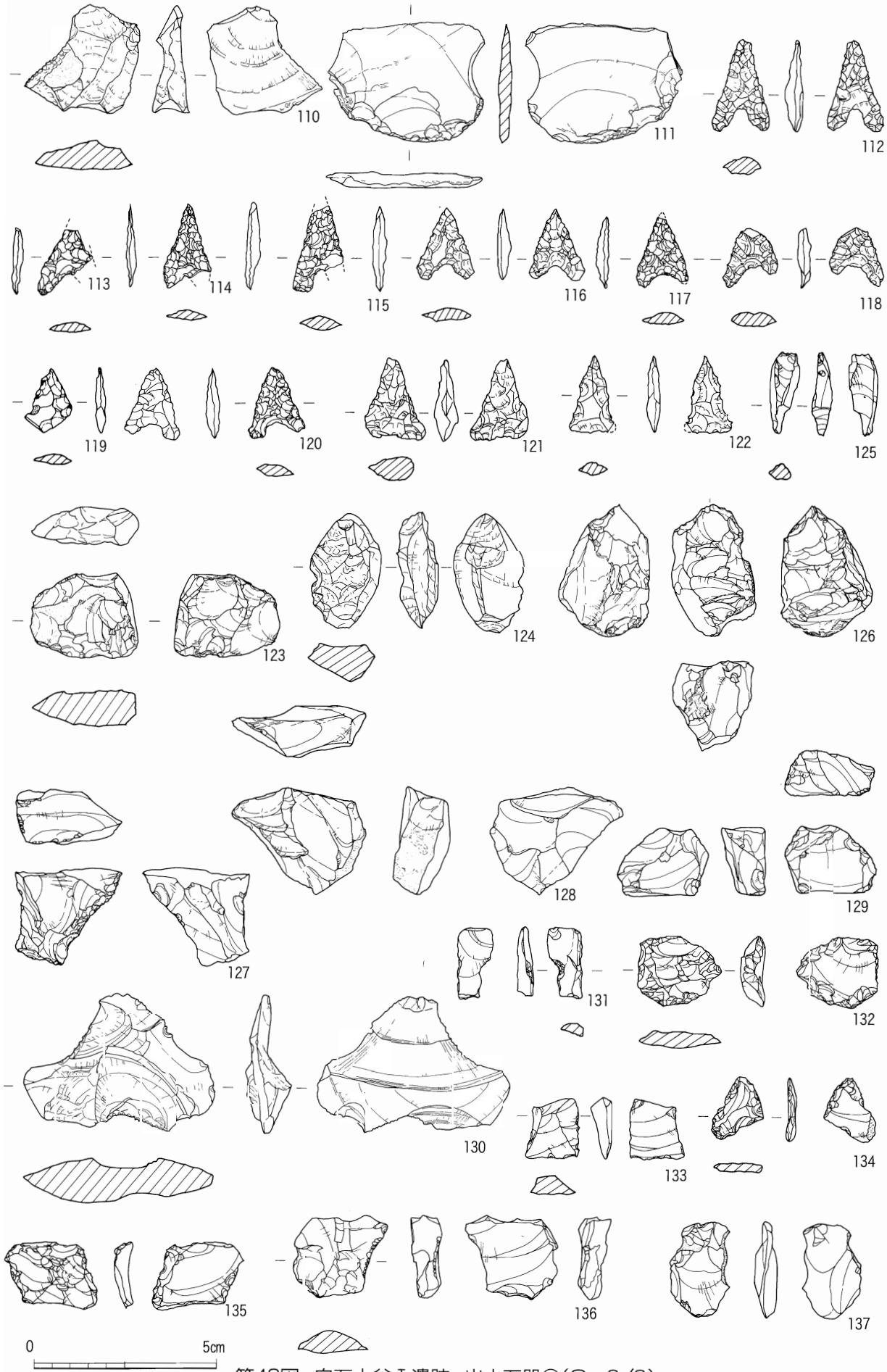
第27表　白石大谷Ⅰ遺跡　出土剥片計測表

番号	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)
1	黒曜石	22.90	18.70	5.50	1.47
2	黒曜石	23.85	13.70	6.30	1.83
3	黒曜石	13.40	6.60	1.60	0.11
4	黒曜石	14.80	11.00	2.70	0.38
5	黒曜石	10.09	5.70	3.55	0.24
6	黒曜石	18.80	15.20	4.25	0.95
7	黒曜石	23.05	22.80	4.10	2.11
8	黒曜石	12.70	9.20	2.15	0.27
9	黒曜石	11.20	8.10	1.45	0.11
10	黒曜石	15.20	10.70	2.60	0.43
11	黒曜石	19.95	13.20	5.20	1.63
12	黒曜石	26.20	15.20	4.90	2.38
13	黒曜石	10.75	4.20	2.00	0.07
14	黒曜石	19.10	16.00	3.80	1.01
15	黒曜石	23.65	15.10	4.30	1.44
16	黒曜石	13.70	13.50	2.80	0.55
17	黒曜石	14.97	13.20	5.00	0.84
18	黒曜石	28.20	18.75	4.70	2.59
19	黒曜石	14.00	12.05	3.75	0.61
20	黒曜石	9.58	8.80	1.80	0.13
21	黒曜石	18.50	12.35	4.00	0.68
22	黒曜石	15.40	9.15	1.70	0.16
23	黒曜石	14.50	8.71	2.15	0.28
24	黒曜石	30.65	12.70	2.53	1.41
25	黒曜石	16.25	13.10	2.92	0.47
26	黒曜石	22.75	15.20	2.90	0.80
27	黒曜石	22.32	13.50	6.72	2.20
28	黒曜石	15.40	8.80	2.30	0.22
29	黒曜石	26.90	21.00	7.10	3.85
30	黒曜石	17.40	11.10	5.40	0.89
31	黒曜石	21.50	13.10	3.00	0.64
32	黒曜石	34.20	12.40	8.80	3.00
33	黒曜石	17.69	14.50	5.35	1.20
34	黒曜石	25.76	15.55	3.35	0.83
35	黒曜石	20.21	16.72	6.91	1.73
36	黒曜石	21.85	16.00	2.42	0.90
37	黒曜石	17.20	12.45	4.32	0.65
38	黒曜石	10.90	4.20	3.06	0.19
39	黒曜石	17.60	14.60	6.55	1.74
40	黒曜石	14.70	10.00	7.20	0.33
41	黒曜石	13.47	8.60	2.77	0.34
42	黒曜石	12.45	0.67	0.25	0.30
43	黒曜石	26.60	20.90	7.85	3.30
44	黒曜石	13.60	13.10	5.30	0.72
45	黒曜石	18.20	14.83	4.42	1.00
46	黒曜石	10.38	0.78	0.90	0.08
47	黒曜石	18.25	10.39	2.90	0.53
48	黒曜石	14.80	0.81	2.92	0.33
49	黒曜石	13.45	10.50	3.60	0.34
50	黒曜石	22.39	15.35	3.80	0.77
51	黒曜石	12.85	0.65	5.10	1.50
52	黒曜石	15.70	7.20	3.40	0.32
53	黒曜石	12.35	7.30	2.55	0.12
54	黒曜石	13.20	9.70	4.80	0.46
55	黒曜石	14.00	10.30	5.00	0.59
56	黒曜石	14.00	8.15	2.20	0.20
57	黒曜石	15.40	14.40	4.15	0.72
58	黒曜石	19.60	10.70	4.90	0.61
59	黒曜石	14.50	13.20	7.05	1.56
60	黒曜石	24.2	13.47	3.90	1.16
61	黒曜石	15.60	9.25	6.80	0.58
62	黒曜石	23.20	20.50	4.70	1.78
63	黒曜石	17.70	14.60	8.10	1.72
64	黒曜石	12.40	11.15	1.50	0.21
65	黒曜石	8.45	8.30	3.00	0.25
66	黒曜石	18.00	11.00	3.50	0.50
67	黒曜石	17.20	10.90	6.30	1.01
68	黒曜石	14.00	8.70	4.55	0.54
69	黒曜石	15.80	11.10	2.55	0.31
70	黒曜石	10.90	9.65	3.55	0.34
71	黒曜石	14.20	11.80	8.60	1.30
72	黒曜石	12.60	9.10	1.60	0.21
73	黒曜石	13.75	13.35	3.75	0.51
74	黒曜石	16.15	8.20	1.70	0.25
75	黒曜石	13.55	9.50	4.00	0.58
76	黒曜石	11.60	10.80	4.40	0.43
77	黒曜石	11.30	8.94	1.80	0.16
78	黒曜石	18.30	9.90	3.75	0.53
79	黒曜石	19.80	12.30	4.00	0.97
80	黒曜石	13.80	9.60	3.90	0.37
81	黒曜石	13.43	11.10	3.80	0.54
82	黒曜石	14.10	8.25	4.10	0.46
83	黒曜石	12.40	7.05	3.25	0.21
84	黒曜石	13.75	9.65	2.90	0.29
85	黒曜石	10.00	9.95	2.63	0.21
86	黒曜石	12.00	8.00	2.95	0.28
87	黒曜石	18.85	17.20	3.40	0.98
88	黒曜石	18.40	15.40	2.70	0.79
89	黒曜石	13.40	9.80	2.65	0.31
90	黒曜石	15.20	15.40	5.60	1.00
91	黒曜石	12.50	7.35	1.48	0.11
92	黒曜石	12.20	8.80	3.75	0.23
93	黒曜石	17.20	13.95	8.70	1.82
94	黒曜石	12.60	11.05	2.75	0.37
95	黒曜石	12.75	11.80	2.20	0.24
96	黒曜石	11.45	9.20	2.35	0.23
97	黒曜石	16.70	12.35	3.50	0.51
98	黒曜石	15.10	10.50	4.30	0.55
99	黒曜石	9.50	8.60	2.85	0.24
100	黒曜石	7.90	7.70	2.00	0.14
101	黒曜石	17.93	15.00	3.10	0.68
102	黒曜石	15.35	9.80	3.15	0.43
103	黒曜石	14.45	11.40	3.00	0.48
104	黒曜石	13.50	10.65	1.80	0.19
105	黒曜石	15.30	13.20	5.05	0.80
106	黒曜石	16.10	13.45	4.90	0.43
107	黒曜石	16.40	10.30	4.10	0.24
108	黒曜石	13.70	7.90	3.54	0.47
109	黒曜石	17.80	12.10	2.45	0.47
110	黒曜石	18.40	15.25	3.20	0.86
111	黒曜石	12.50	11.40	3.35	0.46
112	黒曜石	16.70	13.75	3.15	0.61
113	黒曜石	16.90	13.90	4.60	0.84
114	黒曜石	11.00	7.70	2.75	0.21
115	黒曜石	15.45	9.70	2.97	0.35
116	黒曜石	22.75	12.10	4.00	0.78
117	黒曜石	10.30	7.10	2.05	0.14
118	黒曜石	15.90	12.55	3.70	0.65
119	黒曜石	14.95	8.65	3.95	0.47
120	黒曜石	15.60	11.80	4.50	0.73
121	黒曜石	19.6	19.4	6.6	2.39
122	黒曜石	14.60	9.50	1.30	0.18
123	黒曜石	17.60	13.80	6.20	1.24
124	黒曜石	13.50	11.40	2.00	0.23
125	黒曜石	12.30	9.30	4.55	0.37
126	黒曜石	21.80	15.90	8.40	2.37
127	黒曜石	21.20	19.40	4.60	1.03
128	黒曜石	14.80	8.45	2.30	0.25
129	黒曜石	12.00	5.75	2.00	0.14
130	黒曜石	13.95	8.30	2.43	0.19
131	黒曜石	19.40	13.30	2.90	0.75
132	黒曜石	15.60	10.56	1.80	0.30
133	黒曜石	10.70	8.00	1.70	0.11
134	黒曜石	17.00	11.00	5.00	0.90
135	黒曜石	13.50	9.10	3.45	0.44
136	黒曜石	28.60	14.00	9.40	3.46
137	黒曜石	22.20	7.80	2.60	0.48
138	黒曜石	8.95	6.30	2.80	0.14
139	黒曜石	10.10	7.90	1.80	0.12
140	黒曜石	14.30	12.00	2.50	0.35
141	黒曜石	20.40	13.1	3.40	0.85
142	黒曜石	13.70	11.20	5.85	0.64
143	黒曜石	45.70	26.30	7.60	8.26
144	黒曜石	15.95	14.40	2.20	0.47
145	黒曜石	20.40	15.40	6.10	1.76
146	黒曜石	37.10	17.60	5.10	2.57
147	黒曜石	27.80	16.30	11.95	4.06
148	黒曜石	31.40	23.50	9.95	6.23
149	黒曜石	22.00	17.45	9.20	3.01
150	黒曜石	16.92	8.70	4.45	0.52
151	黒曜石	16.45	15.40	7.70	1.05
152	黒曜石	23.20	18.30	8.00	3.32
153	黒曜石	19.75	19.55	8.30	3.2
154	黒曜石	23.20	14.65	3.80	1.29
155	黒曜石	27.00	15.38	11.90	2.53
156	黒曜石	34.10	25.80	8.30	7.17
157	黒曜石	16.30	15.30	5.10	1.42
158	黒曜石	25.10	21.25	11.70	5.19
159	黒曜石	12.60	12.30	2.20	0.31
160	黒曜石	34.50	21.00	10.50	6.70
161	黒曜石	26.30	16.30	7.20	2.74
162	黒曜石	15.20	13.60	2.90	0.47
163	黒曜石	20.50	15.20	4.10	1.01
164	黒曜石	22.70	18.60	9.20	3.75
165	黒曜石	19.70	13.55	5.20	1.05
166	黒曜石	12.30	11.75	4.40	0.56
167	黒曜石	20.60	17.00	4.90	1.76
168	玉髄質	16.00	12.9	4.70	1.27
169	安山岩	25.50	17.55	3.50	1.27
170	安山岩	16.70	14.10	2.55	0.57

石鏃（112～122）は11点中安山岩製のものは１点だけである。本遺跡と同じ宍道町内に所在するラント遺跡で出土した縄文時代の石器について、川原和人氏が分類を行っている（文献20）。Ⅰ区出土の石器は時期が特定できない等の問題はあるが、石鏃はこれに従って分類した。



第47図　白石大谷Ⅰ遺跡　石器出土状況(S＝1/200)



第48図　白石大谷Ⅰ遺跡　出土石器①(S＝2/3)

第49図　白石大谷Ⅰ遺跡　出土石器②（S＝2/3、151はS＝1/3）

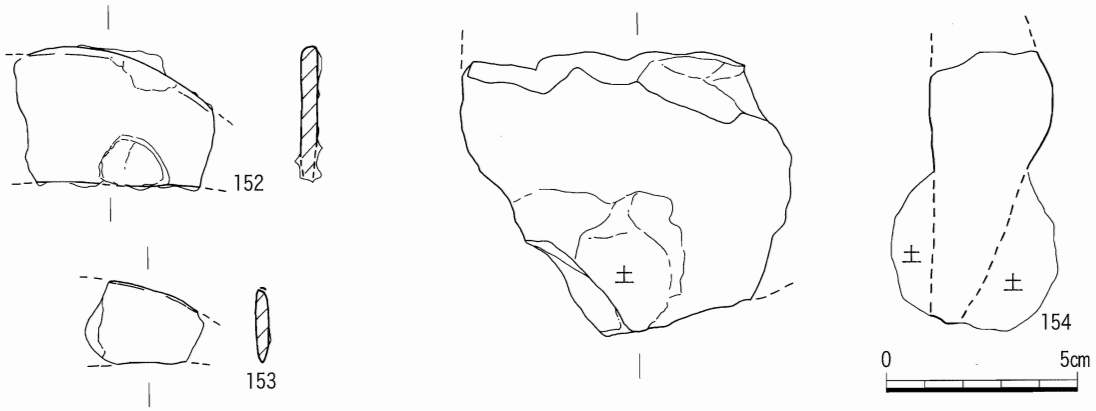
その結果、ＩＡａ類・ＩＢｂ類・ＩＣ類・Ⅱｂ類が２点、ＩＡｂ類が３点という割合だった。119は二次的に火を受けている。縁辺が摩滅しているように見られ、火を受けた後に使用した可能性がある。120は図中左の面に、122は両面に一次剥離面を残す。楔形石器（123～125）・石核（126～129・150）・抉入石器（130・131）は全て黒曜石製で、123・127・128には自然面が残る。二次加工のある剥片（132～149）も玉髄製の144を除いて全て黒曜石製である。133は台形石器の可能性も考えられる。139は縁辺が摩耗し両面に使用による細かい剥離が見られる。143の図中下側の窪みは自然面である。145は二次加工を施した面の反対側は自然面である。146は舟形石器の可能性が考えられる。150はⅡ区で出土した石核で片面はほぼ自然面が残っている。151はⅠ区西で出土した敲き石で、擦ったり敲いたりして使用した面と砥石として使用した面がある。

６．鉄器・鉄滓（第50図、写真図版38）

鉄器は２点出土している。片側が刃部になっており、２点とも鎌の一部と考えられる。出土地点からⅠ区西の遺構から転落したものと考えられる。鉄滓は９点出土している。全て１区で出土し、椀形鍛冶滓（154）が出土したⅠ区西に鍛冶関連の遺構が存在したと考えられる。Ⅰ区西で出土した遺物の時期から古代以降のものと推測される。

第28表　白石大谷Ⅰ遺跡　出土鉄器鉄滓観察表

挿図番号	写真図版	遺物番号	出土地点	遺物名	寸法（cm）			重量（g）	メタル度	備　考
					長さ	幅	厚さ			
50	38	152	Ⅰ区西側斜面　1層	鎌？	5.30	3.60	0.5	21.79	－	
50	38	153	Ⅰ区谷北側　1層	鎌の先？	3.20	2.20	0.3	5.00	－	
50	38	154	Ⅰ区西	椀形鍛冶滓	7.25	8.75	3.2	316.39	H	
－	38	M1	Ⅰ区谷北　2層	鉄滓	1.70	1.80	0.9	3.37	なし	
－	38	M2	Ⅰ区谷北　1層	鉄滓	2.20	2.50	0.3	3.00	なし	
－	38	M3	Ⅰ区東　1層	鉄滓	1.60	2.30	0.8	1.25	なし	
－	38	M4	Ⅰ区谷　1層	椀形鍛冶滓？	2.50	3.30	0.8	9.01	なし	
－	38	M5	Ⅰ区西　1層	含鉄鍛冶滓	2.60	3.00	1.0	7.31	なし	
－	38	M6	Ⅰ区1層	鍛冶滓？	2.70	3.00	1.4	15.42	なし	
－	38	M7	Ⅰ区段状遺構3	鍛冶滓	3.50	4.00	2.5	31.31	なし	
－	38	M8	Ⅰ区北	椀形鍛冶滓？	4.50	6.00	3.1	67.98	なし	



第50図　白石大谷Ⅰ遺跡　出土鉄器･鉄滓(S＝1/2)

７．骨

Ⅰ区耕作土中で骨が１点出土している。乾燥して非常に軽くなっているが火を受けてはいない。種別・部位等は不明である。

白石大谷Ⅰ遺跡の横口付窯跡の地磁気年代

島根大学総合理工学部　時枝克安、渡部道貴
島根職業能力開発短期大学校　伊藤晴明

１　地磁気年代法の仕組み

地磁気は一定ではなく不規則な変動をしている。地磁気変動には周期の短いものから長いものまで様々な成分が含まれているが、なかでも、10年以上経過して初めて変化が識別できるような緩慢な変動を地磁気永年変化と称している。地磁気年代測定法で時計の機能を果たすのはこの地磁気永年変化であり、過去の地磁気の方向の時間的変化を示す曲線に年代を目盛って、地磁気の方向から逆に年代を読み取ろうとする。しかし、例えば、ある焼土がいつ焼けたかを知ろうとするとき、焼土が焼けたときの地磁気の方向がどこかに記録されており、それを測定できなくては目的は果たせない。じつは、焼けた時の地磁気の方向は焼土の熱残留磁気として記録されている。地磁気年代を求める手順を述べると、まず、焼土の定方位試料を採取し、それらの熱残留磁気を測定して、焼土が最終加熱されたときの地磁気の方向を求める。そして、標準となる地磁気永年変化曲線状にこの方向に近い点をもとめて年代の目盛りを読み取ることになる。

地磁気中で粘土が焼けると、粘土に含まれる磁鉄鉱、赤鉄鉱などの磁性鉱物が担い手となって、焼土は熱残留磁気を帯びる。この熱残留磁気の方向は、焼けたときの地磁気の方向に一致し、しかも非常に安定であり、磁性鉱物のキュリー温度（磁鉄鉱：578℃、赤鉄鉱675℃）以上に再加熱されない限り数万年以上年代が経過しても変化しない。もし、再加熱によって、焼土がキュリー温度以上になった場合は、それまで保持していた残留磁気は完全に消滅し、その代わり、新たに再加熱時の地磁気の方向を向いた熱残留磁気が獲得される。つまり、焼土は最終焼成時の地磁気を熱残留磁気として正確に記憶する。それゆえ、あらかじめ、年代既知の焼土の熱残留磁気を測定して、地磁気の方向の時間的変化をグラフにしておけば、このグラフを時計の代わりに用いて、焼土の焼けた年代を推定できる。この時計では地磁気の方向が針に相当し、焼土の熱残留磁気が焼成時の針の位置を記憶していることになる。日本では、広岡によって西南日本の過去2000年間の地磁気永年変化曲線がかなり詳しく測定されているので[1]、この方法が焼土の簡便な年代測定法として実用化されている。地磁気年代方の詳細については中島による解説が参考になる[2]。

２　地磁気年代測定法の問題点

第一に、地磁気の方向は時間だけでなく場所によっても変化するので、地域によっては、その場所での標準曲線の形が西南日本のものからかなり相違していることが問題となる。厳密に言えば、ある焼土の地磁気年代を求めるには、焼土の熱残留磁気をその場所の標準曲線と比較しなければならない。形の相違の少ないときには西南日本の標準曲線を代用できるが、相違が大きいときにはその地域特有の標準曲線を決定し、この曲線と焼土の残留時期の方向を比較しなくてはならない。しかし、近畿、中国地域の過去の調査例では、広岡による西南日本の標準曲線から求められた地磁気年代と土器年代はうまく整合しているので、これらの地域においてこの標準曲線を代用しても問題はない。

第二に指摘すべきことは、「地磁気年代は地磁気変動という物理現象から推定されるので土器編年に左右されない」と思われがちであるが、これは誤解であり、両者には密接な相互依存の関係が

あるという事実である。すなわち、少数の年代定点を除くと、標準曲線状の年代目盛りのほとんどは考古学の土器編年体系を参照して決められている。それゆえ、地磁気年代が年代定点に近いときは問題がないが、年代定点から遠くなるほど土器編年の影響をより強く受けることになり、もし土器編年に改訂があれば、地磁気年代もそれに伴って訂正しなければならない。年代定点の数が増加すると、地磁気年代と土器年代の相互依存関係は解消するが、現状ではやむをえない。しかし、地磁気を媒介とする地磁気年代測定法は、無遺物の場合でも有効である点、また、遠隔地の土器編年を地磁気変動を通して対比できる点で独自の性格を持つ。

3　遺構と試料

白石大谷Ⅰ遺跡（島根県八束郡宍道町大字白石）の横口付製炭窯は真砂質の丘陵を斜面に沿って水平方向に掘り抜いて構築されており、細長い窯体、片側に並ぶ横口、緩斜面の窯底という特徴的な構造をもつ。同様の構造の窯は多数報告されており、製炭窯とする説もあるが、窯の使用目的に関する統一見解はまだない。遺物は焚口の床面から～７Ｃのものと推定される小型の壷（完形）および壷の底部が出土している。窯の局部的変化を検出して正しい地磁気年代を求めるために、床面の広い範囲から定方位試料を25個採取した。

4　測定結果

試料の残留磁気の方向と強度をスピナー磁気系で測定した。第51図は残留磁気の方向の測定結果である。３ヶ所の飛び離れたデータを除くと残りのデータは小円内に緊密に集中しているのが分かる。残留磁気強度は～10－４（emu／ｇ）であった。

小円内のデータは強度も強く方向が良く揃っているので最終焼成時の熱残留磁気の方向を示すと判断できる。さらに、丘陵の地盤は安定しており、窯が最終焼成後に全体として傾いた形跡はないので、小円内のデータの平均方向は横口付窯跡の最終焼成時の地磁気の方向を正しく示していると考えられる。それゆえ、小円内のデータをもとに地磁気年代を推定する。小円内のデータの平均方向と誤差の目安となる数値を計算すると次のようになる。θ_{95}が小さくｋが大きいほど測定結果の精度が良いことを意味する。

第29表　白石大谷Ⅰ遺跡　の横口式窯跡の残留磁気の平均方向

遺　構	Ｉｍ	Ｄｍ	ｋ	θ_{95}	ｎ／Ｎ
横口式窯跡	61.20度	13.15度W	2450	0.63度	22／25

Ｉｍ：平均伏角　Ｄｍ：平均偏角　ｋ：Fisherの信頼度係数　θ_{95}：９５％誤差角
ｎ／Ｎ：採用試料数／採取試料数

5　地磁気年代の推定と考察

第52図は白石大谷Ⅰ遺跡の横口付窯跡の残留磁気の平均方向（＋印）と誤差の範囲（点線の楕円）、および、西南日本の過去2000年間の地磁気永年変化である。地磁気年代を求めるには、残留磁気の平均方向から近い点を永年変化曲線状に求めて、その点の年代を読み取ればよい。年代誤差も点線の楕円から同様にして推定できる。このようにして地磁気年代を求めると横口付窯跡につい

て、Ａ．Ｄ．660±20を得る。

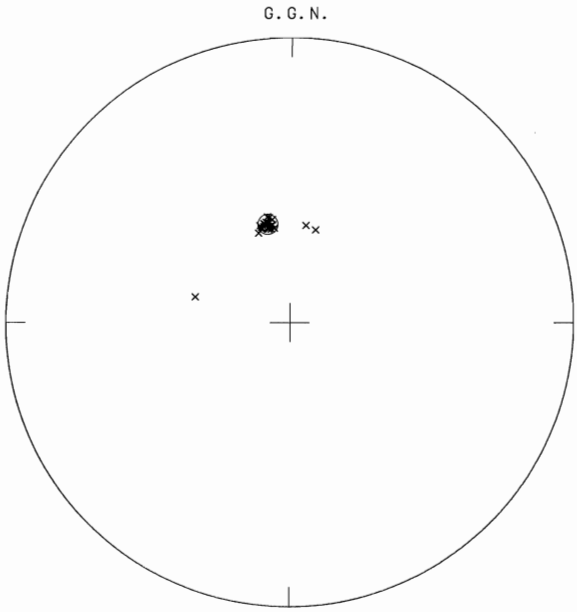
白石大谷Ｉ遺跡の横口付窯跡の地磁気年代

Ａ．Ｄ．660±20

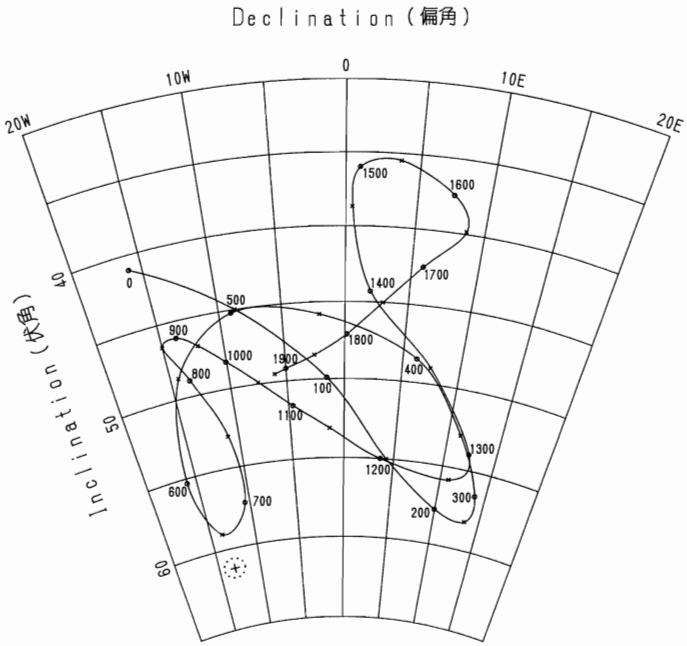
窯の広い範囲の残留磁気の方向が揃っていることから窯の局部的変形の影響を全く受けていない。さらに、窯の地盤には窯全体の傾動を示す形跡がないので、残留磁気の方向は最終焼成時の地磁気の方向を正しく示している。したがって、ここで得られた地磁気年代は高い信頼性を持つと考えてよい。また、この地磁気年代は焚口から出土した壷の～７Ｃという考古学的推定年代と整合している。

最後に、試料採取にあたってお世話になった川原和人氏、東森　晋氏をはじめとする島根県教育委員会の皆様に厚く感謝します。

註 (1) 広岡公夫　「考古学磁気および第四紀古地磁気の最近の動向」『第４紀研究』15、200－203、1978
(2) 中島正志、夏原信義　『考古学磁気年代測定法』考古学ライブラリー９　ニューサイエンス社　1981



第51図　白石大谷Ｉ遺跡の横口付窯跡１号の残留磁気の方向



第52図　白石大谷Ｉ遺跡の横口付窯跡の残留磁気の平均方向(＋印)と誤差の範囲(点線の楕円)、および、広岡による西南日本の過去2000年間の地磁気永年変化曲線

第30表　C14年代測定結果

㈱地球科学研究所

	遺　跡　名	遺　　構	測定方法・期間	試料の種類	前　処　理
Beta-151474	白石大谷Ⅰ遺跡	横口式製炭窯・作業場床面	Radiometoric-Standard	charred material	acid/alkali/acid
Beta-151475	白石大谷Ⅰ遺跡	横口式製炭窯・焼成部内	Radiometoric-Standard	charred material	acid/alkali/acid
Beta-151476	白石大谷Ⅰ遺跡	ＳＫ１５	Radiometoric-Standard	charred material	acid/alkali/acid
Beta-151477	白石大谷Ⅰ遺跡	ＳＫ２３	Radiometoric-Standard	charred material	acid/alkali/acid
Beta-151478	白石大谷Ⅰ遺跡	ＳＫ０８	Radiometoric-Standard	charred material	acid/alkali/acid

	C14年代（yBP）	δ13C（permil）	補正C14年代（yBP）
Beta-151474	＞44630	－25.9	＞44620
Beta-151475	1100±60	－26.1	1080±60
Beta-151476	1130±70	－25.8	1120±70
Beta-151477	2300±60	－28.1	2250±60
Beta-151478	590±50	－26.1	570±50

年代値はＲＣＹＢＰ（1950A.D.を０年とする）で表記。モダン　リファレンス　スタンダードは、国際的な慣習として、NBS Oxalic AcidのＣ１４濃度の95％を使用し、半減期はリビーの5568年を使用した。エラーは１シグマ（68％確率）である。

第8節　まとめ

１．白石大谷Ⅰ遺跡の性格について

白石大谷Ⅰ遺跡では弥生時代から近世に至る長期間の遺構・遺物を検出した。中でも中心的な時代は弥生時代と古墳時代で、遺物の大半がこの時期に属している（第31表）。しかし建物跡は、僅かに段状遺構１・３が弥生時代の建物の可能性があるくらいで、古墳時代の建物跡については調査区内では確認できなかった。９世紀頃の遺構として段状遺構４が挙げられるが、居住用の建物では無く作業場等の可能性が高いと思われる。このように比較的まとまった量の遺物が出土した時代でも集落の中心となる遺構が検出されなかったので、白石大谷Ⅰ遺跡は各時代を通じ、同道川流域に営まれた集落の縁辺部に位置していたと考えられる。また、本遺跡と同じ同道川西岸の下流に位置する萩遺跡（第53図10）は圃場整備後に、弥生時代中期の壺や７・８世紀の須恵器、土製支脚、鉄滓（炉壁の可能性があるものを含む）が出土している。本遺跡から約700ｍしか離れておらず、立地もよく似ている。遺物の時期が重なっていることからも本遺跡との関連が考えられる。

２．横口付製炭窯について

今回の調査で検出した遺構の内、横口付製炭窯は当地域で調査例の少ない貴重な資料だった。このため大規模な炭窯と考えられる以外、時期や炭の利用目的など不明な点が多く残されている。そこで県内で調査された他の横口付製炭窯と比較して現状をまとめてみたい。

横口付製炭窯が県内で最初に確認されたのは平成７年度に行われた布志名大谷Ⅱ遺跡の調査で、その後白石大谷Ⅰ遺跡、屋敷古墳群、そして現在調査中の三井Ⅱ遺跡と宍道湖南岸地域で次々に確認された。いずれも丘陵高所に位置し、地山をトンネル状に刳り抜いて焼成部を造る「地下式」タイプの窯という点で共通しており、この地域の大きな特徴と言える(1)。また、屋敷古墳群の「窯跡」は製作途上で放棄されており、当地域の横口付製炭窯の製作状況の分かる資料として注目される。

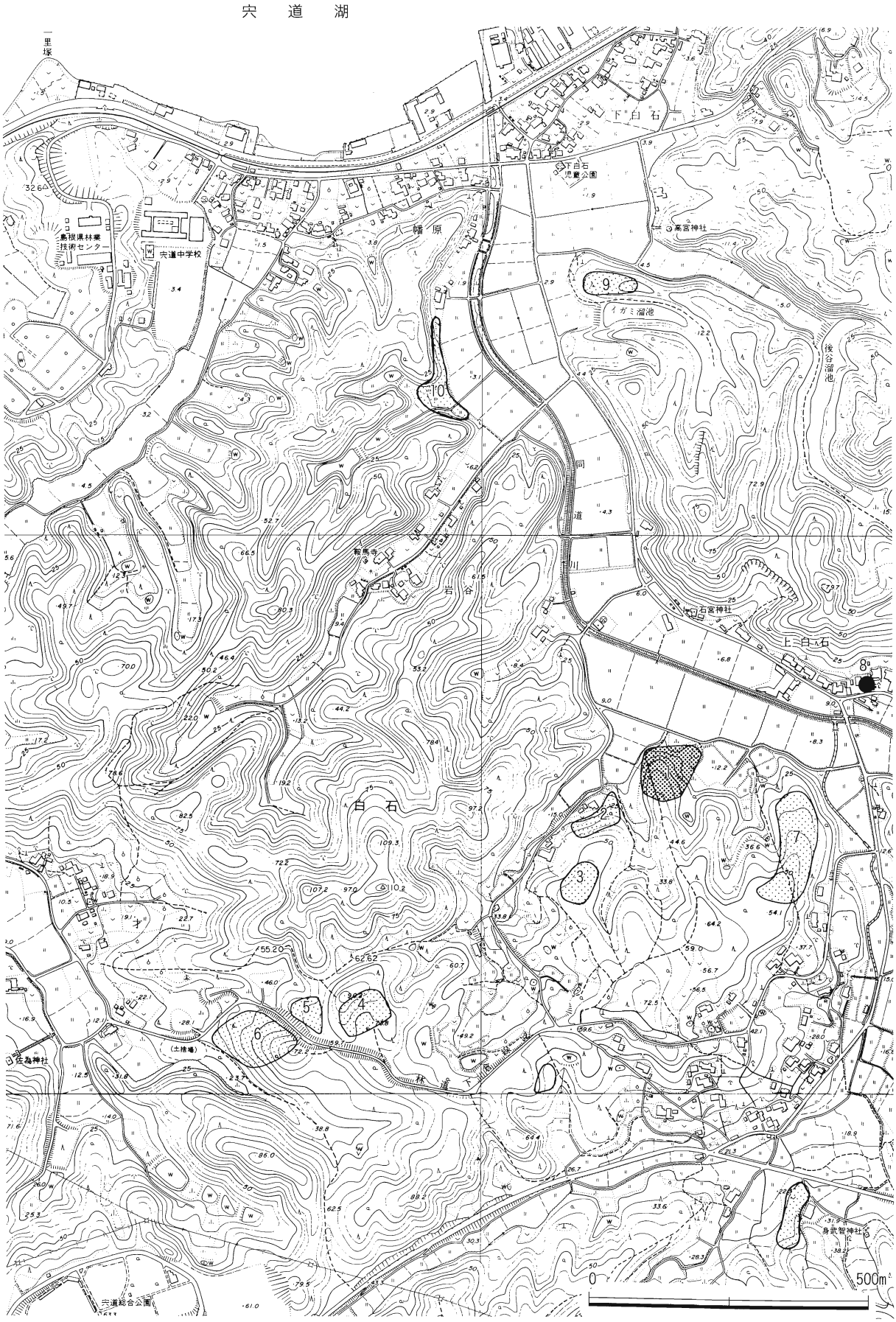
以上の窯跡を上拵氏の分類（文献19）に従って分類したものが第32表である。図示していないが、布志名大谷Ⅱ遺跡１号窯と三井Ⅱ遺跡２号窯は前庭・側庭作業面も含め、非常によく似た規模・形態をしている。上拵氏のＢ３型に分類される。時期は布志名大谷Ⅱ遺跡が７～８世紀頃とされ、三井Ⅱ遺跡２号窯は、閉塞に使用したと考えられる瓦の年代から８世紀後半頃と推測される。一方、白石大谷Ⅰ遺跡で検出した窯跡はＢ１型に分類されるもので、各部のつくりが異なっている。上拵氏の編年では、中国地方においてはＢ１型がＢ３型に先行して出現するとされており、これに従えば白石大谷Ⅰ遺跡の横口付製炭窯の時期は７世紀代に遡る可能性が考えられる。

また、このような形態の窯跡は他地域の例では製鉄遺構に関連するものと考えられるが（文献３・７）、県内の例ではいずれも周辺で製鉄関連の遺構が確認されていない。高速道路建設に伴う発掘調査の場合調査区が限定されるため、調査区外に製鉄関連の遺構が存在する可能性は十分あるが、現時点では製鉄遺構と切り離して考え、当地域では「７～８世紀に大量の炭を製造した地下式の炭窯」という点を押さえるにとどめたい(2)。

---

(1)　同様な傾向は因幡、丹後地方にも見られる。鳥取県郡家町山ノ上通遺跡では「地下式」と「半地下式」の窯が隣接して検出されたが、これは「半地下式」の窯が多数分布する津山盆地に近い郡家町の立地を考慮する必要があるとの御教示を穴沢義功氏より得ている。

(2)　文献10では鉄滓および木炭が出土しなかったことから、炭窯としての性格も疑問視されている。



第53図　白石大谷Ⅰ遺跡の位置と周辺の主な遺跡(S＝1/10,000)

1. 白石大谷Ⅰ遺跡(弥生中期後葉～中世集落・遺物散布地、後期古墳、横口付製炭窯)　2. 白石大谷Ⅱ遺跡(弥生後期中葉遺物散布地、中世集落)
3. シトギ免遺跡(後期古墳)　4. 野津原Ⅱ遺跡東区(弥生後期後葉集落、落とし穴)　5. 野津原Ⅱ遺跡西区(弥生時代後期後葉集落)
6. 山守免遺跡(弥生後期前葉～古代集落)　7. 椎山古墳群(古墳4基、1号墳は横穴式石室を持つ前方後円墳)　8. 下ノ空古墳(横穴式石室を持つ後期古墳)
9. 伊賀見古墳群(古墳3基、1号墳は横穴式石室を持つ前方後方墳)　10. 萩遺跡(弥生中期・古代遺物散布地)　11. 宮原遺跡(弥生後期・古墳時代遺物散布地)

第31表　白石大谷Ⅰ遺跡　出土遺物数量表

種　別	器　種	分類・特徴	段１	段２	段３	土坑１	土坑2	集石1	１号墳	炭窯	段４	溝1	Ⅰ区	Ⅱ区	Ⅲ区	Ⅳ区	計
縄文土器	深鉢	宮滝式					1										1
縄文土器　計							1										1
弥生土器（中期）	壷			1	1		1						2				5
	甕			2	8		1				2		17				30
		頸部に指圧痕文帯			1								3				4
	底部			3	6								6			1	16
	鉢					1											1
	高坏						1						3				4
	不明（胴部）			10	18								4				32
弥生土器（後期中葉）	壷							2					1				3
	甕				5			6					11		1		23
	底部																0
	鉢							1									1
	高坏							1					1				2
	鼓形器台				2			1					1				4
	不明（胴部）				1								2				3
弥生土器（後期後葉～）	壷											1	1				2
	甕			1	7								10		1		19
	底部																0
	高坏												1				1
	鼓形器台				5								7				12
	低脚坏												1				1
	不明（胴部）				1												1
時期不明の弥生土器	壷												1				1
	底部												9				9
	高坏																0
	不明（胴部）		4	5	27			17				4	1020				1077
弥生土器　計			4	22	82	1	3	28			2	5	1101		2	1	1251
土師器	甕	複合口縁			1								10				11
		口縁内わんする											1				1
		口縁外反する											8				8
		口縁太く短い													1		1
		口縁直線的に開く									1	1	2				4
	壷												1				1
	高坏												10				10
	器台							1									1
	不明（胴部）											9	152			4	165
須恵器	蓋坏	古墳時代							7				17	1		1	26
		古代									2	2	11	1		1	17
		その他										1	4				5
	高坏										2						2
	蓋												2			1	3
	壷									2	1		19	1	1		24
	甕									1	3		56			1	61
	壺・甕口縁												5				5
	不明							1			12		50				63
土師器・須恵器　計					1			2	7	3	21	13	348	3	2	8	408
中世土師器	坏												6				6
	皿	柱状高台付											1			1	2
	鍋												1				1
白磁	碗	Ⅱ類											1				1
		Ⅳ類											3				3
		その他											6				6
青磁	碗	龍泉窯系Ⅰ5b類											1				1
中国製陶器	壷													1		1	2
備前系陶器	壷												1				1
	甕												3				3
	擂鉢												1				1
不明土器													5				5
その他の土器　計													29	1		2	32
石器	スクレイパー												2				2
	石鏃				1								10				11
	楔形石器			1			1						1				3
	石核												4	1			5
	抉入石器				1								1				2
	剥片	２側縁に二次加工											6	1			7
		１側縁に二次加工			1								10				11
		その他の二次加工			3								19				22
		使用痕あり											4				4
		その他		6	26						1		111				144
	石斧						1						1				2
石器　計				7	32		2				1		169	2			213
鉄器													2				2
鉄滓													9				9
合計			4	29	115	1	6	30	7	3	24	18	1658	6	4	11	1916

第32表　島根県内で調査された横口付製炭窯

NO	遺　構　名	所在地	焼成部長(m)	同　幅(m)	同勾配(°)	同タイプ	煙道長(m)	同幅(m)	同タイプ	横口	上方溝	時　　期	備　考	文献
1	白石大谷Ⅰ	八東郡宍道町	8.5	0.8	7～8	B型	1.2	0.24～0.45	1型	6	M0型	A.D.660±20年(地磁気) 1100±60BP(C14) 1080±60BP(補正C14)	窯内から木炭出土。前庭・側庭作業面に木炭堆積。	本書
2	布志名大谷Ⅱ　1号	八東郡玉湯町	8.4	0.6～1.4	10	B型	0.75	0.3	3型	8	M0型	A.D.650±40年(地磁気) 1060±50BP(C14) 1030±50BP(補正C14)	窯内から木炭出土。側庭作業面(溝)に木炭堆積。	12
3	布志名大谷Ⅱ　2号	八東郡玉湯町	6.6	0.8	6	B型	0.6	0.4	3型	6以上	M0型	A.D.660±50年(地磁気) 1310±60BP(C14) 1290±60BP(C14)	側庭作業面(溝)に木炭堆積。	12
4	屋敷古墳群	八東郡宍道町	9.4以上	0.55	?	B	?	?	?	7	M0型		未完成の窯	24
5	三井Ⅱ　1号	簸川郡斐川町	?	?	?	?	?	?	?	1以上	?		トレンチで焼成部と横口を確認。	※
6	三井Ⅱ　2号	簸川郡斐川町	8.3	1.1	?	B型	?	?	?	6	M0型	8世紀後半	横口から熱を受けた平瓦が出土。	※
7	三井Ⅱ　3号	簸川郡斐川町	?	?	?	?	?	?	?	3以上	?		トレンチで焼成部と横口を確認。	※

※三井Ⅱ遺跡は斐川町教育委員会　江角　健･阿部賢治　両氏のご教示による

第３章　主要参考文献

1　東森市良　「九重式土器について」『考古学雑誌』　第57巻　第１号　日本考古学会　1971

2　足立克己　丹羽野裕ほか　『高広遺跡発掘調査報告書』　島根県教育委員会　1984

3　穴沢義功　「製鉄遺跡からみた鉄生産の展開」『季刊考古学』　第８号　雄山閣出版　1984

4　広江耕史　桑原真治ほか　『石台遺跡』　島根県教育委員会　1989

5　松山智弘　「出雲における古墳時代前半期の土器の様相　－大東式の再検討－」『島根考古学会誌』　第８集　島根考古学会　1991

6　松本岩雄　「出雲隠岐地域」『弥生土器の様式と編年　－山陽・山陰編－』　木耳社　1992

7　行田裕美　「製炭窯」『吉備の考古学的研究』　集成14　山陽新聞社出版局　1992

8　川上稔　湯村功ほか　『上長浜貝塚』出雲市教育委員会　1996

9　中川寧　「山陰の後期弥生土器における編年と地域間関係」『島根考古学会誌』　第13集　島根考古学会　1996

10　椿真治　「第６章　結語　３．古道について」『渋山池遺跡・原ノ前遺跡』　島根県教育委員会　1997

11　柳浦俊一　『福富Ⅰ遺跡・屋形１号墳』　島根県教育委員会　1997

12　柳浦俊一　「大谷Ⅰ・Ⅱ遺跡」『布志名大谷Ⅰ遺跡・布志名大谷Ⅱ遺跡・布志名才の神遺跡』　島根県教育委員会　1997

13　中野知照　『山ノ上通山遺跡発掘調査報告書』　郡家町教育委員会　1997

14　増田孝彦　岡崎研一ほか　「遠所遺跡」『京都府遺跡調査報告書　第21冊』　京都府埋蔵文化財調査研究センター　1997

15　池渕俊一　「門生黒谷Ⅲ遺跡の調査」『門生黒谷Ⅰ遺跡・門生黒谷Ⅱ遺跡・門生黒谷Ⅲ遺跡』　島根県教育委員会　1998

16　山本清ほか　「宍道・知原遺跡群とその性格」『宍道町歴史叢書４』　宍道町教育委員会　1999

17　川原和人ほか　『勝負廻Ⅰ遺跡・白石大谷Ⅱ遺跡・シトギ免遺跡・野津原Ⅱ遺跡・山守免遺跡・石地蔵遺跡』　島根県教育委員会　2000

18　林健亮　「野津原Ⅱ遺跡」『野津原Ⅱ遺跡（西区）・女夫岩西遺跡・城山遺跡』　島根県教育委員会　2000

19　上拵武　「横口式窯跡の基礎的研究」『たたら研究』第41号　たたら研究会　2001

20　川原和人　錦田剛志　『荒畑遺跡・ラント遺跡・野田遺跡』　島根県教育委員会　2001

21　林健亮ほか　『上野遺跡・竹ノ崎遺跡』　島根県教育委員会　2001

22　岩橋孝典　『西川津遺跡Ⅷ』　島根県教育委員会　2001

23　久保田一郎ほか　『上野Ⅱ遺跡』　島根県教育委員会　2001

24　宮本正保「屋敷古墳群」『屋敷古墳群・鋤崎古墳群・足頭古墳群・長廻古墳群・海部城跡・杓子観音Ⅰ古墳群・杓子観音Ⅰ遺跡』　島根県教育委員会　2002

25　大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集　島根考古学会　1994

第４章　惣 三 堀 遺 跡

第１節　位置と調査の概要

惣三堀遺跡は八束郡宍道町東来待369番地他に所在する。ここはちょうど玉湯町の西方に聳える標高236ｍの上野山から宍道湖に向かって伸びている尾根の西側斜面に当り、鏡地区の小さな谷の上方に位置する。また、ここは、南北に伸びている谷が急に狭くなっているところで、谷を挟んで北側には鏡神社が鎮座し、東側の尾根は玉湯町と接する。

この鏡地区には数多くの遺跡が知られているが、最も注目される遺跡は鏡北廻古墳である。この古墳は一辺約10ｍ、高さ２ｍほどの小さな方墳であるが、来待石の切石で造られた奥行き1.8ｍ、幅1.0ｍ、高さ1.2ｍの横穴式石室を持ち、閉塞石に閂状の陽刻を施した出雲地方の代表的な終末期古墳として著名なものである。その他の遺跡としては大紋古墳や古墳時代～奈良時代の集落跡と思われる大門、掘畑、草の上、草の上東等の遺跡、中世の土器が表採されている庄廻、岩穴遺跡が存在している。このように鏡地区は古墳時代から中世にかけての遺跡が密集している地域で、小さな谷にもかかわらず古代から連綿として人間の営みの痕跡をたどることができる地域である。

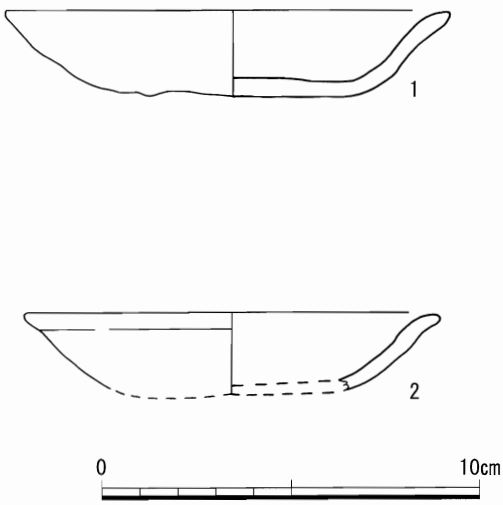
調査は遺跡の有無及び範囲を確認するため標高70ｍ～90ｍの尾根上に10本のトレンチを設置して行った。その結果、尾根の下方から中世土器を伴う土壙が出土したため、その周辺約100ｍ^{2}を拡張して本調査に入った。

参考文献　『宍道町遺跡地図』　宍道町教育委員会　1993.3
『宍道町歴史史料集（古墳時代編Ⅰ）』　宍道町教育委員会　1993.3

第２節　検出した遺構・遺物

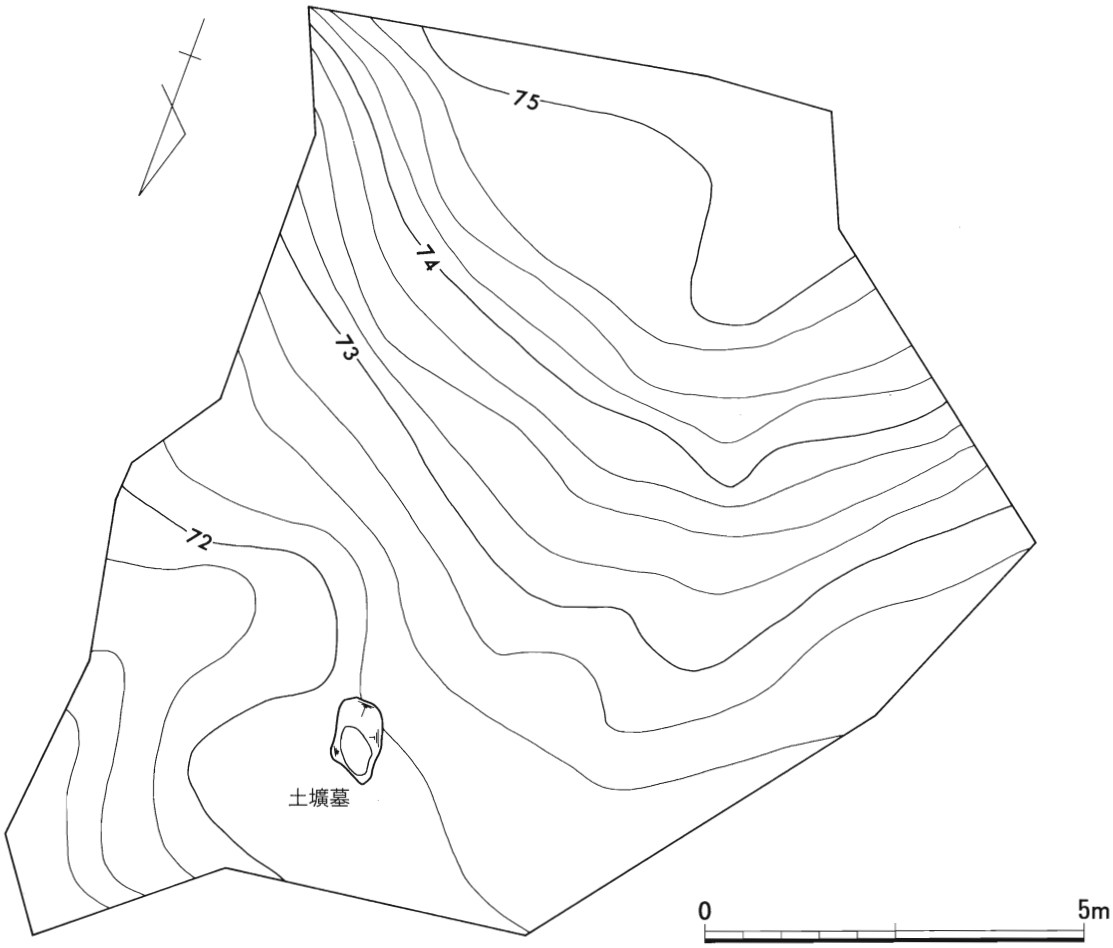
今回の調査で見つかった遺構は土壙墓１基のみであった。この土壙墓は標高72ｍあまりの緩やかな斜面に築かれていたもので、2.2ｍ×1.3ｍの不整な楕円形を呈している。主軸は尾根とほぼ直行し、深さは上部が削り取られているが現状で0.3ｍを測り、西側が東側と比べやや急な角度で底にいたっている。土壙の内部には木炭片と人骨片が混ざった暗黒灰色土と、その下部に暗褐色土が詰まっており、中世の土師器２点を伴っていた。

この土師器はいずれも京都系の土師皿で、第54図１は口径11.8㎝、器高2.3㎝あまりを測る。底はやや丸みを持ち、体部はゆるく外反して口縁部にいたっている。口縁部の内側には緩やかな平坦面があり、この部分の器壁が最も厚い。調整は内外面とも上方に横ナデ、下方にナデがあり、内面の底は円形にナデが施されている。底部から体部に移るあたりの器面は指圧痕のため凸凹が見られる。色調は淡灰褐色を呈し、胎土は若干の石英、長石を含み焼成は良好で、全体的にやや粗雑な造りである。なお、この皿は内面にススが付着していることから灯明皿になるものと思われる。第54

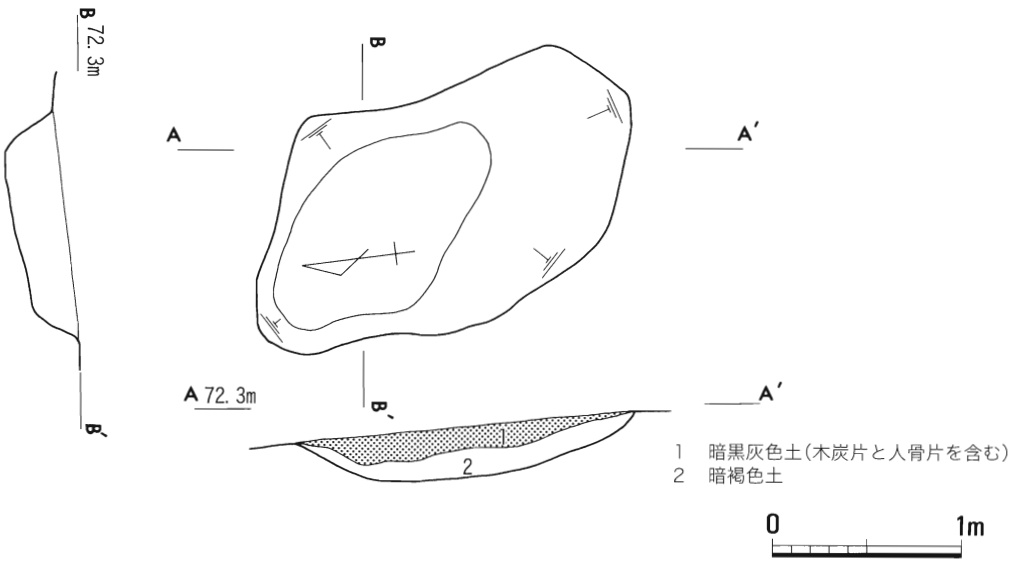


第54図　惣三堀遺跡　出土遺物実測図(S＝1/2)

第55図　惣三堀遺跡　地形測量図(調査区配置図)(S=1/400)



第56図　惣三堀遺跡　調査後地形測量図･遺構配置図(S＝1/100)



第57図　惣三堀遺跡　土壙墓実測図(S＝1/40)

図２は推定口径11.0cmを測る小破片の皿で、器面にはナデ調整が施され、器形はやや内湾ぎみに上り、口縁部近くでかるく外反して口唇部にいたっている。外面はやや明るい灰褐色を呈し、内面はやや暗い灰褐色である。胎土は若干の砂を含むが良好で焼成も充分である。

人骨は4.8cm×1.2cmのものが最も大きく計68点あまりの火葬骨片である。これらの人骨は奈良国立文化財研究所の松井章氏の鑑定によると、頭骸骨、顎骨、肋骨、腕骨等があり、人骨全てではなくその一部であることが分かった。

第3節　まとめ

今回の調査では中世墓を１基検出したのみであった。県下の中世墓については今まで充分な研究が行われていないので、あらためて検討を加え、惣三堀遺跡の中世墓の位置付けをしたいと思う。

島根県における中世墓の研究については、1971年に島根県教育委員会が今まで調査された中世墓をまとめた報告書を刊行しており(註1)、他地方より比較的早くから着手してきた。しかし、この報告は主に骨蔵器及び石塔を中心とするもので、中世墓全体を把握するものではなかった。その後、目立った研究は行われていないが、1996年に南前孝明氏が山陰中世墓の一覧表をはじめて作成し、主に火葬墓が普及した背景について検討がなされ現在にいたっている(註2)。このように中世墓の分類及び変遷等については、ほとんど研究が行われていないのが現状である。そこで発掘調査の報告がなされたものを拾いあげて一覧表を作成し検討を加えてみたい。

県下における奈良・平安時代の墳墓は特定な地域に点在的な様相で存在していたが、中世になると各地に普遍的な状態で出現するようになり、その数も増加している。しかしながら発掘調査で検出されたものは他の遺構と重複して偶然に見つかったものが大半で、報告書の中でも充分な記載がなく、詳細がつかめないものが多い。一覧表はまず火葬墓と土葬墓に分け、平安時代末～鎌倉時代を中世前期、室町時代前期～後期を中世中後期、室町時代末～安土桃山時代を中世末期として分類した。また、火葬骨が出土していない小型の壷棺（骨蔵器）は火葬墓とし、甕棺は土葬墓に入れて分類した。

火葬墓は19あまりの遺跡から検出されているが、ある程度の時代が分かるものは14か所である。平安時代から鎌倉時代にかけての火葬墓は松江市の的場古墓群の骨蔵器が知られている程度である。これは上部施設等については明らかでないが四耳壷の底部に火葬骨が残っていたもので、単独に骨蔵器を埋めたものと思われる。

中後期になると前期にあった骨蔵器が単独に埋葬されているものの他、上部に石塔を有するものや規模の大きい集団墓地、それに火葬土壙墓等が現れ墳墓が増えてくるとともに多様化してくる。松江市二反田古墓は斜面を２段に築造して広大な墓域を設定している。下段には荼毘した坑をそのまま埋葬施設にした土壙が横一列に数基存在し、その上方の段には供養塔と思われる宝篋印塔が数基安置されている。また、館跡に伴う墳墓の可能性ある美都町東仙道土居遺跡は、複数の石塔と褐釉陶器の骨蔵器を持ち、広瀬町経負坂遺跡は楕円形を呈する盛り土の上に宝篋印塔があり、石組状の施設に備前系陶器の骨蔵器が納められていた。その他、火葬土壙墓は底に焼けた石を持つものが多く見られるが、これは、火力を増すためのものと推定され、玉湯町烏坊第２号墓では塔の基壇から火葬骨が蒔かれた状態で検出されており注目される。

中世末期になると石塔や盛り土を有するものが増えてくるとともに副葬品に古銭を伴うものが多くなってくる。また、安来市清水大日堂裏古墓のように宗教との関連の中で巨大な墓地が築かれる

第33表　島根県下における中世墓一覧表①（火葬墓）

No.	遺跡名	所在地	遺構名	時代	上部施設				内部施設				人骨	副葬品等					立地	参考文献
					石塔	盛り土	集石	基壇	土壙	焼土土壙	壷・甕棺	石組み		古銭	鉄釘	土器	刀子類	その他		
1	的場古墓群	松江市	第３号 横穴羨門部上	前期							○		○			○			丘陵	1
2	東仙道土居遺跡	美都町		中後期				○			○		○			○		墨書の石	丘陵	2
3	玉造古墓	玉湯町	不明	中後期	不　明						○			○		○			不明	1
4	中竹矢遺跡	松江市	Ⅲ区ＳＫ３２	中後期					○	○			○		○				丘陵	3
5	二反田古墓	松江市	第２テラスＳＤ１	中後期					○	○						○		石	斜面	4
			第２テラスＳＤ２	中後期					○	○								焼石	斜面	
			第２テラスＳＤ３	中後期					○	○			○					焼石	斜面	
			第２テラスＳＤ４	中後期					○	○			○						斜面	
			第２テラスＳＤ５	中後期					○	○			○					焼石	斜面	
			第２テラスＳＤ６	中後期					○	○								柱状の焼け石	斜面	
6	烏坊古墓群	玉湯町	第２号墓	中後期				○	な　し				○						丘陵	5
7	河原崎古墳	安来市		中後期	○？						○					○			斜面	1
8	経負坂古墳群	広瀬町	１号墳	中後期	○	○					○								丘陵	6
9	馬込山古墓群	松江市	２号墓	末期		○			○	○			○	○	○	○		木製数珠	丘陵	1
10	島田池遺跡	東出雲町	４区ＳＫ０２	末期		○？			○	○			○	○	○	○			斜面	7
11	矢田横穴群	安来市	第１群２号横穴	末期							○					○		鉄鍋 （骨蔵器の蓋）	丘陵	8
12	杓子観音Ⅰ遺跡	宍道町	火葬墓　３基	末期	○1基				○	○			○					焼石	丘陵	9
13	社日古墳	松江市	加工段２	末期				○					○			○			斜面	10
			ＳＸ01	末期				○					○						丘陵	
14	惣三堀遺跡	宍道町	土壙墓	末期					○				○			○			尾根上	11
15	殿屋敷遺跡	西見町	ＳＫ１８				○		○	○			○	○				土錘 ハシ鉈	平地	12
16	清水大日堂裏古墓	安来市	ＳＢ０１						○										丘陵	13
			Ａ１区中　９基		○				○				○						丘陵	
			火葬墓　４基		○？				○				○						平坦地	
			Ｂ区　７基		○３基				○				○６基						斜面	
17	中尾墳墓群	安来市	１４基		○				○				○６基						丘陵	14
18	袋居古墓群	松江市	ＳＫ－１１						○	○			○						丘陵	15
			ＳＫ－１２						○	○			○						丘陵	
19	的場古墓群	松江市	第２号横穴羨門部上						○	○							○直刀		丘陵	1

第34表　島根県下における中世墓一覧表②(土葬墓)

No.	遺　跡　名	所在地	遺　構　名	時代	上部施設				内部施設			人骨	副葬品等					立地	参考文献
					石塔	盛り土	集石	基壇	土壙	壺・甕棺	その他		古銭	鉄釘	土器	刀子類	その他		
1	小無田Ⅱ遺跡	松江市	ＳＸ－０１	前期					○		木棺？			○	○		鉄製品紡錘車	斜面	16
			ＳＸ－０２	前期					○					○	○	○		斜面	
2	西石橋遺跡(西古墳群)	斐川町	土壙墓	前期					○						○	○	鏃、不明鉄製品	丘陵	17
3	横路遺跡古墓	浜田市	ＳＫ４	前期					○			○			○	○	和鏡、石	平地	18
4	荻杼古墓	出雲市		前期			○			○		○			○		石塔片、石	平地	19
5	福富Ⅰ遺跡	松江市	土壙　８基	前期					○						○３基		石　２基	斜面	20
6	的場遺跡	松江市	中世墓Ⅱ	前期					○					○	○		和鏡	平地	21
7	上塩冶横穴墓群第３３支	出雲市	ＳＫ０１	前期			○		○	○					○	○	青磁碗	斜面	22
8	叶ザコ遺跡	八雲村		前期						○							石	谷の奥	23
9	古志本郷遺跡Ⅱ	出雲市	ＨⅡ区ＳＫ５８	中後期					○						○			平地	24
10	古志本郷遺跡Ⅲ	出雲市	１区ＳＫ１０２	中後期					○						○			平地	25
11	坊床古墓群	伯太町	第１号墓	中後期			○？			○					○			斜面	1
			第２号墓	中後期			○？			○								斜面	
			第３号墓	中後期			○？			○								斜面	
12	檜山古墓群	松江市	第Ⅰ号墓	末期		○			○			○					錫杖他仏具，珠数玉	丘陵	1
			第Ⅲ号墓	末期		○			○			○			○		錫杖	丘陵	
			第ＸⅢ号墓	末期		○			○			○			○		錫杖頭	丘陵	
			第ＸＶⅠ号墓	末期					○						○	○	和鏡、法螺貝他	丘陵	
13	坂灘遺跡	仁摩町	第１９号人骨？	末期					○？			○	○					砂丘上	1
			第３号人骨	末期			○		○		配石	○						砂丘上	
			第５号人骨	末期			○		○		配石	○					アワビ	砂丘上	
			第１４号人骨	末期			○		○		配石	○						砂丘上	
14	黒田畦遺跡	松江市	東区ＳＸ－０１	末期					○		木棺？		○	○	○			丘陵	26
			東区ＳＸ－０２	末期					○		木棺？		○	○	○			丘陵	
			東区ＳＸ－０３	末期					○									丘陵	
			東区ＳＸ－０４	末期					○						○			丘陵	
			東区ＳＸ－０５	末期					○					○	○			丘陵	
			東区ＳＸ－０６	末期					○					○	○		木片少量	丘陵	
１５	蔵小路西遺跡	出雲市	墓１	末期					○		木棺		○		○			平地	27
			墓２	末期					○		木棺							平地	
			墓３	末期					○			○	○		○			平地	
			墓４	末期					○						○		自然石１，竹	平地	
			墓５	末期					○			○						平地	
１６	姫原西遺跡	出雲市	１号古墓	末期					○		木棺	○	○		○		木製の数珠・櫛	平地	28
			２号古墓	末期					○		木棺	○			○			平地	
			３号古墓	末期					○		木棺				○		小型の木箱	平地	
１７	島田池遺跡	東出雲町	４区ＳＫ０１	末期					○									丘陵	7
			４区ＳＫ０３	末期					○		木棺？			○	○		木質	丘陵	
１８	野田遺跡	宍道町	１区ＳＫ０３	末期					○				○		○			斜面	29
１９	古志本郷遺跡Ⅰ	出雲市	Ｄ区ＳＫ５１	末期					○						○			平地	30
			Ｄ区ＳＫ５４	末期					○						○			平地	
２０	古志本郷遺跡Ⅱ	出雲市	ＨⅡ区ＳＫ１０５	末期	削平				○						○			平地	24
２１	古志本郷遺跡Ⅲ	出雲市	１区ＳＫ３０	末期					○						○			平地	25
			１区ＳＫ６０	末期					○						○			平地	
			１区ＳＫ１０５	末期					○						○			平地	
２２	中竹矢遺跡	松江市	土壙　４基	末期	○１基				○		横穴式の納骨墓							斜面	31
２３	神原五輪塔	加茂町		末期	○	○	○		不明									平地	1
２４	柴尾古墓	松江市	土壙　１１基	末期					○								石　１基	丘陵	32
２５	板屋Ⅰ遺跡	頓原町	積石遺構	末期	○		○		○？						○		鉄製伏鉄小片	丘陵	33
２６	下黒田遺跡	松江市	ＳＫ－０２	末期					○						○		転石	丘陵	34
２７	清水大日堂裏古墓	安来市	１７基		○１基		○３基		○			○１基	○２基	○１基			石　１基	丘陵	13
２８	奥才古墳群	鹿島町	第３支群古墓		○				○			○歯					不明鉄器	丘陵	35
２９	中尾墳墓群	安来市	１４基		○				○									丘陵	14
３０	窯屋古墓群	松江市	１０基		○？				○７基		木棺？３基	○１基	○		○３基		石　３基	丘陵	15
３１	市部Ⅱ遺跡	西ノ島町	１４基						○					○１基				斜面	36
３２	経負坂古墳群	広瀬町	３基						○									丘陵	6
３３	的場古墓群	松江市	第２号穴前庭部								木棺？			○	○			丘陵	1
３４	烏坊古墓群	玉湯町	第１号墓			○			○									丘陵	5
			第３号墓		○			○										丘陵	
３５	的場遺跡	松江市	６区ＳＫ－０１						○		配石・木棺？				○		枕台の石	平地	21

ようになる。

次に土葬墓を見てみると築造時期がある程度わかる遺跡は24あまりである。前期はほとんどが単独に造られた土壙墓であるが、出雲市荻杼古墓は上部に集石を持つ常滑焼きの甕棺墓で、内部から竜泉窯の整美な碗が出土している。この時期の副葬品には土器以外に刀子、鎌等の鉄製品や和鏡を伴うものが多くみられ注目される。また、浜田市横路遺跡や荻杼古墓のように平地に存在しているものがあり、横路遺跡のＳＫ４は屋敷墓と考えられている。

中世中後期の遺跡は現在のところあまり知られていなく、伯太町坊床遺跡及び出雲市古志本郷遺跡が知られている程度である。前者は室町時代初期の集石を持つ甕棺、後者は土器を伴っている土壙墓である。この時期になると刀子等の鉄製品や鏡などの副葬品が見られなくなり、副葬の風習がすたれてくる。

16世紀代に入ると墳墓の数が増し、死者の埋葬が一般的になるとともに檜山古墓群や坂灘遺跡等のように被葬者の性格が分かるものや、関東のやぐらに良く似た横穴式の納骨墓、さらに蔵小路西遺跡のように館に伴うものなどが出てくる。この時期は平地の墓が増えるとともに、木棺を使用し、古銭を伴うものが多くなってくる。埋葬施設はほとんどが土壙で、上部に盛土を持つもの、集石があるもの、さらに五輪塔や宝篋印塔を伴うものなど多種多様である。

以上、火葬墓と土葬墓の変遷について述べてきたが両者の立地を見てみると前者は丘陵地に築かれているものが大半を占めるのに対し、後者は古い段階から平地と丘陵地に分かれて存在している。平地の墳墓には蔵小路西遺跡のように館跡に伴うものや横路遺跡の屋敷墓的なもの等がある。また、土葬墓は前期の段階で副葬品に刀子、鏡といった優品を持っており、火葬墓より優っているが、火葬墓は中後期になるとしっかりした墓地を造成し、石塔を伴う集団墓が現れるなど墓制が整い充実してくる傾向がある。

山陰の中世墓の一覧表を作成した南前孝明氏は墓制変遷の画期を12世紀代と15世紀代に置いている。たしかに12世紀は小無田Ⅱ遺跡や西石橋遺跡のように中世墓の出現時期であり、15世紀になると規模の拡大や塚、石塔を有するなど墳墓に多様性が見られ数も増えてくる。ただ、中世末期には副葬品として今までなかった古銭を伴うようになり、安来市の清水大日堂裏古墓のように巨大な墓地が現れてくるなどの現象が見られることから16世紀代も一つの画期として捉えるのが妥当と思われる。ともあれ、県内の中世墓は今後の資料の増加を待って、各時代における実態の把握と墓制変遷の社会的背景を検討する必要があると思われる。

惣三堀遺跡から検出した火葬墓は16世紀代の土壙を伴うもので、中世墓が広く浸透していく時期のものである。この時期の火葬骨が出土した土壙墓は、ほとんどが荼毘にふした後、拾骨をせずにそのまま葬った火葬土壙墓であるのに対し、惣三堀遺跡は火葬した後に別の場所に葬られたもので、人骨の全体でなく一部が葬られていたことは注目される。県内の火葬墓で一部の人骨を埋葬した例として松江市馬込山遺跡等があり、玉湯町烏坊古墓では石塔の基壇に火葬骨がばら蒔かれていた。烏坊古墓は埋葬施設が存在しなかったことから供養塔とも考えられ、火葬骨は分骨して埋葬されたものが多いと推測される。このように惣三堀遺跡の火葬墓は中世末期における火葬の風習を知る上で重要な遺跡であるといえよう。

なお、惣三堀遺跡の墳墓は、北側の谷部から中世土器が表採されている庄廻、岩穴遺跡の集落と何らかの関わりがあるものと思われる。

註１　『島根県埋蔵文化財調査報告書　第Ⅲ集』　島根県教育委員会　1971
註２　南前孝明　「山陰の中世墓」『季刊文化財　第84号』　島根県文化財愛護協会　1996

中世墓一覧表　参考文献

1　『島根県埋蔵文化財調査報告書　第Ⅲ集』　島根県教育委員会　1971
2　「第４回埋蔵文化財専門研修資料」　美都町教育委員会　2001
3　『国道９号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ』　島根県教育委員会　1983
4　『二反田古墓』　松江市教育委員会　1987
5　『玉造　烏坊遺跡群』「－古墳群・集落跡・古墓群の記録－」　玉湯町教育委員会　1970
6　『経負坂古墳群』「一般県道草野・横田線（東比田工区）特別県単事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」　広瀬町教育委員会　2001
7　『島田池遺跡・鷸貫遺跡』「一般国道９号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書　西地区Ⅷ」　島根県教育委員会　1997
8　『島根県埋蔵文化財調査報告書　第Ⅰ集』　島根県教育委員会　1969
9　島根県教育委員会から2002年３月に刊行予定
10　『社日古墳』「一般国道９号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書　12」　島根県教育委員会　2000
11　島根県教育委員会から2002年３月に刊行予定
12　『戦国時代の殿屋敷遺跡』「匹見町埋蔵文化財調査報告書第26集」　匹見町教育委員会　1999
13　『県道安来布部線改良工事に伴う清水大日堂裏古墓発掘調査報告書』　安来市教育委員会　1998
14　『中尾遺跡』　安来市教育委員会
15　『袋尻遺跡群発掘調査報告書』「松江市文化財調査報告書　第76集」　松江市教育委員会　1998
16　『小無田Ⅱ遺跡発掘調査概報』「松江市文化財調査報告書　第75集」　松江市教育委員会　1997
17　川原和人・桑原真治　「島根県斐川町西石橋遺跡の中世墓」『古文化談叢第18集』　九州文化研究会　1987
18　『横路遺跡（土器土地区）』「下府川河川局部改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」　浜田市教育委員会　1997
19　近藤正　「出雲市荻杼発見の骨蔵器について」『山陰古代文化の研究』　近藤正遺稿集刊行会　1977
20　『福富Ⅰ遺跡・屋形Ⅰ号墳』「一般国道９号（松江道路西地区）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書２」　島根県教育委員会　1997
21　『本庄地区県営圃場整備事業に伴う松江北東部遺跡発掘調査報告書』「松江市文化財調査報告書　第78集」　松江市教育委員会　1999
22　『上沢Ⅱ遺跡・狐廻谷古墳・大井谷城跡・上塩冶横穴墓郡第７，12，22，23，33，35，36，37支群』「斐伊川放水路予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ」　島根県教育委員会　1998
23　宮本徳昭　「八雲村・叶ザコ遺跡出土の常滑甕」『松江考古　第８号』　松江考古学談話会　1992
24　『古志本郷遺跡Ⅱ』「斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書ＸＩ」　島根県教育委員会　2001
25　『蟹谷遺跡　上沢Ⅲ遺跡　古志本郷遺跡Ⅲ』「斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書ＸⅡ」　島根県教育委員会　2001
26　『黒田畦遺跡発掘調査報告書』「松江市文化財調査報告書　第65集」　松江市教育委員会　1995
27　『蔵小路西遺跡』「一般国道９号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書　２」　島根県教育委員会　1999
28　『姫原西遺跡』「一般国道９号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書　１」　島根県教育委員会　1999
29　『荒畑遺跡・ラント遺跡・野田遺跡』「中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書11」　島根県教育委員会　2001
30　『古志本郷遺跡Ⅰ』「斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ」　島根県教育委員会　1999
31　『一般国道９号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ｘ（中竹矢遺跡）』　島根県教育委員会　1992
32　『宮尾古墳群他発掘調査報告書』　松江市教育委員会　1996
33　『森遺跡・板屋Ⅰ遺跡・森脇山城跡・阿丹谷辻堂跡』「志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財調査報告書２」　島根県教育委員会　1994
34　『下黒田遺跡　発掘調査報告書』　松江市教育委員会　1988
35　『奥才古墳群』　鹿島町教育委員会　1985
36　『四引遺跡・市部Ⅱ遺跡発掘調査報告書』「－県道西ノ島海士線道路改良工事に伴う発掘調査－」　隠岐島前教育委員会　1992

第５章　掘田ケ谷遺跡

第１節　位置と調査概要

この遺跡は宍道町西来待2175番地他に所在する。ここは来待川によって形成された比較的大きな谷の西方に当り、この谷に向かって伸びている狭長な伊野谷が内ケ峠に接する手前の北側丘陵に位置している。この丘陵は複雑に谷が入り組んでおり、遺跡が存在しているところは伊野谷に面した標高30mあまりの小高い台地上である。この伊野谷付近は来待石の石切場が数多く存在しているところで、古代の遺跡としては来待石の岩盤を穿って造られた西来待横穴群が知られている程度であるが、掘田ケ谷遺跡の北側の丘陵地帯及び東側の来待川周辺には数多くの遺跡が存在している。前者には須恵器窯跡の分散期に当たる平安時代初期の窯跡として著名な小松古窯跡をはじめ方墳の宇由比神社古墳や集落跡と考えられている段原遺跡、船分遺跡等がある。一方後者では船形石棺を持つ横田古墳、横穴式石室を有する知原古墳群や須恵器及び土師器片が表採されている遺跡が10か所あまり知られている。

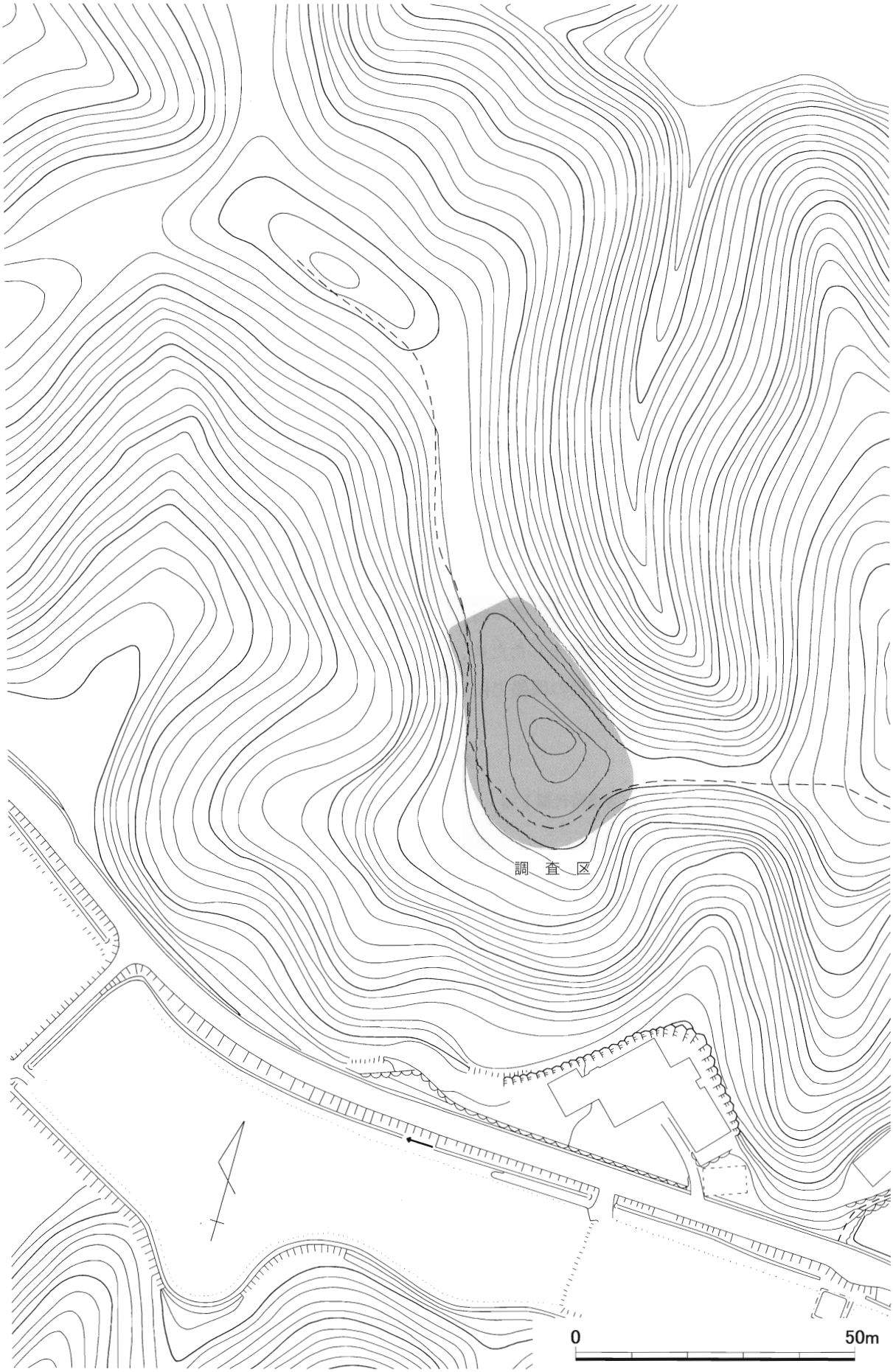
掘田ケ谷遺跡は平成６年の分布調査で確認された遺跡で、調査対象地は比較的平坦な西側の尾根と緩やかな斜面が広がる東側の２か所に分かれる。調査はまず10数本のトレンチを対象地全体に設置して平成８年７月17日から実施した。その結果、東側の斜面からは遺構、遺物を検出できなかったが、西側の平坦地から土器片が出土したため、約275m^{2}の調査区を設け８月９日に調査を終了した。この調査では、この台地が後世の開墾で山を削って平坦にしているため住居跡等の遺構が破壊されていることが分かった。

参考文献　『宍道町遺跡地図』　宍道町教育委員会　1993．3
『宍道町歴史史料集（古墳時代編Ⅰ）』　宍道町教育委員会　1993．3

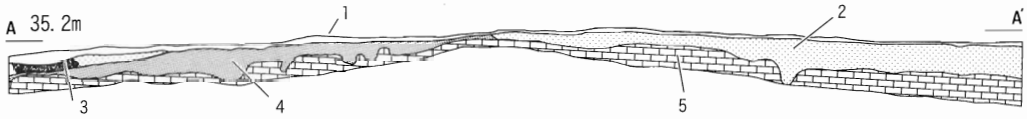
第２節　調査結果

本調査地は標高34mあまりの平坦地で、伊野谷に向かって伸びている尾根の先端部に当る。調査区の西側及び南東側は急峻な斜面となっており、北側には緩やかな尾根が続く。平坦地の南北方向の土層図を見てみると、地山は中央部が最も高く、両端に行くにしたがって下がっている。南側は地山の上方に茶褐色砂質土と表土が80cmあまり堆積していて単純な層序を呈していたが、北側では地山の上に白褐色砂質土があり、その上に南側で見られた茶褐色砂質土と暗褐色砂質土が詰まっていた。地山の風化土と思われる茶褐色砂質土や白褐色砂質土から遺物が出土していることから、これらの土層は開墾によって二次的に客土されたものと推測される。地山は比較的硬いが木の根等によって不規則な落ちこみが多数見られ、地上面が凸凹している。精査時に土坑と思われていたものも坑内の発掘が進むにつれて壁が不規則になるものが大半で、明確な遺構は最終的に検出することができなかった。

出土遺物は樹根の落ちこみや客土層から検出されたもので、総計135点あまりの破片である。その内訳は弥生土器片１点、古墳時代後期～奈良時代の土師器甕片120点、奈良・平安時代の須恵器坏片２点、古墳時代～奈良時代の竈片３点、中世土師器皿片９点である。このようにこの遺跡は、古墳時代後期～奈良時代を中心としたもので、生活に関連する土器が多いことから住居跡に本来伴っていたものと推測される。



第58図　掘田ケ谷遺跡　遺跡周辺の地形図(S＝1/1,000)

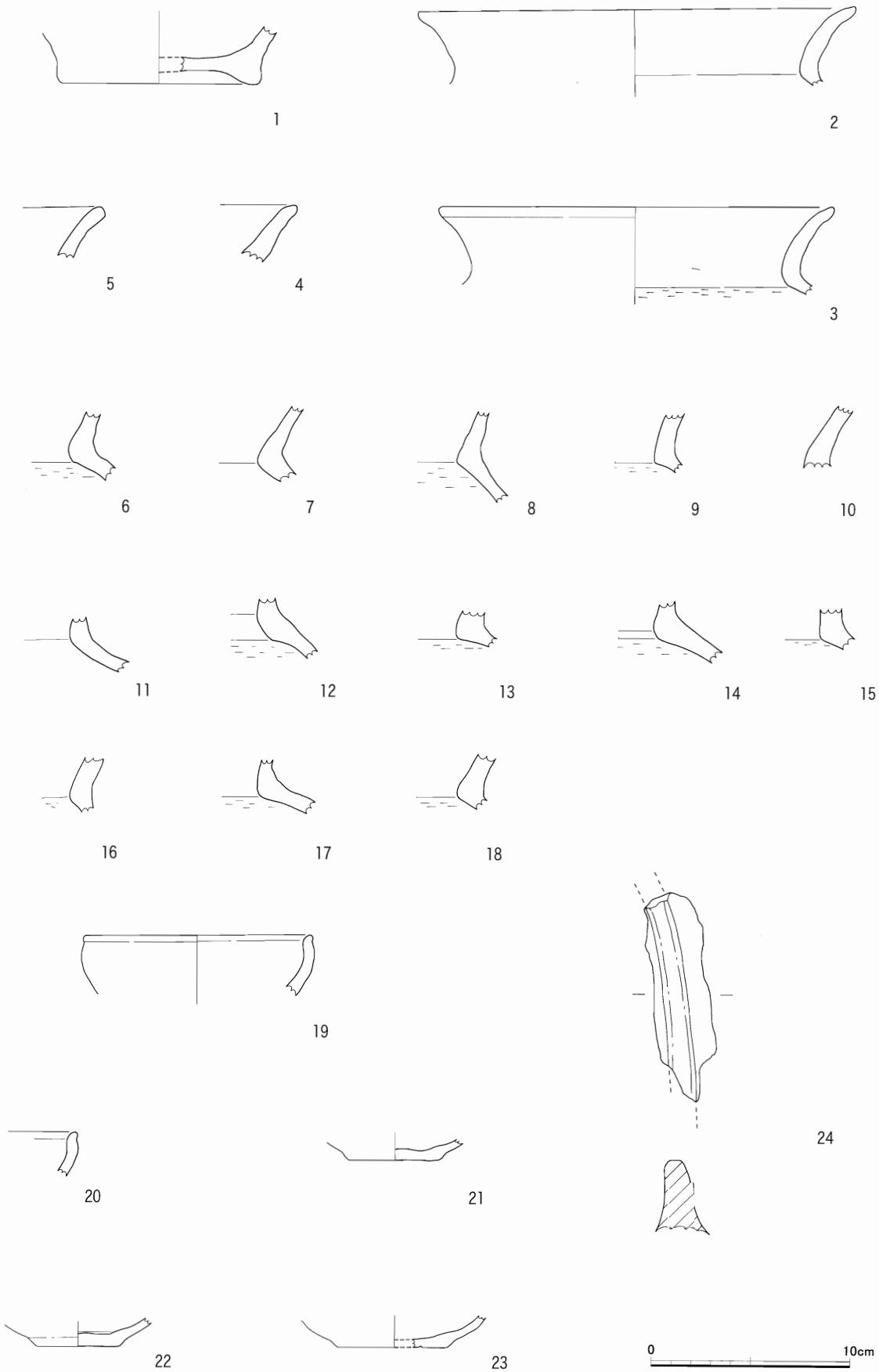


1. 表　土
2. 茶褐色砂質土
3. 暗茶褐色砂質土
4. 白茶褐色砂質土
5. 地　山

土　層　図

0　4m

第59図　掘田ケ谷遺跡　調査区配置図(S＝1/375)・土層実測図(S＝1/120)



第60図　掘田ケ谷遺跡　出土遺物実測図(S=1/3)

出土土器で図化できたのは24点あまりで、以下、時代ごとに記述する。

第60図１は弥生土器の底部片で、推定底径10.0cmあまりを測る。底は最大で0.7cm盛り上がった上げ底。底部から体部にかけてはやや外反ぎみに上方に伸び、底部の器厚は0.6cmあまりを測る。調整は風化が著しいので不明。色調は外面がやや赤っぽい褐色、内面が黄褐色を呈し、胎土には石英、長石等の砂粒を多量に含んでいる。

第60図２～18は古墳時代～奈良時代のものと思われる土師器の甕片である。２～５は口縁部片、６～18は頸部付近の破片である。４～18は小破片のため径不明のものである。２は推定口径2.2cmの口縁部片で、器形は頸部から外反して口縁端部にいたっているもので、その高さは3.5cmあまりを測る。口縁端部は丸く頸部に向かって徐々に厚みを増している。頸部内側には横方向のケズリが見られ、外面には横ナデ調整が施されている。全体的に赤みを帯びた褐色をなしている。胎土には細かい砂粒が比較的多く含まれている。３は推定口径20.0cmの口縁部片。２とくらべ色調及び推定口径がやや異なるが他はほぼ同じであることから同一個体になる可能性を持っている。４、５は推定口径の計測ができないやや外反ぎみの口縁部片。４は口縁端部が細く下方にいくにしたがって厚みを増しているのに対し、５は口縁端部に厚みを持つタイプのものである。

第60図６～18はいずれも「く」の字形に屈曲している頸部付近の破片で、内面下方には横方向のケズリが見られる。胎土は細かい砂粒を含むものが大半で、色調は淡褐色を呈した土器片とやや赤っぽい色をなしているものがある。第60図19、20は須恵器の坏片。これらの土器は体部がやや内湾ぎみで口縁部近くで短く外反して端部にいたっているタイプのものである。色調は外面が淡い灰色、内面がやや赤みのある灰色を呈している。胎土は良好、焼成は柔らかい焼き上がりとなっており、同一個体の可能性がある。第60図21～23は中世土師器皿の底部片で、いずれも風化が著しく、淡褐色をした胎土の良好なものである。底径は21、22がやや小さく4.5cm前後、23は5.5cmあまりである。第60図24は竈の廂部分の破片で砂粒を多量に含みやや赤みがかった色を呈している。

第34表　掘田ケ谷遺跡　出土土器一覧表

種類	口縁・頸部片		底部片		その他の破片		計
	総数	実測数	総数	実測数	総数	実測数	
弥生土器	0	0	1	1	0	0	1
土師器	18	18	0	0	102	0	120
須恵器	2	2	0	0	0	0	2
竈	0	0	0	0	3	1	3
中世土師器	0	0	3	3	6	0	9
計	20	20	4	4	111	1	135

第３節　まとめ

今回の調査では遺構は検出できなかったが、かつてこの尾根には弥生時代～中世にかけて何らかの遺構が存在していたものと考えられる。特に生活に関連する土器の出土量が多かった古墳時代後期～奈良時代については住居跡が存在していたものと推測され、今までこの周辺ではこの時期の住居跡が尾根上から検出された例がないことから今後の研究の一資料になるものと思われる。

第6章　地蔵院遺跡

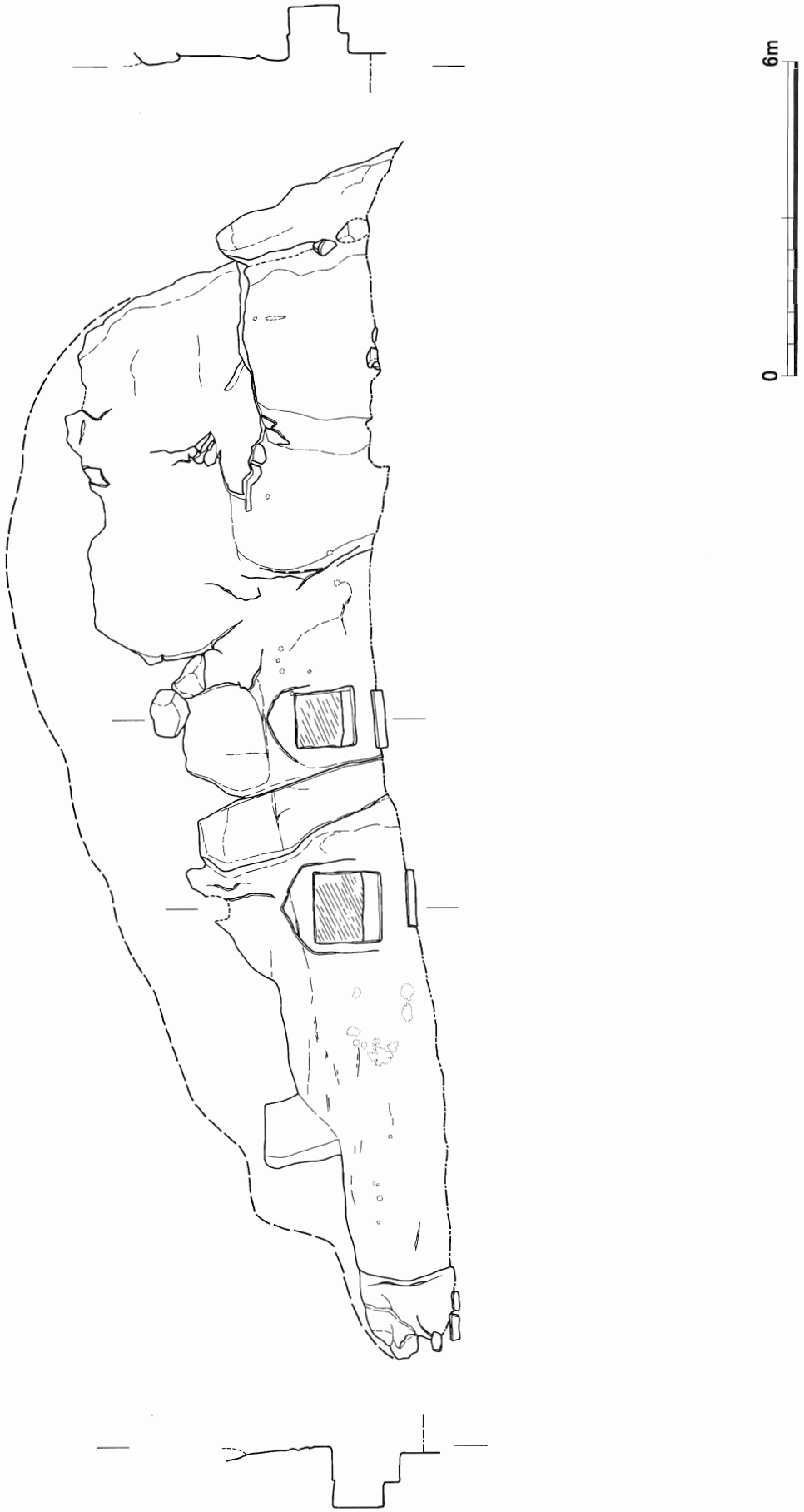
第1節　位置と調査概要

この遺跡は宍道町東来待1666－2番地他に所在する。ここは来待川の上流約1㎞の右岸に位置し、国道9号線から南側に直進して下がっている県道海潮・宍道線が東側に大きく曲がっている付近に存在する宝篋印塔を伴う祭祀遺跡である。地元の人はこの遺跡を穴地蔵と呼んでおり、北隣には地蔵院と呼ぶ小さな建物が存在している。このあたりは来待石が露頭して数多くの石切場の跡が残っている。地蔵院の北200mのところには丘陵斜面に彫り込まれた112体の磨崖仏からなる久戸千体地蔵がある。この地蔵群は高さ約70㎝の石窟の中に高さ50㎝前後の地蔵が浮き彫りされたもので、室町時代から江戸時代にかけて築かれたものと考えられている。また、久戸千体地蔵の北側の水田の中には、土御門親王の墓と伝えられている宝篋印塔があり、来待川上流にある大森神社の西南に広がる台地には全長3mを測る県内最大の五輪塔である伝大野次郎左衛門墓がある。この他、町内には上白石のホウジ向遺跡、西来待木実田遺跡、白石金山五輪塔群、上来待の岩屋寺等で五輪塔及び宝篋印塔の存在が知られている。

地蔵院遺跡は二つの石窟に宝篋印塔が計6基安置されていたもので、石窟の調査は測量のみにとどめ、宝篋印塔は、民間信仰の地蔵札打ちによってお札が全体に張られていたため、新しい場所に移転した後、地元の了解を得て平成13年12月に実測図を作成した。

参考文献　『宍道町遺跡地図』　宍道町教育委員会　1993.3
『宍道町の文化財めぐり』　宍道町教育委員会　1989.11

第61図　地蔵院遺跡　遺跡周辺の地形図（S＝1／1,000）



第62図　地蔵院遺跡　測量図(S＝1／120)

第2節　遺跡の概要

この遺跡は長さ約23m、高さ７ｍあまりを測る大きな岩塊の岩壁に穿たれた方形の石窟に宝篋印塔が安置されていたものである。石窟は２穴からなっているが、北側のものを１号石窟、南側のものを２号石窟と呼ぶ。この岩壁前面には約５ｍあまりの平坦地があり、北側にある地蔵院からこの石窟に上がられるようになっている。この平坦地は石窟が穿たれている岩塊中央部に向かって登り坂となっており、その高低差は1.4mあまりである。

１号石窟

地蔵院の上がり口から約８ｍあまり入った所に穿たれた石窟で、現地表面から0.4m上に掘り込まれている。入り口は一辺1.26mのほぼ正方形を呈しており、その上方部には禅宗のお寺の窓に使われている火灯窓を模倣したものと思われる文様が線刻で描かれている。奥行は床面で1.0m、天井部で1.2mあまりを測る。天井部は入り口から0.6m入ったところに僅かな段が付いている。床面は入り口から0.4m奥に高さ0.18mの段があり、その上段に宝篋印塔３基が安置されていた。

２号石窟

１号石窟の南側2.4mに存在するもので、入り口は一辺が1.14mあまりの正方形を呈しているが上辺はやや幅が狭くなっている。床は二段になっており、その段の高さは0.18mあまりである。奥行は床面で0.9m、天井部で1.02m、床上段から天井部までの高さは0.93mを測る。入り口上方にはやや丸みをおびた山形状に線刻が施されている。また、天井部は床の段がある奥行のところで僅かに段がつき高さが若干低くなっている。床面は二段になっており、上段に宝篋印塔３基が安置されていた。

宝篋印塔

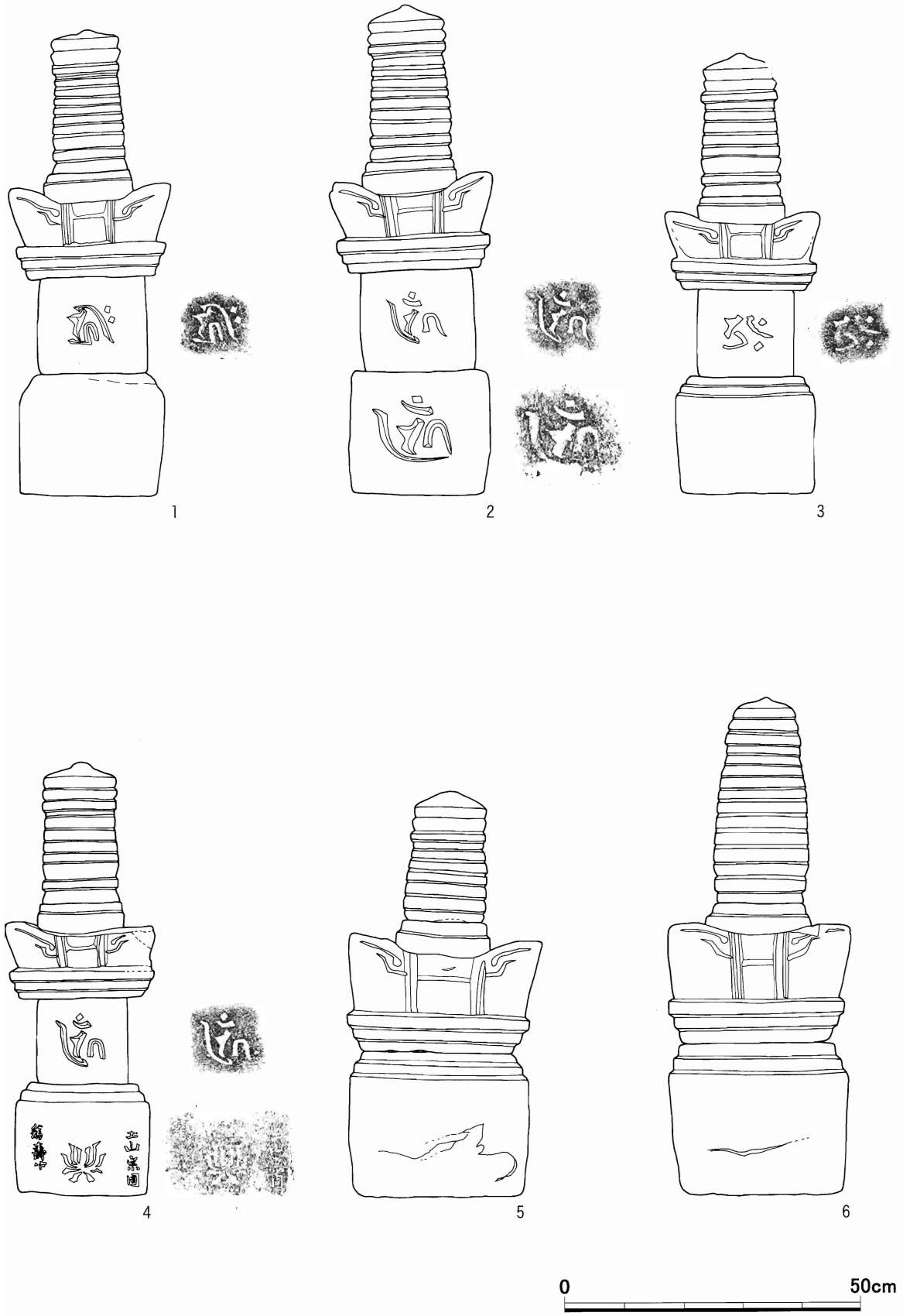
地蔵院の石窟に安置されていた宝篋印塔は６基あるが、それらは相輪及び笠の形態から３つのタイプに分けられる。

Ａタイプ（第63図１、２）

相輪の請花は退化してただの凸帯となっているが九輪の数は整い、隅飾突起の高さは10cm前後で、塔身にやや膨らみが見られるタイプである。１は全長80cmあまり、相輪の長さ24cmで、その径は最大で12.5cmを測る。ややずんぐりとしており九輪は下から２、３番目あたりが最も太くなっている。宝珠は扁平で二段からなっており本来の形から退化している。笠部は幅28cm、高さ18cmあまりを測る。隅飾突起はやや外側に傾いており、左右の突起の基部に当るところには縦方向に一本の線刻があり、上方には刻点と線弧が上下二本施されている。上方のものは隅飾突起の縁に沿って描かれており、下方は鍵形を呈している。隅飾突起正面中央部は約1.5cm、奥に向かって方形に切り込んでおり、正面上方で段をなしている。段形は上部二段、下部は軒の下に二段ある。塔身は高さ16.5cm、幅17.5cm～18.5cmを測る。下方の幅がやや広く、若干の膨らみを持ち、中央には梵字が陰刻されている。基礎は21cm×25cmの方形。２は１とほぼ同じ形態をなしているが、相輪の高さが１より高く26.5cmを測る。また、基礎の石は幅24cmの塔身の石を使っており、組合せが本来のものとは異なっている。

Ｂタイプ（第63図３、４）

Ａタイプと同様相輪の請花は退化してただの凸帯となり九輪の数が整っていないもので、隅飾突起の高さがＡタイプより若干低く、塔身に膨らみを持たないタイプである。相輪は24cm前後で、下



第63図　地蔵院遺跡　宝篋印塔実測図(S＝1/10)

から２番目の輪が薄く、その上下の輪は厚みを持っている。径は12.0㎝～13.5㎝を測る。隅飾突起はＡタイプとほぼ同様な形態、文様を持っている。塔身には梵字が描かれており、４の右側には人名と思われる「空？山宗固」左側には「為寿□」の銘文が見える。基礎の石は高さ18.9㎝～19.8㎝の方形の石であるが、上方には２段にわたって階段上に刻みが施してある。

Ｃタイプ（第63図５、６）

Ｂタイプと同様九輪の数は整っていないが、Ａ・Ｂタイプのものより隅飾突起の傾きが少ない宝篋印塔で、いずれも塔身を欠いている。相輪はわずかに宝珠、請花のなごりを留めている５と、面影がほとんど残っていない６があり、円柱状の石に５で６本、６で14本の線刻が施されている。その高さは22.3㎝、34.8㎝を測り、６の最大径は16.5㎝あまりである。隅飾突起はＡ・Ｂタイプとほぼ同様な形態、文様を持っているが、他のタイプと比べ高さがやや高く、傾きが少ない特色を持っている。

宝篋印塔に係る祭祀

宝篋印塔に係る言い伝えや祭祀について地元の坂本研次氏から話を聞いたので以下記述する。宝篋印塔が安置されていたところを地元では穴地蔵と呼んでおり、特別な言い伝えや祭祀は残っていないが、隣接して存在する地蔵院の祭に合せていっしょに行っていたようである。地蔵院の祭は久戸地区の各組が輪番で世話をしている。当番の組を御戸組という。祭は毎年７月30日で、午前中に御戸組で掃除を行い、花を飾り、女性はお供えのだんごを作る。夕方６時頃から久戸地区の住民が集まり祭が始まる。祭は弘長寺の住職が念仏をあげ、お供えのだんごをもらって帰る。これを食べると夏の疲れがでないと言われている。この祭とは別に「地蔵札打ち」という民間信仰がある。これは地区の住民が亡くなった時、葬儀の３日後以内に喪主や親戚縁者が地区内にある地蔵さんを巡拝し、死者をあの世にお導き下さいという祈りをこめて「南無地蔵願王菩薩」というお札を地蔵さんに貼る。地蔵院の宝篋印塔も地蔵さんとして地蔵札打ちの対象になっていた。

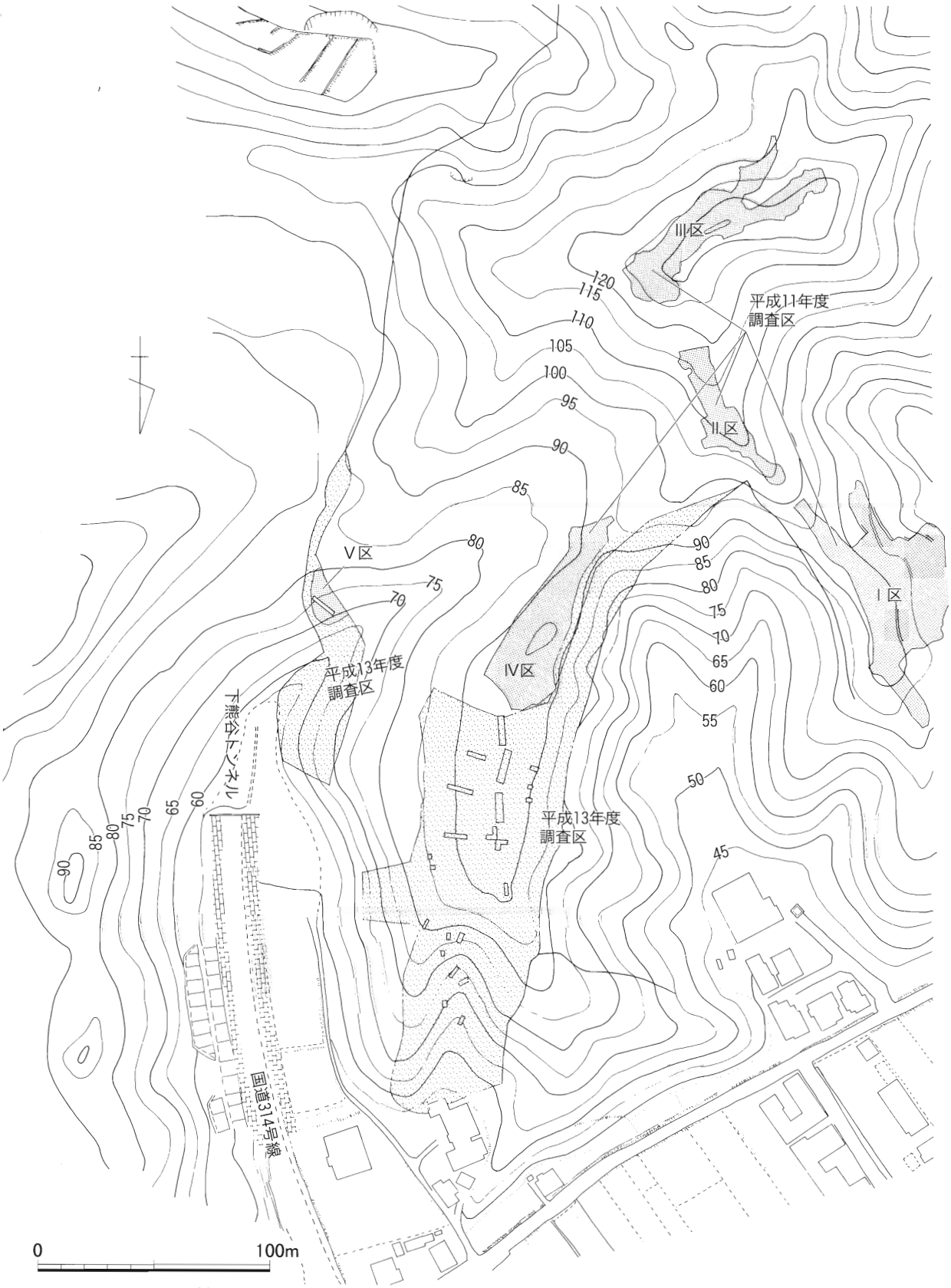
第３節　まとめ

地蔵院の宝篋印塔は二つの石窟に６基安置されていた。これらの塔は相輪の請花が退化しているが九輪の数は整っているもの（Ａタイプ）、九輪の数が整っていないもの（Ｂタイプ）Ｂタイプと同様九輪の数が整っていないが、隅飾突起の傾きがＡ・Ｂタイプのものより少ないもの（Ｃタイプ）の三つに分けることができる。県内における宝篋印塔については今岡稔氏、杉原清一氏、柚原恒平氏、真野大丞氏などによって編年案が提示[註1～4]されている。これらによると相輪の請花や基礎の反花座の蓮弁の形態が新しくなるにつれて退化し、本来の約束事を守らなくなる傾向が指摘されている。これに当てはめて地蔵院の宝篋印塔を見てみるとＡタイプ→Ｂタイプ→Ｃタイプと変遷していったものと思われ、新しくなると隅飾突起が直立する傾向が出てくるようである。また、これらの石塔は相輪や隅飾突起の形態から中世末期ごろのものと推測される。

註１　今岡　稔　「山陰の石塔二三について－２－」　『島根考古学会誌　第８集』　島根考古学会　1991
２　杉原清一　『二反田古墓』　松江市教育委員会　1987
３　柚原恒平　「隠岐島前の宝篋印塔について」　『島根考古学会誌　第12集』　島根考古学会　1995
４　真野大丞　「高津川上中流域の宝篋印塔」　『宍道町歴史叢書１』　宍道町教育委員会　1996

第７章　熊谷遺跡

発掘調査の経緯と経過・遺跡の位置　熊谷遺跡は、中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵



第64図　熊谷遺跡　平成13年度調査対象範囲（S＝1/2,000）

文化財発掘調査事業のひとつとして平成11年度と平成13年度に発掘調査が行われた。遺跡の範囲は、島根県飯石郡三刀屋町下熊谷と島根県大原郡木次町下熊谷両町に及んでいる。平成13年度の調査対象区域は、国道314号下熊谷トンネルの西側丘陵及びその東側の谷筋にあたる区域である。

中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査事業は、平成11年度には宍道インター～三刀屋間の調査を中心に行い、宍道町内のインターチェンジ以西４遺跡を2.5パーティーで、加茂町内７遺跡を1.5パーティーで、三刀屋町と木次町で４遺跡を2.5パーティーでそれぞれ行った。また、この間に松江道路から中国横断自動車道につながる連結部の調査も行った。

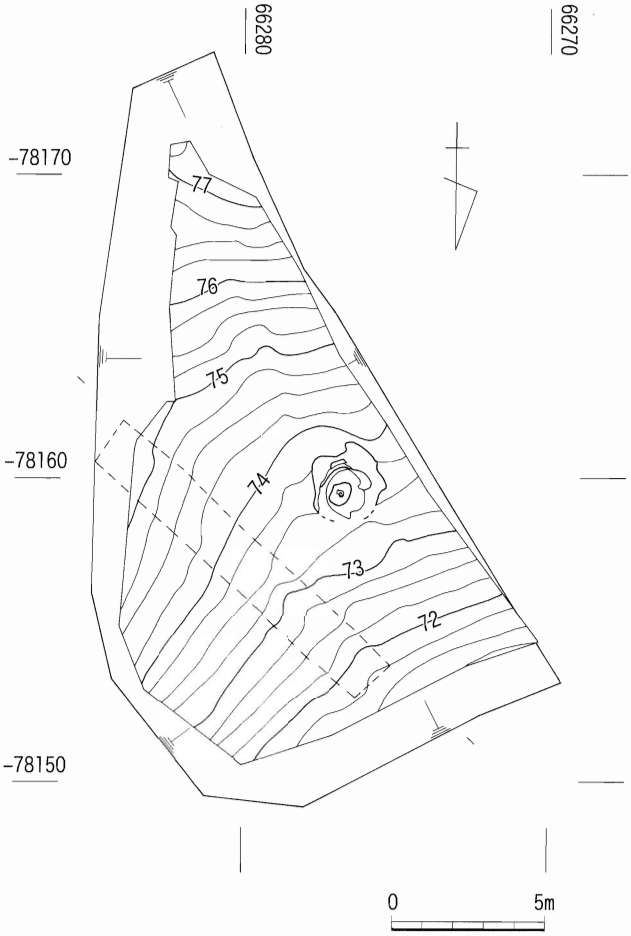
三刀屋町から木次町にかけての調査は平成11年４月から開始した。調査開始当初は３遺跡に重なるインターチェンジ部分の調査量が、その後の調査スケジュールに大きく影響すると考えてこれに該当する三刀屋町下熊谷から木次町下熊谷にかかる熊谷遺跡と、三刀屋町下熊谷に所在する要害遺跡のトレンチ調査を２パーティーで開始した。しかし、三刀屋町給下の馬場遺跡部分の調査を優先したいとの日本道路公団側からの要望を受けて、５月には馬場遺跡のトレンチ調査に１パーティーを回している。馬場遺跡については、平安時代前後を中心に縄文～近世の良好な遺物包含層を確認し、直ちに全面調査を開始した。インターチェンジ部分のトレンチ調査では、要害遺跡で堀と考えられる遺構を確認した。また、熊谷遺跡では墨書土器を採集したほか、戦国時代の山城の可能性が考えられた。木次町側の南に向かって延びる尾根上には、分布調査時には、古墳の可能性があるマウンドのあった部分を中心に下熊谷中遺跡としていたが、土砂流出でマウンドが失われており、トレンチ調査を行ったが、遺構・遺物は残存していなかった。

熊谷遺跡については、４つの調査区に区分して平成11年５月13日から全面調査を開始した。遺跡内において、三刀屋熊谷１・２号墳を検出した。これらの古墳については、８月12日に蓮岡法暲・渡邊貞幸両先生による調査指導を受けた。８月30日には、三刀屋熊谷１・２号墳の現地説明会を実施し、約50名の見学者に公開した。その後、熊谷遺跡においては城跡関係の遺構や落とし穴などを検出し、平成11年11月17日にこの年の現地調査を終了した。しかし、用地買収その他の都合により、インターチェンジ部分にかかる熊谷遺跡の一部が未踏査、未調査のまま残されることとなった。

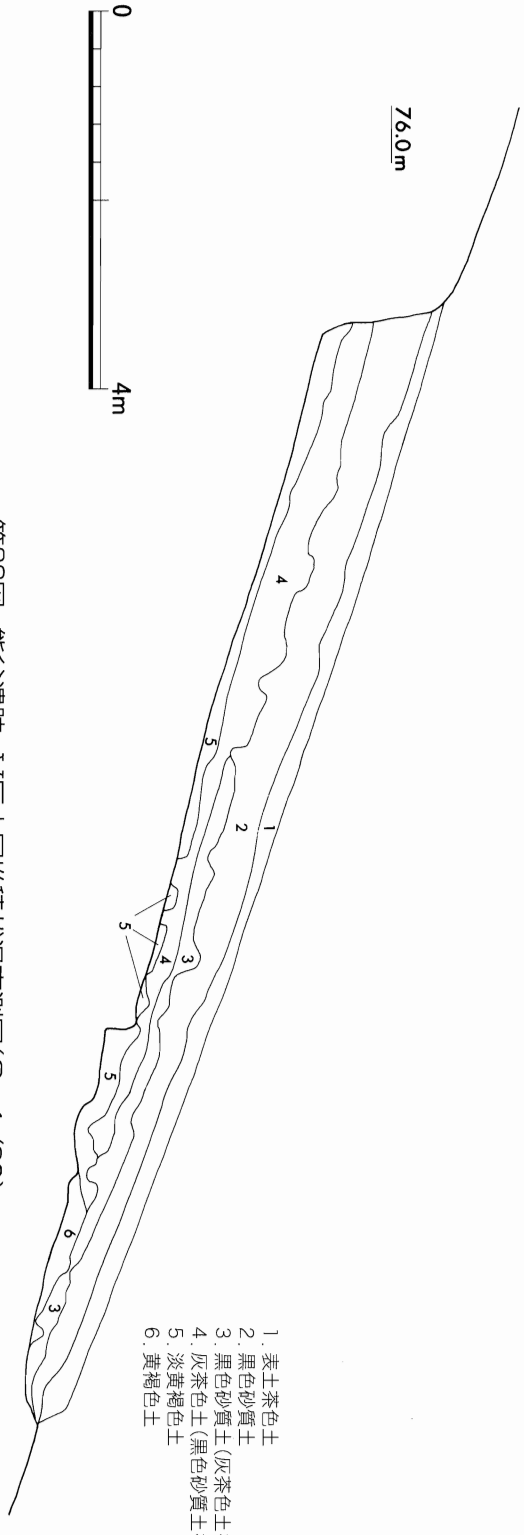
このような状況が解消され、残された部分の現地踏査及びトレンチ調査にとりかかることができるようになったのは平成13年７月になってからであった。

平成13年度調査対象区域13,000㎡を踏査して7,000㎡に絞り込み、杉林、竹林、雑木林の下草刈り、間伐を行った後、トレンチ調査を開始したのは平成13年７月23日であった。このトレンチ調査対象区域に23地点、329㎡のトレンチを設定して調査したところ、木次町下熊谷に所在するインターチェンジ用地内の丘陵西斜面に設定したトレンチから弥生前期土器と須恵器を含む顕著な包含層が検出された。この区域は熊谷遺跡Ｖ区と名付け、対象全区域のトレンチ調査終了後に８月６日から283.2㎡の調査区を設定して本調査を開始した。この熊谷遺跡Ｖ区以外の区域に設定したトレンチからは、全部で８点の遺物が出土したがいずれも破片資料であった。また、どのトレンチからも明確な遺構は検出されなかった。

熊谷遺跡Ｖ区における本調査の結果、トレンチ調査の時点で検出された遺物を含む厚さ60㎝～80㎝の黒色砂質土層は、設定した調査区の東側上方、道路用地外の尾根筋から調査区の中央部分にかけて分布していることがわかった。この調査区内の遺物包含層からは、弥生時代前期のものと思わ



第65図　熊谷遺跡　Ⅴ区完掘後地形測量図
（S＝1/250）

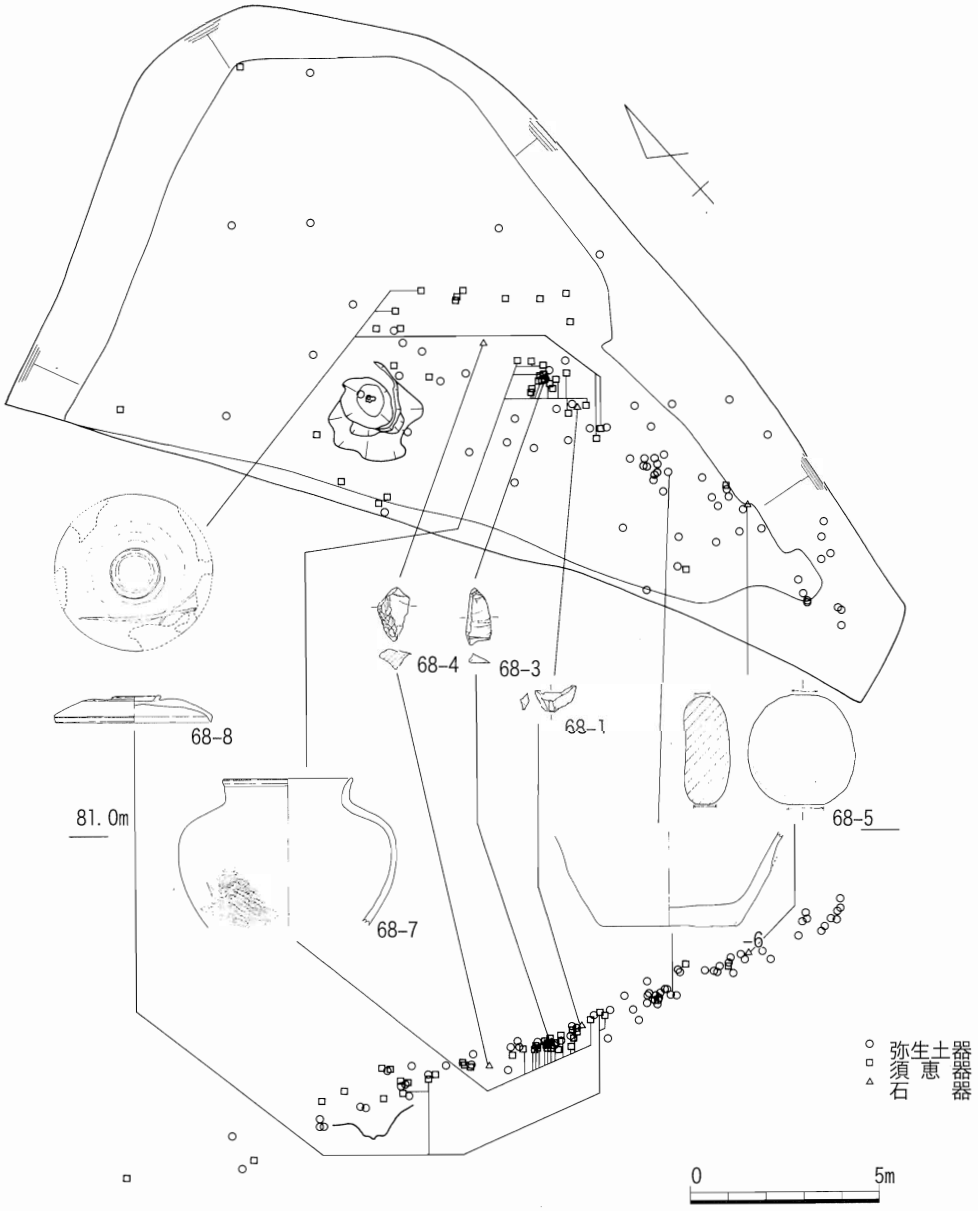


第66図　熊谷遺跡　Ⅴ区土層堆積状況実測図（S＝1/80）

れる土器と須恵器および石錘、黒曜石剥片などが出土した。また、包含層を除去した地山からは、包含層形成以前に埋没した、落とし穴とみられる土坑1基（径120～160㎝、深さ50㎝、平面不整形楕円、断面逆台形、第69図）が検出された。現地調査は平成13年９月14日に終了した。

遺物の概要　熊谷遺跡Ⅴ区黒色砂質土の遺物包含層からは、その胎土中に比較的大きい砂粒（１㎜～３㎜）を多量に含むことから弥生時代前期のものとみられる弥生土器貯蔵容器の破片と、7世紀後半の須恵器坏蓋をはじめとする高台坏などの供膳具、短頸壺などの貯蔵容器および石錘、黒曜石剥片などの遺物が出土した。（第67図、第68図、第35表、第36表、第37表）

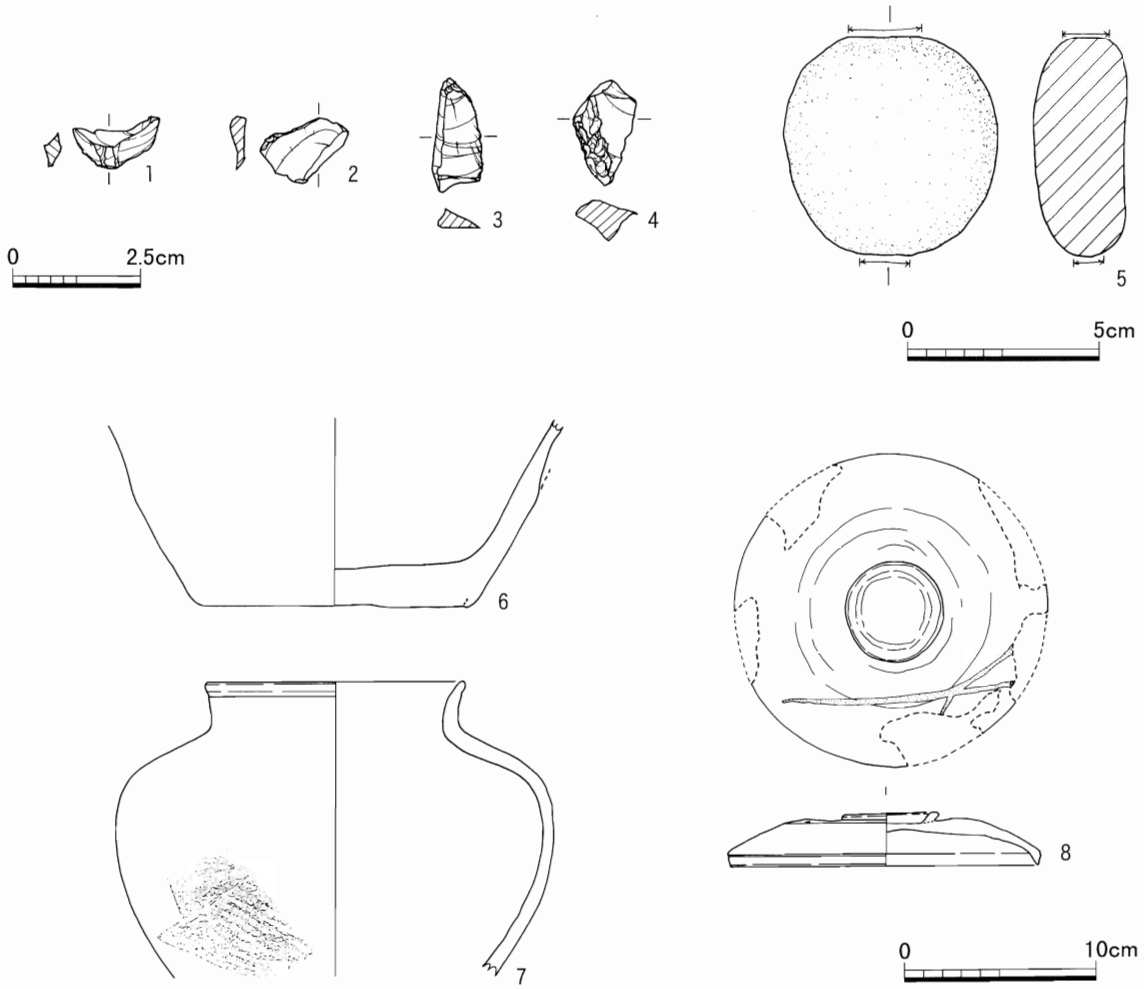
これらの遺物の出土状況は、平面的にも水準的にも錯綜しており、それぞれの遺物群について一定の傾向なり規則性を把握することは難しいもの



第67図　熊谷遺跡　Ⅴ区遺物出土状況実測図(S＝1/200)

と思われる。また、これらの遺物群は原位置からの出土ではない。供給源は用地外の斜面上方、もしくはさらに上方の尾根筋と考えられる。（第64図）

第68図の１～４は黒曜石の剥片である。第68図の５は127.７ｇの石錘である。第68図の６は弥生時代前期のものと思われる壺の底部である。外面は黄褐色から灰褐色を呈し、輪積みの痕跡あるいは成形調整の痕跡と思われるある程度規則的な凹凸が観察される。また、胎土中に１㎜～３㎜程度の比較的大粒の石英粒が多量に含まれる。このような前期のものと思われる弥生土器の破片は、調査区内で109点出土しているが、この図示したものを含めて壺形と思われるものが２個体あったことがうかがえる。第68図の７は須恵器短頸壺である。口縁部外周に１条の沈線を巡らす。体部下方、底部近くの外面に格子状のタタキ目が観察できる。第68図の８は須恵器坏蓋である。輪状つまみを貼り付け、口縁端部を下方に屈折させている。体部の中央は極端に厚みを増して盛り上がって



第68図　熊谷遺跡　Ⅴ区出土遺物実測図　黒曜石剥片(S＝2/3)、石錘(S＝1/2)、弥生土器・須恵器(S＝1/4)

第36表　熊谷遺跡　Ⅴ区出土遺物観察表１(石器等)

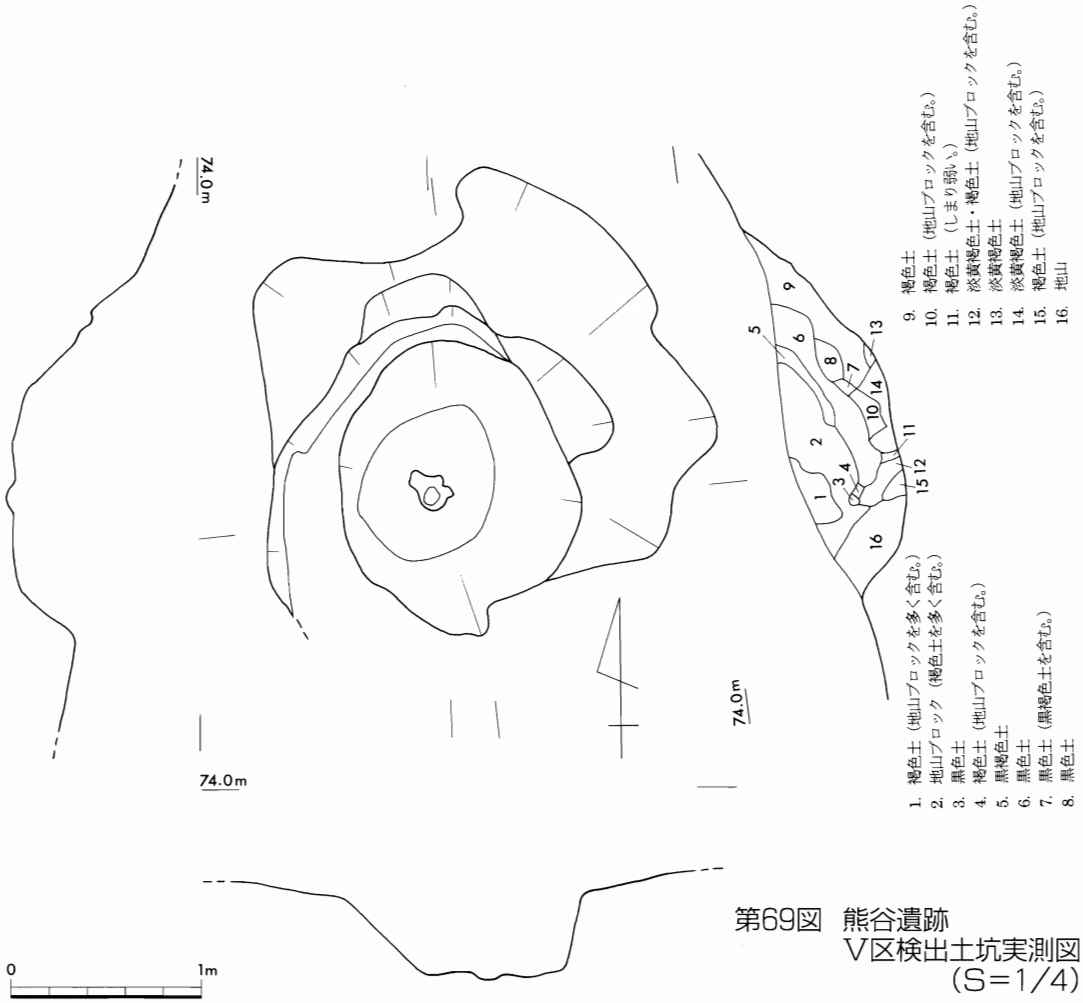
挿図番号	写　真	出土地点	材質	器種	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備　　考	実測番号
68-1	図版54	Ⅴ区斜面Ｐno. 37	黒曜石	剥片	10.5	17.0	4.0	0.3	背面・腹面に石核の剥離面を残す	Ｐno. 37
68-2	図版54	Ⅴ区斜面	黒曜石	剥片	13.0	12.5	3.0	0.4		TSU1
68-3	図版54	Ⅴ区斜面Ｐno. 24	黒曜石	剥片	23.0	10.0	4.5	0.7	三面とも剥離の方向が下方へぬける。一側縁は薄く鋭利。	Ｐno. 24
68-4	図版54	Ⅴ区斜面Ｐno. 108	黒曜石	剥片	21.5	12.5	8.6	1.4		Ｐno. 108
68-5	図版54	Ⅴ区斜面Ｐno. 28	凝灰岩	石錘	58.0	57.0	24.5	127.7		Ｐno. 28

第37表　熊谷遺跡　Ⅴ区出土遺物観察表2(弥生土器、須恵器)

挿図番号	写　真	出土地点	種類	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	手　　法	備　　考	実測番号
68-6	図版54	Ⅴ区斜面Ｐno. 105	弥生土器	壺	不明	10.0	13.8		風化が進んでいるため観察難。	Ｐno. 105
68-7	図版54	Ⅴ区斜面	須恵器	短頸壺	13.2	15.7	不明	内：回転ナデ 外：回転ナデ、タタキ		TSU2
68-8	図版54	Ⅴ区斜面Ｐno. 59	須恵器	坏蓋	16.5	2.8	―	デ　外：回転ヘラケズリ、回転ナデ	火襷状の黒斑あり。	Ｐno. 59

第38表　熊谷遺跡　Ⅴ区出土遺物数量表

種　別	器　種	数　量
石　　器	石錘	1
	黒曜石剥片	4
弥生土器	壺	2
	甕	2
	総破片点数	109
須 恵 器	蓋	3
	坏	2
	壺	4
	皿	1
	総破片点数	29



第69図　熊谷遺跡
Ⅴ区検出土坑実測図
（S＝1/4）

いるが、全体としては扁平なつくりである。天井（輪状つまみの内側）はナデて仕上げており、回転台からの切り離し工程の痕跡は観察できない。また、輪状つまみの周囲にはヘラ削りの痕跡が３条巡り盛り上がっている。さらに、このような技法、形式は出雲７期[註1]の特徴を示しており、７世紀第３四半期のものと考えられる。外面に火襷の黒斑２条が交叉する。

包含層と落とし穴状土坑との関係　若干の粗密はあるが土坑の位置は平面的には各遺物群の分布域である。また、土坑の埋土は包含層と似かよっている。しかし、土坑の埋土からは一片の遺物も出土していない。土坑の時期は不確定で、包含層の形成された須恵器の時期以前としか言えない。

まとめ　土坑を落とし穴状遺構とみれば、平成11年度の調査で検出されたものの中にも同様のものが見られる。一方、調査区の斜面上方に連なる用地外の尾根付近が供給元と考えられる遺物は、須恵器を除いて、平成11年度の成果にはあまり見られなかったものである。周囲に弥生時代前期の集落があったことが考えられる。集落の縁辺もしくは集落に付随する何かの施設の存在が想定できようか。土器の出土量や比高差40mの谷の奥まった地形などから考えて、土器棺墓の存在も想定できるのではないだろうか。当遺跡の新たな様相を解明する手がかりとなる資料といえよう。

註１　大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集1994年
大谷晃二「出雲地方の須恵器編年表」『出雲の横穴墓』－その型式・変遷・地域性－第7回山陰横穴墓調査検討会資料　山陰横穴墓研究会

図　　版

白石大谷Ⅰ遺跡と周辺の遺跡

１．白石大谷Ⅰ遺跡　２．白石大谷遺跡Ⅱ遺跡　３．シトギ免遺跡　４．野津原Ⅱ遺跡　５．山守免遺跡

図版2　白石大谷Ⅰ遺跡

白石大谷Ⅰ遺跡　全景(南西から)

同　上（南東から）

同　上（北から）

集石１

集石１　赤色物

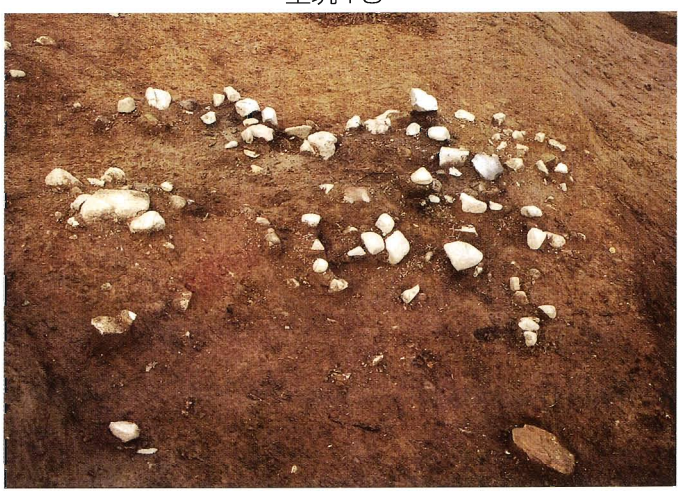
土坑４

土坑５

土坑１３

土坑１５

土坑１７


集石３

図版４　白石大谷Ⅰ遺跡

横口付製炭窯（北東から）

同　上（北西から）

図版5　白石大谷Ⅰ遺跡

横口付製炭窯　前庭土層断面

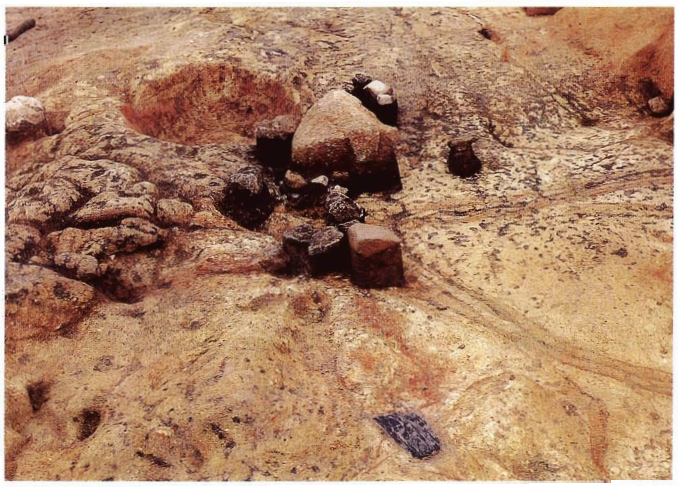
同　横口付製炭窯　焼成部

同　焼成部断面

同　煙道部

同　煙出し部

同　側庭土層断面



同　側庭の石

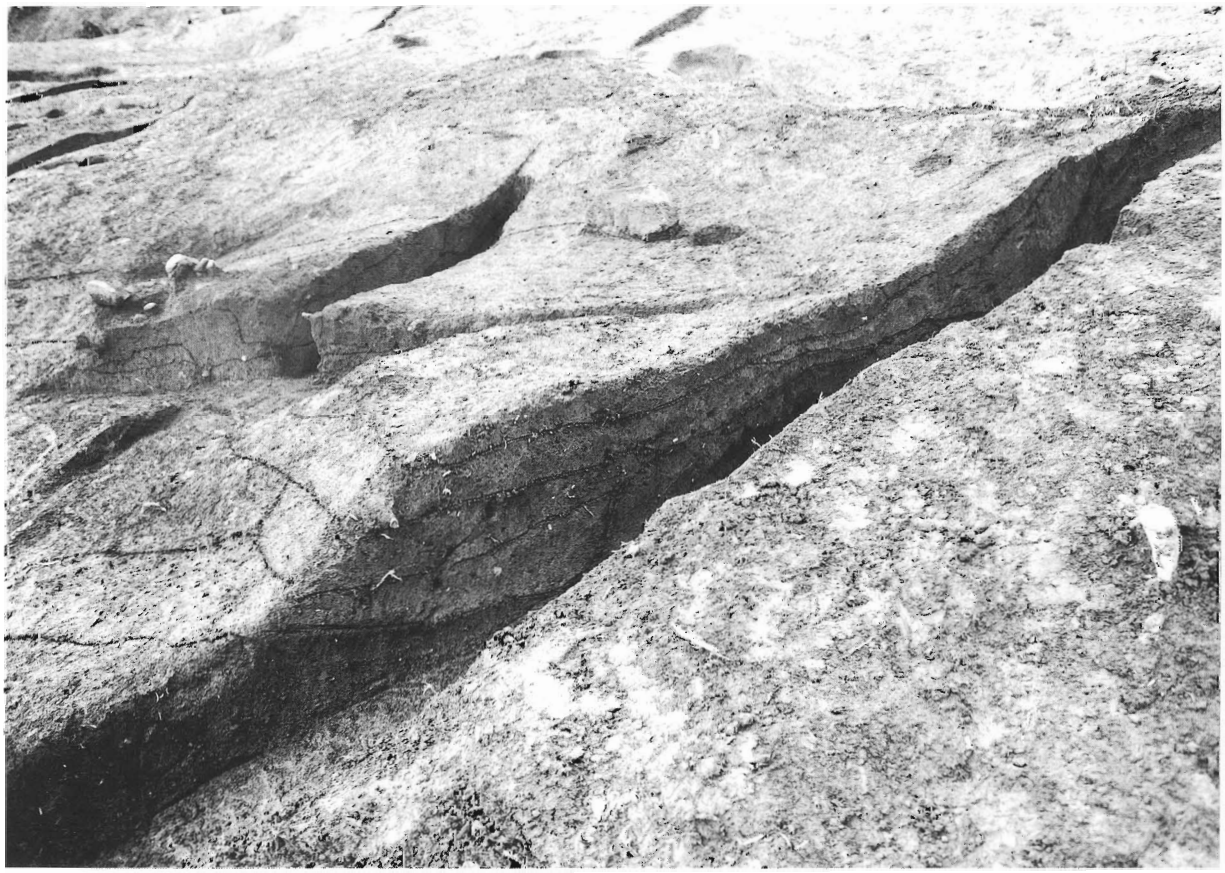
同　土層断面

図版6　白石大谷Ⅰ遺跡

調査前(北から)

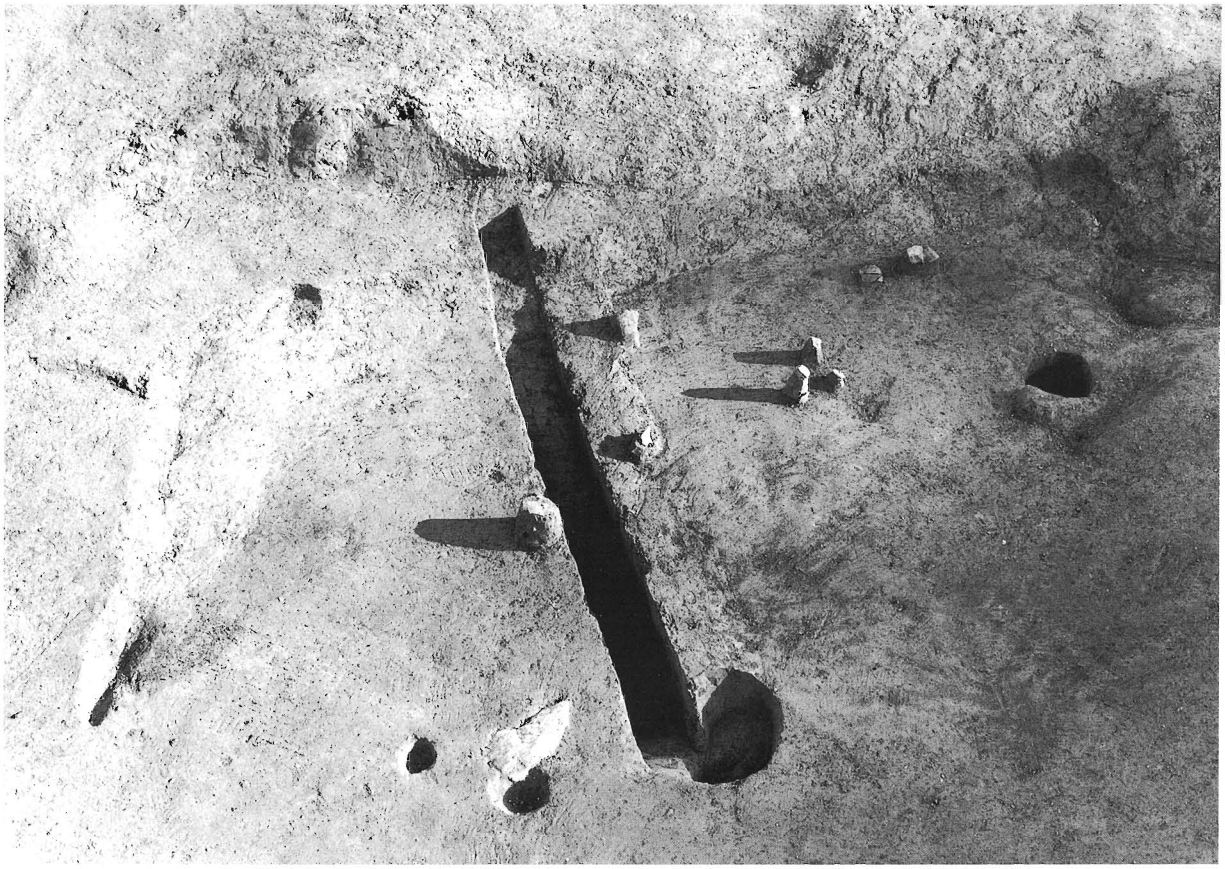
Ⅰ区　調査前(西から)

段状遺構１

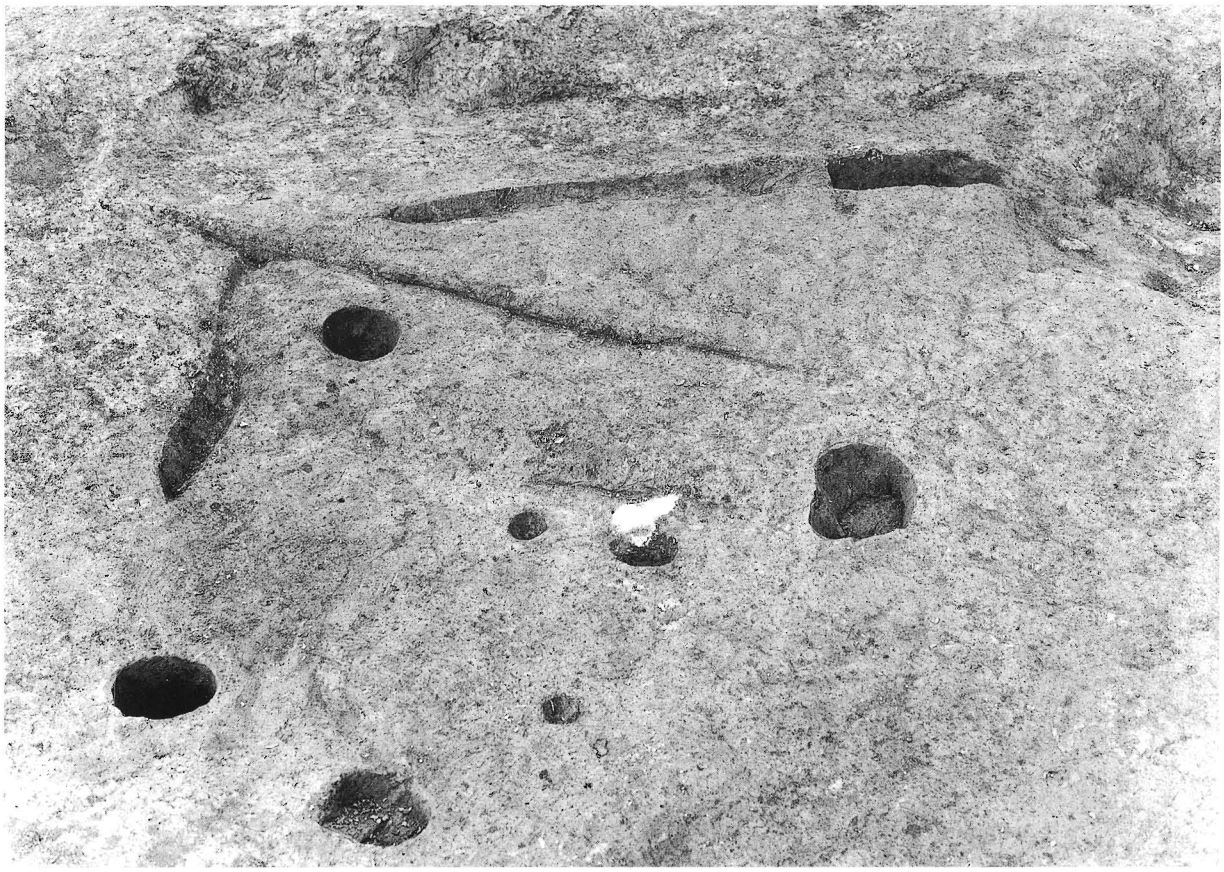


同　上　土層断面

図版8　白石大谷Ⅰ遺跡



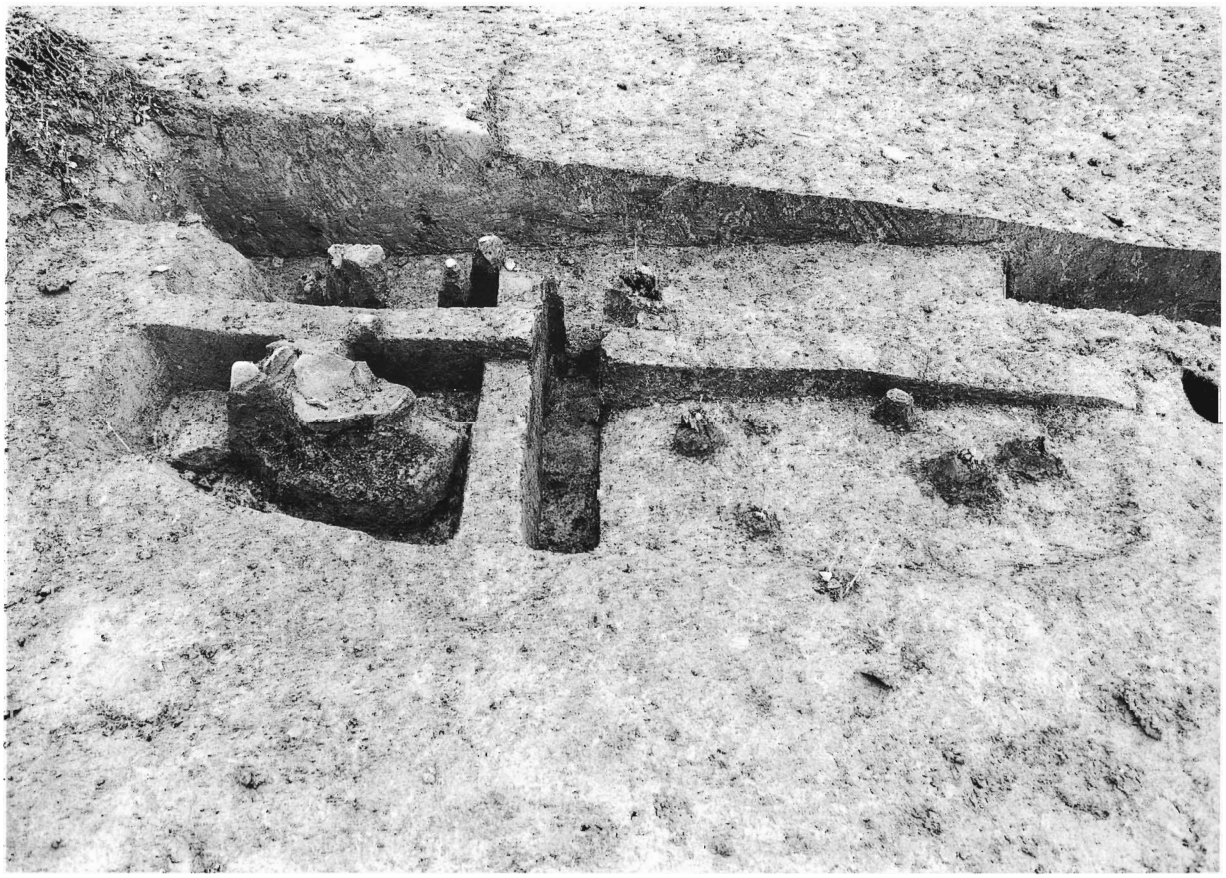
段状遺構2



段状遺構3

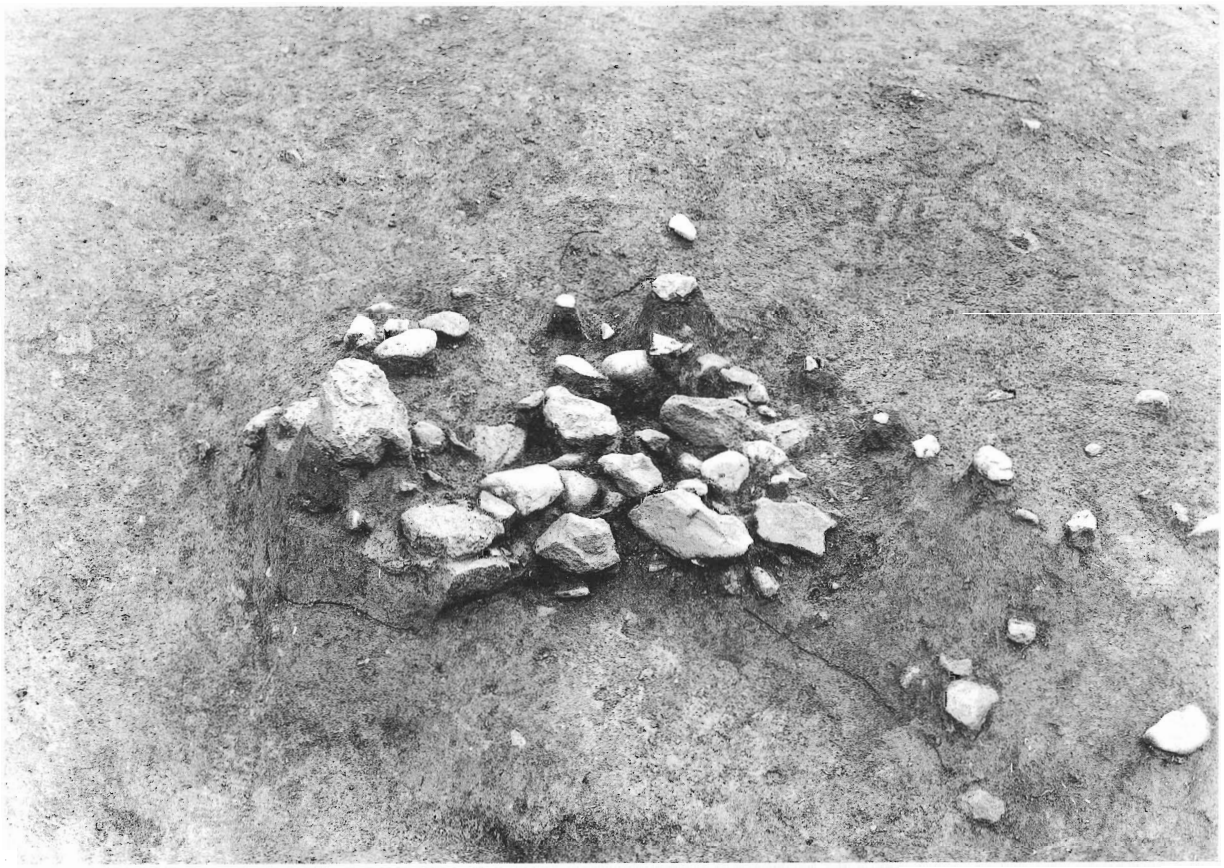
土坑1

土坑2内弥生土器・炭化物



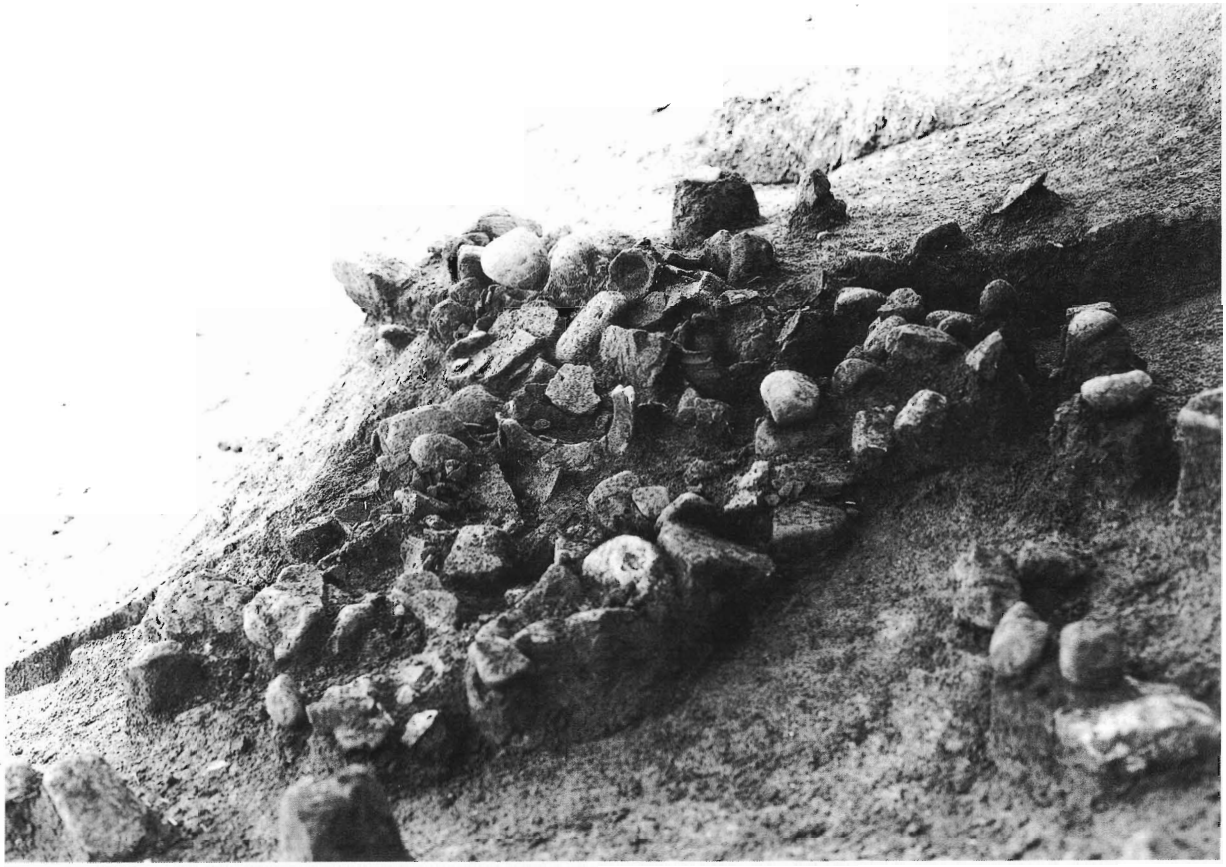
土坑2

図版10　白石大谷Ⅰ遺跡

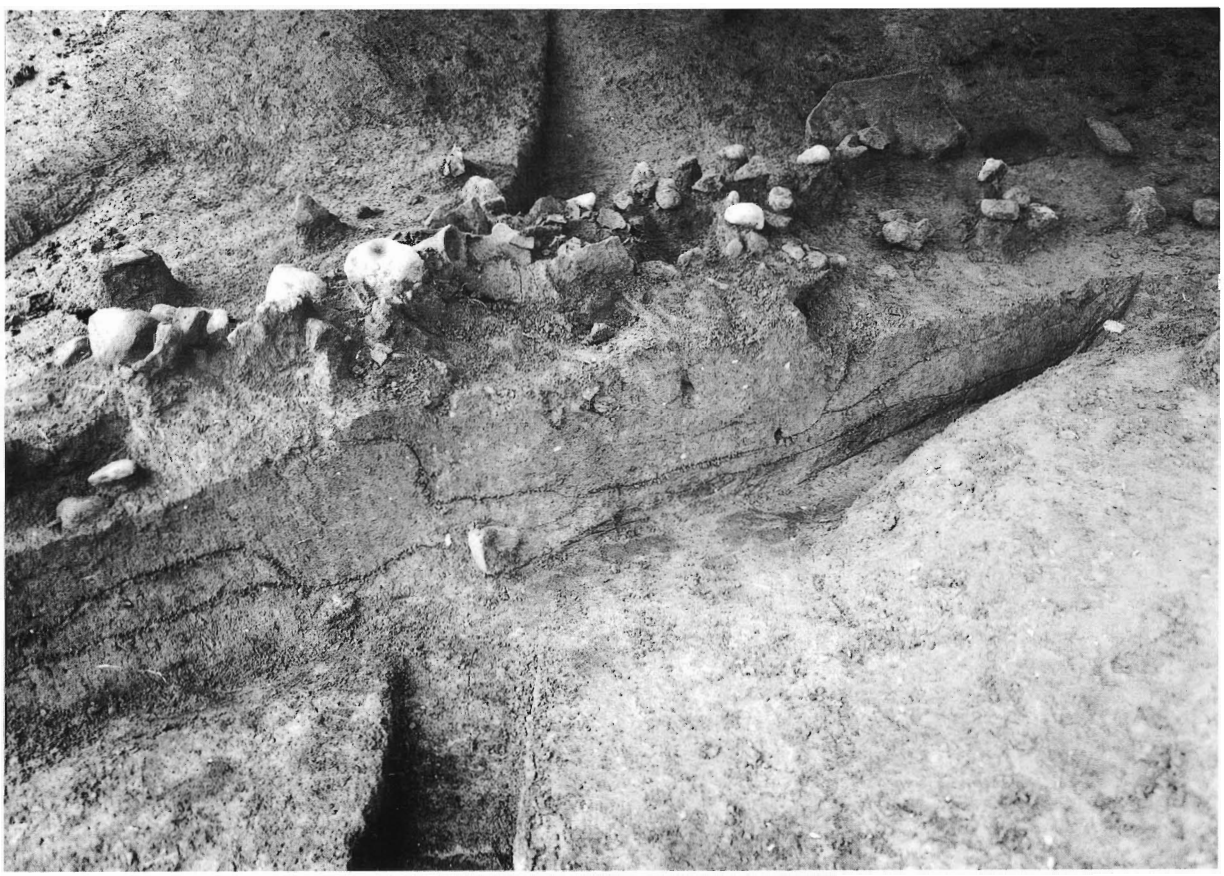


集石1　検出時

集石1



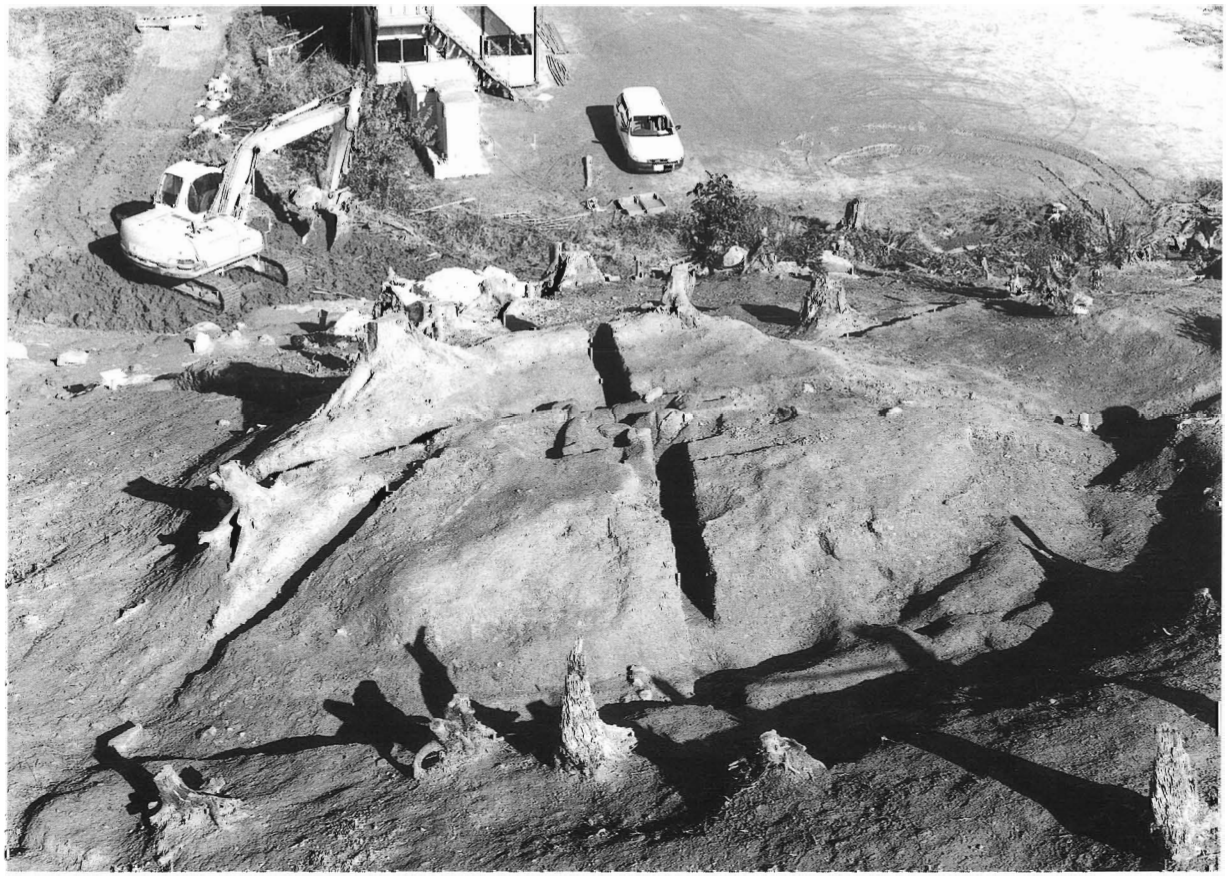
集石1



同　上　土層断面

図版12　白石大谷Ⅰ遺跡

1号墳　調査前



同　上　完掘後

1号墳　Aライン土層断面

同　南側土層断面

図版14　白石大谷Ⅰ遺跡

1号墳　主体部

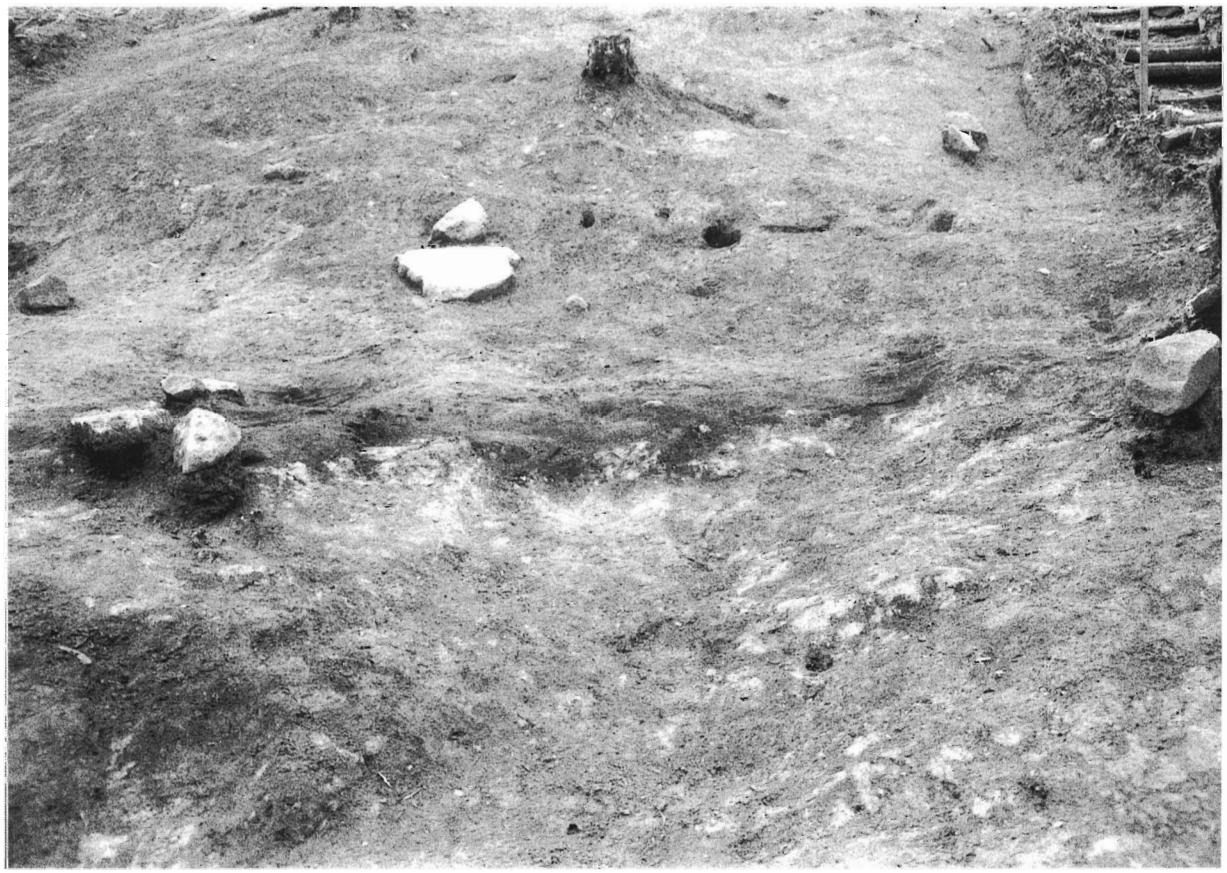
同　上

1号墳　主体部西土層断面

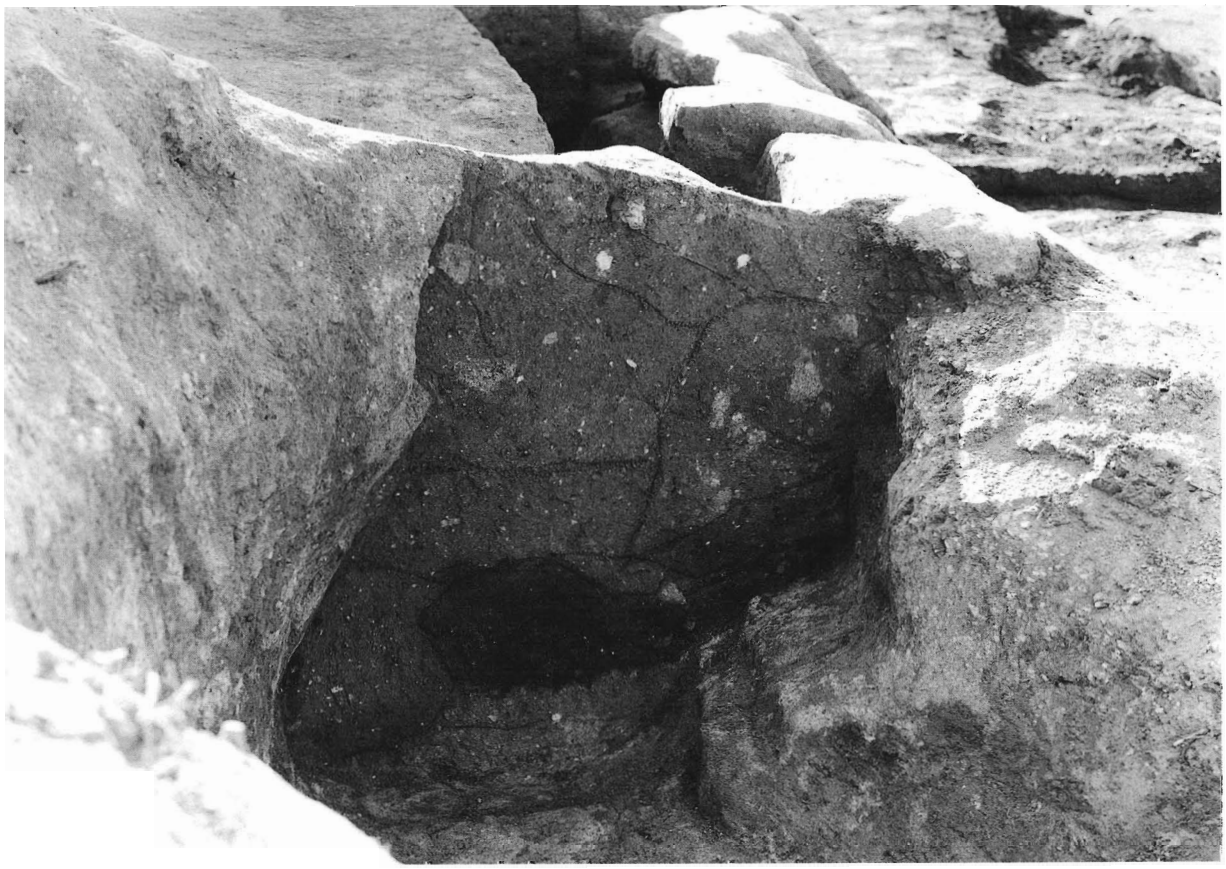
同　周溝内須恵器・来待石石材

図版16　白石大谷Ⅰ遺跡

横口付製炭窯　遠景



同　上　側庭　検出時

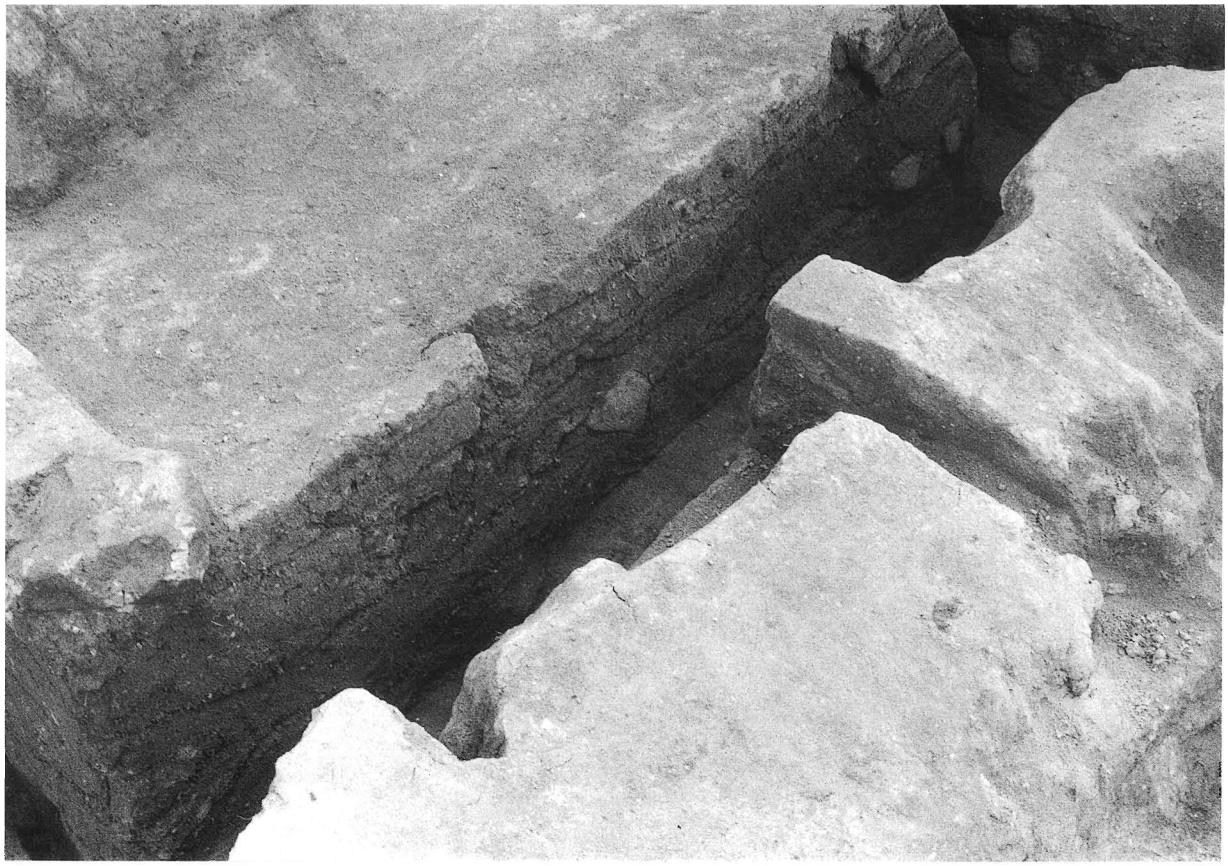


横口付製炭窯　Hライン土層断面

同　上　前庭上須恵器出土状況

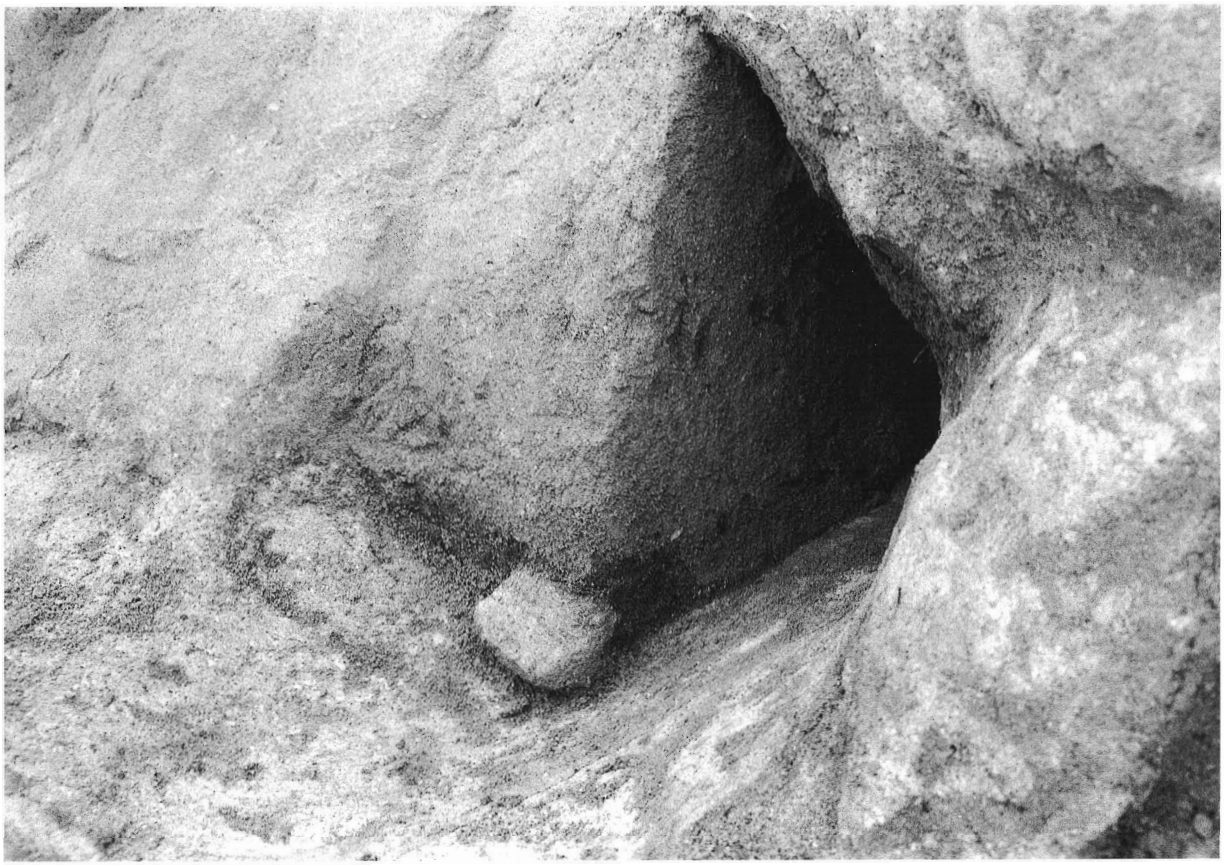
同　左

図版18　白石大谷Ⅰ遺跡



横口付製炭窯　Eライン土層断面

同　上　焼成部



横口付製炭窯　横口4土層断面

同　上　煙道